秋田城跡調査事務所年報 2006

秋 田 城 跡

秋 田 市 教 育 委 員 会
秋 田 城 跡 調 査 事 務 所

序　　文

平成18年度秋田城跡発掘調査は、史跡内の3地区を実施し、東大路跡の一部や建物跡・竪穴住居跡等を発見し、多くの貴重な成果をあげることができました。

特に、これまでの調査も含め、城内の道路遺構に関する一連の調査は秋田城の基本構造を知る上で、また、今後の史跡保存管理方針を決める上で大きな成果となりました。

また、環境整備事業につきましては、今年度は政庁東門と築地塀の復元工事と創建期の政庁復元模型が完成し、全体像がいよいよ具体化してまいりました。

このように秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでおりますことは、文化庁及び秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員、そして地元住民の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

平成19年3月

秋田市教育委員会
教育長　髙　橋　健　一

秋田城跡調査事務所年報 2006

目　　次

例言・凡例

Ⅰ　調査の計画と実施状況…… 1

Ⅱ　第88次調査報告
　1）調査経過 …… 2
　2）検出遺構と出土遺物…… 14
　3）基本層序及び各層出土遺物…… 39

Ⅲ　第89次調査報告
　1）調査経過…… 44
　2）検出遺構と出土遺物…… 53
　3）基本層序及び各層出土遺物…… 60

Ⅳ　第90次調査報告
　1）調査経過…… 63
　2）検出遺構と出土遺物…… 67
　3）基本層序及び各層出土遺物…… 81

Ⅴ　現状変更（鵜ノ木地区共同住宅新築工事）に伴う発掘調査報告
　1）調査経過について…… 82
　2）調査結果について…… 84
　3）調査結果とその後の措置…… 85

Ⅵ　考　察
　1　第88次調査について…… 88
　2　第89次調査について…… 96
　3　第90次調査について…… 99

Ⅶ　秋田城跡出土炭化材の樹種同定……103

Ⅷ　秋田城跡の環境整備事業……106

Ⅸ　秋田城跡の現状変更……110

写真図版……111

報告書抄録……163

秋田城跡調査事務所要項……164

例　　言

1　本書は、平成18年度に実施した秋田城跡第88次・第88次・第90次調査、現状変更に伴う調査、秋田城跡出土炭化材の樹種同定及び、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。

2　本書の執筆・編集は安田忠市、伊藤武士、松下秀博、筒井孝志があたり、小松正夫が補佐した。

3　遺物の実測・トレース、遺構図の作成及びトレースは、安田、伊藤、筒井のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、大井重樹、最上谷布美子があたった。

4　遺構・遺物の写真撮影は、伊藤があたった。

5　墨書土器の解読は、山形大学人文学部 三上喜孝助教授の指導を得た。

6　出土鉄製品の錆取りについては、東北歴史博物館学芸部及川規氏の指導・協力を得て伊藤が実施した。

7　本調査で得られた資料は、秋田市教育委員会で保管している。

8　発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

新野直吉、岡田茂弘、渡邊定夫、細見啓三、牛川喜幸、小井川和夫、坂井秀弥、進藤秋輝、国生　尚、冨樫泰時、伊藤博幸、穴澤義功、八重樫忠郎、村木志伸、岩見誠夫、高橋　学、百瀬正恒、文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

凡　　例

遺　物

1　土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。

2　土器の性格の相違は、下記のスクリーントーンで表現した。

黒色処理　　転用硯

3　土器の表面付着物の相違は、下記のスクリーントーンで表現した。

煤　　漆

4　土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。

・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。

・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。

・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽い撫で調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものを撫で調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧な撫で調整と記載。

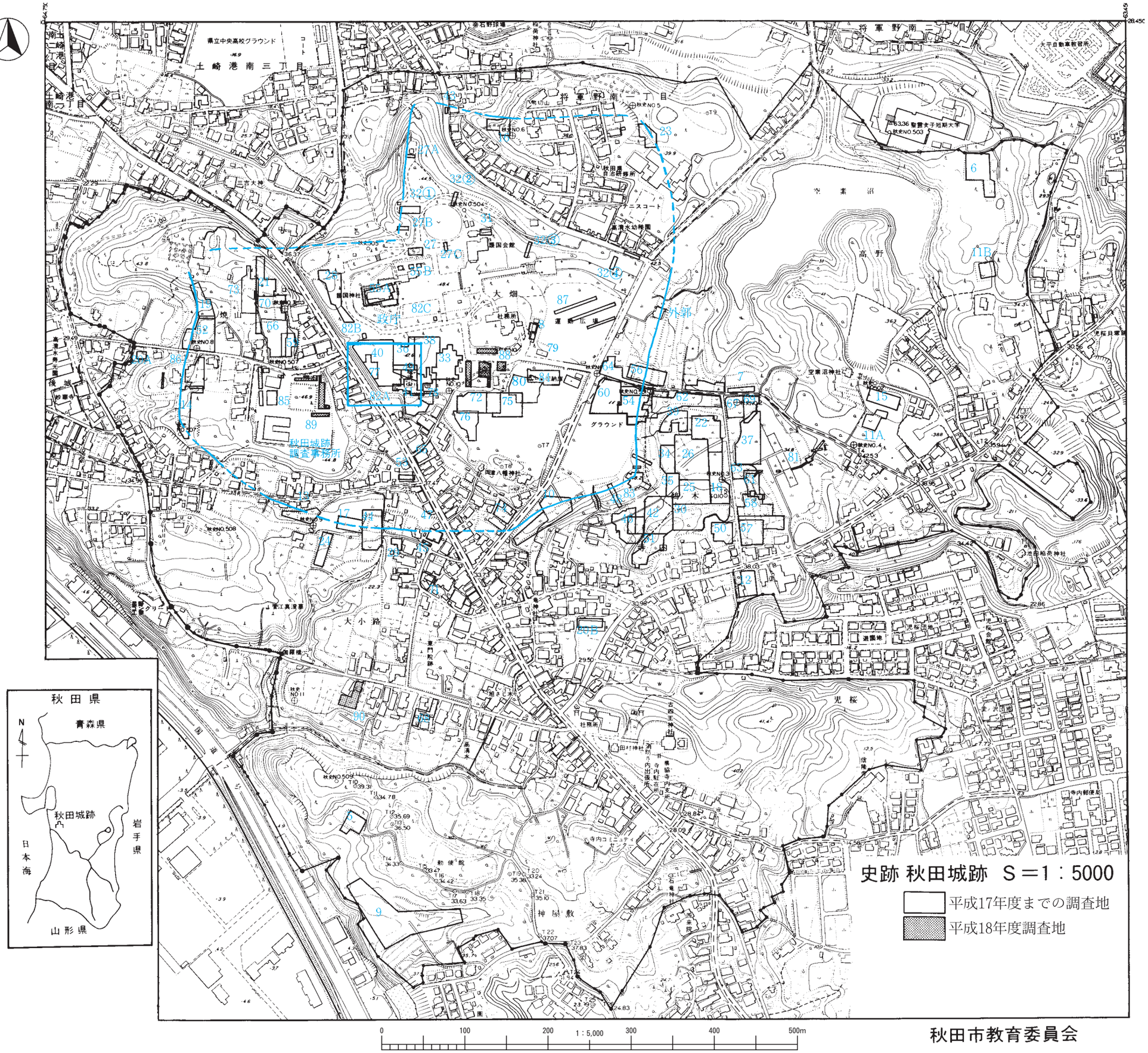
・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。

・実測図・写真図版の縮尺は、特記のあるもの以外はすべて１／３である。

方位・測量原点

文章中の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。

遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X＝－28562.592、Y＝－64607.889である。



第１図　秋田城跡発掘調査位置図

Ⅰ　調査の計画と実施状況

平成18年度の秋田城跡発掘調査は、第88次、第89次調査と、現状変更に伴う事前調査の対応として第90次調査を実施した。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）1,500万円のうち国庫補助額750万円（50％）、県費補助額200万円（13.3％）、市費550万円（36.7％）である。

調査計画は、下記のように立案した。

表１　発掘調査計画

調 査 次 数	調 査 地 区	発掘調査面積㎡（坪）	調 査 予 定 期 間
第88次	大畑地区中央部	800㎡（242）	4 月17日～ 8 月16日
第89次	焼 山 地 区 東 部	500㎡（152）	8 月17日～11月11日
計		1,300㎡（394）	

発掘調査に伴う現状変更許可申請については、平成18年 2 月13日付け教文第326号で申請し、平成18年 3 月17日付け17委庁財 4 の1745号で許可された。

平成18年度の発掘調査は、寺内大畑地区中央部と寺内焼山地区東部の 2 箇所を調査対象とした。

第88次調査は、旧高清水小学校の北西側、秋田県護国神社の南東側で、外郭東門と政庁域間のやや政庁寄りの位置にあたる大畑地区中央部を対象とし、外郭東門から政庁に至る城内東西道路（東大路）の存在が推定される場所である。これまでの周辺調査では、西側隣接地の第33次調査で材木塀に囲まれた建物や鍛冶工房が発見されている。また、南側隣接地の第72次調査では鍛冶工房群が発見されており、調査地の周辺は生産施設としての利用が確認されている。そこで今回の調査は、この地区の整備計画を踏まえて城内東西道路（東大路）の存在及び位置を確認するとともに、大路周辺の利用状況を把握することを目的として実施した。

調査の結果、道路側溝跡などからなる城内東大路の一部や、道路北側の生産施設の一画が確認された。調査地全体では、掘立柱建物跡 1 棟、柱列 9 列、ピット群、材木塀跡 5 条、溝跡12条、竪穴住居跡 1 軒、竪穴状工房跡 4 軒、土坑14基、焼土遺構 3 基、道路遺構 2 面等が検出された。

第89次調査は、旧秋田市水道局浄水場跡で、現在秋田城跡調査事務所北東側の空閑地になっている焼山地区東部を対象とした。調査地は、重要遺構である政庁から城内西側を通る東西道路遺構（西大路）の存在が推定される所で、推定政庁西辺からの距離は約30ｍである。これまでの周辺調査では、北西側の焼山地区北部で奈良時代から平安時代にかけて変遷する、規則的配置に基づく城内最大規模の掘立柱建物群が確認されている。また、西側では平安時代の竪穴住居や材木塀区画施設が確認されている。そこで今回の調査は、かつて水道用地として造成された地域であるが、調査地南側での歴史資料館建設計画も踏まえて、焼山地区東部における遺構の遺存状況や東西道路遺構の有無をはじめとする周辺の利用状況を把握することを目的として実施した。

調査の結果、城内東西道路遺構（西大路）は確認されなかったが、奈良時代の大規模な掘立柱建物跡や、平安時代の掘立柱建物跡などが発見された。また、南側でも奈良時代の大規模な掘立柱建物跡が発見され、焼山地区東部にも規則的配置に基づく掘立柱建物群が存在する可能性が高くなった。他に調査地南側では平

安時代の竪穴住居跡や材木塀跡、柱列も発見された。調査地全体では、掘立柱建物跡７棟、柱列跡３列、ピット群、材木塀跡１条、溝跡３条、竪穴住居跡１軒、土坑１基等が検出された。

今年度の調査は第88次、第89次の２箇所を予定していたが、個人が大小路地区に住宅新築を計画したことから現状変更許可申請の対応として事前に遺構確認調査を行うこととし、第90次調査とした。現状変更は平成18年８月21日付けの申請を教文第180号で進達し、９月15日付け18委庁財第４の1055号で許可された。そして、許可条件である発掘調査を10月４日から10月30日まで行い、11月10日に調査の終了報告をした。

第90次調査は、城外の南側で、推定外郭南門から南に延びる推定南大路の西側にあたる場所で、外郭南辺から南に160ｍの所に位置している。これまでの周辺調査では、推定南大路を挟んだ東側で平安時代の竪穴住居跡が検出されており、居住域としての利用が確認されている。そこで今回の事前調査では、遺構及び遺物包含層の遺存状況や現状変更による影響の有無、周辺利用状況の把握を行うことを目的として実施した。

調査の結果、調査地全体から遺構及び遺物包含層が確認された。奈良時代後半から室町時代にかけての遺構が検出され、平安時代を中心に居住域として利用される状況が把握された。調査地全体では、掘立柱建物跡３棟、柱列３列、溝跡５条、井戸跡１基、竪穴住居跡９軒、土坑６基、土取り穴１基、焼土遺構１基等が検出された。なお、検出された遺構及び遺物包含層については、一部工事の計画変更を行って保護することから現状変更による影響はないと判断した。

７月８日に第88次調査の現地説明会を開催し、120名の参加者があった。また、11月３日に第89次調査の現地説明会を開催し、95名の参加者があった。

11月２日に文化庁記念物課坂井秀弥主任文化財調査官の現地指導を受けた。

１月18日に宮城県多賀城跡調査研究所小井川和夫所長と古川一明主任研究員から調査指導を受けた。

平成18年度の発掘調査実施状況は下記表２のとおりである。

表２　発掘調査実施状況

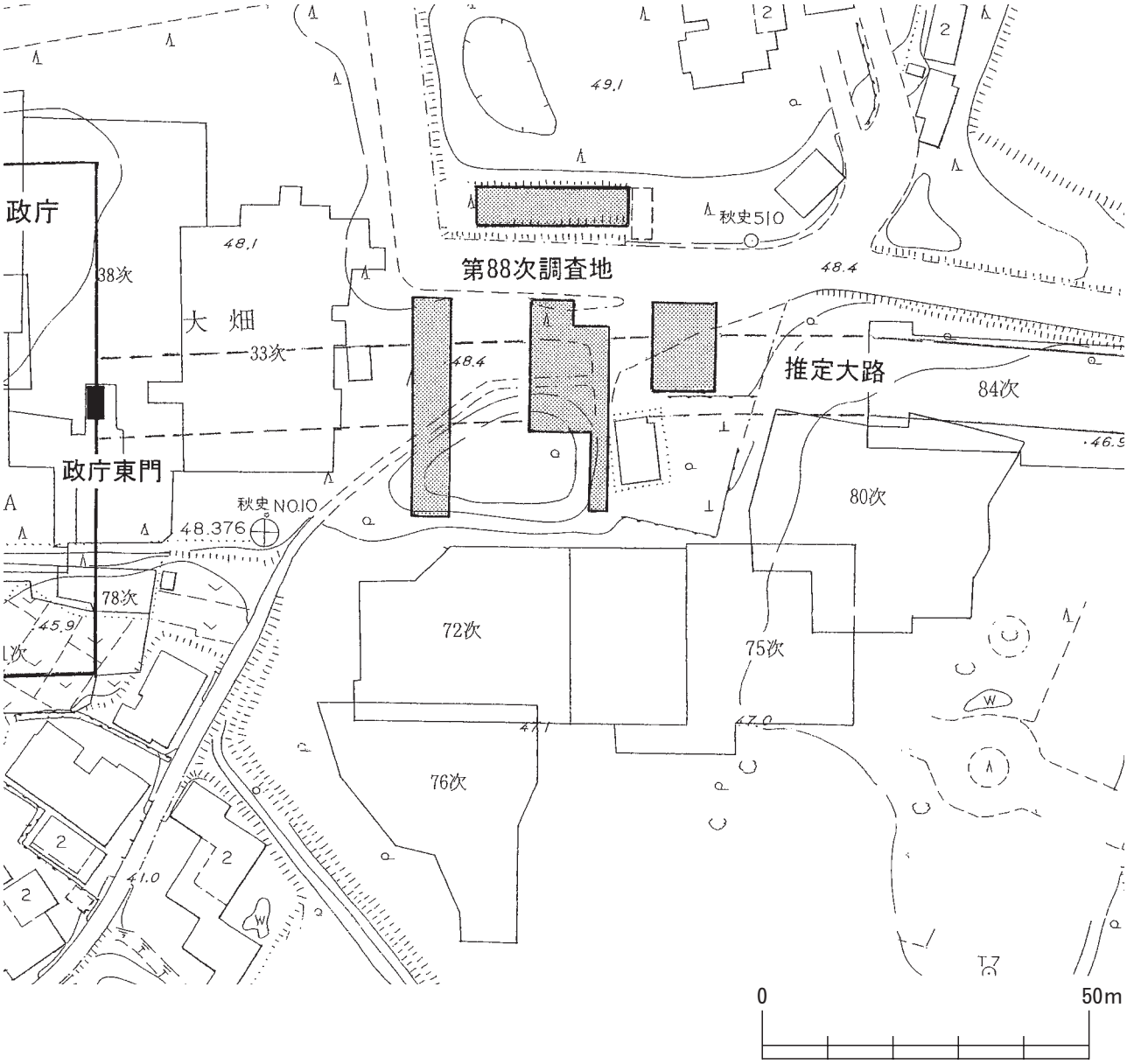
調 査 次 数	調 査 地 区	発掘調査面積㎡（坪）	調 査 実 施 期 間
第88次	大畑地区中央部	621㎡（188）	４月17日～８月10日
第89次	焼山地区東部	478㎡（145）	８月２日～11月28日
第90次	大小路地区南西部	203㎡（ 62）	10月４日～10月30日
計		1,302㎡（395）	

Ⅱ　第 88 次調査報告

１）調査経過

第88次調査は、秋田城跡の城内東側にあたる大畑地区中央部を対象に、平成18年４月17日から８月10日まで実施した。調査面積は621㎡である。

調査地は旧高清水小学校の北西側、秋田県護国神社の南東側にあたる。明治時代初めに調査地北側に招魂社が置かれ、明治26年に招魂社が焼失して移転した後は、明治時代末に土崎公園、大正時代に高清水公園と



第２図　第88次調査周辺地形図

して整備されて、近年は神社の駐車場として利用されていた場所である。また、調査地南側には以前より高さ３ｍ～４ｍの小山状の地形が存在している。

調査地は外郭東門と政庁間のやや政庁寄りの位置にあたり、外郭東門から政庁東門に至る城内東西道路（城内東大路）の存在が推定される場所である。周辺調査では、東側の第84次調査で奈良時代から平安時代にかけて変遷する城内東大路が検出されている。また、西側隣接地の第33次調査では、材木塀に囲まれた掘立柱建物や竪穴状鍛冶工房からなる平安時代の生産施設が、南側隣接地の第72次調査においても平安時代の鍛冶工房群が検出されている。

調査は、この地区の整備計画を踏まえて、城の基本構造に関わる重要遺構である城内東大路の存在及び位置を確認するとともに、大路周辺の利用状況を把握することを目的として実施した。

調査方法は大路の推定位置を中心に東西にA・B・C調査区を配し、道路を狭んだ北側にD調査区の計４調査区を設定して実施した。特に調査地南側に存在している小山状地形が旧地形として存在し、大路の位置関

係に影響を与えているかを把握するために、A調査区南半とB調査区南東側が小山状地形を断ち割るように調査区を設定した。

調査は、まず基準杭測量及び調査区の設定を行い、設定後重機による表土除去作業を行った（4月17日～4月19日）。次に調査機材の搬入や調査地安全対策用フェンス設置作業を行った（4月20日～4月21日）。

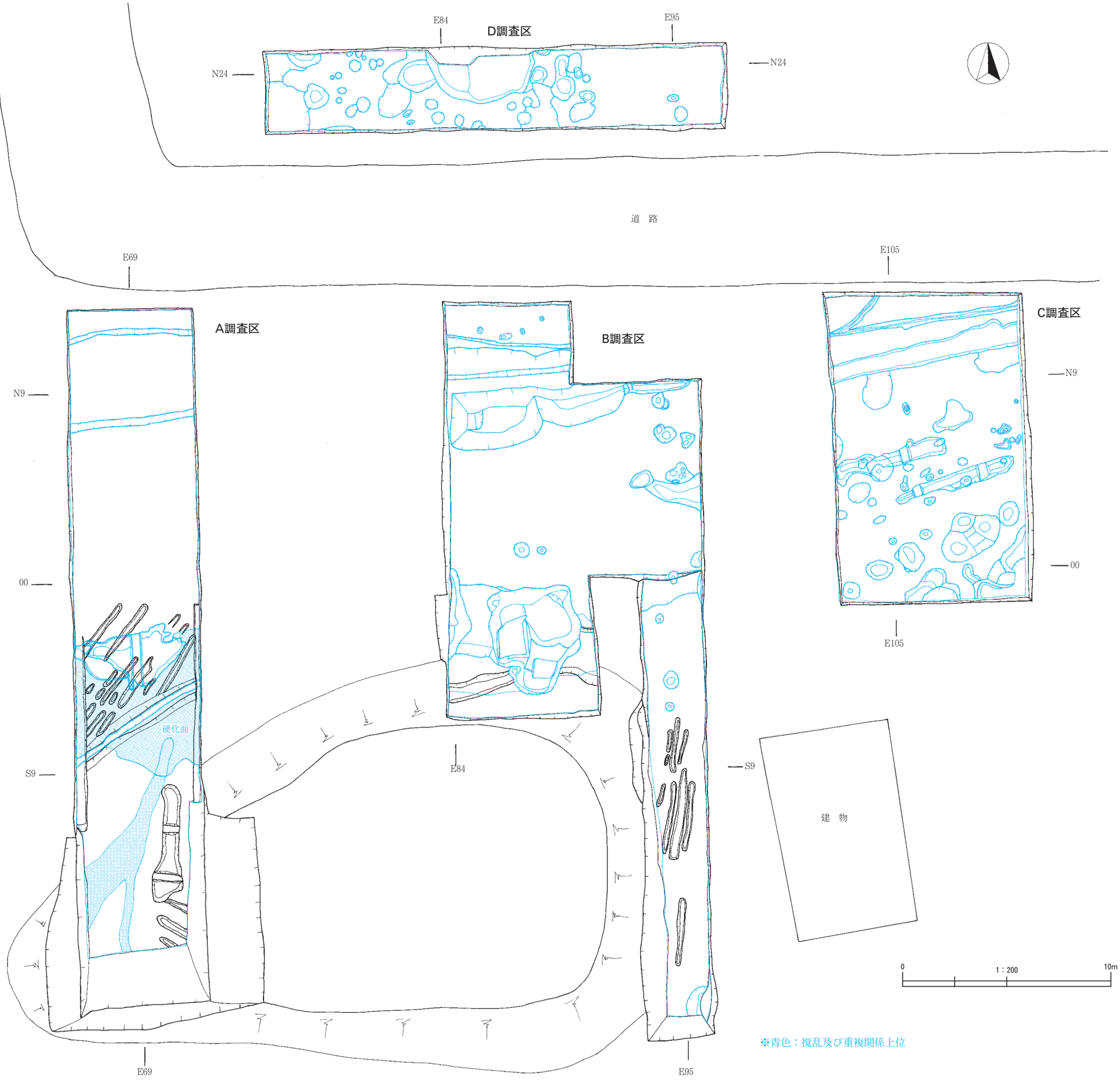
東側のC調査区から人手による表土除去を開始し、次にB調査区北側の表土除去を行った。調査地東側では削平により造成土下が地山飛砂層面となっており、撹乱が検出された（4月24日～4月26日）。B調査区南東側で小山状地形をトレンチ状に断ち割る形で表土及びその下層の浅黄色砂と褐色土・黒褐色土の交互層となっている造成土を除去していったところ、造成土内より瀬戸・美濃系の染付磁器片が出土し、小山状地形は近世末～明治時代以降の盛り土であることが判明した（4月27日）。A調査区及びD調査区の表土を除去したところ、A調査区の北側は表土・造成土下より遺物包含層が検出され、D調査区は造成土下が地山飛砂層面となっていた。各調査区について表土除去後の写真撮影を行った（4月28日～5月11日）。

B・C・D各調査区の撹乱を掘り下げ、造成土下を精査する。B調査区中央～北側では、SA1883ピット群と南寄りの明黄褐色砂層面でSI1900竪穴住居跡を検出した。また、D調査区ではSA1884ピット群を検出した。A調査区中央～南側の盛土造成土を掘り下げ、下層より一部が硬化した第3層黒褐色土面を検出した。また、A調査区北側を精査し、第6層褐色土層面から第8層褐色土層面にかけてSA1874・SA1875柱列、SA1885～SA1888材木塀跡、SK1907～SK1909土坑、SD1890溝跡を検出した。

A調査区中央で検出された灰褐色土硬化面は、その造成土となっている第3層黒褐色土層より近世末から近代の陶磁器片が出土したことから、近代以降の道路状遺構と判断した。年代等から第3層は明治初めの招魂社建設時の造成土と考えられた。A調査区中央から南半、さらにB調査区南東の旧耕作土である第4層灰褐色土層を除去し、旧耕作土である第5層黒褐色土層面で畑畝跡を検出した。B調査区南東ではSK1914・SK1915土坑も検出した。さらに第5層を除去し、盛土造成部の断面実測や写真撮影等の記録化を行った（6月5日～6月23日）。

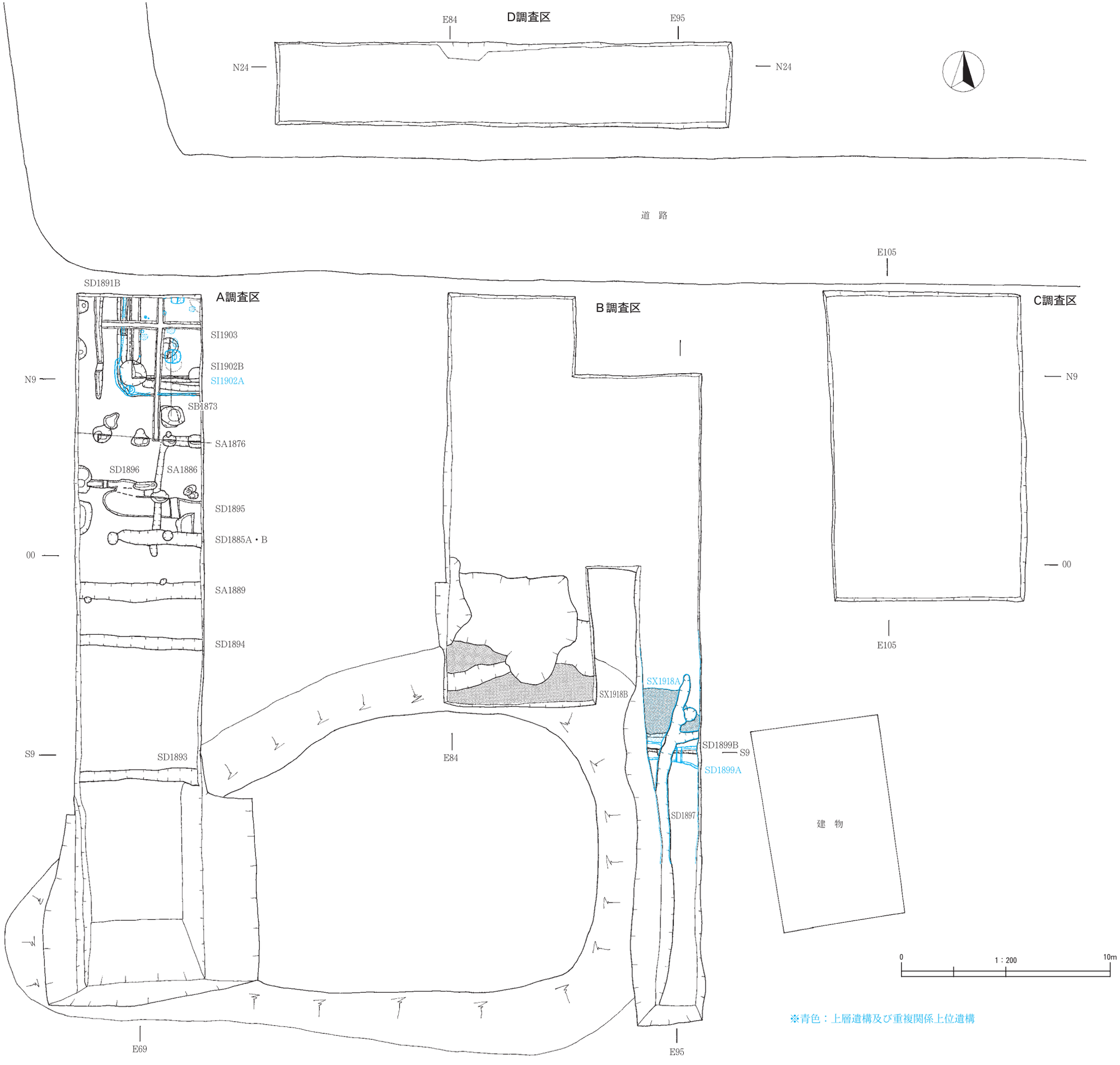
A調査区中央から南側及びB調査区南東側の第5層を除去し、第6層褐色土層面を精査した。A調査区ではSK1905、SK1906土坑、SD1892溝跡を、B調査区ではSD1897・SD1898溝跡・SK1916土坑を検出し、各遺構の掘り下げを行った。A調査区北側では第6層から第8層褐色土層面にかけての検出遺構の掘り下げを行った。SA1885～SA1888材木塀跡では、布掘り溝底部より丸太材痕跡が検出された。各遺構掘り下げ後、遺構の断面・平面実測や写真撮影等の記録化を行った（6月26日～6月30日）。

A調査区中央から南側で第6層を除去して精査したところ、削平等による影響で第10層明黄褐色砂層面まで下がった所で、SK1904土坑やSD1893・SD1894溝跡とSA1889材木塀跡の布掘り溝を検出した。B調査区南東側でも第6層を除去し、第10層明黄褐色砂層面で、道路面と考えられる灰褐色土の硬化面とその南側に道路側溝と考えられるSD1899溝跡を検出した。従って古代の東大路の道路面は後世の削平により奈良時代に該当する下層の、しかも南端部分しか遺存しなかったものと判断し、道路面をSX1918道路遺構とした。また、その面でSA1877柱列やSK1917土坑を検出した。A調査区検出のSD1893はSD1899の東西方向延長線上にあり、東大路南側の側溝に該当すると考えられた。なお、埋土より赤褐色土器片が出土することから、奈良時代と平安時代で同位置に溝が重複している可能性が考えられた。また、SA1889はSD1899より約9m北側にあり、また埋土から赤褐色土器片が出土することから、平安時代に道路北側を区画する区画施設と考えられた。各遺構掘り下げ後、断面・平面実測や写真撮影等の記録化を行った（7月4日～7月7日）。



第３図　第88次調査検出遺構図①（撹乱・畝跡）

第 4 図　第88次調査検出遺構図②（調査地全体の上層及び重複関係上位遺構）

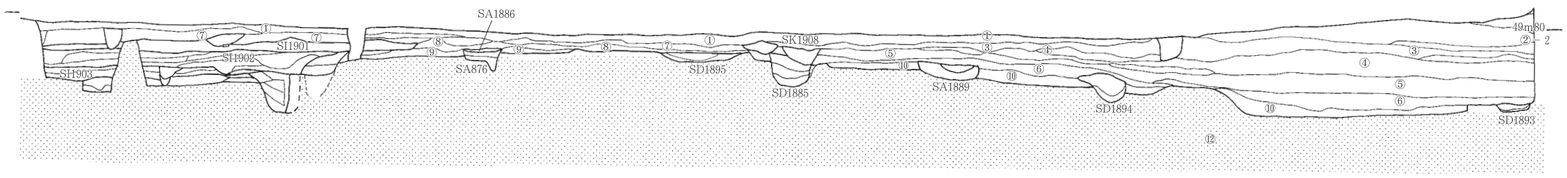


第５図　第88次調査検出遺構図③（調査地全体の下層及び重複関係下位遺構）

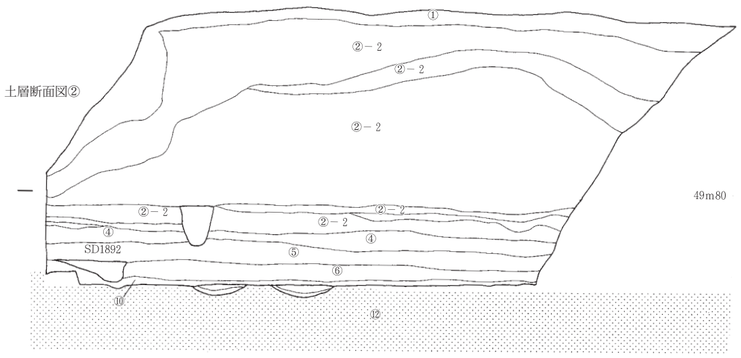
第88次調査地基本層序

①　表土：暗褐色土
②－1　造成土：黒褐色土・明褐色粘土
②－2　造成土：浅黄色砂・褐色土・黒褐色土
③　造成土：黒褐色土・灰褐色土
④　旧耕作土：灰褐色土・褐灰色土
⑤　旧耕作土：黒褐色土
⑥　第6層：褐色土
⑦　第7層：暗褐色土に焼土・炭化物混入
⑧　第8層：褐色土・明褐色土
⑨　第9層：明褐色土
⑩　第10層：明黄褐色砂・褐色砂
⑪　第11層：褐色砂・浅黄色砂
⑫　地山飛砂層

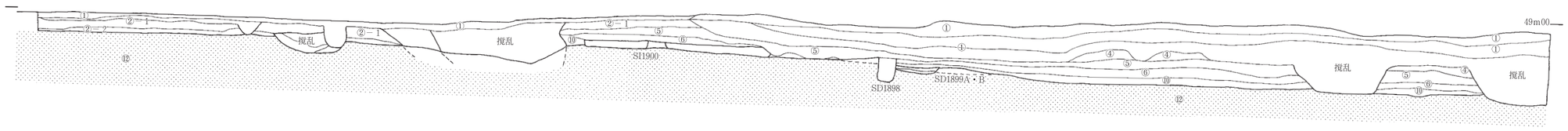
A調査区東壁（E72ライン）土層断面図①



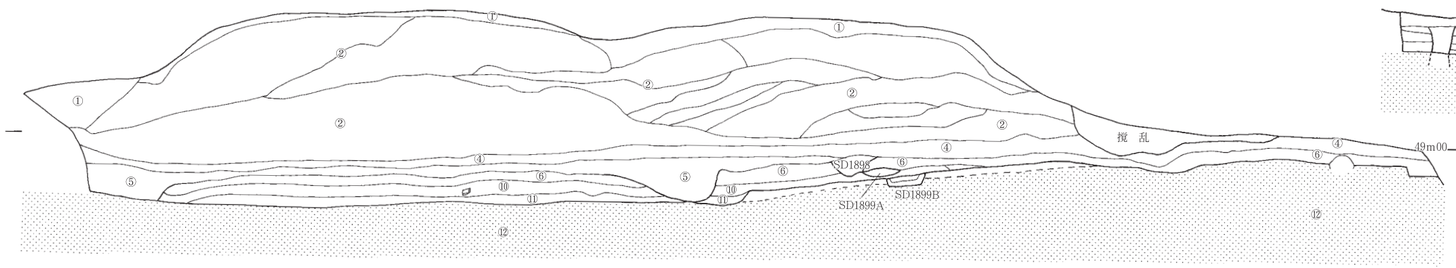
A調査区東壁（E72ライン）土層断面図②



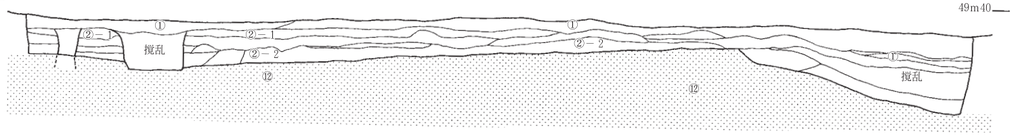
B調査区東壁（E96ライン）土層断面図



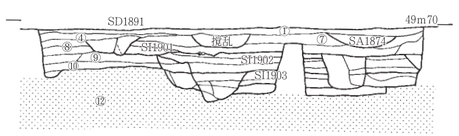
B調査区南側トレンチ西壁土層断面図



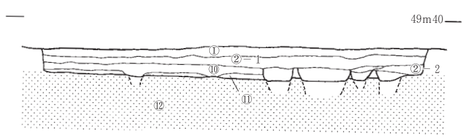
C調査区東壁土層断面図



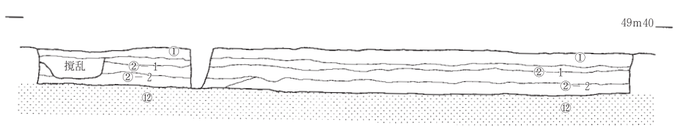
A調査区北壁土層断面図

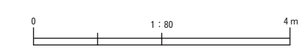


B調査区北壁土層断面図

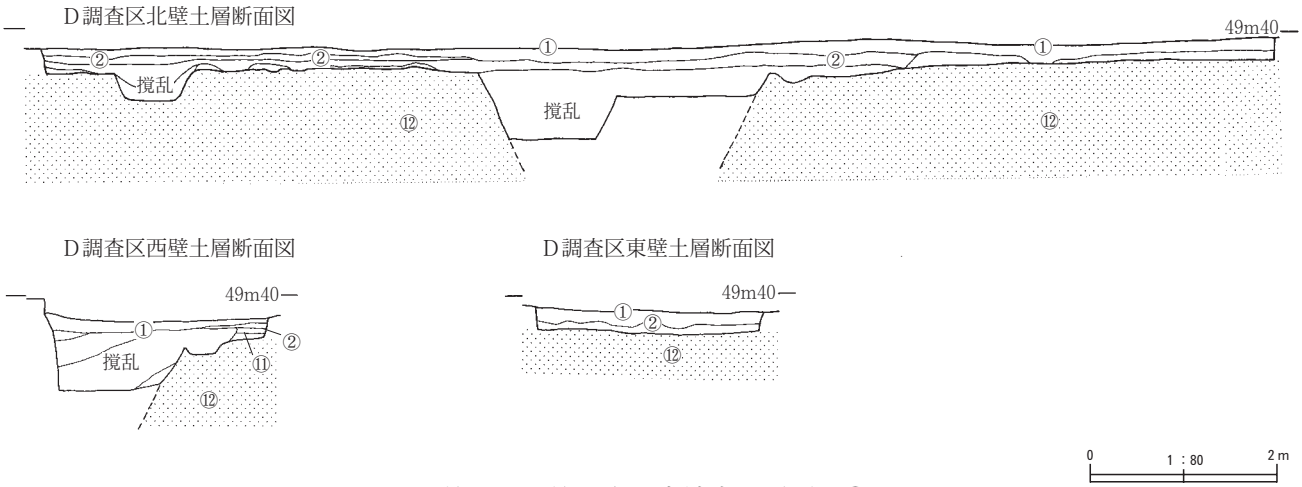


C調査区北壁土層断面図





第6図　第88次調査地土層断面図①



第７図　第88次調査地土層断面図②

７月８日には現地説明会を開催し、120名の参加者があった。

Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面を精査し、SK1911土坑とSX1921焼土遺構を検出した。また、それらよりやや下層でSK1912・SK1913土坑を検出した。第８層褐色土・明褐色土層面を精査し、埋土に炭化物が多量に混入する埋土を伴う竪穴状の落ち込みとしてSI1901竪穴状工房跡を検出した。さらに少し南寄りにSK1910土坑を検出した。SA1886材木塀跡の布掘り溝はさらに南側に伸びる状況が把握された。この段階で西側隣接地の第33次調査で検出された材木塀で区画された生産施設は、Ａ調査区北側まで広がりを持ち東西対称の位置に各々鍛冶工房を配置する構造であり、Ａ調査区中央から北側の東西方向の区画施設は、その生産施設の南辺区画施設が変遷しているものであることが確認された。各検出遺構の掘り下げ後、実測や写真撮影等の記録化を行った（７月10日～７月14日）。

Ｂ調査区南東側では、第10層を除去し、第11層褐色砂・浅黄色砂面を検出し、精査した。東大路南辺付近では、SX1918道路跡の創建期道路面を検出し、SD1899側溝とほぼ同位置にそれに伴う側溝を検出した。そのため、各々前者をSX1918Ａ・SD1899Ａ、後者をSX1918Ｂ・SD1899Ｂとした（７月18日～７月19日）。

Ａ調査区北側でさらに下層遺構の追求を行い、若干の傾斜に沿って第８層を除去し、北寄りで第９層明褐色土層面を検出し、南寄りで第10層明黄褐色砂・褐色砂層面を検出して精査を行った。北寄りの第９層面では、SI1901とほぼ同位置で重複するSI1902・SI1903竪穴状工房跡を検出した。また、その南にSA1876柱列を検出した。南寄りの第10層面では、SD1895・SD1896溝跡を検出した。SD1895溝跡は南側道路側溝としたSD1893から溝内端部間で約12ｍの距離になることから、奈良時代の道路北側側溝である可能性が考えられた。（７月20日～７月24日）。

Ａ調査区北側の遺構掘り下げと記録化を進めるとともに、Ｂ調査区中央の小柱掘り方群の精査を進め、SA1878～SA1882柱列を把握し、掘り下げた。位置や方向からSA1878は生産施設の東西区画施設、SA1879は南辺区画施設になると考えられた。また、Ａ調査区のSI1902を掘り下げて精査したところ、ほぼ同位置で重複するSI1903竪穴状工房跡を検出した。Ｃ調査区についても中央の東西方向溝跡の精査と掘り下げを行ったが、古代の遺物が出土せず、他の撹乱溝に一致する溝の方向等から、撹乱溝と判断した。Ａ～Ｃ調査区の遺構について断面・平面実測や写真撮影等の記録化を行った（７月25日～７月28日）。

主要遺構の掘り下げが終了したため、ヘリコプターによる調査地航空写真撮影を行うとともに、ローリングタワーによる調査地全景写真撮影を行った（８月１日）。

補足調査としてＡ調査区 SI1903とその周辺の精査を行い、地山飛砂層面で SB1873掘立柱建物跡を検出した。SI1903の隅柱や SB1873柱掘り方の断ち割りや断面・平面実測、写真撮影を行った（８月２日～８月７日)。

その後人手による埋め戻しを開始し、機材等の撤収作業を行った。作業員による撤収作業終了後、重機による埋め戻し作業を行い、調査を終了した（８月８日～８月10日)。

２）検出遺構と出土遺物

ＳＢ1873掘立柱建物跡（第５・８図、図版12）

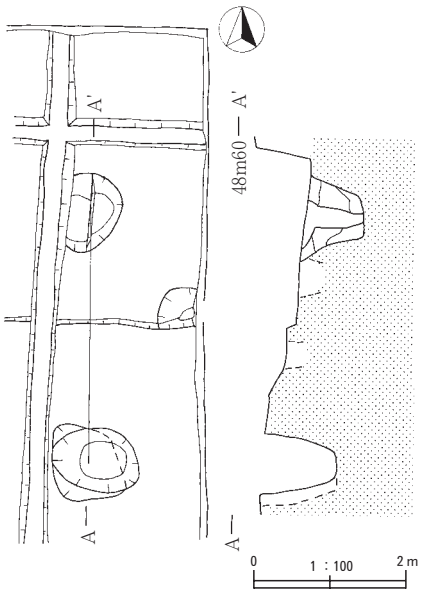
Ａ調査区北側の地山飛砂層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる掘立柱建物跡と考えられる。南北１間以上（3.0ｍ＋…）である。建物の方位は南北柱筋がほぼ真北方向である。柱掘り方は一辺1.0ｍの隅丸方形で、深さ0.8ｍ～1.0ｍである。北側の柱掘り方は削平によりやや浅くなっており、南側の柱掘り方には上層遺構が重複している。柱痕跡は直径18㎝～20㎝で、抜き取りを受けている。SI1903と重複し、これよりも古い。

ＳＢ1873出土遺物（第９図、図版33）

１は柱掘り方埋土、２は柱掘り方抜き取り出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後、底部と台周縁に撫で調整を施す台付坏である。

赤褐色土器（２）：糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。体部外面に二次加熱の痕跡がある。



第８図　ＳＢ1873掘立柱建物跡

ＳＡ1874柱列（第４・10図、図版６）

Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。３基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約５度東に振れる。柱掘り方は直径1.0ｍ～1.2ｍ前後のゆがんだ円形で、深さは20㎝～30㎝である。柱痕跡は削平によって明確でないが、抜き取りを受けていると考えられる。柱間は南から3.0ｍ＋3.0ｍである。

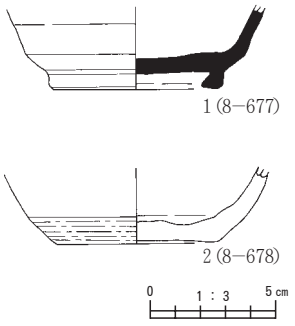
SA1875、SI1901、SX1920と重複し、SA1875、SX1920よりも古く、SI1901より新しい。

ＳＡ1874出土遺物（第11図、図版33）

１～４は柱掘り方埋土出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後に撫で調整を施す坏の底部で、外面に「良」の墨書がある。

赤褐色土器（２～４）：全て糸切り無調整の坏である。２は底部外面に「厨カ」、３は底部外面に判読不能、４は底部内面に判読不能の墨書がある。



第９図　ＳＢ1873掘立柱建物跡出土遺物

ＳＡ1875柱列（第４・12図、図版６）

Ａ調査区北側の第６層褐色土層面で検出された。５基以上の柱掘り方よりなる

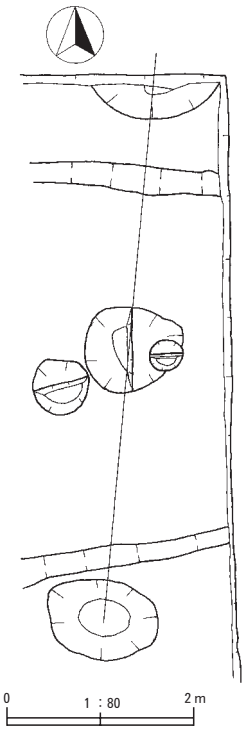
東西方向の柱列である。柱列の方向は西で約8度南に振れる。

柱掘り方は直径30㎝～40㎝の円形で、深さは20㎝～30㎝と浅く、全体に削平を受けている。削平によって明確でないが、柱痕跡は直径18㎝～20㎝である。柱間は西から1.2ｍ＋1.2ｍ＋2.7ｍ…である。SA1874、SK1901、SX1919と重複し、これらよりも新しい。

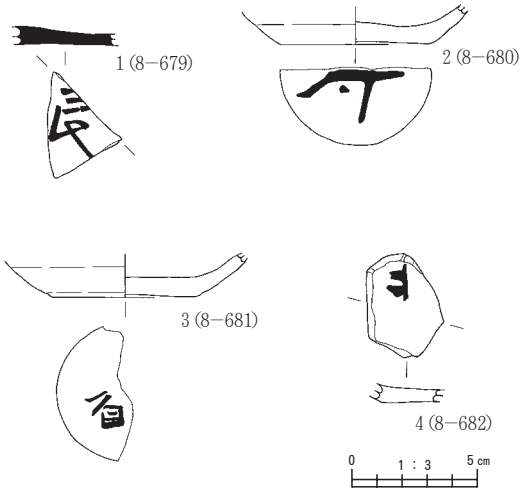
ＳＡ1875出土遺物（第13図、図版33）

１は柱掘り方埋土出土である。

塼（１）：一部のみの残存である。軟質で、灰白色を呈する。



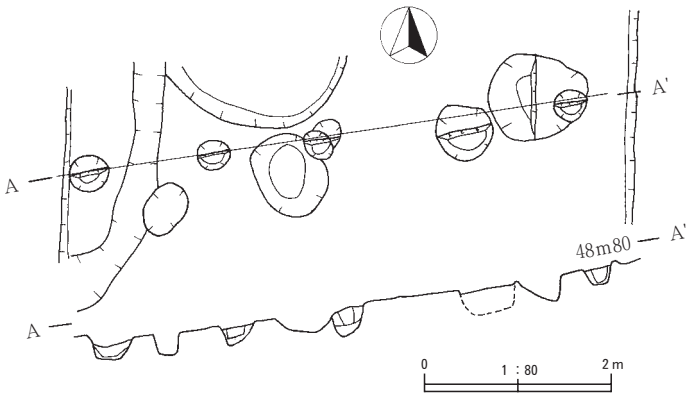
第10図　ＳＡ1874柱列



第11図　ＳＡ1874柱列出土遺物

ＳＡ1876柱列（第４・５・14図、図版９）

Ａ調査区北側の第９層明褐色土層面で検出された。４基以上の柱掘り方よりなる東西方向の柱列である。柱列の方向は西で約４度北に振れる。柱掘り方は一辺50㎝～80㎝の隅丸方形で、深さ0.8ｍ～1.0ｍである。柱痕跡は直径16㎝～18㎝で、抜き取りを受けている。柱間は西から2.0ｍ＋1.4ｍ＋１.2ｍ…である。SA1886～SA1888と重複し、これらよりも古い。



第12図　ＳＡ1875柱列

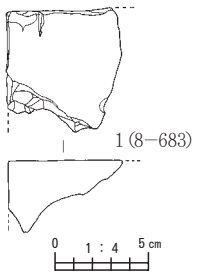
ＳＡ1876出土遺物（第15図、図版33）

１は柱掘り方抜き取り出土である。

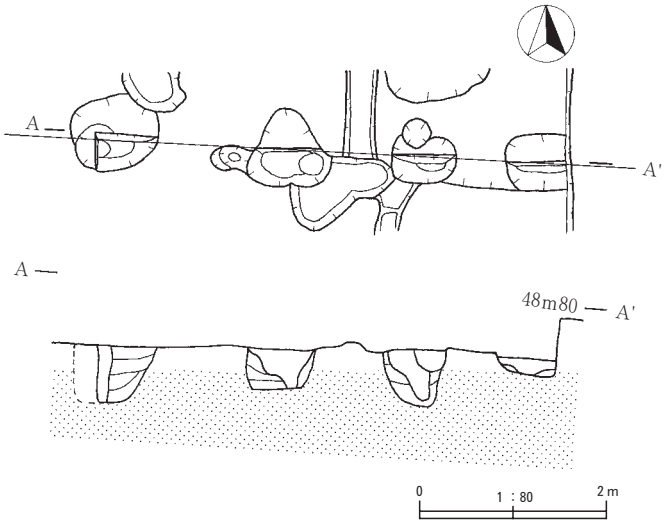
赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏である。

ＳＡ1877柱列（第16図、図版６）

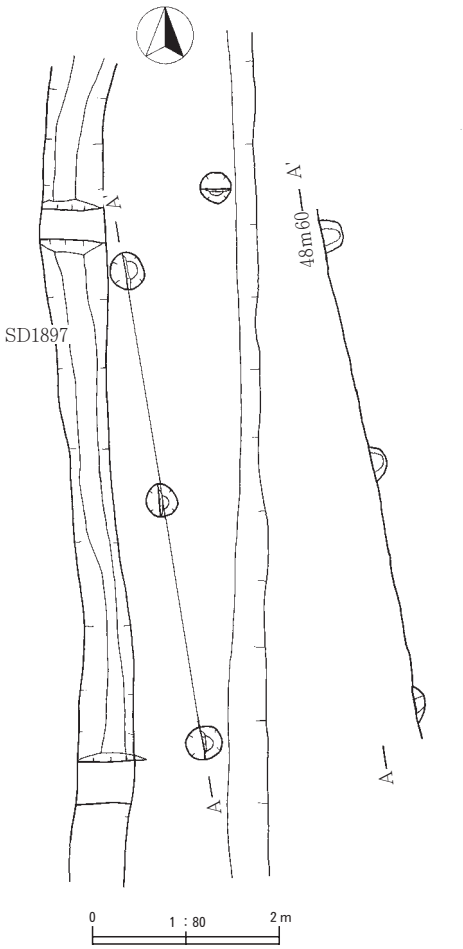
Ｂ調査区南東側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された。３基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約６度西に振れる。柱掘り方は直径60㎝～80㎝の円形で、深さは24㎝～40㎝と浅く、全体に削平を受けている。柱痕跡は直径14㎝～18㎝である。柱間は北から2.4ｍ＋2.6ｍである。



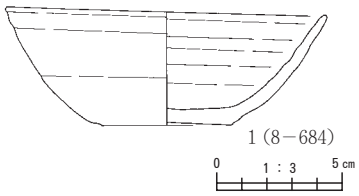
第13図　ＳＡ1875柱列出土遺物



第14図　ＳＡ1876柱列



第16図　ＳＡ1877柱列



第15図　ＳＡ1876柱列出土遺物

ＳＡ1878柱列（第17図、図版７）

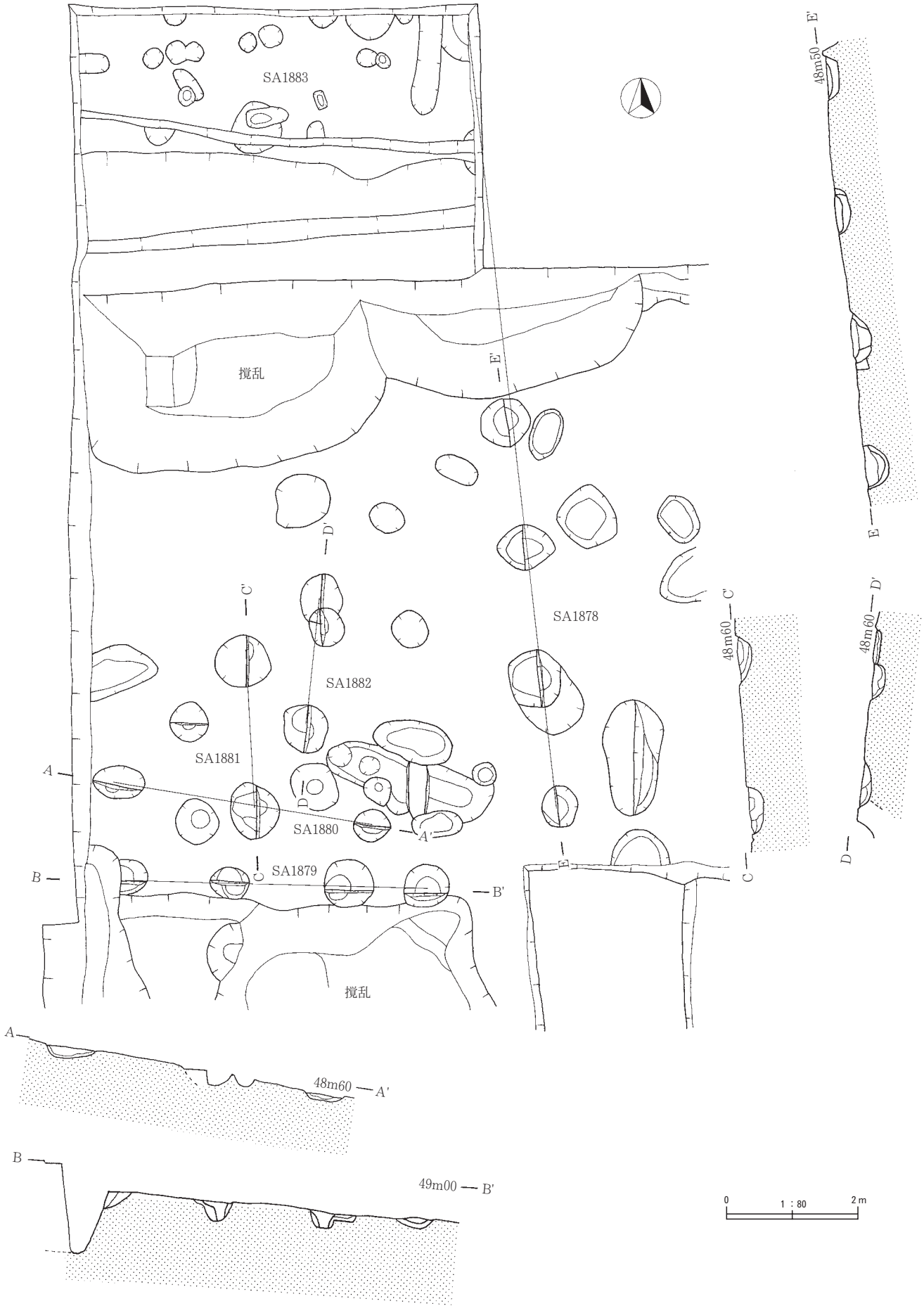
Ｂ調査区中央の地山飛砂層面で検出された。５基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約４度西に振れる。柱掘り方は直径50㎝～80㎝の円形、深さは20㎝～40㎝で、全体に削平を受けている。削平と抜き取りにより明確でないが、柱痕跡は直径26㎝前後である。柱間は西から1.9ｍ＋1.9ｍ＋2.0ｍ＋2.0ｍ（＋2.0ｍ＋2.0ｍ）…である。材木塀（柱列塀）の柱痕跡のみが遺存した可能性がある。

ＳＡ1879柱列（第17図、図版７）

Ｂ調査区中央の第11層褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。４基以上の柱掘り方よりなる東西方向の柱列である。柱列の方向は西で約２度北に振れる。柱掘り方は直径60㎝～80㎝の円形で、深さ20㎝～30㎝と浅く、全体に削平を受けている。柱痕跡は直径12㎝～14㎝で、抜き取りを受けている。柱間は西から1.8ｍ＋1.5ｍ＋1.4ｍ…である。材木塀（柱列塀）の柱痕跡のみが遺存した可能性がある。

ＳＡ1880柱列（第17図、図版７）

Ｂ調査区中央の地山飛砂層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる東西方向の柱列である。柱列の方向は西で約９度北に振れる。柱掘り方は直径50㎝～80㎝の円形で、深さ10㎝～20㎝と浅く、全体に削平を受けている。柱痕跡は削平と抜き取りにより不明である。柱間は東から2.0ｍ＋1.8ｍ…と推定される。



第17図　ＳＡ1878・ＳＡ1879・ＳＡ1880・ＳＡ1881・ＳＡ1882柱列、ＳＡ1883ピット群

ＳＡ1881柱列（第17図、図版７）

Ｂ調査区中央の地山飛砂層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約２度西に振れる。柱掘り方は直径70㎝～80㎝の円形で、深さ20㎝～30㎝と浅く、全体に削平を受けている。削平により明確でないが、柱痕跡は直径16㎝前後である。柱間は南から2.4ｍ＋…である。

ＳＡ1882柱列（第17図、図版７）

Ｂ調査区中央の地山飛砂層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約７度東に振れる。柱掘り方は直径60㎝～70㎝の円形で、深さ15㎝～20㎝と浅く、全体に削平を受けている。柱痕跡は削平と抜き取りにより不明である。柱間は南から1.8ｍ＋…と推定される。

ＳＡ1883ピット群（第４・17図、図版４・７）

Ｂ調査区中央から北側にかけての地山飛び砂層面から第11層褐色砂・浅黄色砂層面にかけて検出された。直径30㎝～50㎝の小柱掘り方からなるピット群である。小規模な掘立柱建物や柱列を構成する可能性がある。埋土より赤褐色土器片が出土している。

ＳＡ1884ピット群（第４図、図版６）

Ｄ調査区中央から北側にかけての地山飛び砂層面で検出された。直径30㎝～50㎝の小柱掘り方からなるピット群である。小規模な掘立柱建物や柱列を構成する可能性がある。埋土より赤褐色土器片が出土している。

ＳＡ1885Ａ・Ｂ材木塀跡（第４・18図、図版８）

Ａ調査区中央北寄りの第８層褐色土・明褐色土層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西方向の材木塀で、西側は削平により失われ、東側は調査区外へ延びる。塀の方向は、布掘り溝跡が西で約１度北へ振れる方向である。位置等から、今次調査地西側の第33次調査検出の区画施設であるSA565と連続すると考えられる。ほぼ同位置で新旧二時期の重複があり、新しい布掘り溝跡がＡ、古い布掘り溝跡がＢとなる。

布掘り溝跡は上幅60㎝～70㎝、深さ30㎝～40㎝で、断面形はＵ字状を呈する。新しい布掘り溝には直径50㎝～60㎝の小柱掘り方を2.7ｍ間隔で伴う。古い布掘り溝は底部に直径20㎝～30㎝の丸太材の柱痕跡が認められる。材の間隔は１ｍ前後と推定され、間隔をあけて丸太材を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。また、複数の柱痕跡が接するように認められる箇所があることから、改修・補修が行われた可能性がある。

SA1886、SD1890、SK1908と重複し、SD1890、SK1908よりも古く、SA1886より新しい。

SA1885Ａ・Ｂ出土遺物（第19図、図版33、34）

１～８はＳＡ1885Ｂ布掘り埋土、９はＳＡ1885Ａに伴う小柱掘り方抜き取り、10～12はＳＡ1885Ａに伴う小柱掘り方埋土出土である。

須恵器（１）：糸切り無調整の坏で、底部外面に判読不能の墨書がある。

土師器（10）：糸切り後、台周縁に撫で調整を施す台付皿である。内面の口縁部から体部下半にかけて横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

赤褐色土器（２～９、11、12）：２、３は糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。４～７、９は糸切り無調整の坏である。４は口縁部内外面に、６は体部内外面に煤状炭化物が付着している。７は底部

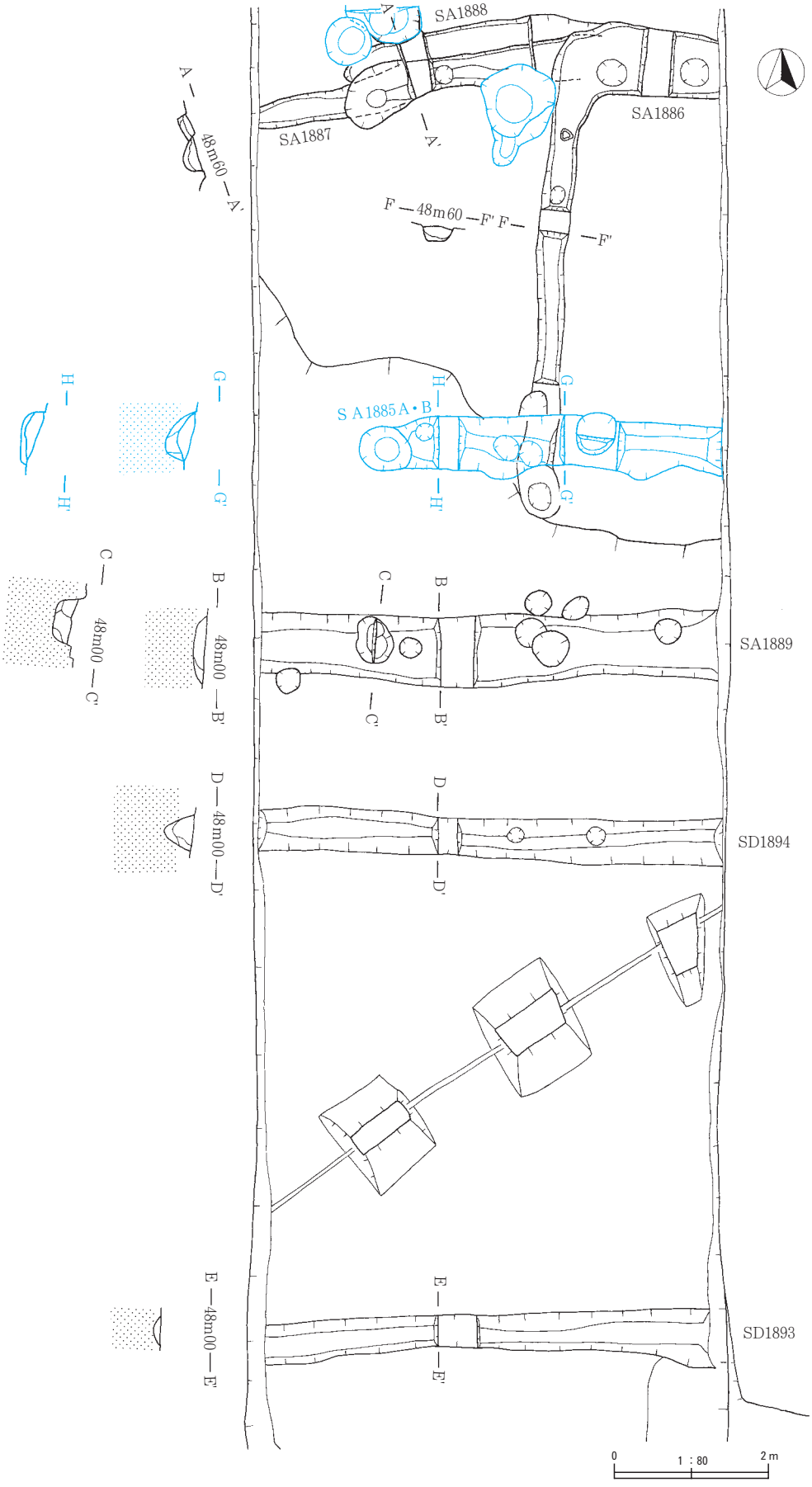
外面に「厨ヵ」の、8は体部外面に判読不能の墨書がある。11は糸切り無調整の皿である。体部内面に煤状炭化物が付着し、体部外面に二次加熱の痕跡がある。12は糸切り後に台周縁に撫で調整を施す台付皿で、底部内面を硯に転用している。

ＳＡ1886材木塀跡

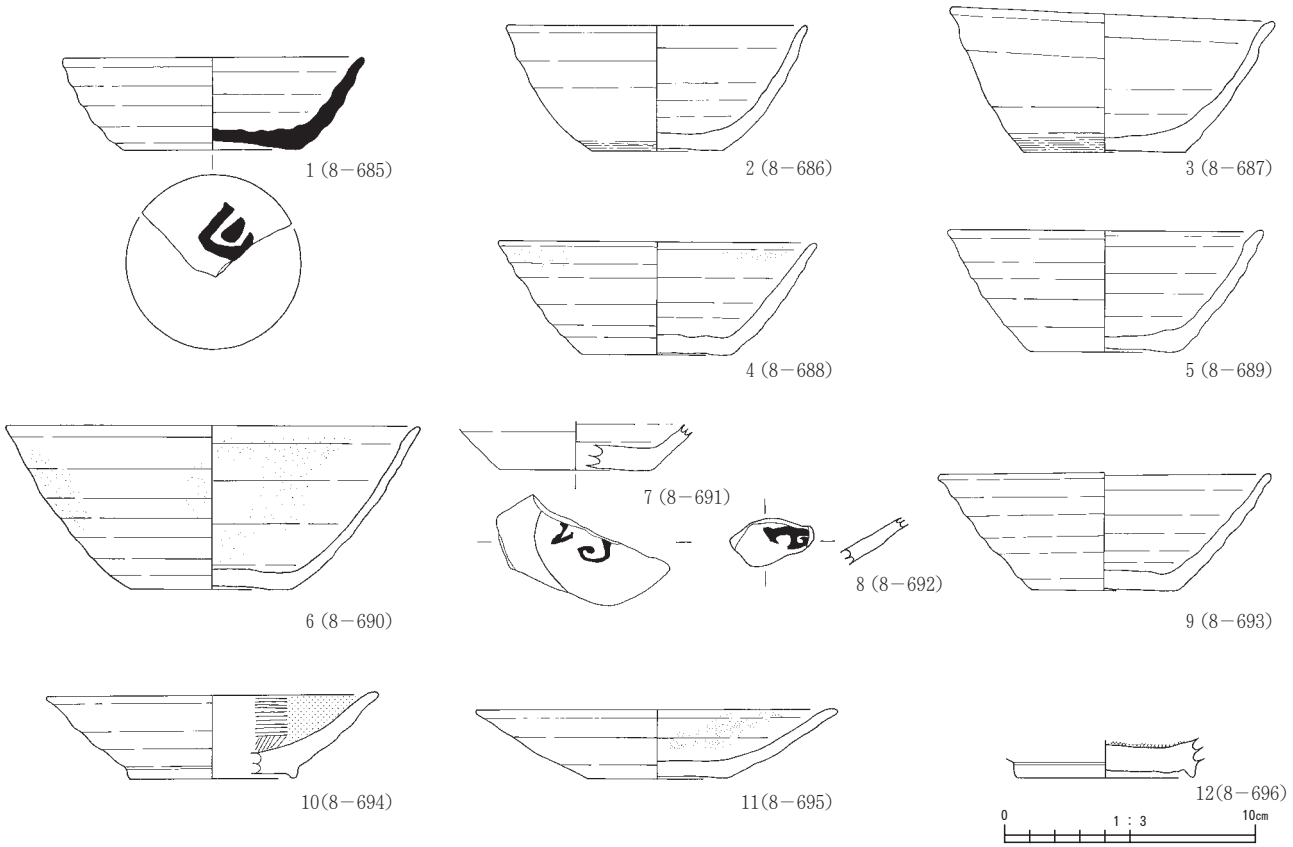
（第18図、図版８）

Ａ調査区中央から北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西から南北方向へ曲がる材木塀跡で、L字状を呈している。南側は削平により失われた可能性がある。東側は調査区外へ延びる。塀の方向は、東西方向の布掘り溝跡が西で約１度北へ振れる方向で、南北方向の布掘り溝跡が北で約４度東へ振れる方向である。

布掘り溝跡は上幅40㎝～90㎝、深さ20㎝～25㎝で、断面形は逆台形を呈する。



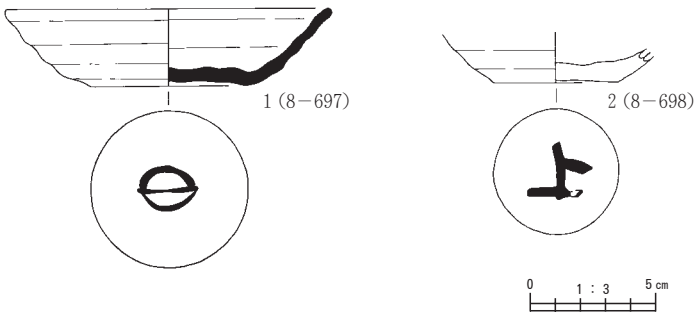
第18図　ＳＡ1885Ａ・Ｂ・ＳＡ1886・ＳＡ1887・ＳＡ1888・ＳＡ1889材木塀跡、ＳＤ1893・ＳＤ1894溝跡



第19図　ＳＡ1885Ａ・Ｂ材木塀跡出土遺物

東西方向の布掘り溝の幅が広い。材の痕跡は、布掘り溝底部の柱痕跡より直径20㎝～30㎝の丸太材である。材の間隔は、抜き取りを受けており明確でないが、0.7ｍ～１ｍと推定され、間隔をあけて丸太材を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。

SA1876、SA1885ＡＢ、SA1887、SA1888、SD1890と重複し、SA1885ＡＢ、SA1887、SA1888、SD1890よりも古く、SA1876より新しい。



第20図　ＳＡ1886材木塀跡出土遺物

ＳＡ1886出土遺物（第20図、図版34）

１は埋土、２は埋土上層出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後に撫で調整を施す坏で、底部外面に記号状の墨書がある。

赤褐色土器（２）：糸切り無調整の坏で、底部外面に「上」の墨書がある。

ＳＡ1887材木塀跡（第４・５・18図、図版８）

Ａ調査区北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西方向の材木塀跡で、東側、西側とも調査区外へ延びる。塀の方向は、布掘り溝跡が西で約９度南へ振れる方向である。

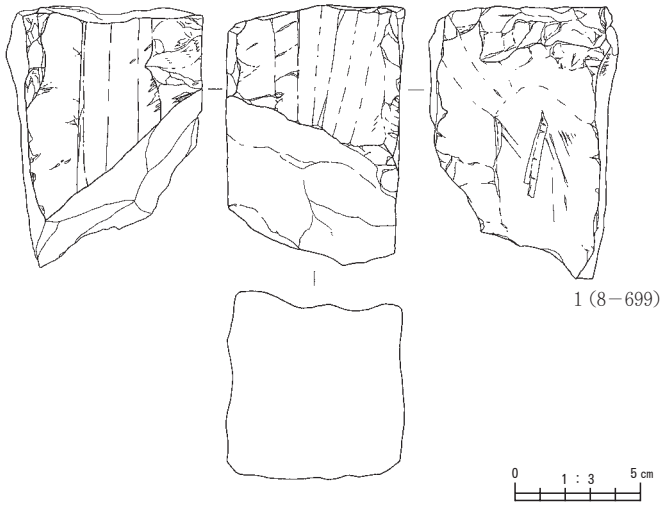
布掘り溝跡は上幅40㎝前後、深さ25㎝前後で、断面形はU字状を呈する。材の痕跡は、布掘り溝底部の柱痕跡より直径20㎝の丸太材である。材の間隔は、抜き取りを受けており明確でないが、間隔をあけて丸太材を立て並べた構造の柱列塀と推定される。

SA1876、SA1886、SA1888と重複し、これらより新しい。

ＳＡ1887出土遺物（第21図、図版34）

１は埋土出土である。

砥石（１）：３面に磨面が認められるもので、石質は凝灰岩である。



第21図　ＳＡ1887材木塀跡出土遺物

ＳＡ1888材木塀跡（第４・５・18図、図版８）

Ａ調査区北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西方向の材木塀跡で、東側はSA1866の重複により不明となっている。塀の方向は、布掘り溝跡が西で約７度南へ振れる方向である。

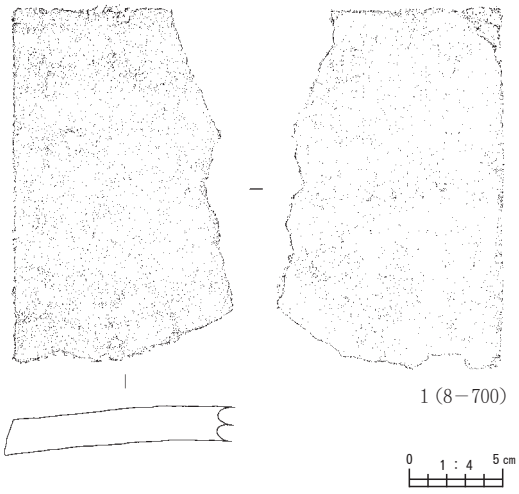
布掘り溝跡は上幅40㎝以上、深さ15㎝前後で、断面形はU字状を呈する。材の痕跡及び材の間隔は削平と抜き取りにより明確でない。

SA1876、SA1886、SA1887と重複し、SA1887より古く、SA1876、SA1886より新しい。

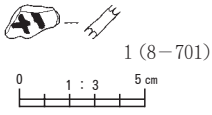
ＳＡ1888出土遺物（第22図、図版34）

１は埋土出土である。

瓦（１）：熨斗瓦である。硬質で、暗灰色を呈する。



第22図　ＳＡ1888材木塀跡出土遺物



第23図　ＳＤ1894溝跡出土遺物

ＳＡ1889材木塀跡（第18図、図版８）

Ａ調査区中央北寄りの第10層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西方向の材木塀跡で、東側、西側とも調査区外へ延びる。塀の方向については、布掘り溝跡が西で約１度南へ振れる方向である。

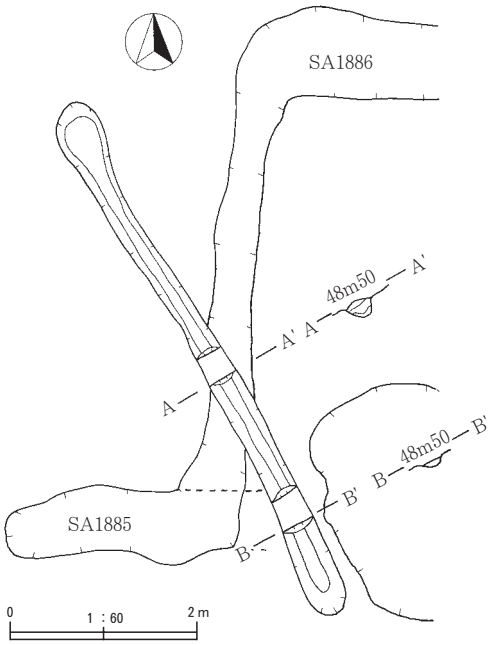
布掘り溝跡は上幅80㎝～90㎝、深さ20㎝前後で、断面形はU字状を呈する。材の痕跡は、布掘り溝底部の柱痕跡より直径30㎝前後の丸太材である。材の間隔は1.2ｍと推定され、間隔をあけて丸太材を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。複数の柱痕跡が接するように認められる箇所があることから、改修・補修が行われた可能性がある。埋土より赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1893溝跡（第18図、図版８・９）

Ａ調査区中央南寄りの第10層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。城内東西道路南側側溝となる可能性が高い。幅40㎝～50㎝、深さ10㎝～20㎝、長さ5.6ｍ以上の東西北方向の溝跡で、溝の方向は西で約２度南に振れる。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1894溝跡（第18図、図版８・９）

Ａ調査区中央の第10層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。幅50㎝～60㎝、深さ35㎝前後、長さ6.0ｍ以上の東西方向の溝跡で、溝の方向は西でほぼ真西の方向である。底部に直径20㎝前後の丸太材の痕跡が認められる箇所があり、材木塀等の区画施設となる可能性を残す。城内東西道路北側の側溝や区画施設となる可能性が高い。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。

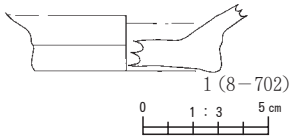


第24図　ＳＤ1890溝跡

ＳＤ1894出土遺物（第23図、図版35）

１は埋土出土である。

赤褐色土器（１）：体部破片で、外面に判読不能の墨書がある。



第25図　ＳＤ1890溝跡出土遺物

ＳＤ1890溝跡（第24図、図版10）

Ａ調査区中央北寄りの第６層褐色土層面で検出された。幅30㎝～45㎝、深さ10㎝～20㎝、長さ6.0ｍ以上の北西から南東方向の溝跡で、溝の方向は北で約29度西に振れる。SA1885・SA1886・SK1910と重複し、これより新しい。

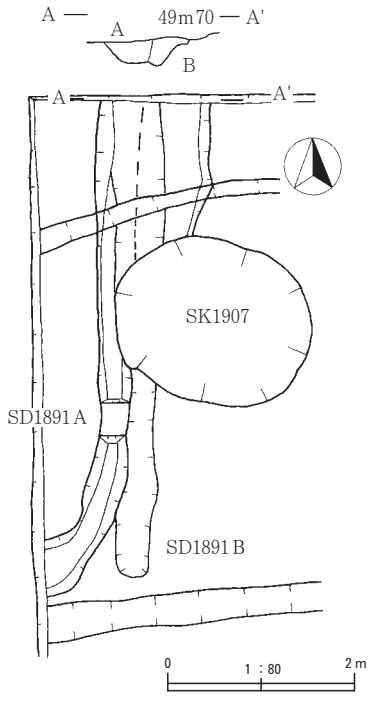
ＳＤ1890出土遺物（第25図、図版34）

１は埋土出土である。

赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏である。底部が擬高台状に厚く作られて、柱状高台となっている。

ＳＤ1891Ａ・Ｂ溝跡（第26・36図、図版12）

Ａ調査区北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された。やや位置をずらして新旧二時期の重複があり、新しい溝跡がＡ、古い溝跡がＢとなる。SD1891Ａは幅30㎝～50㎝、深さ20㎝～25㎝、長さ5.0ｍ以上の南北方向の溝跡で、南で西側調査区外へ屈曲する。溝の方向は南北方向で、北で約２度東に振れる。SD1891Ｂは幅30㎝～50㎝、深さ20㎝～30㎝、長さ5.0ｍ以上の南北方向の溝跡である。溝の方向は南北方向で、北でほぼ約１度西に振れる。Ａ・ＢともにSK1907と重複し、これより古い。

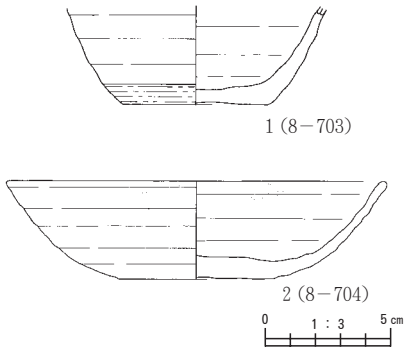


第26図　ＳＤ1891Ａ・Ｂ溝跡

ＳＤ1891出土遺物（第27図、図版34）

１、２はSD1891Ｂ埋土出土である。

赤褐色土器（１、２）：１は糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。２は糸切り無調整の坏である。内外面が平滑で、丁寧な作りである。



第27図　ＳＤ1891溝跡出土遺物

ＳＤ1892溝跡（第28図、図版10）

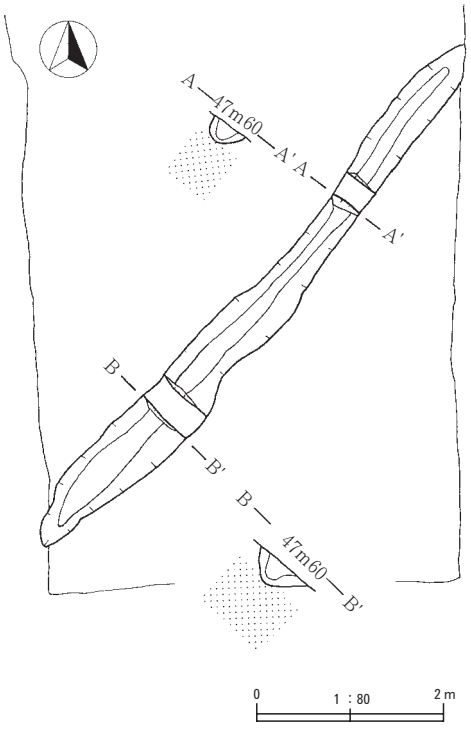
Ａ調査区南側の第６層褐色土層面で検出された。幅30㎝～60㎝、深さ20㎝～30㎝、長さ7.0ｍ以上の北東から南西方向の溝跡で、溝の方向は北で約49度東に振れる。

ＳＤ1895溝跡（第29図、図版９・10）

Ａ調査区北側の第10層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。幅90㎝～100㎝、深さ10㎝前後、長さ4.7ｍ以上の東西方向の溝跡で、溝の方向は西で約４度北に振れる。城内東西道路北側の側溝となる可能性が高い。SA1886、SK1908、SK1910と重複し、これらより古い。

ＳＤ1896溝跡（第４・５・29図、図版９・10）

Ａ調査区北側の第10層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。幅30㎝前後、深さ20㎝前後、長さ3.3ｍ以上の東西方向の溝跡で、溝の方向は西で約１度北に振れる。城内東西道路北側の区画施設布掘り溝跡となる可能性が高い。SA1886、SK1910と重複し、これらより古い。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。



第28図　ＳＤ1892溝跡

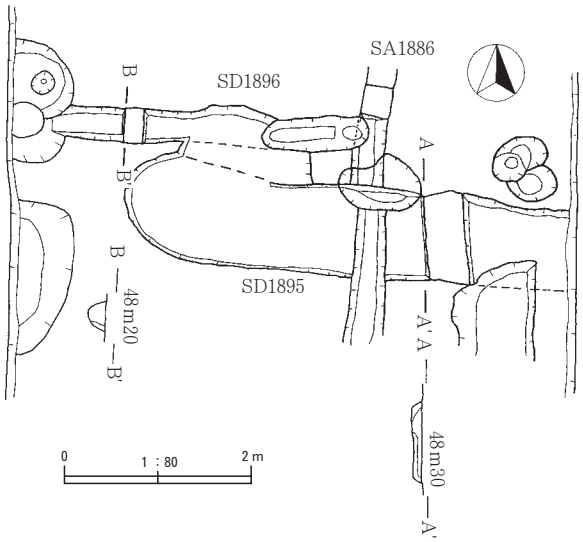
ＳＤ1897溝跡（第４・５・30図、図版11）

Ｂ調査区南東側の第６層褐色土層面で検出された。幅80㎝～40㎝、深さ40㎝～55㎝、長さ17.0ｍ以上のやや不規則な南北方向の溝跡で、溝の方向は北で約18度東に振れ、南側では大きくは真南の方向となる。SD1899Ａ・Ｂ、SX1918、SI1900、SK1916と重複し、これらより新しい。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1897出土遺物（第31図、図版35）

１は埋土出土である。

陶器（１）：灰釉壺の体上部で、施釉方法は剥落に



第29図　ＳＤ1895・ＳＤ1896溝跡

より不明である。

ＳＤ1898溝跡（第４・５・30図、図版11）

Ｂ調査区南東側の第６層褐色土層面で検出された。幅40㎝～80㎝、深さ35㎝～50㎝、長さ3.0ｍ以上のやや不規則な東西方向の溝跡で、溝の方向は西で約26度南に振れる。SD1899Ａ・Ｂ、SX1918Ａ・Ｂと重複し、これらより新しい。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1899Ａ溝跡（第32図、図版11）

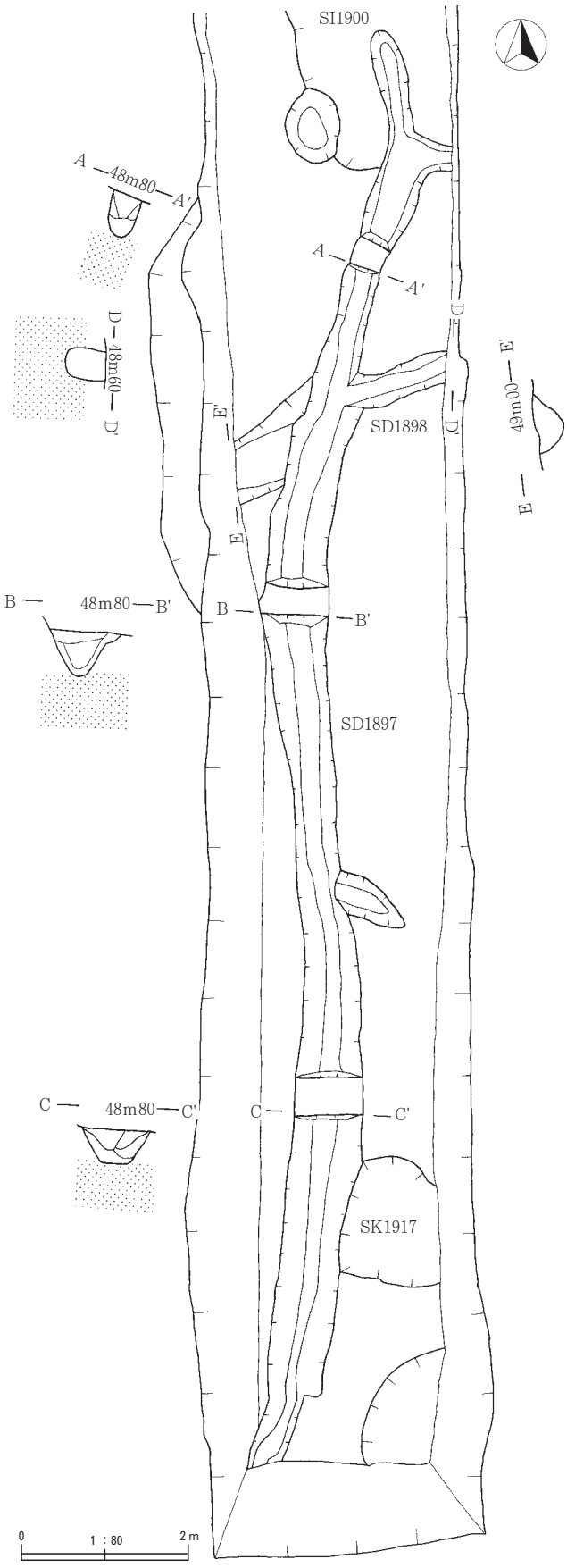
Ｂ調査区南東側の第10層明黄褐色砂・褐色砂層面で検出された。やや位置をずらして新旧二時期の重複があり、新しい溝跡がＡ、古い溝跡がＢとなる。SD1899Ａは幅70㎝～100㎝、深さ20㎝前後、長さ2.4ｍ以上の東西方向の溝跡である。溝の方向は西で約５度北に振れる。SX1918Ａ道路遺構硬化面の南端部に接し、城内東西道路の南側側溝となると判断される。SD1897、SD1998と重複し、これらより古い。

ＳＸ1918Ａ道路遺構（第32図、図版11）

Ｂ調査区南東側の第10層明黄褐色砂・褐色砂層面で検出された。ほぼ同位置に新旧二時期の道路面が重複しており、新しい道路面がＡ、古い道路面がＢとなる。SX1918Ａは厚さ10㎝前後の粘土混じりの灰褐色土により造成されており、上面は硬化している。道路北側は後世の削平により失われており、北側2.2ｍまで整地及び硬化面を確認できる。硬化面が途切れる南側にSD1899Ａが接している。城内東西道路の道路遺構となると判断される。SD1897、SD1998と重複し、これらより古い。

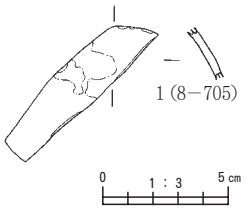
ＳＤ1899Ｂ溝跡（第33図、図版11）

Ｂ調査区南東側の第11層褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。SD1899Ａに対してやや北寄りにずれている。幅80㎝、深さ20㎝前後、長さ2.4ｍ以上の東西方向の溝跡である。溝の方向は西で約３度北に振れる。SX1918Ｂ道路遺構の南端部に接し、城内東西道路の南側側溝となると



第30図　ＳＤ1897・ＳＤ1898溝跡

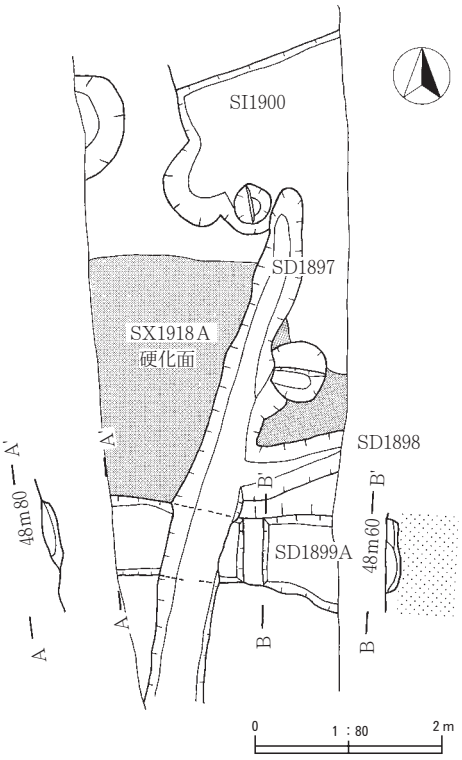
判断される。SD1897、SD1998と重複し、これらより古い。



第31図　ＳＤ1897溝跡出土遺物

ＳＸ1918Ｂ道路遺構（第32図、図版11）

Ｂ調査区南東側の第11層褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。SX1918Ａの下層の整地層で、厚さ10㎝前後の褐色土により造成されている。SX1918Ａによる造成・削平の影響か硬化はほとんどしていない。道路北側は後世の削平により失われており、北側2.2ｍまで整地面を確認できる。整地面が途切れる南側にSD1899Ｂが接している。城内東西道路の道路遺構となると判断される。SD1897、SD1998と重複し、これらより古い。



第32図　ＳＸ1918Ａ道路遺構、ＳＤ1899Ａ溝跡

ＳＩ1900竪穴住居跡（第34図、図版５）

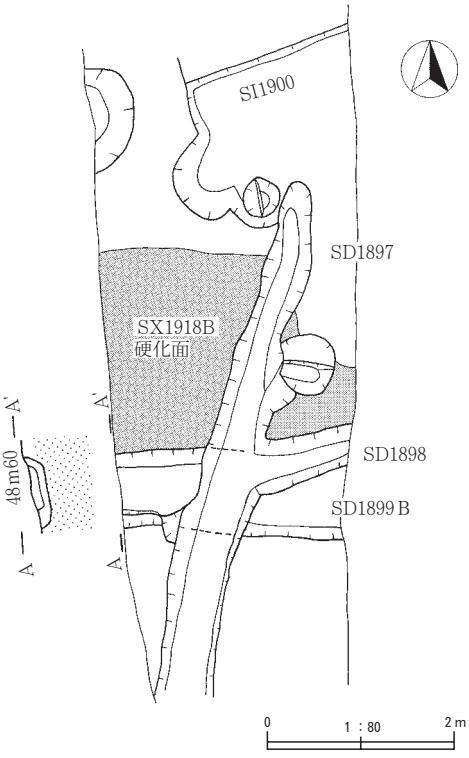
Ｂ調査区南東側の第10層明黄褐色砂・褐色砂層面で検出された。平面形は東西2.3ｍ以上×南北4.0ｍの方形を呈し、東側調査区外へプランは広がる。西壁は北で約18度西へ振れる。カマドの有無は不明である。住居壁高は約20㎝を計るが、削平により全体に浅くなっている。北西及び南西隅の床面に小柱穴を伴う。

ＳＩ1900出土遺物（第35図、図版35）

１は南西隅ピット、２は埋土出土である。

赤褐色土器（１）：糸切り無調整の中型甕である。頸部が「く」の字状に外傾して口縁部が立ち上がる器形で、体部外面と口縁部内面に煤状炭化物が付着している。

陶器（２）：緑釉陶器椀の口縁部破片で、内外面につけ掛けで施釉している。



第33図　ＳＸ1918Ｂ道路遺構、ＳＤ1899Ｂ溝跡

ＳＩ1901竪穴状工房跡（第４・５・36図、図版12）

Ａ調査区北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された。平面形は東西4.0ｍ以上×南北６.4ｍ以上の方形を呈し、南西隅部が南に約１ｍ張り出すプランとなっている。北側及び東側の調査区外へプランは広がり、大きな竪穴状工房の南西側と考えられる。西壁は北で約６度西へ振れる。側壁から東側（中央寄り）にやや離れた床面に南北方向に２基以上の掘立柱列を伴う。床面には炭化物面と焼土面が認められる。壁高は高い部分で15㎝～20㎝を計るが、全体に削平により浅くなっている。

ほぼ同位置にSI1902ＡＢ、SI1903が重複しており、それらよりも新しい。また、SA1874、SX1921、SK1907、SK1912、SK1913と重複し、それらより古い。

ＳＩ1901出土遺物（第37～39図、図版35～37）

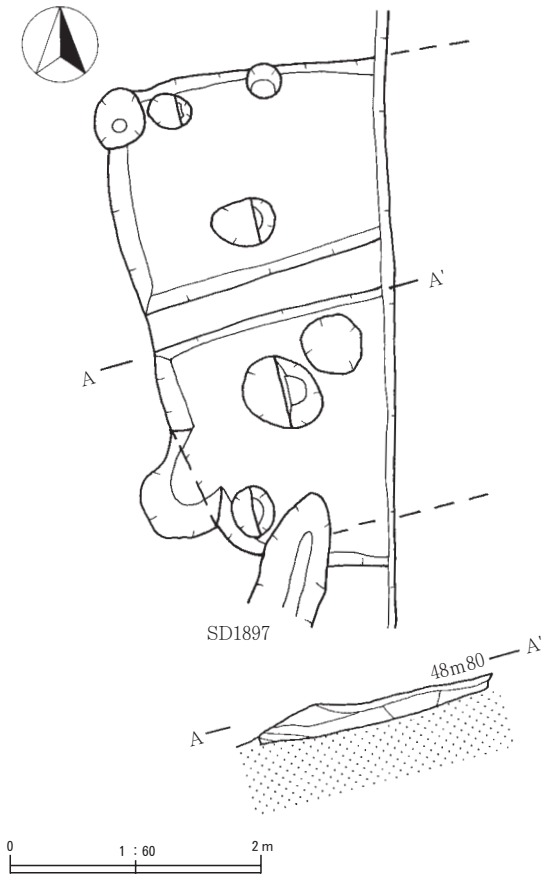
１～７、10、12、13、19～21、24～27、29は埋土、８、９、11、14～18、22、23、28、30、31は床面出土である。

他に埋土より鉄滓が出土している。

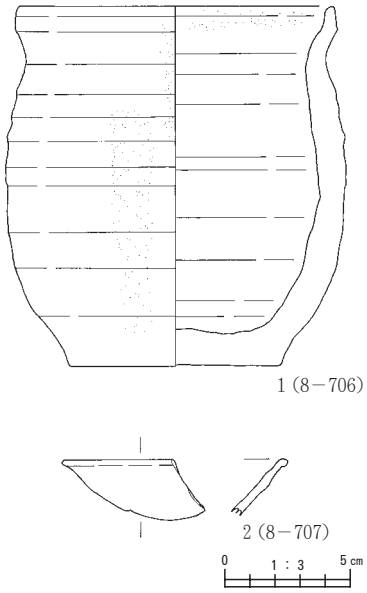
須恵器（１～11）：１は糸切り無調整の坏である。体部外面に判読不能の墨書が、底部内面に漆の付着が認められる。２、３はヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。２の口縁部内面に煤状炭化物が付着し、３の底部外面には「尓」の墨書がある。４は糸切り後、底部周縁に撫で調整を施す坏である。５は糸切り無調整の坏である。６はヘラ切り後に撫で調整を施す坏で、底部外面に判読不能の墨書がある。また、底部内面に煤状炭化物が多く認められ、燈明皿として使用されたと考えられる。７は糸切り無調整の坏である。８はヘラ切り後に撫で調整を施す坏で、底部外面に「午」の墨書がある。７、８は底部内面を硯に転用している。９は蓋の破片で、体部外面に墨痕が認められる。10は天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施す蓋である。天井部内面を硯に転用し、体部外面に「天」の墨書がある。11はヘラ切り後、台周縁に撫で調整を施す台付坏で、底部外面を硯に転用している。

土師器（12、13）：12は台付皿で、糸切り後、台周縁に撫で調整を施す。内面の口縁部から体部下半にかけて横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。13は糸切り無調整の坏である。口縁部外面に撫で調整を施し、内面の口縁部から体部下半にかけて横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

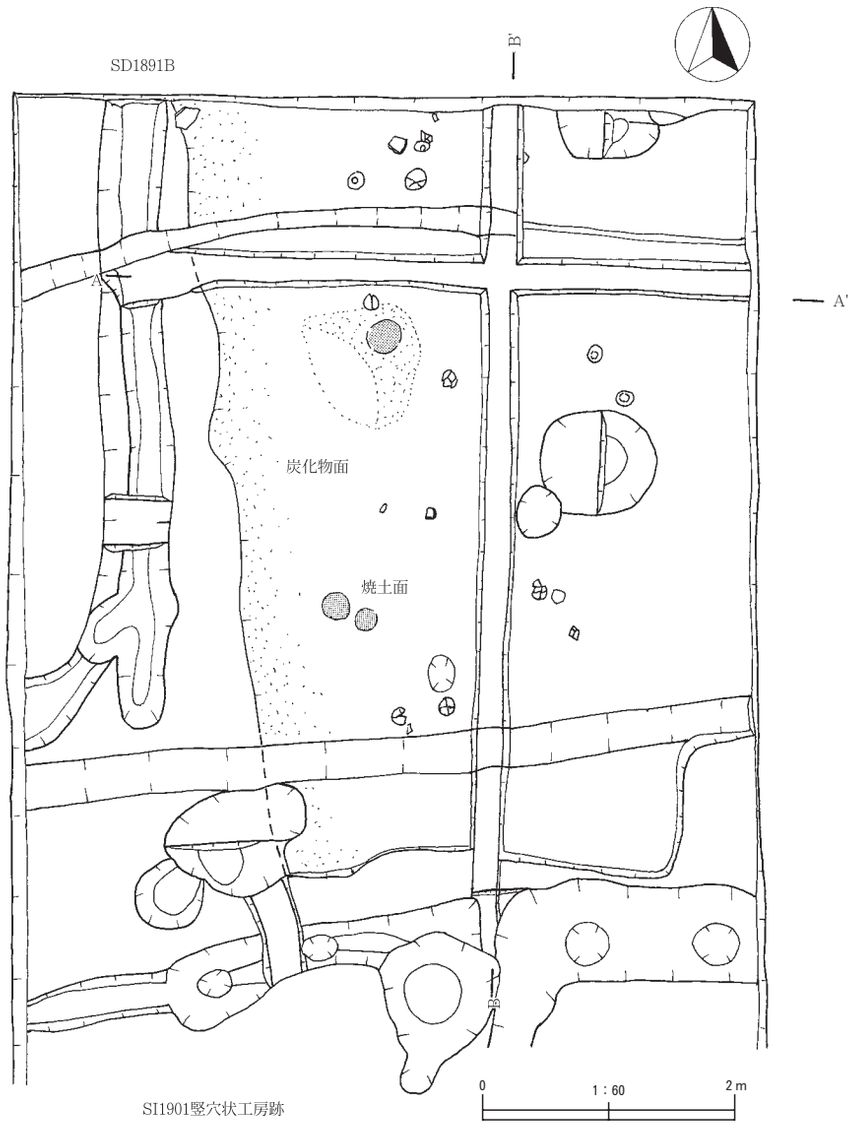
赤褐色土器（14～28）：14は糸切り後に体部下端にケズリ調整を施す坏で、体部内面に煤状炭化物が付着している。15～24、26、27は糸切り無調整の坏である。19の体部内面に煤状炭化物が付着している。22、26は底部外面に「厨」、23は底部外面に「厨カ」、24は底部外面に「由」、27は底部外面に「田中」の墨書がある。25は坏の口縁部から体部破片で、外面に「厨」の墨書がある。28は天井部ヘラ切り後にケズリ調整を施す蓋で、体部から天井部内面に煤状炭化物が付着している。

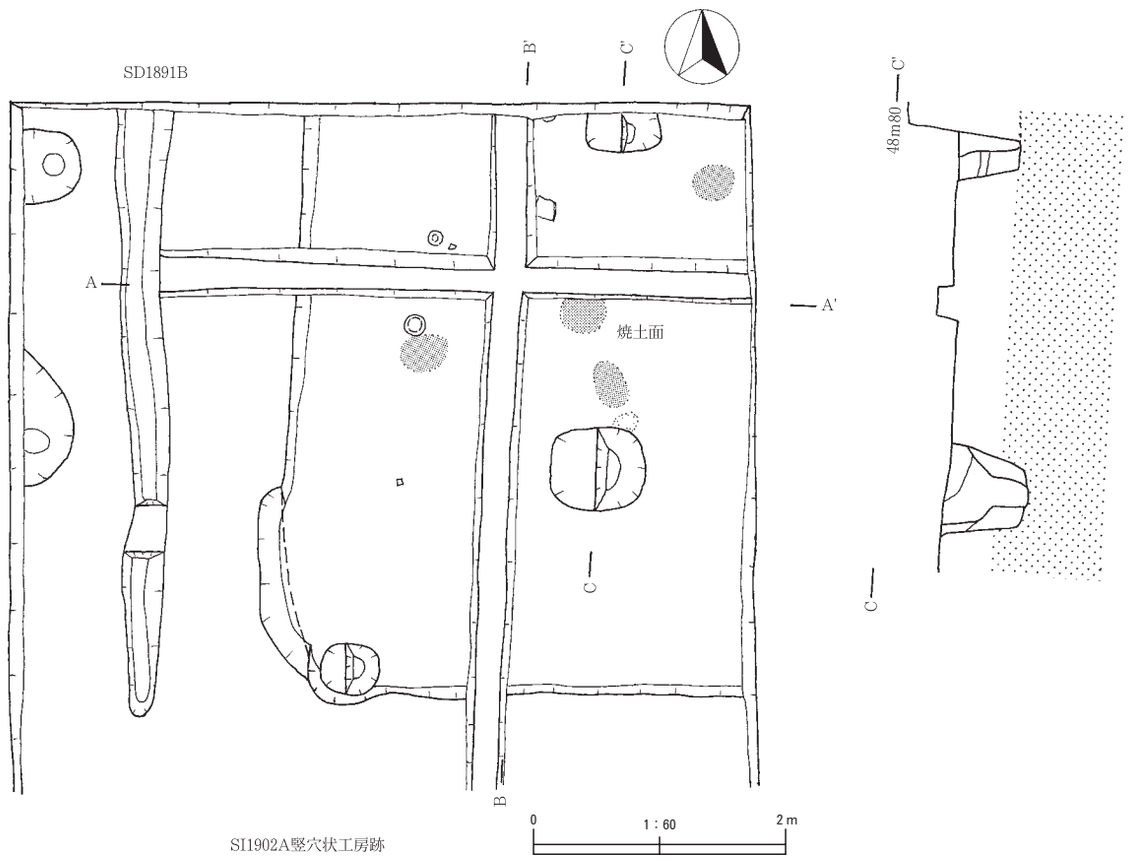


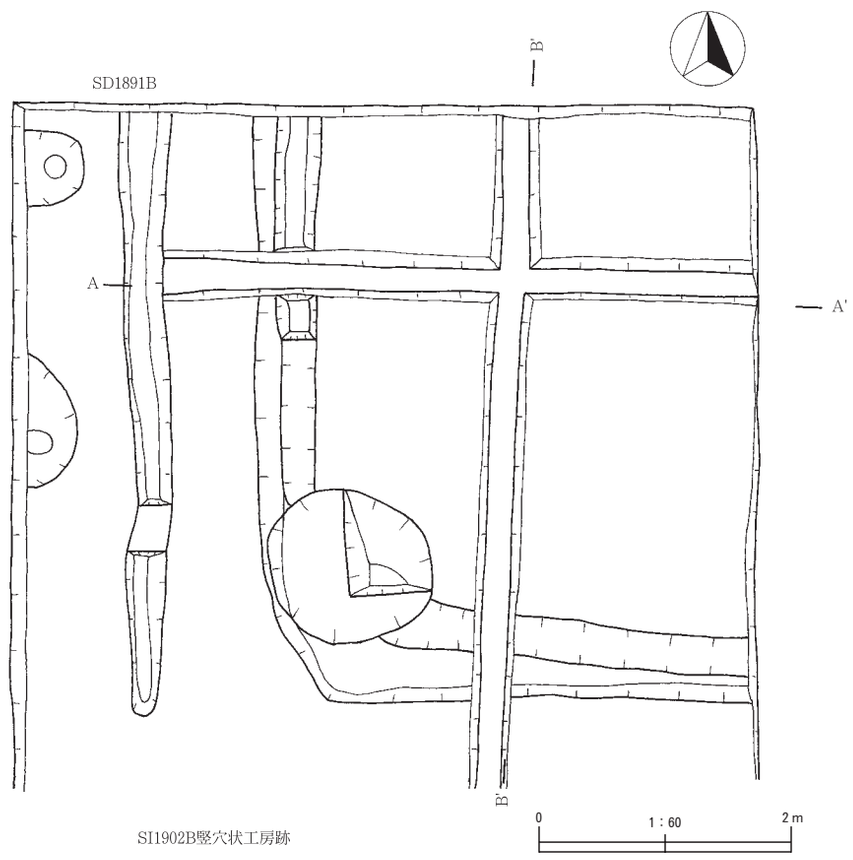
第34図　ＳＩ1900竪穴住居跡

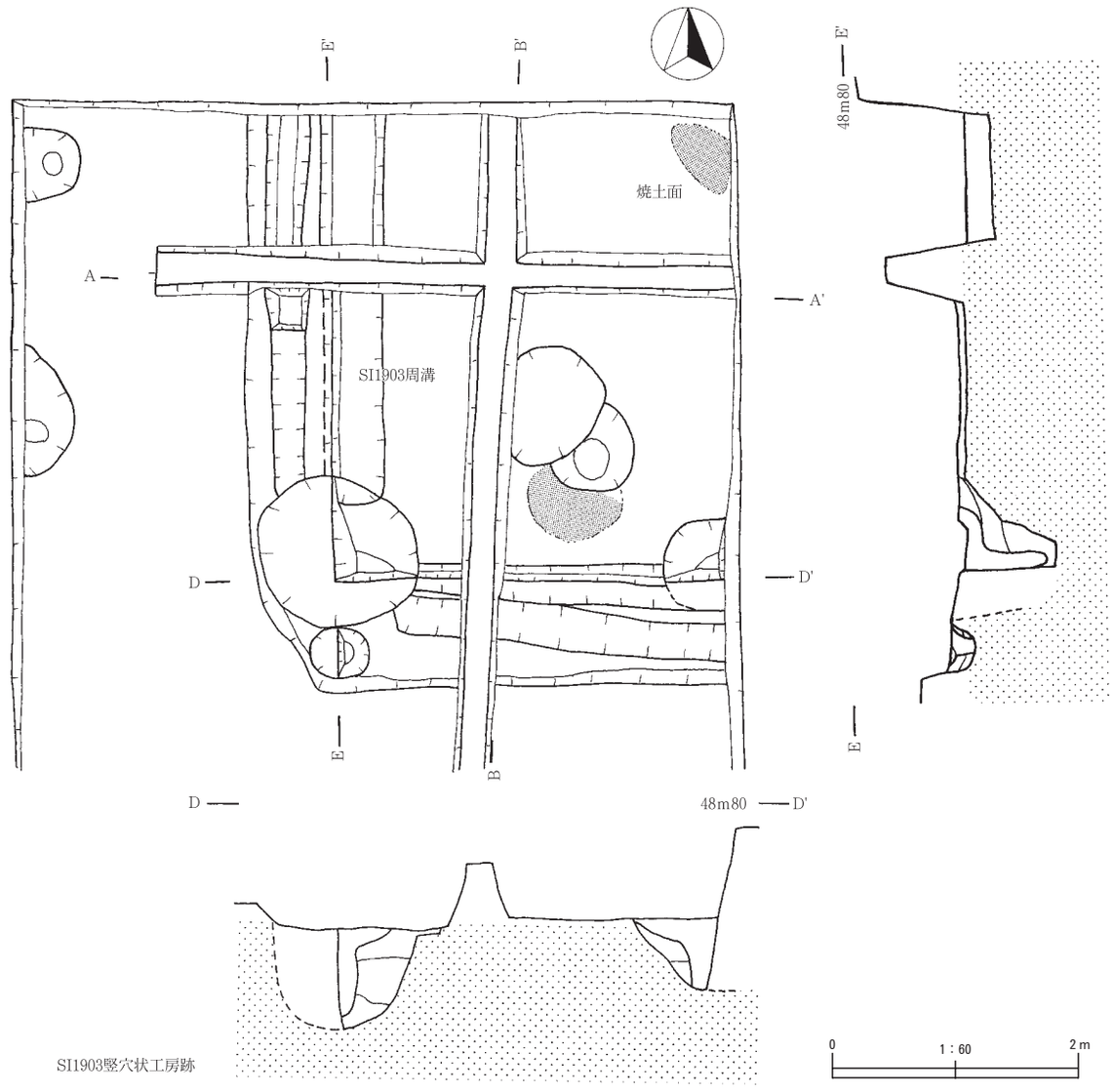


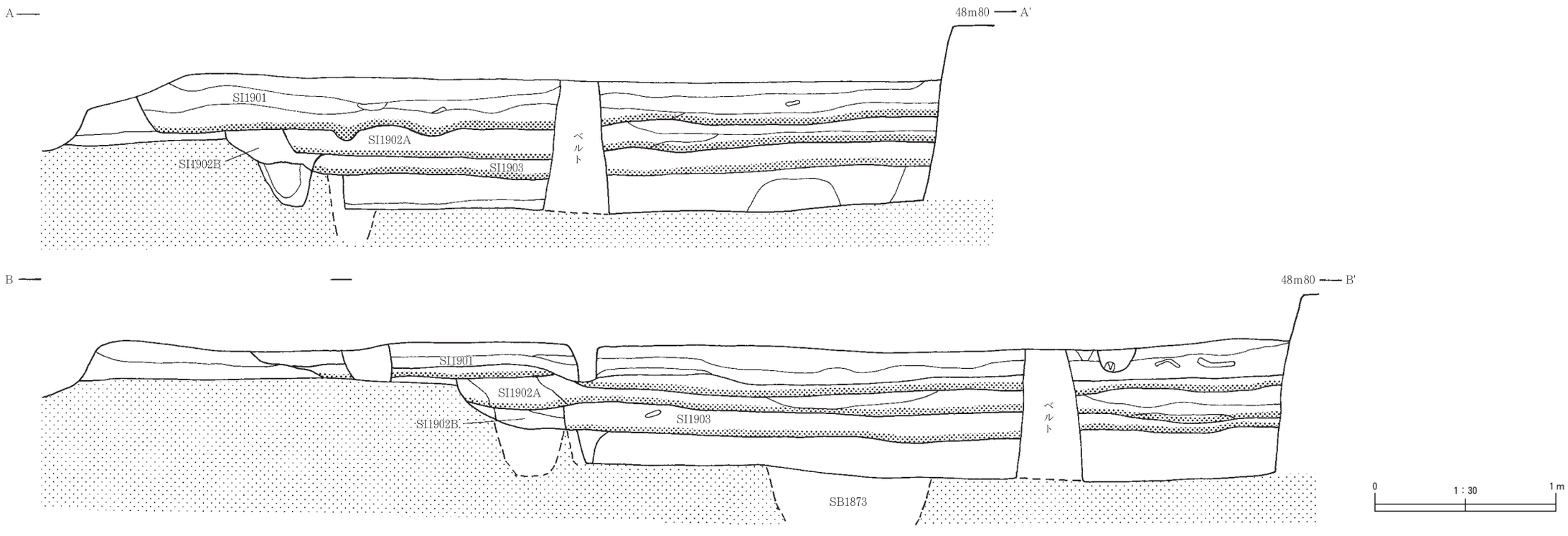
第35図　ＳＩ1900竪穴住居跡出土遺物



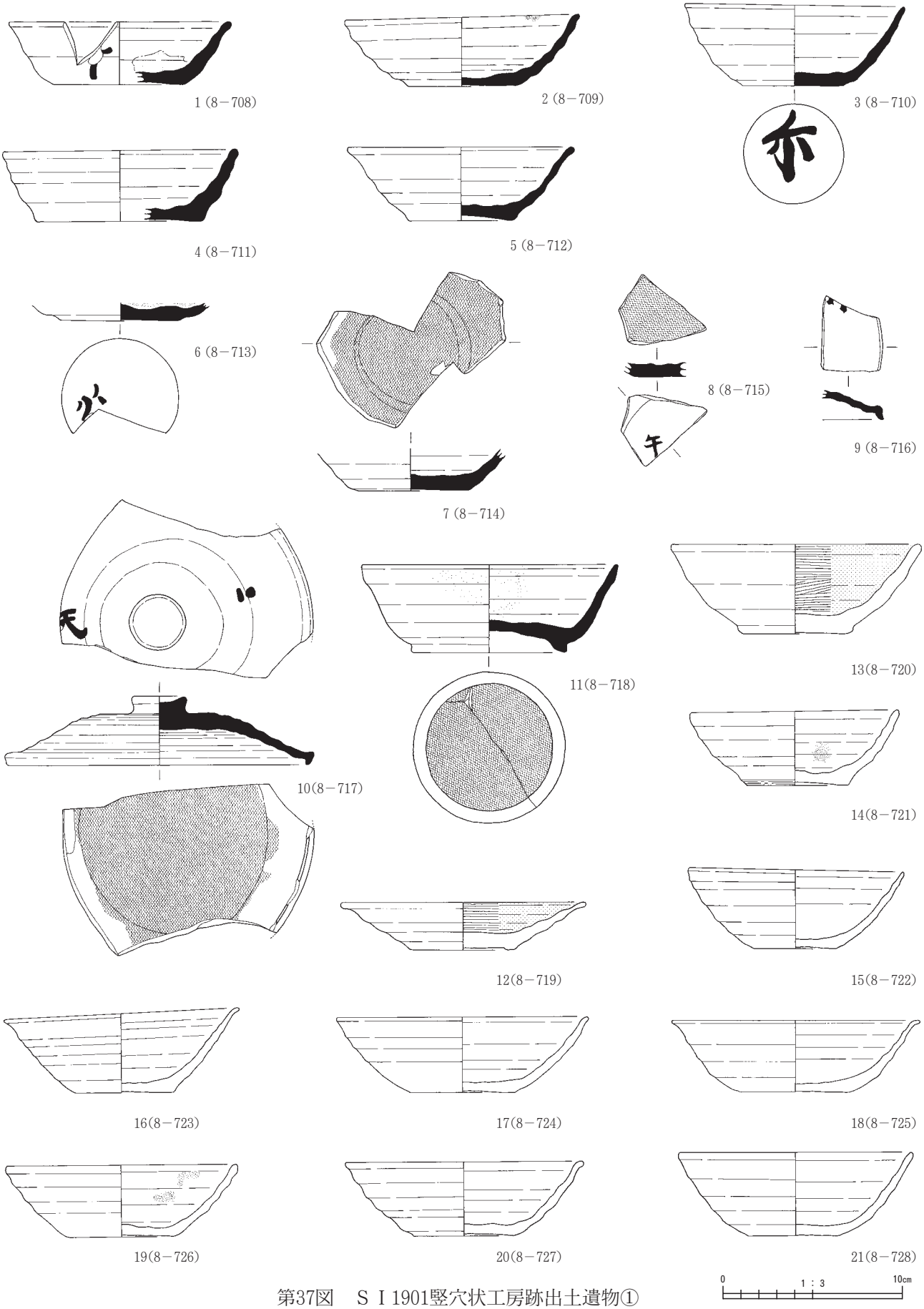




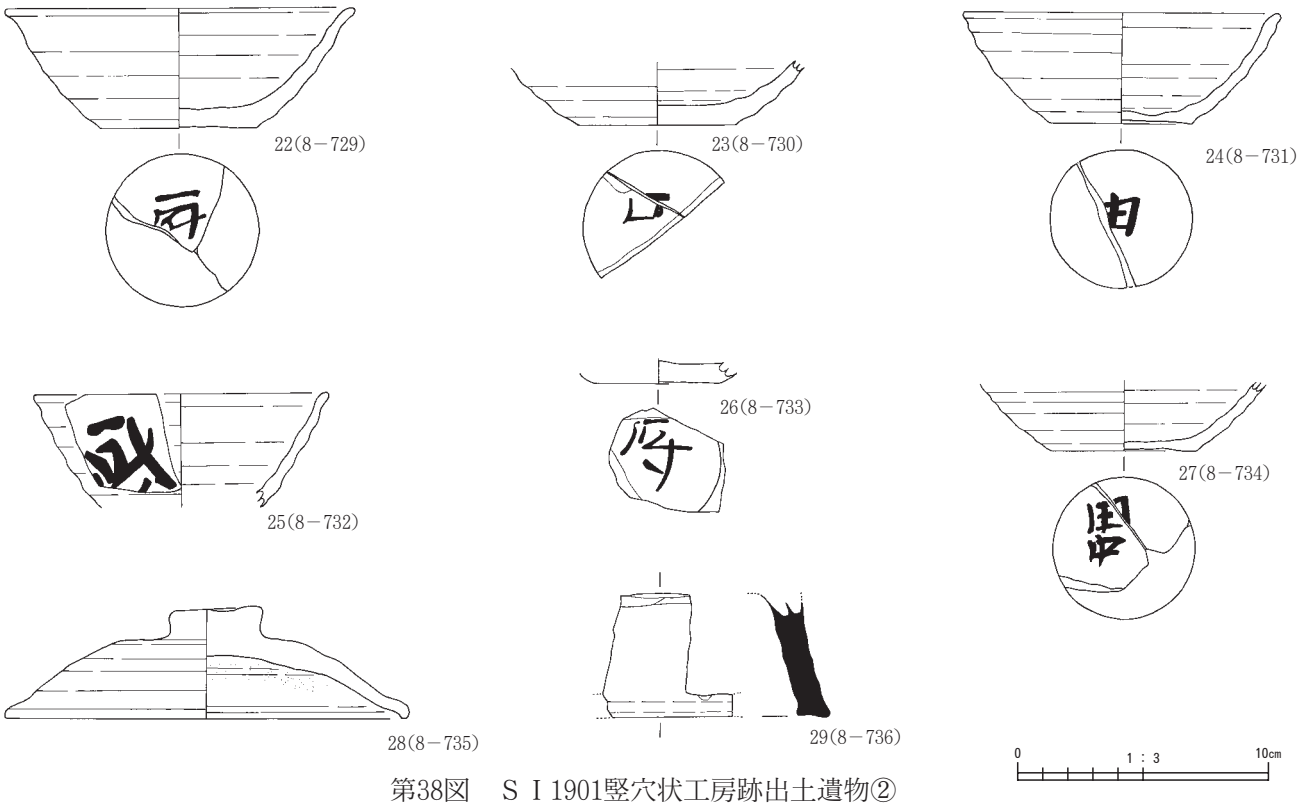




第36図　ＳＩ1901・ＳＩ1902・ＳＩ1903竪穴状工房跡



第37図　ＳＩ1901竪穴状工房跡出土遺物①



第38図　ＳＩ1901竪穴状工房跡出土遺物②

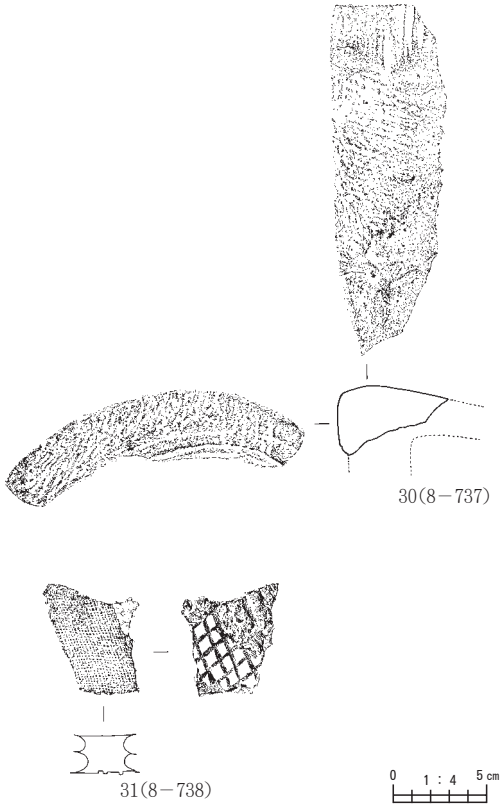
硯（29）：須恵器の円面硯である。脚部の破片で、方形の透かし窓が認められる。

瓦（30、31）：30は軒丸瓦の一部であるが、瓦当部を欠く。凸面に縄目叩き痕が認められ、自然釉が掛かっている。硬質で、暗灰色を呈する。31は格子目平瓦の破片である。凹面に布目痕、凸面に格子目叩き痕が認められる。硬質で、青灰色を呈する。

ＳＩ1902Ａ竪穴状工房跡（第４・５・36図、図版12）

Ａ調査区北側の第９層明褐色土層面で検出された。平面形は東西3.7m以上×南北4.6m以上の方形を呈し、北側及び東側の調査区外へプランは広がり、大きな竪穴状工房の南西側と考えられる。西壁は北で約１度東へ振れる。側壁から東側（中央寄り）にやや離れた床面に南北方向に２基以上の掘立柱列を、南西隅に小柱掘り方を伴う。北側床面には焼土面が認められる。壁高は高い部分で15㎝を計るが、全体に削平により浅くなっている。

ほぼ同位置にSI1901、SI1902B、SI1903が重複しており、SI1901より古く、SI1902B、SI1903よりも新しい。また、SK1907、SK1912、SK1913と重複し、それらより古い。



第39図　ＳＩ1901竪穴状工房跡出土遺物③

ＳＩ1902Ｂ竪穴状工房跡（第４・５・36図、図版12）

Ａ調査区北側の第９層明褐色土層面で検出された。平面形は東西4.0ｍ以上×南北4.7ｍ以上の方形を呈し、北側及び東側の調査区外へプランは広がり、大きな竪穴状工房の南西側と考えられる。西壁は北でほぼ真北の方向を示す。南西隅床面に直径1.3ｍの円形の柱掘り方を伴う。壁際に幅26㎝～30㎝、深さ35㎝の周溝を伴う。壁高は西辺で部分的に10㎝を計るが、南辺はSI1902Ａによる建て替えや重複のために削平され、ほとんどなくなっている。

ほぼ同位置にSI1901、SI1902Ａ、SI1903が重複しており、SI1901、SI1902Ａより古く、SI1903よりも新しい。また、SK1907、SK1912、SK1913と重複し、それらより古い。

ＳＩ1902Ａ・Ｂ出土遺物（第40・41図、図版37～39）

１～６、９、10、14～19、24、25は床面、７、８、11～13、20～23は埋土出土である。なお、SI1902Ａ・Ｂは同一面で重複しているが、重複状況から全てＳＩ1902Ａからの出土と考えられ、他に埋土より鉄滓と鉄製品の破片が出土している。

須恵器（１～15）：１～３はヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。１は体部内外面に煤状炭化物が付着している。２は底部外面に「厨」の墨書がある。４はヘラ切り無調整の坏で、底部外面に記号状の墨書がある。５～９はヘラ切り後に軽い撫で調整を施す坏で、９はさらに体部下端にケズリ調整を施している。５は底部外面に「山本」の墨書があり、底部内面に漆と煤状炭化物が付着している。６は底部外面に「官」の墨書があり、底部内面を硯に転用している。７は底部外面に記号状の墨書がある。10は糸切り無調整の坏である。11、14、15はヘラ切り後、台周縁に撫で調整を施す台付坏である。11は底部外面を、14は底部内面を硯に転用している。15は底部外面に「厨ヵ」の墨書があり、底部内面を硯に転用している。12、13は天井部ヘラ切り後、撫で調整を施す蓋である。12は天井部内面に煤状炭化物が付着し、13は天井部内面を硯に転用している。

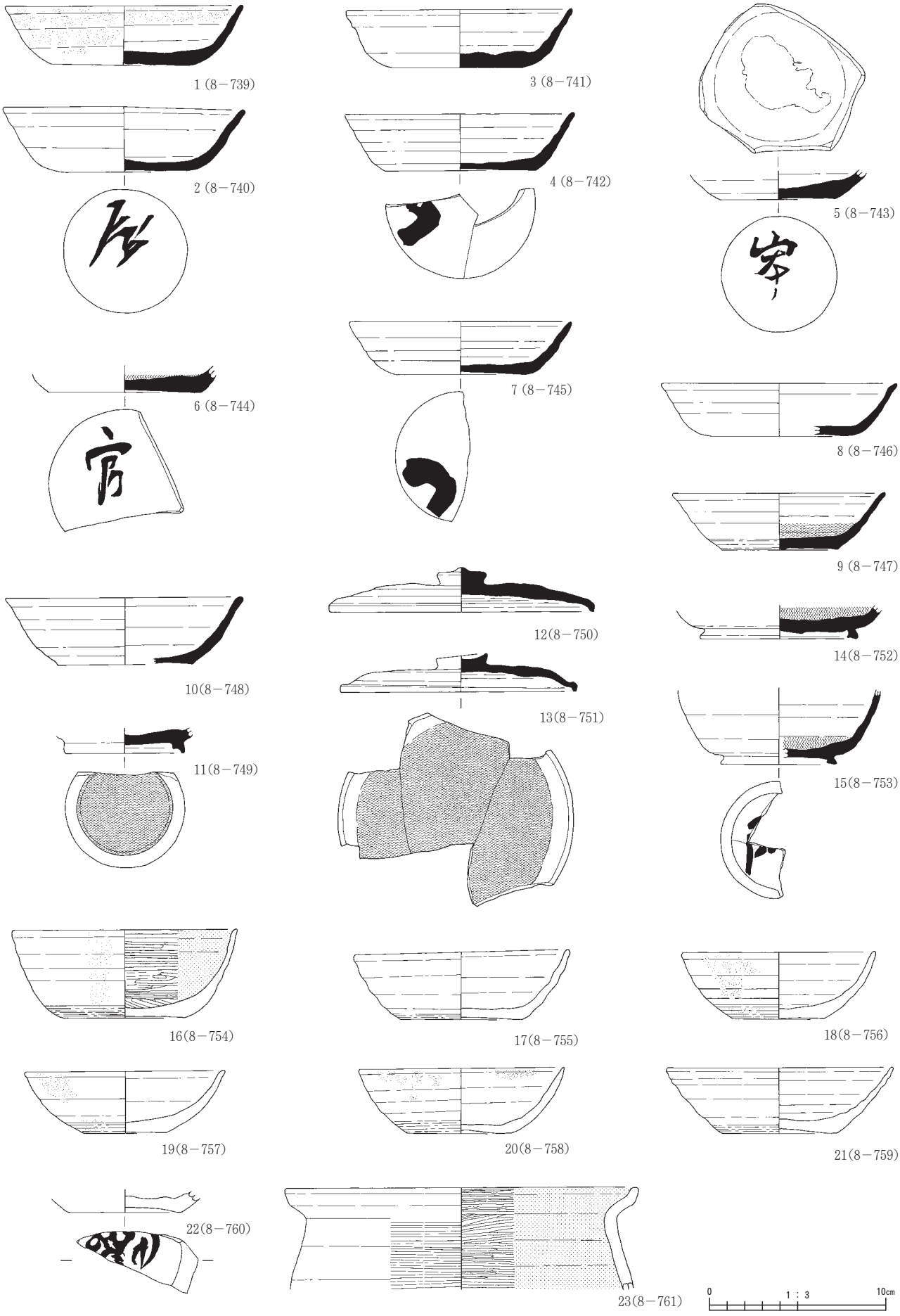
土師器（16）：坏で、底部と体部下端にケズリ調整を行っていることから切り離し不明である。内面の口縁部から体部下半にかけて横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、黒色処理している。外面の体部から底部にかけて煤状炭化物が付着している。

赤褐色土器（17～23）：17～21は糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。18、19は体部外面に、20は体部内外面に煤状炭化物が付着している。22は糸切り無調整の坏で、底部外面に判読不能の墨書がある。23は頸部が「く」の字状に外傾する甕である。外面は口縁部にナデ調整を、体部に横方向の刷毛目調整を施している。内面は横方向にミガキ調整を施し、黒色処理している。

硯（24、25）：24、25は須恵器の円面硯である。脚部に縦位の刻線を施し、方形の透かし窓が認められる。

ＳＩ1903竪穴状工房跡（第４・５・36図、図版12）

Ａ調査区北側のSI1902Ａ床面で検出された。平面形は東西3.4ｍ以上×南北4.1ｍ以上の方形を呈し、調査区外へプランは広がり、大きな竪穴状工房の南西側と考えられる。西壁は北でほぼ真北の方向を示す。南辺に直径75㎝の円形の柱掘り方を伴う。南西隅にも柱掘り方を伴う可能性があるが、SI1902Ｂ隅柱の重複により不明となっている。壁際に幅26㎝～40㎝、深さ20㎝の周溝を伴う。床面には焼土面が認められる。壁高は南辺で部分的に12㎝を計るが、西辺はSI1902A・Bによる建て替え、重複のため削平され、ほとんどなくなっている。



第40図　ＳＩ1902Ａ・Ｂ竪穴状工房跡出土遺物①

ほぼ同位置にSI1901、SI1902Ａ、SI1903が重複しており、SI1901、SI1902Ａより古く、SB1873よりも新しい。また、SB1873、SK1907、SK1912、SK1913と重複し、SB1873より新しくSK1907、SK1912、SK1913より古い。

ＳＩ1903出土遺物（第42図、図版39）

１～５は床面、６は南西隅柱掘り方埋土出土である。

須恵器（１～５）：１～４はヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。３は体部外面に記号状の墨書がある。４は底部外面に「小」の墨書がある。５は天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施す蓋である。

赤褐色土器（６）：糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。

ＳＫ1904土坑（第43図、図版13）

Ａ調査区中央の第10層明黄褐色砂・褐色砂層面で検出された。東西2.5ｍ、南北1.6ｍの楕円形を呈し、深さ22㎝である。

ＳＫ1904出土遺物（第44図、図版39）

１は埋土出土である。

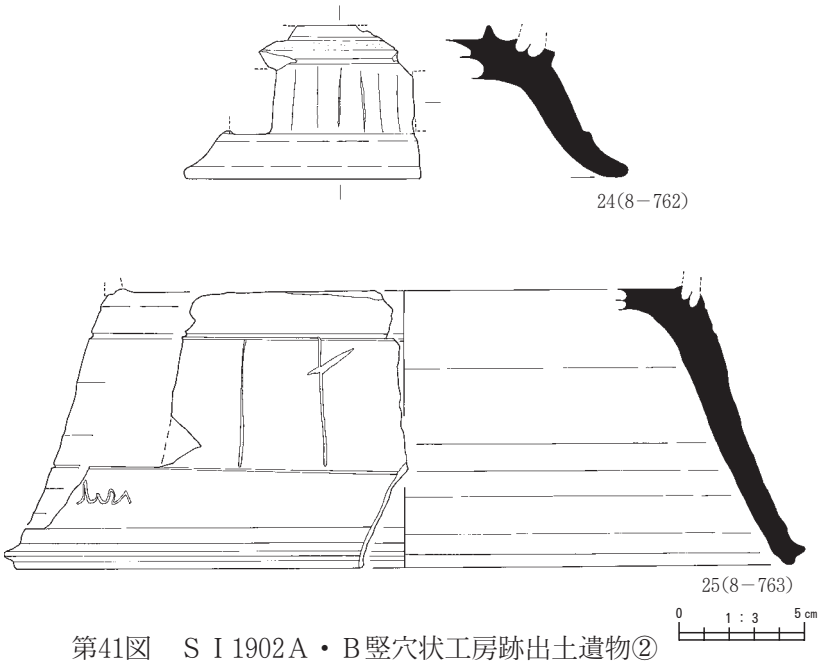
赤褐色土器（１）：糸切り無調整の皿である。

ＳＫ1905土坑（第45図、図版13）

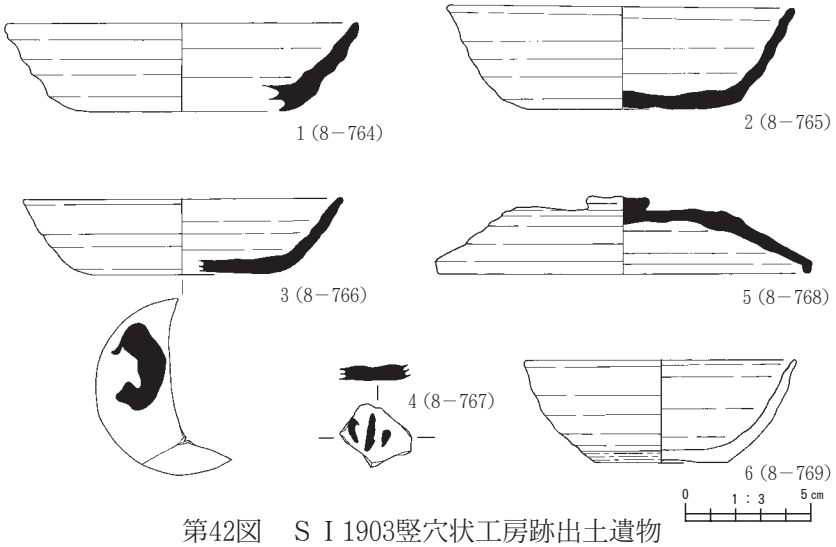
Ａ調査区南側の第６層褐色土層面で検出された。東西80㎝、南北105㎝の不整形を呈し、深さ16㎝である。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。

ＳＫ1906土坑（第46図、図版13）

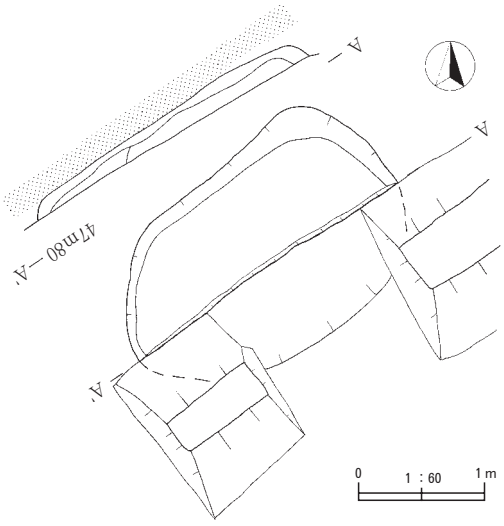
Ａ調査区南側の第６層褐色土層面で検出された。東西90㎝、南北85㎝の不整形を呈し、深さ20㎝である。埋土より須恵器・赤褐色土器片、硯の破片が出土している。



第41図　ＳＩ1902Ａ・Ｂ竪穴状工房跡出土遺物②



第42図　ＳＩ1903竪穴状工房跡出土遺物



第43図　ＳＫ1904土坑

ＳＫ1907土坑（第４・47図、図版13）

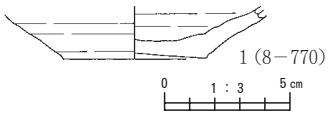
Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。東西2.0ｍ、南北1.7ｍの楕円形を呈し、深さ25㎝である。SD1891Ａ・Ｂ、SI1901、SI1902Ａ・Ｂ、SK1912と重複し、それらより新しい。

ＳＫ1907出土遺物（第48図、図版40）

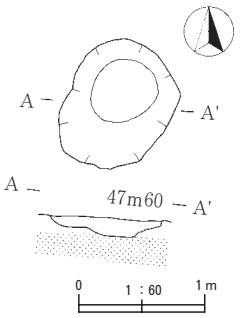
１～５は埋土出土である。

須恵器（１）：甕の肩部破片である。外面に「厨ヵ」の墨書があり、内面を硯に転用している。

赤褐色土器（２～５）：２～５は糸切り無調整の坏である。３、４は底部内面を硯に転用している。２は体部外面に煤状炭化物が付着し、底部外面に「酒所」の墨書がある。５は糸切り後、台周縁を棒状工具によって撫で調整している台付坏である。



第44図　ＳＫ1904土坑出土遺物



第45図　ＳＫ1905土坑

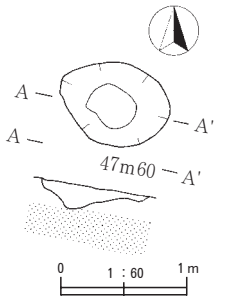
ＳＫ1908土坑（第４・49図、図版８）

Ａ調査区中央の第６層褐色土層面で検出された。東西1.4ｍ、南北2.0ｍの不整形を呈し、深さ30㎝である。SA1855Ａ・Ｂと重複し、それより新しい。

ＳＫ1908出土遺物（第50図、図版40）

１、２は埋土出土である。

赤褐色土器（１、２）：１、２は糸切り無調整の坏で、２は体部外面に判読不能の墨書がある。



第46図　ＳＫ1906土坑

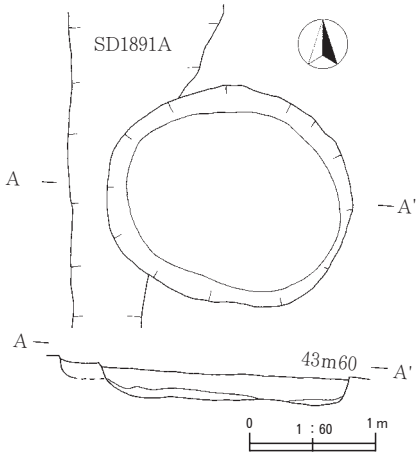
ＳＫ1909土坑（第４・51図、図版13）

Ａ調査区北側の第６層褐色土層面で検出された。東西65㎝、南北90㎝の楕円形を呈し、深さ28㎝である。 SA1875、SI1901、SX1919と重複し、SA1875より古く、SI1901、SX1919より新しい。埋土より須恵器の他に、赤褐色土器片が出土している。

ＳＫ1909出土遺物（第52図、図版40）

１は埋土出土である。

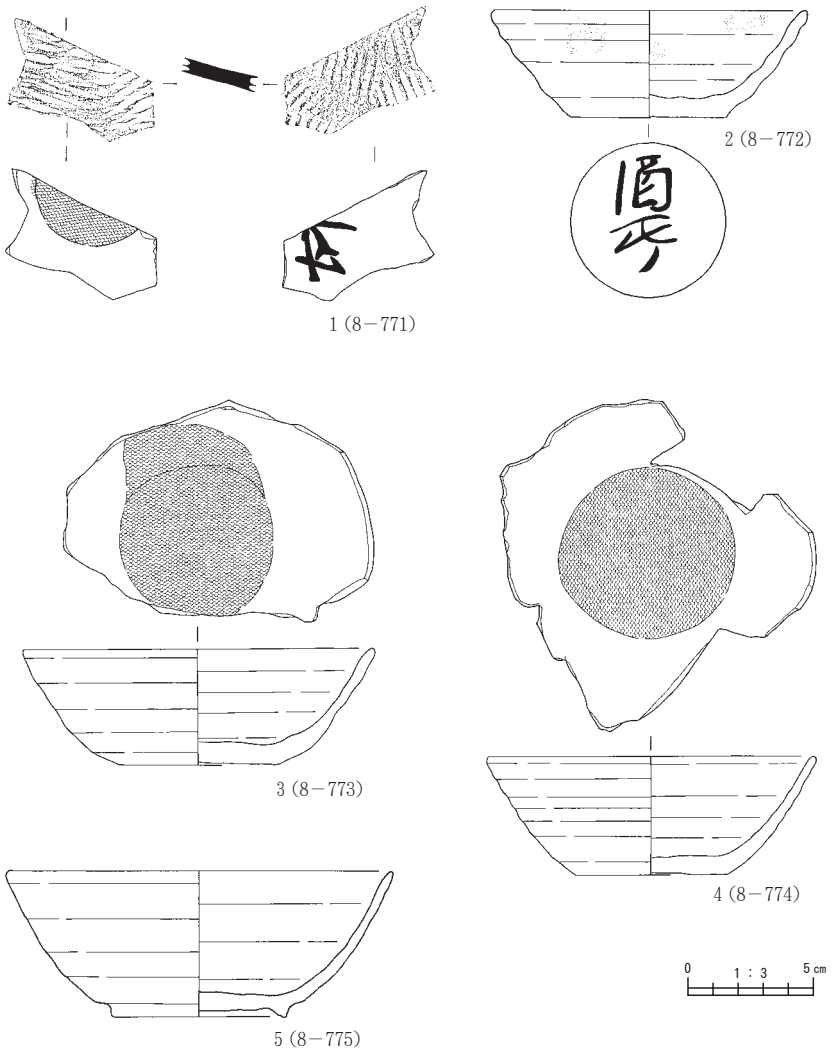
須恵器（１）：ヘラ切り後に軽い撫で調整を施す坏で、体部内外面に煤状炭化物が付着している。



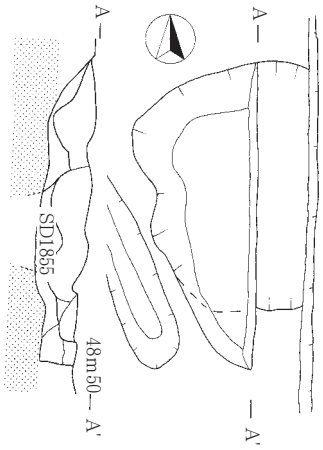
第47図　ＳＫ1907土坑

ＳＫ1910土坑（第４・５・53図、図版14）

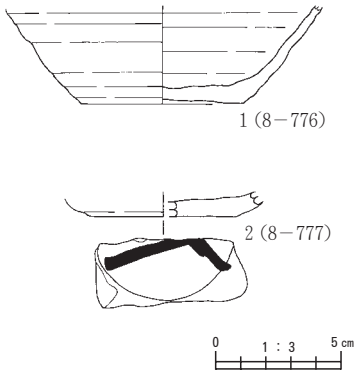
Ａ調査区北側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された。東西1.4ｍ、南北1.7ｍの楕円形を呈し、深さ18㎝である。SD1890、SD1895、SD1896と重複し、SD1890より古く、SD1895、SD1896より新しい。



第48図　ＳＫ1907土坑出土遺物



第49図　ＳＫ1908土坑



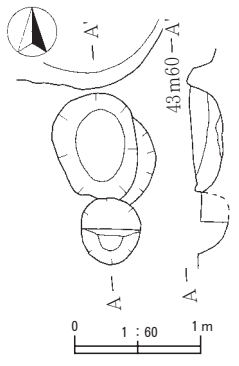
第50図　ＳＫ1908土坑出土遺物

ＳＫ1910出土遺物（第54図、図版40）

１、２は埋土出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後に軽い撫で調整を施す坏の底部破片で、外面に「厨」の墨書がある。

赤褐色土器（２）：糸切り後に体部下端にケズリ調整を施す坏で、内外面に二次加熱を受けて劣化している。



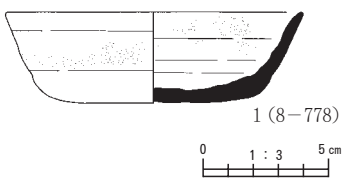
第51図　ＳＫ1909土坑

ＳＫ1911土坑（第４・５・55図、図版14）

Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。東西1.2ｍ、南北0.8ｍの楕円形を呈し、深さ35㎝である。SA1888、SX1921と重複し、それらより新しい。

ＳＫ1911出土遺物（第56・57図、図版40・41）

１～４は埋土出土である。

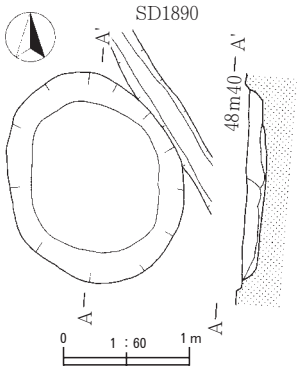


第52図　ＳＫ1909土坑出土遺物

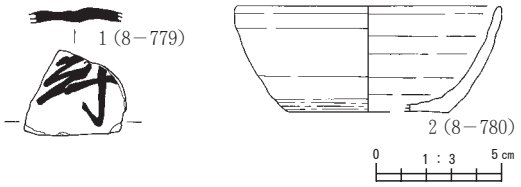
須恵器（１）：糸切り無調整の坏である。

赤褐色土器（２、３）：２は糸切り無調整の坏である。体部内外面に煤状炭化物が付着し、二次加熱の痕跡がある。３は底部外面に判読不能の墨書がある。

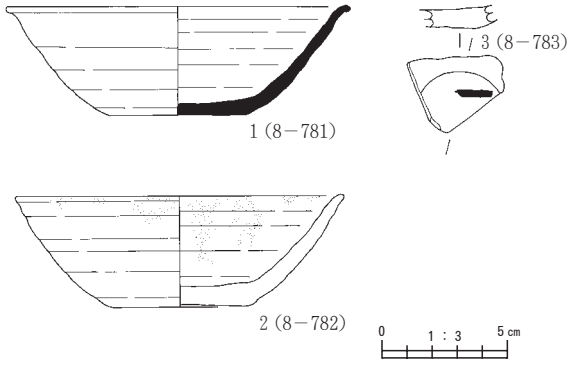
鉄滓（４）：製鉄時の製錬滓である。長方形箱形炉の炉底塊と考えられる。



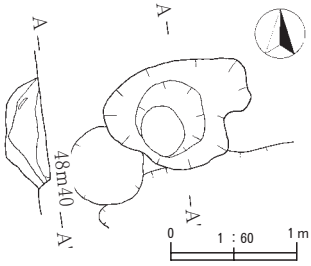
第53図　ＳＫ1910土坑



第54図　ＳＫ1910土坑出土遺物



第56図　ＳＫ1911土坑出土遺物①



第55図　ＳＫ1911土坑

ＳＫ1912土坑（第４・58図、図版14）

Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。東西60㎝、南北145㎝の不整形を呈し、深さ25㎝である。SI1901、SK1907と重複し、SK1907より古く、SI1901より新しい。埋土より須恵器の他に、赤褐色土器片が出土している。

ＳＫ1912出土遺物（第59図、図版41）

１は埋土出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後に撫で調整を施す坏の底部破片で、外面に判読不能の墨書がある。

ＳＫ1913土坑（第４・58図、図版14）

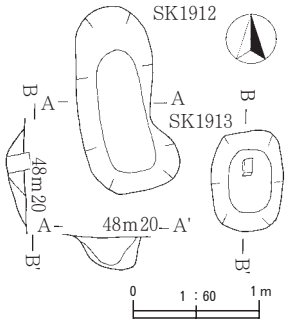
Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。東西56㎝、南北80㎝の隅丸方形を呈し、深さ25㎝である。SI1901、SX1921と重複し、SX1921より古く、SI1901より新しい。

第57図　ＳＫ1911土坑出土遺物②

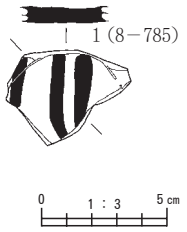
ＳＫ1913出土遺物（第60図、図版41）

１は埋土出土である。

塼（１）：硬質で、青灰色を呈する。



第58図　ＳＫ1912・SK1913土坑



第59図　ＳＫ1912土坑出土遺物

ＳＫ1914土坑（第４・61図、図版15）

Ｂ調査区南東側の第５層黒褐色土層面で検出された。東西65㎝以上、南北75㎝の円形を呈し、深さ30㎝である。西側が調査区外となっている。SD1897と重複し、これより新しい。

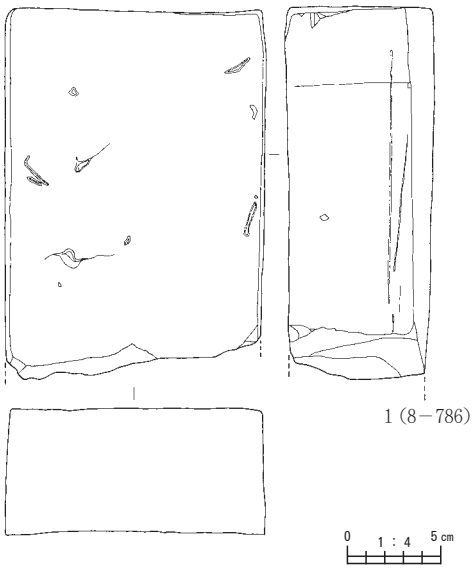
ＳＫ1914出土遺物（第62図、図版41）

１は埋土出土である。

赤褐色土器（１）：台付坏で、高台取付後に撫で調整を施していることから切り離しは不明である。

ＳＫ1915土坑（第63図、図版15）

Ｂ調査区南東側の第５層黒褐色土層面で検出された。東西１ｍ以上、南北１ｍの不整形を呈し、深さ15㎝である。東側が調査区外となっている。埋土より赤褐色土器片が出土している。



第60図　ＳＫ1913土坑出土遺物

ＳＫ1916土坑（第４・64図、図版15）

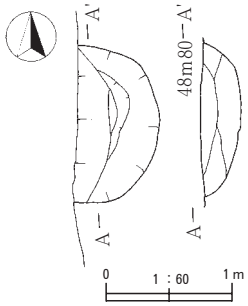
Ｂ調査区南東側の第６層褐色土層面で検出された。東西1.2ｍ以上、南北1.0ｍの不整形を呈し、深さ28㎝である。東側が調査区外となっている。SD1897と重複し、これより古い。

ＳＫ1916出土遺物（第65図、図版41、42）

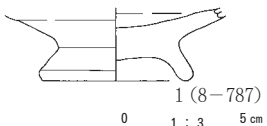
１～15は埋土出土である。

須恵器（１）：糸切り無調整の坏の底部破片で、外面に「厨カ」の墨書がある。

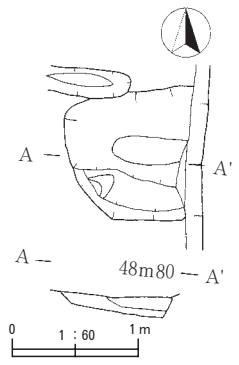
赤褐色土器（２～13）：２～４は糸切り無調整の小型皿である。２は底部を擬高台状に作っている。３は底部が擬高台状に高くなり、柱状高台となっている。５～７は糸切り無調整の小型坏である。７の底部切り離しは粗雑である。８～10は糸切り無調整の小型坏である。10は口縁部内外面に煤状炭化物が付着していることから、燈明皿として使用したと考えられる。11は糸切り無調整の坏で、内外面に二次加熱を受けている。12、13は台付坏である。12、13は糸切り後、台周縁を



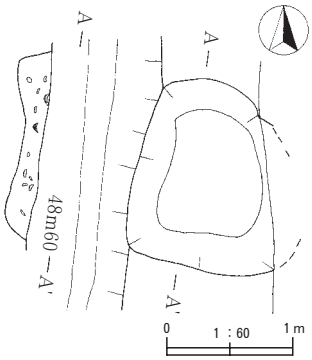
第61図　ＳＫ1914土坑



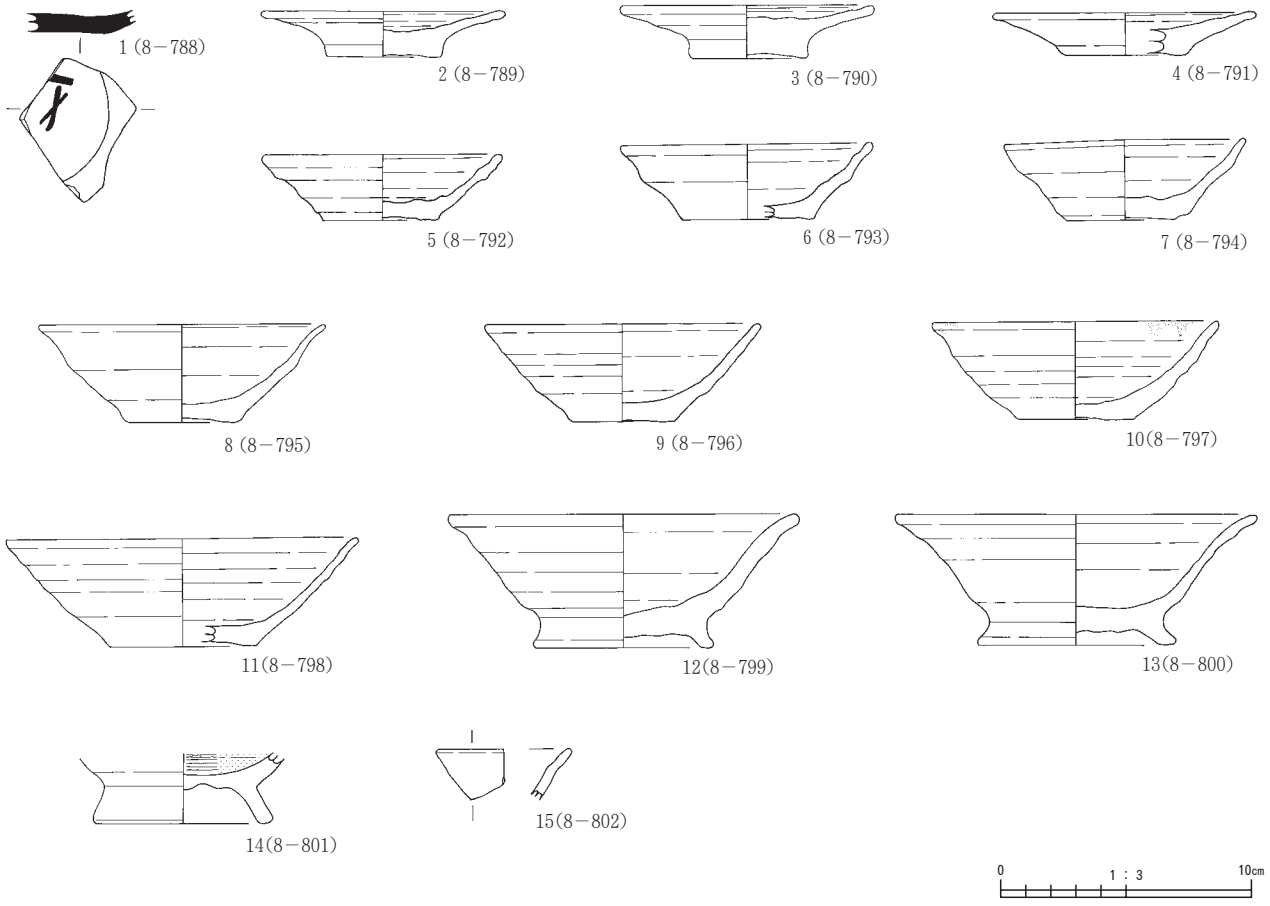
第62図　ＳＫ1914土坑出土遺物



第63図　ＳＫ1915土坑



第64図　ＳＫ1916土坑



第65図　ＳＫ1916土坑出土遺物

棒状工具によって撫で調整している。

土師器（14）：糸切り後、底部及び台周縁を棒状工具によって撫で調整している台付坏である。内面の底部に放射状のミガキ調整を施し、黒色処理している。

陶器（15）：緑釉陶器椀の口縁部破片で、内外面に刷毛塗りで施釉している。

ＳＫ1917土坑（第４・66図、図版15）

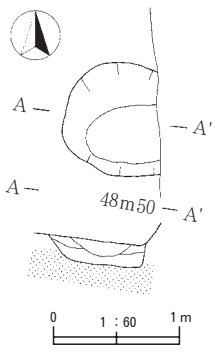
Ｂ調査区南東側の第８層褐色土・明褐色土層面で検出された。東西70㎝以上、南北90㎝の円形を呈し、深さ20㎝である。東側が調査区外となっている。SK1916と重複し、これより古い。

ＳＸ1919焼土遺構（第４・67図、図版15）

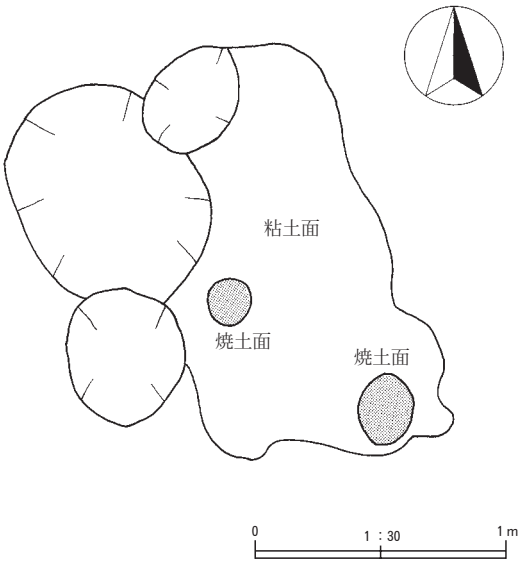
Ａ調査区北側の第６層褐色土層面で検出された。東西0.9ｍ×南北1.7ｍの不整形を呈する範囲に粘土面が検出され、その中央及び南端に赤褐色の焼土面が検出された。SA1875、SK1913と重複し、SK1913より新しく、SA1875より古い。

ＳＸ1920焼土遺構（第４・68図、図版15）

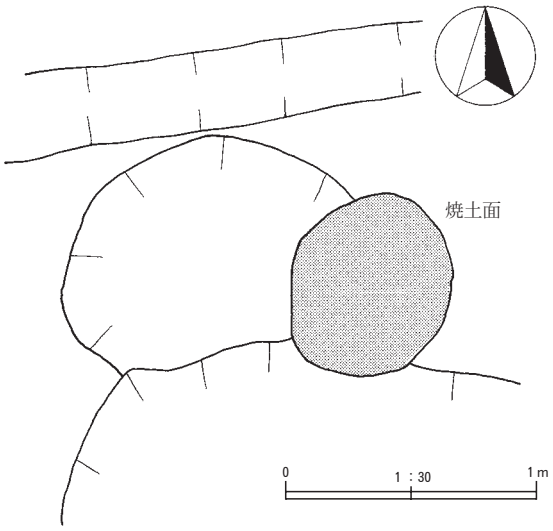
Ａ調査区北側の第６層褐色土層面で検出された。東西65㎝×南北75㎝の楕円形を呈する範囲に赤褐色の焼土面が検出された。削平等によりほぼ平坦な状況で検出された。



第66図　ＳＫ1917土坑



第67図　ＳＸ1919焼土遺構

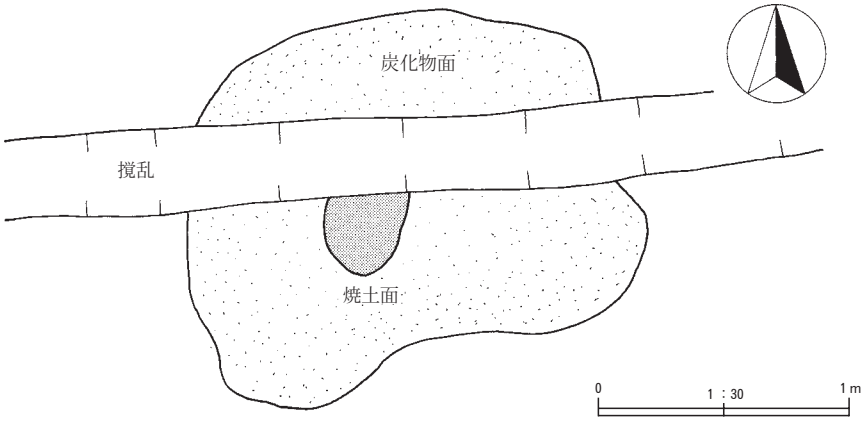


第68図　ＳＸ1920焼土遺構

SA1874、SA1886と重複し、それらより新しい。

ＳＸ1921焼土遺構（第４・69図、図版15）

Ａ調査区北側の第７層暗褐色土層面で検出された。東西1.8ｍ×南北1.5ｍ不整形を呈する範囲に炭化物面が検出され、その中央に直径30㎝の円形を呈する赤褐色の焼土面が検出された。



第69図　ＳＸ1921焼土遺構

削平等によりほぼ平坦な状況で検出された。SA1888、SI1901、SK1911、SK1913と重複し、SK1911より古く、SA1888、SI1901、SK1913より新しい。

３）基本層序及び各層出土遺物

基本層序（第６・７図、図版16・17）

第88次調査地は広い範囲を対象としており、調査地内で同時期の堆積と考えられる土層についても色調等にいくらかの違いが認められるが、土地利用状況や遺構変遷を踏まえて調査地全体の基本層序をまとめると以下のようになる。

第１層　表土：現表土。

第２層　造成土：近現代の公園整備に伴う造成土。明治末から大正の造成土（２－２層）と昭和20年代以降

の造成土（２－１層）に細分される。前者は旧土崎港町による土崎公園整備時と南秋田郡寺内町による高清水公園整備時の造成土。造成に伴い調査地東側では第２層直下が地山飛砂となる削平を受け、調査地中央南側には小山状の大規模な盛土がなされている。後者は調査地中央から北側にかけて認められ、Ｄ区では弓道場造成土となっている。

第３層　造成土：明治初年の招魂社建設時の造成土。調査地西側のＡ区中央には造成による道路状の硬化面が認められる。黒褐色土からなり、硬化面は褐灰色・灰褐色を呈する。

第４層　旧耕作土：招魂社建設時以前、近世に遡る旧畑地耕作土。調査地西側南半から中央南側（Ａ区南半からＢ区南東）にかけて堆積している。褐灰色土・灰褐色土からなる。

第５層　旧耕作土：近世の旧畑地耕作土。調査地西側南半から中央南側（Ａ区中央～南からＢ区南東）にかけて堆積している。畑耕作時の畝跡が検出された。黒褐色土からなる。SK1914・SK1915の検出面。

第６層　褐色土層：最上層の古代の遺物包含層。調査地西側から中央南側（Ａ区からＢ区南東）にかけて堆積している。赤褐色土器片が混入する。SA1875、SA1877、SD1890、SD1892、SD1897、SD1898、SK1905、SK1906、SK1908、ＳＫ1909、SK1916、SX1919、SX1920の検出面。

第７層　暗褐色土層：焼土・炭化物が多く混入する。調査地北西側（Ａ区北側）に堆積する。SI1901廃絶直後の整地層となっいる。SA1874、SK1907、SK1911～SK1913、SX1921の検出面。

第８層　褐色土・明褐色土層：調査地北西側や中央南側（Ａ区からＢ区南東）に堆積する。SI1901、SA1877、SA1885～SA1888、SD1891Ａ・Ｂ、SK1910、SK1917の検出面。赤褐色土器が出土している。

第９層　明褐色土層：調査地北西側（Ａ区北側）に堆積する。SI1902Ａ・Ｂ、SA1876の検出面。

第10層　明黄褐色砂・褐色砂層：調査地西側から中央南側（Ａ区からＢ区南東）にかけて堆積している。SA1889、SD1893～SD1896、SD1899Ａ、SX1918Ａ、SI1900、SK1904の検出面。

第11層　褐色砂・浅黄色砂層：調査地中央と南側（Ｂ区北側から中央・南側）の一部に部分的に堆積する。後世の削平等により検出範囲が限られる。秋田出羽柵創建期の整地層と考えられる。SA1879、SA1883、SD1899B、SX1918Ｂの検出面。瓦片が出土している。

地山飛砂層　浅黄色砂層：調査地全域で地山となっている。削平等によりSB1873、SA1884、SA1878、SA1880～SA1882の検出面となっている。また、飛砂層下は黒褐色粘土の地山腐植粘土層、さらにその下層は明褐色粘土の地山粘土層となっている。

各層出土遺物

第１層　表土・表採出土遺物（第70図、図版42）

赤褐色土器（１、２）：１は糸切り無調整の皿で、２は口縁部破片で、体部外面に判読不能の墨書がある。

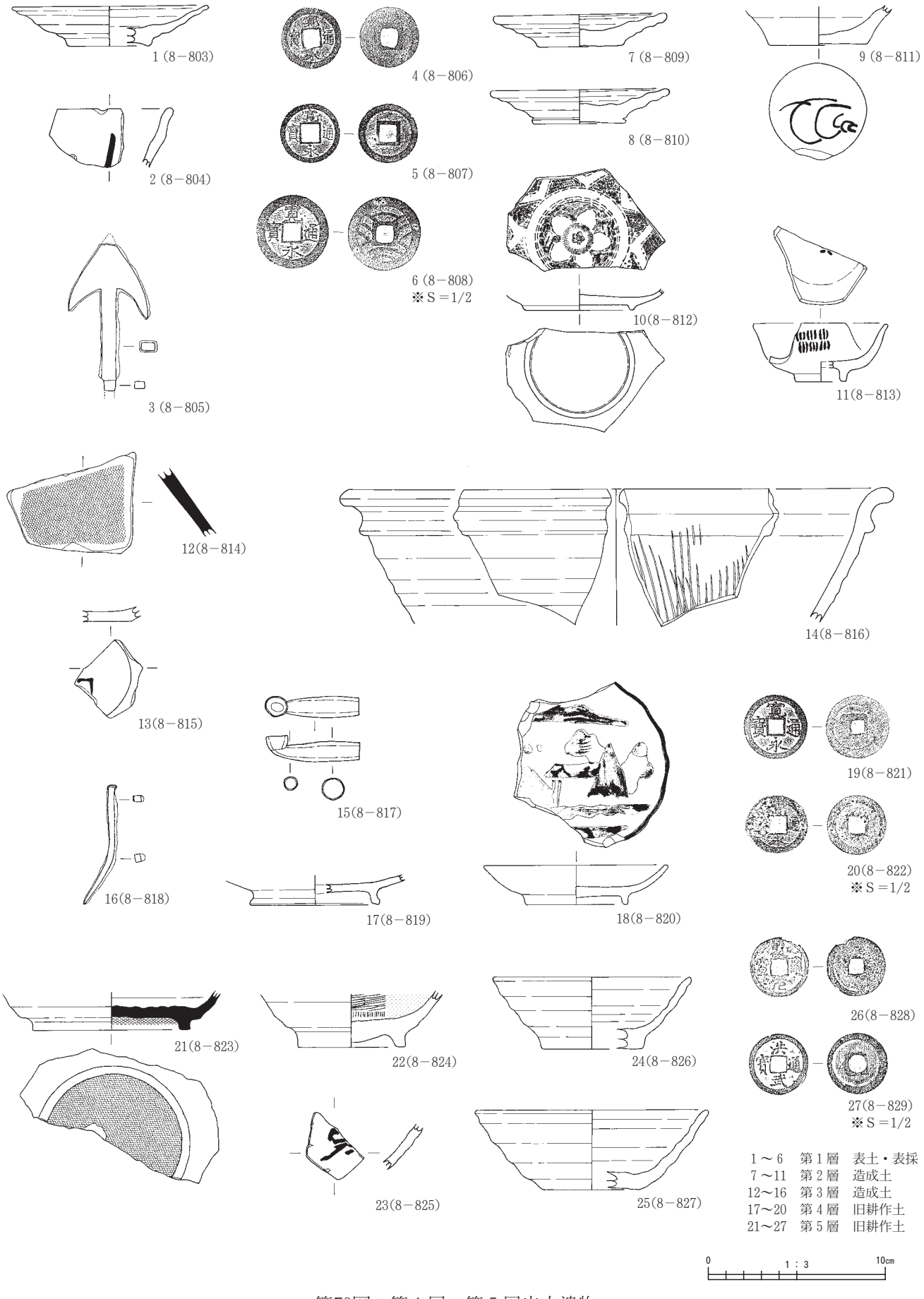
鉄製品（３）：鉄鏃で、基部を欠く。かなり錆化が進んでいる。

銭貨（４～６）：４、５は銅銭の寛永通宝である。６は真鍮銭の四文銭（11波）の寛永通宝である。

第２層　造成土出土遺物（第70・71図、図版42・45）

赤褐色土器（７～９）：７、８は糸切り無調整の小型皿である。９は糸切り無調整の坏で、底部外面に戯画または記号状の墨書がある。

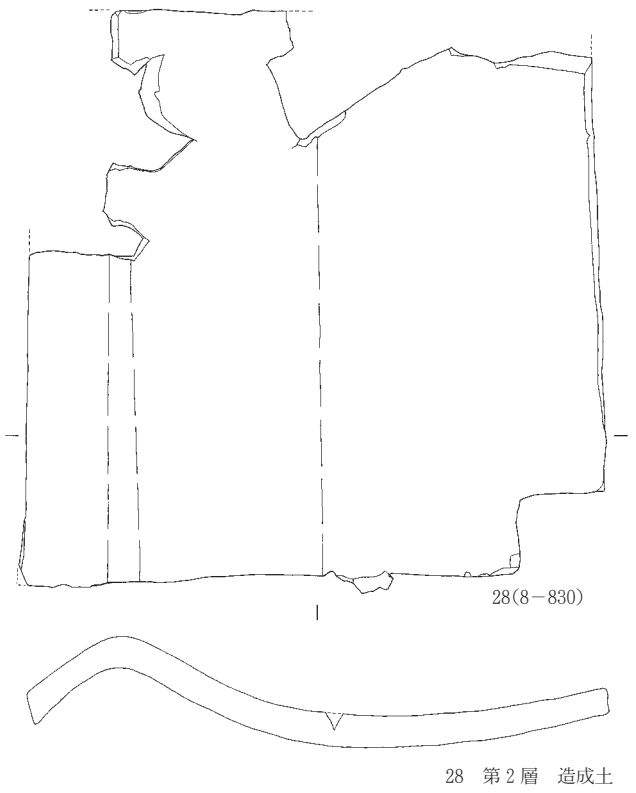
磁器（10、11）：10は染付皿である。コバルトを用いて文様を型紙摺りしている。11は瀬戸・美濃系磁器



第70図　第1層～第5層出土遺物

の染付小椀である。体部外面に算木文を描き、口唇部に口紅を施す。

瓦（28）：桟瓦である。赤瓦で、一部を欠く。



第71図　第2層出土遺物

第3層　造成土出土遺物（第70図、図版43）

須恵器（12）：甕の体上部破片で、内面を硯に転用している。

赤褐色土器（13）：糸切り無調整の坏である。底部外面に判読不能の墨書がある。

陶器（14）：摺鉢の口縁部破片である。内面に幅広のおろし目があり、鉄釉が掛かっている。

銅製品（15）：銅製の煙管雁首部分である。

鉄製品（16）：鉄釘で、頭部を欠く。

第4層　旧耕作土出土遺物（第70図、図版43）

陶器（17）：緑釉陶器台付皿で、底部に回転ケズリ調整を施していることから切り離しは不明である。内外面に刷毛塗りで施釉している。

磁器（18）：染付輪花皿である。内面に山水文を描き、口唇部に口紅を施す。

銭貨（19、20）：19、20いずれも銅銭の寛永通宝である。

第5層　旧耕作土出土遺物（第70図、図版43）

須恵器（21）：ヘラ切り後に台周縁に撫で調整を施す台付坏で、底部外面を硯に転用している。

土師器（22）：台取付後、台周縁と底部に撫で調整を施していることから切り離しは不明である。内面の口縁部から体部下半にかけて横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

赤褐色土器（23～25）：23は体部破片で、外面に判読不能の墨書がある。24、25は糸切り無調整の坏である。

銭貨（26、27）：26は銅銭の熙寧元宝（篆書・北宋・初鋳1068年）、27は銅銭の洪武通宝（明・初鋳1368年）である。

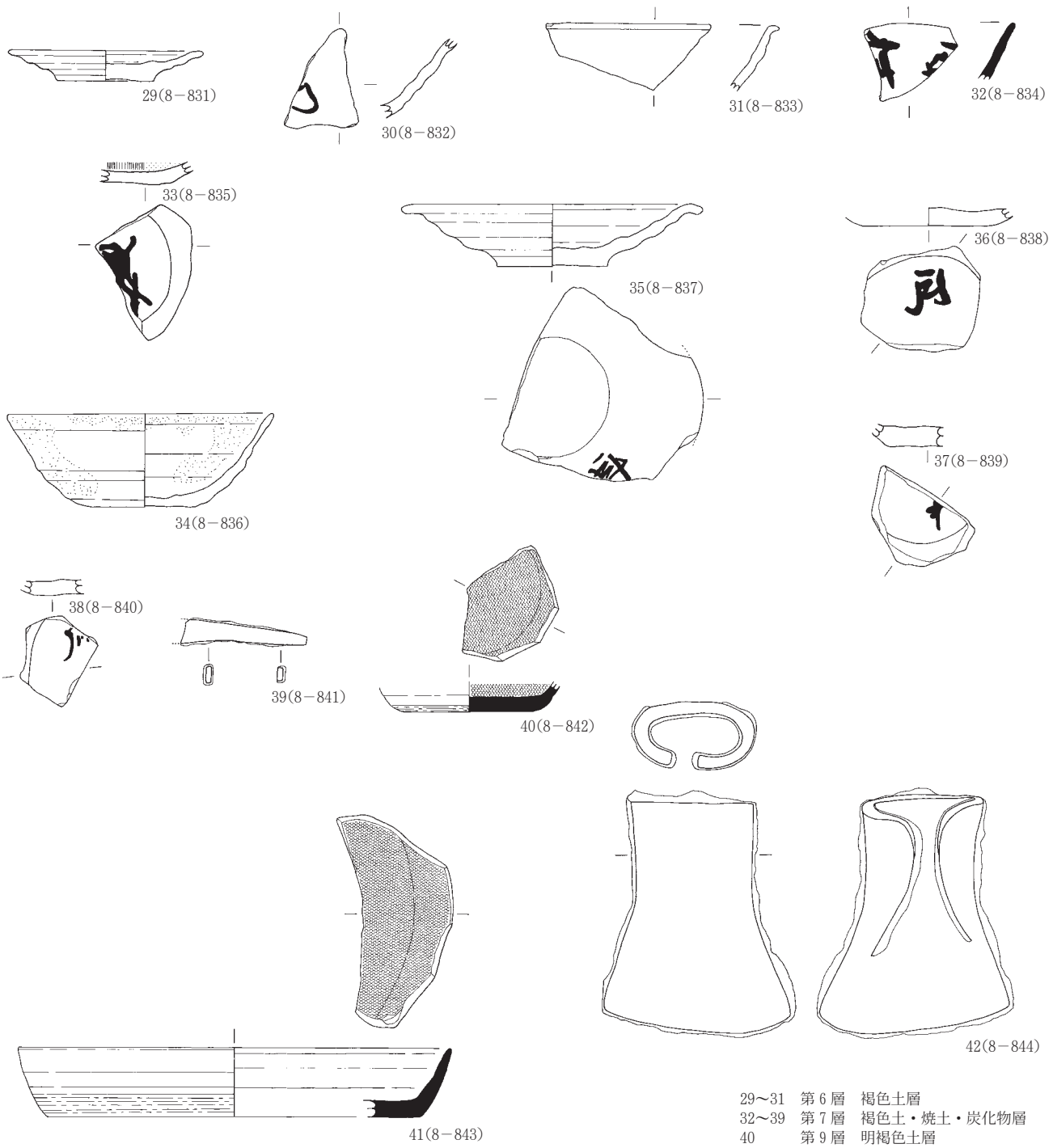
第6層　褐色土層出土遺物（第72図、図版43）

赤褐色土器（29、30）：28は糸切り無調整の小型皿である。30は体部破片で、外面に「厨ヵ」の墨書がある。

陶器（31）：灰釉陶器椀の口縁部破片で、内外面につけ掛けで施釉している。

第7層　褐色土・焼土・炭化物層出土遺物（第72図、図版44）

須恵器（32）：坏の口縁部破片で、外面に判読不能の墨書がある。



第72図　第６層・第７層・第９層・第10層出土遺物

土師器（33）：糸切り無調整の坏で、底部外面に判読不能の墨書がある。内面の底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

赤褐色土器（34～38）：34、36～38は糸切り無調整の坏である。34は内外面に煤状炭化物が付着していることから、燈明皿として使用したと考えられる。36は底部外面に「厨」、37、38は底部外面に判読不能の墨書がある。35は糸切り無調整の皿で、体部外面に「厨」の墨書がある。

鉄製品（39）：刀子の柄で、錆化が進んでいる。

第９層　明褐色土層出土遺物（第72図、図版44）

須恵器（40）：糸切り後に底部全面と体部下端にケズリ調整を施す坏で、底部内面を硯に転用している。

第10層　明褐色砂・褐色砂層出土遺物（第72図、図版44）

須恵器（41）：坏で、底部全面と体部下端にケズリ調整を施していることから切り離しは不明である。底部内面を硯に転用している。

鉄製品（42）：鉄斧である。柄の挿入部は鉄板を折り曲げて袋状に作り出しているもので、厚みがある。側面は柄の挿入部よりも刃先が幅広で、全体的に錆化が進んでいる。

Ⅲ　第89次調査報告

１）調査経過

第89次調査は、秋田城跡の城内西側、政庁域の西側隣接地にあたる焼山地区東部を対象に、平成18年８月２日から11月28日まで実施した。調査面積は478㎡である。

調査地は旧秋田市水道局焼山浄水場で、現在は秋田城跡調査事務所北東側の空閑地となっている場所である。推定される政庁西辺からの距離は調査地東側で約30ｍであり、調査地北側は政庁から外郭東門に至る東西軸線を政庁西側に折り返したラインが通り、城内西側を通る東西道路遺構（城内西大路）の存在が推定される場所である。周辺の調査では北西側の焼山地区北部から中央部の第59次・第66次・第70次・第85次調査等で、奈良時代から平安時代にかけて変遷する規則的配置に基づく城内最大規模の掘立柱建物群が検出されており、倉庫群などの実務官衙域としての利用が確認されている。

調査は調査地南側での歴史資料館建設計画も踏まえて、焼山地区東部における遺構の遺存状況や、城の基本構造に関わる重要遺構である城内西大路の存在や、その南側を含めた周辺利用状況を把握することを目的として実施した。

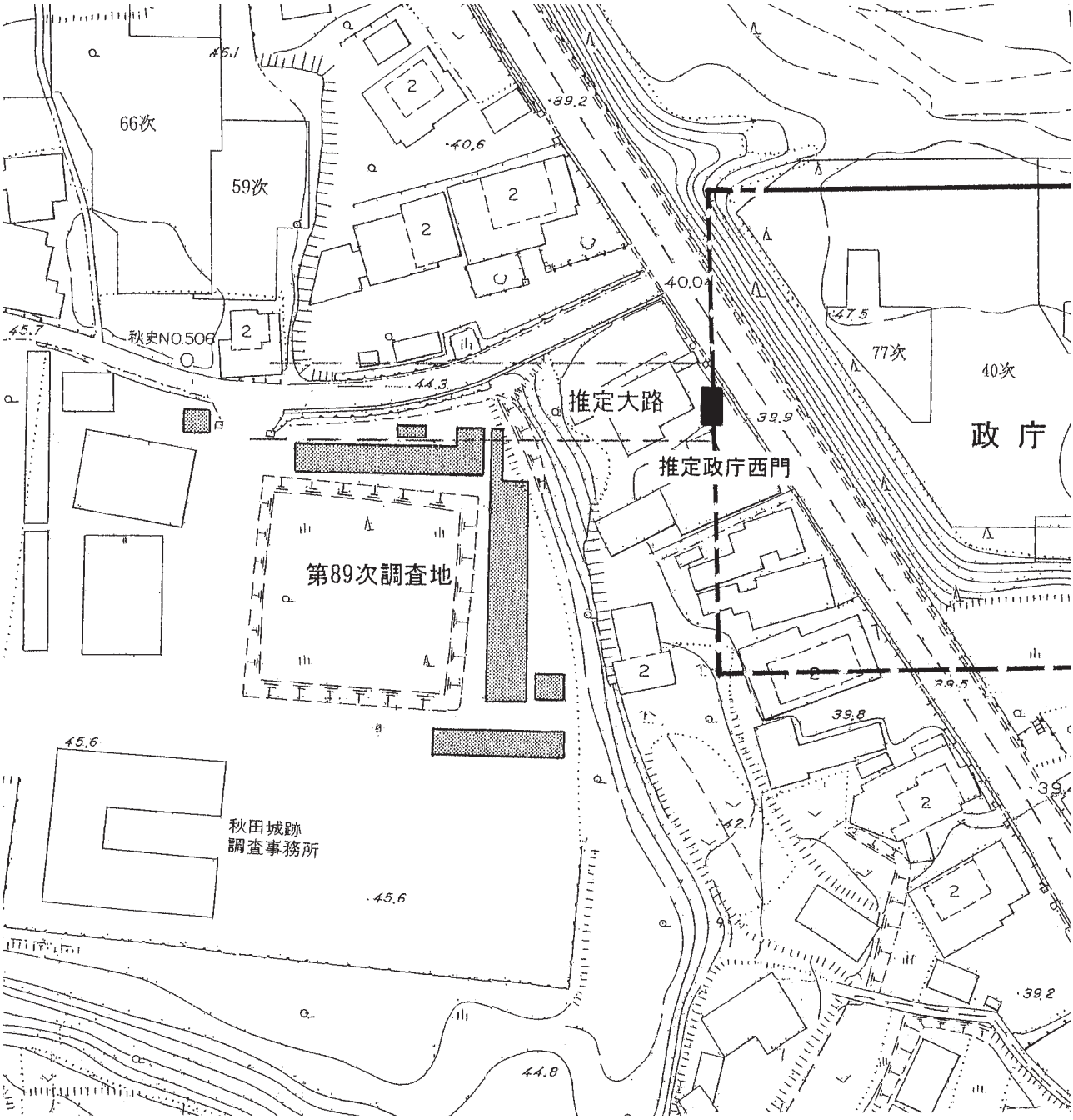
調査は、まず基準杭測量及び調査区の設定を行い、設定後重機による表土除去作業を行った（８月２日～８月４日）。次に調査機材の搬入や、調査地安全対策用のフェンス設置作業を行った（８月８日）。

調査地南側のＣ調査区及び東側のＢ調査区から人手による表土及び造成土除去を開始し、旧耕作土面を検出した（８月９日）。

８月10日には小学生を対象とした史跡秋田城跡発掘体験教室を開催し、20名の参加者があった。

Ｂ・Ｃ調査区で撹乱と旧耕作土面を検出し、検出状況の写真撮影を行った。また、遣り方設置作業を行った（８月11日～８月24日）。

Ａ調査区についても造成土の除去と精査を行い、地山飛砂層面で撹乱とSB1925掘立柱建物跡等の遺構を検出した。またＤ調査区についても、同様に造成土の除去と精査を行い、地山飛砂層面で撹乱とSB1927掘立柱建物跡の柱掘り方を検出した。それにより、本来東西軸線上に城内東西道路が存在したと仮定した場合の推定ラインに接するか、重複する位置に建物跡が存在することが判明し、政庁西側に直線的な東西道路、つまり西大路は存在しない可能性が高まった。Ａ・Ｄ調査区の遺構・撹乱検出状況の平面実測及び写真撮影



第73図　第89次調査周辺地形図

を行い、B・C調査区についても平面実測を行った（8月25日～8月28日）。

B・C調査区で撹乱の掘り下げを行い、掘り下げ状況の写真撮影を行った（8月29日～9月5日）。その後、C調査区からB調査区にかけて旧耕作土で灰黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土からなる第3層を除去し、同じく旧耕作土の第4層灰褐色土層面で畑畝跡を検出した。また、C調査区を中心に第4層下層となるにぶい黄褐色土層が堆積しており、その第4層下層面でも畑畝跡が検出された。それら検出された旧耕作土面畑畝跡の平面実測及び写真撮影を行っていった（9月6日～9月18日）。

旧耕作土下に遺物包含層の堆積が認められるC調査区については、西側で第5層黒褐色土層を除去し、さ

らに西側から東側にかけて第6層暗褐色土層を除去していった。西側の第7層褐色土層面で、SB1926掘立柱建物跡を検出し、それと重複し、それよりも新しいSA1933材木塀跡とSD1934溝跡を検出した。また、東側の第7層面でSI1937竪穴住居跡を検出した。B調査区南半についても第6層面の精査を進め、SA1932ピット群を検出し、その中からSA1927～SA1931柱列を把握した。さらに南端部付近で第6層を除去しSD1935・SD1936溝跡を検出した（9月19日～9月20日）。

B区南端部及びC区中央部で第7層面を精査したところ、第7層が埋土となる落ち込みを検出し、第8層明黄褐色砂・浅黄色砂層面まで追求していったところ、SB1924掘立柱建物跡を検出した。また、すでに第7層面が検出されていたB調査区北半でも第7層を除去し、第8層面で大規模な南北棟建物となるSB1922掘立柱建物跡を検出した（9月21日～9月22日）。

B調査区北半検出のSB1922について精査を進めたところ、ほぼ同位置で新旧2棟の重複があることが判明し、古い時期のものをSB1923、新しい時期のものをSB1922とした。またSB1922からは炭化柱材が検出され、建物が焼失していることも判明した。さらに建物プランが北側と東側に延びることから、B調査区の北端部と東辺の一部を拡張・追求することとした。拡張部分を精査した結果、SB1922・SB1923はともに東西3間以上、南北6間以上となることが確認されたが、東側は敷地外の急斜面となっており、北側は浄水場当時の配水管の撹乱によりさらに追求することはできなかった。建物方位や検出層位等から、SB1922・SB1923は奈良時代に遡る建物跡と考えられ、その北側は推定西大路の範囲に接することから、直線的な西大路が存在しない状況は奈良時代に遡る可能性が考えられた（9月25日～9月28日）。

A調査区東側で検出されていたSB1925について精査を進めた結果、東西4間×南北2間以上の総柱建物となることが確認され、さらに建物プラン内にSB1928が重複し、切り合い関係でSB1925よりも古いことが判明した（9月29日～10月2日）。一方でB調査区南東のB－2区からC調査区東側にかけて、SB1924の建物プラン追求のため、第7層を除去し精査していたところ、SB1924は東西3間×南北3間以上の南北棟建物となることが確認された。これにより、調査区東側に南北方向に2棟の大規模な建物が配置される状況が把握された（10月3日～10月4日）。

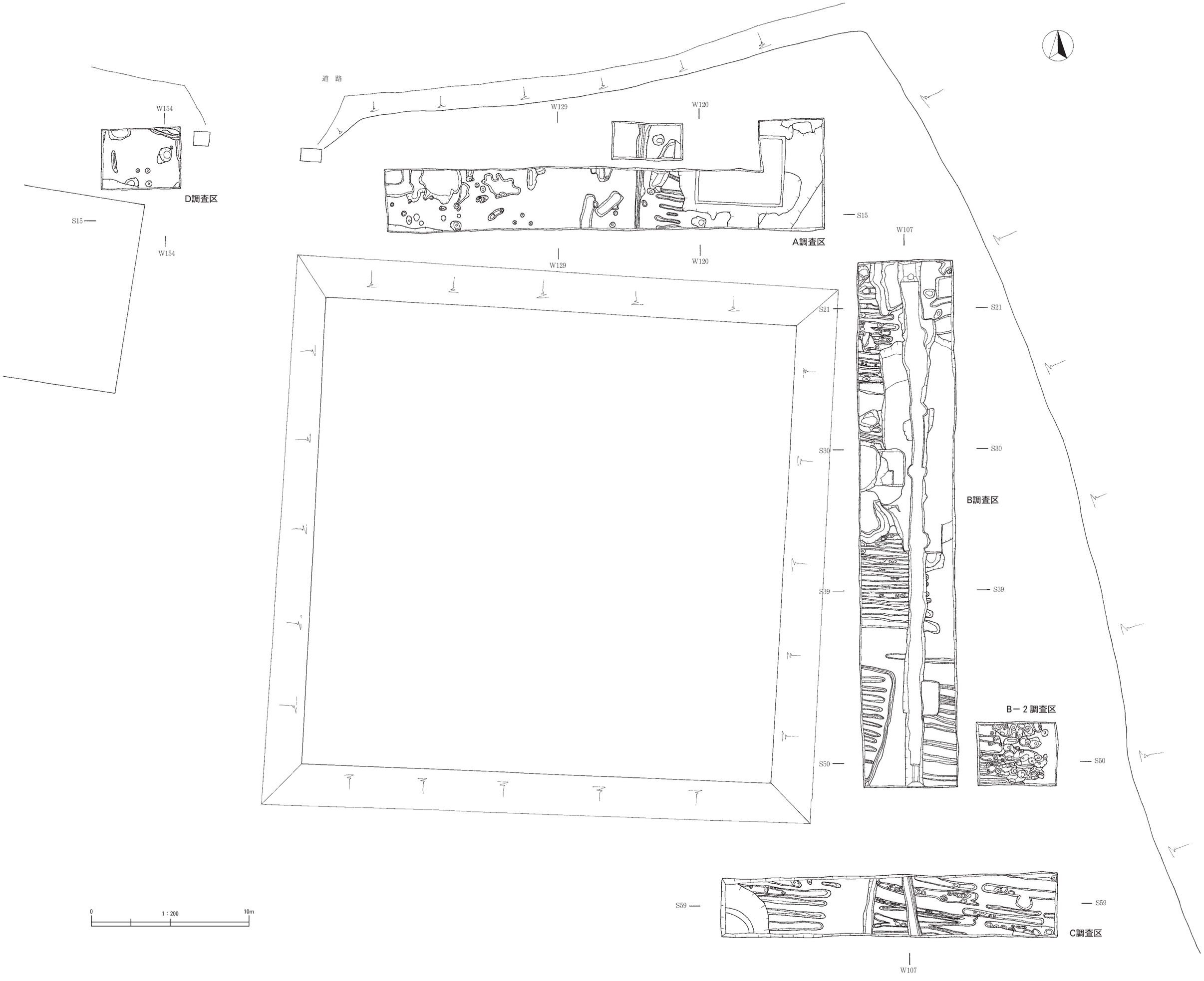
B調査区南半からC調査区にかけてSA1929～SA1931、SD1935、SD1936、SA1934、SI1937等の上層遺構の掘り下げと断ち割りを行った（10月5日）。この後、現状変更に伴う調査として開始された第90次調査のため、10月31日まで調査が中断する。

10月31日に調査を再開し、SB1923、SB1925、SB1928の柱掘り方の断ち割りと掘り下げを行った。SB1925については柱抜き取り穴より赤褐色土器片が出土し、焼土・炭化物が多量に出土したことから、平安時代の建物が焼失していることが確認された（10月31日）。

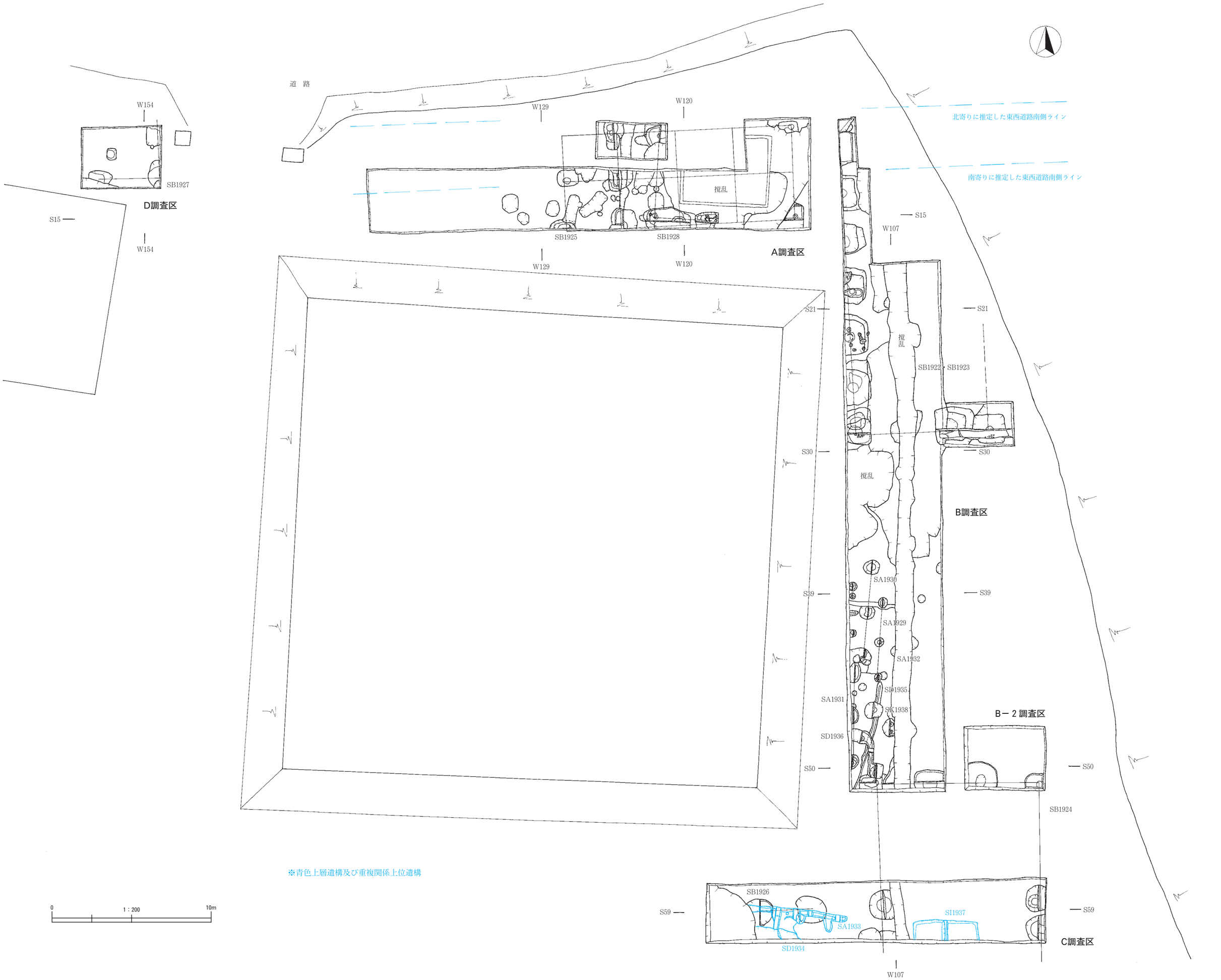
11月1日には文化庁記念物課、坂井秀弥主任文化財調査官の現地指導を受けた。また、11月3日には現地説明会を開催し、95名の参加者があった。

SB1924の柱掘り方の断ち割りと掘り下げを行い、断面の実測や写真撮影を行った。また、その他の建物跡についても断面実測や写真撮影を行った。それらと併行して、調査区壁の土層断面実測や写真撮影、各調査区の平面実測や全体写真撮影等を行った（11月6日～11月15日）。

調査区の全景写真撮影を行った後、人手による埋め戻しを開始した（11月16日）。人手による埋め戻しと併行して機材の撤収作業を行い、作業員による現場作業を終了した（11月19日～11月20日）。重機による埋め戻し作業を行い、調査を終了した（11月27日～11月28日）。

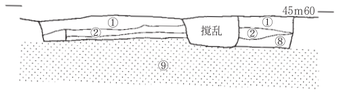


第74図　第89次調査検出遺構図①（撹乱・畝跡）

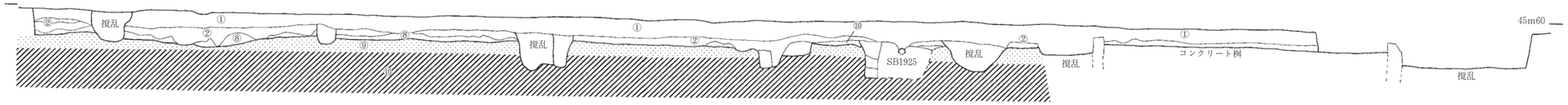


第75図　第89次調査検出遺構図②

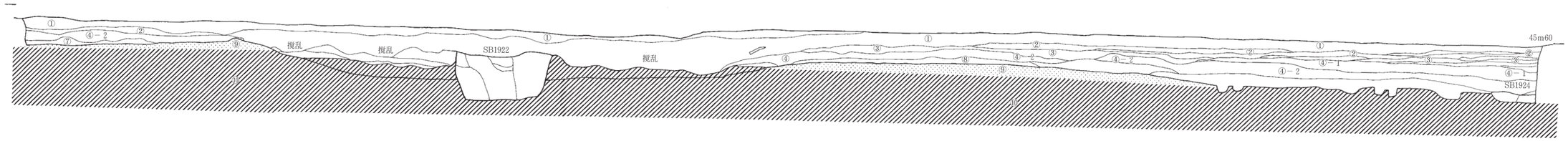
A調査区西壁土層断面図



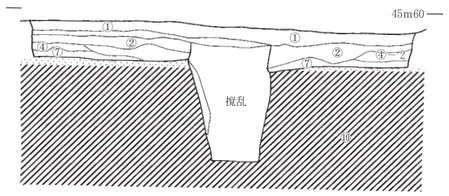
A調査区北壁（S12ライン）土層断面図



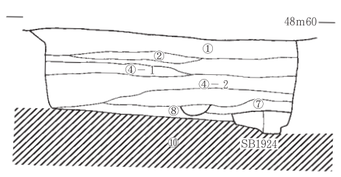
B調査区東壁（W104ライン）土層断面図



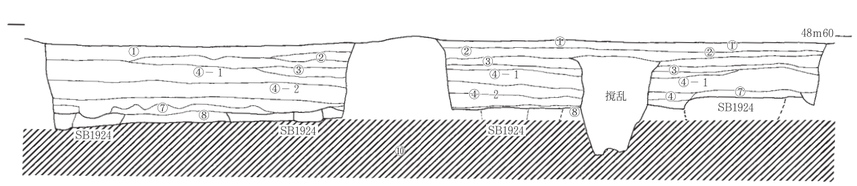
B調査区北壁（S18ライン）土層断面図



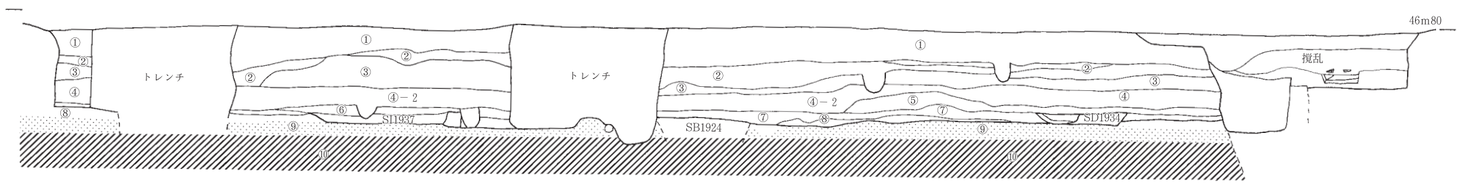
B－2調査区東壁（W98ライン）土層断面図

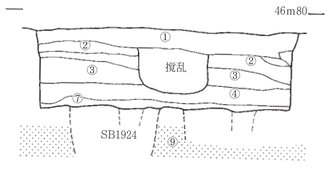


B調査区南壁土層断面図



C調査区南壁（S61ライン）土層断面図





第89次調査地基本層序

①　表土：暗褐色土
②　造成土：明褐色粘土・褐色土
③　旧耕作土：灰黄褐色土・褐灰色土・灰褐色土・黒褐色土
④－1　旧耕作土：灰褐色土
④－2　旧耕作土：にぶい黄褐色土
⑤　第5層：黒褐色土
⑥　第6層：暗褐色土に焼土・炭化物混入
⑦　第7層：褐色土・明褐色土・明褐色粘土層
⑧　第8層：明黄褐色砂・浅黄色砂
⑨　地山飛砂層
⑩　地山粘土層

0　1：80　4m

第76図　第89次調査地土層断面図

2）検出遺構と出土遺物

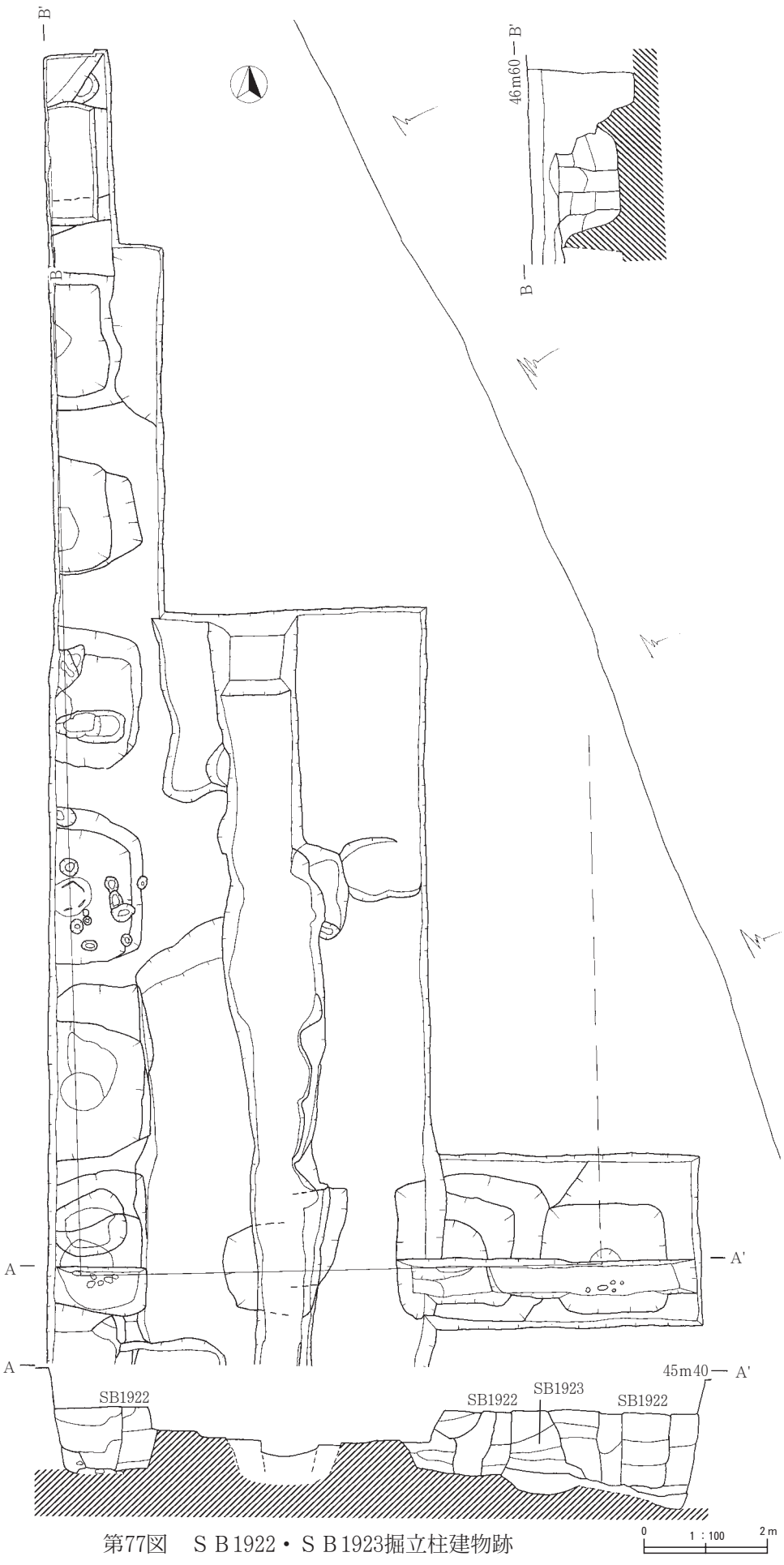
ＳＢ1922掘立柱建物跡

（第77図、図版20・21）

Ｂ調査区北側の第８層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。梁間３間以上（3.0ｍ＋3.0ｍ＋2.7ｍ…）、桁行６間以上（3.0ｍ＋3.0ｍ＋3.0ｍ＋3.0m＋3.0m＋3.0m＋…）の南北棟の掘立柱建物跡である。建物の方位は桁行が北で約２度西に振れる。柱掘り方は一辺1.9ｍ～2.0ｍの方形で、深さ1.0ｍ～1.2ｍである。北側の柱掘り方は削平によりやや浅くなっている。柱痕跡は直径33㎝～42㎝で、南東隅の柱がやや細い。柱抜き取りを受けているが、掘り方内に炭化柱材が遺存しているものもある。炭化柱材の遺存と柱抜き取りに多量の炭化物が混入する状況から、火災により焼失したと判断される。柱掘り方底部に根石、柱底部付近に根固め石が認められる。ほぼ同位置でSB1923と重複し、これよりも新しい。

ＳＢ1922出土遺物（第78図、図版45）

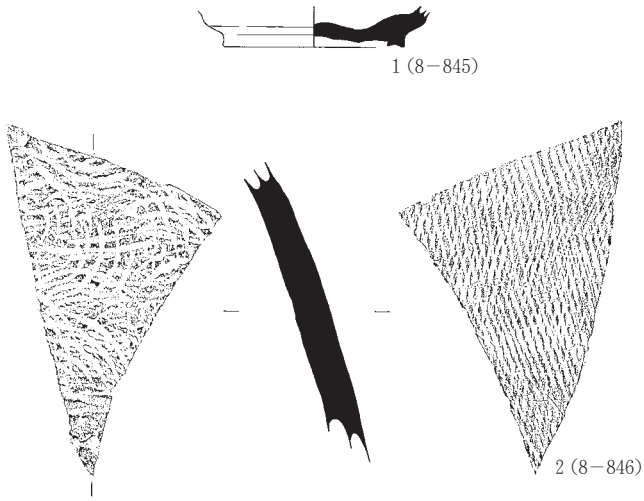
１は柱掘り方抜き取り、２は柱掘り方埋土出土で



第77図　ＳＢ1922・ＳＢ1923掘立柱建物跡

ある。

須恵器（1、2）：1はヘラ切り後、台周縁に撫で調整を施す台付坏である。2は大甕の体上部破片である。外面に平行叩き板、内面に同心円状のアテ具痕が認められる。



第78図　ＳＢ1922掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ1923掘立柱建物跡（第77図、図版20・21）

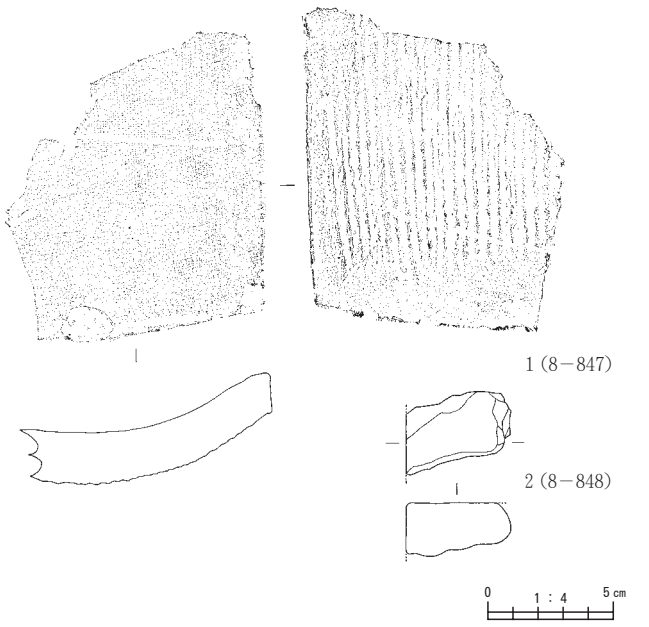
Ｂ調査区北側の第8層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。梁間3間以上、桁行6間以上の南北棟の掘立柱建物跡である。ほぼ同位置でSB1922と重複し、これよりも古い。SB1922との重複により柱痕跡と位置は不明であるが、掘り方の位置関係から、建物の方位や規模はほぼ同様と推定される。柱掘り方は一辺1.9ｍ～2.3ｍの方形でSB1922より一回り大きく、深さ1.0ｍ～1.2ｍである。北側の柱掘り方は削平によりやや浅くなっている。柱痕跡は不明である。

ＳＢ1923出土遺物（第79図、図版45）

1、2は柱掘り方埋土出土である。

瓦（1）：平瓦で、凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。硬質で、青灰色を呈する。

塼（2）：軟質で、灰白色を呈する。



第79図　ＳＢ1923掘立柱建物跡出土遺物

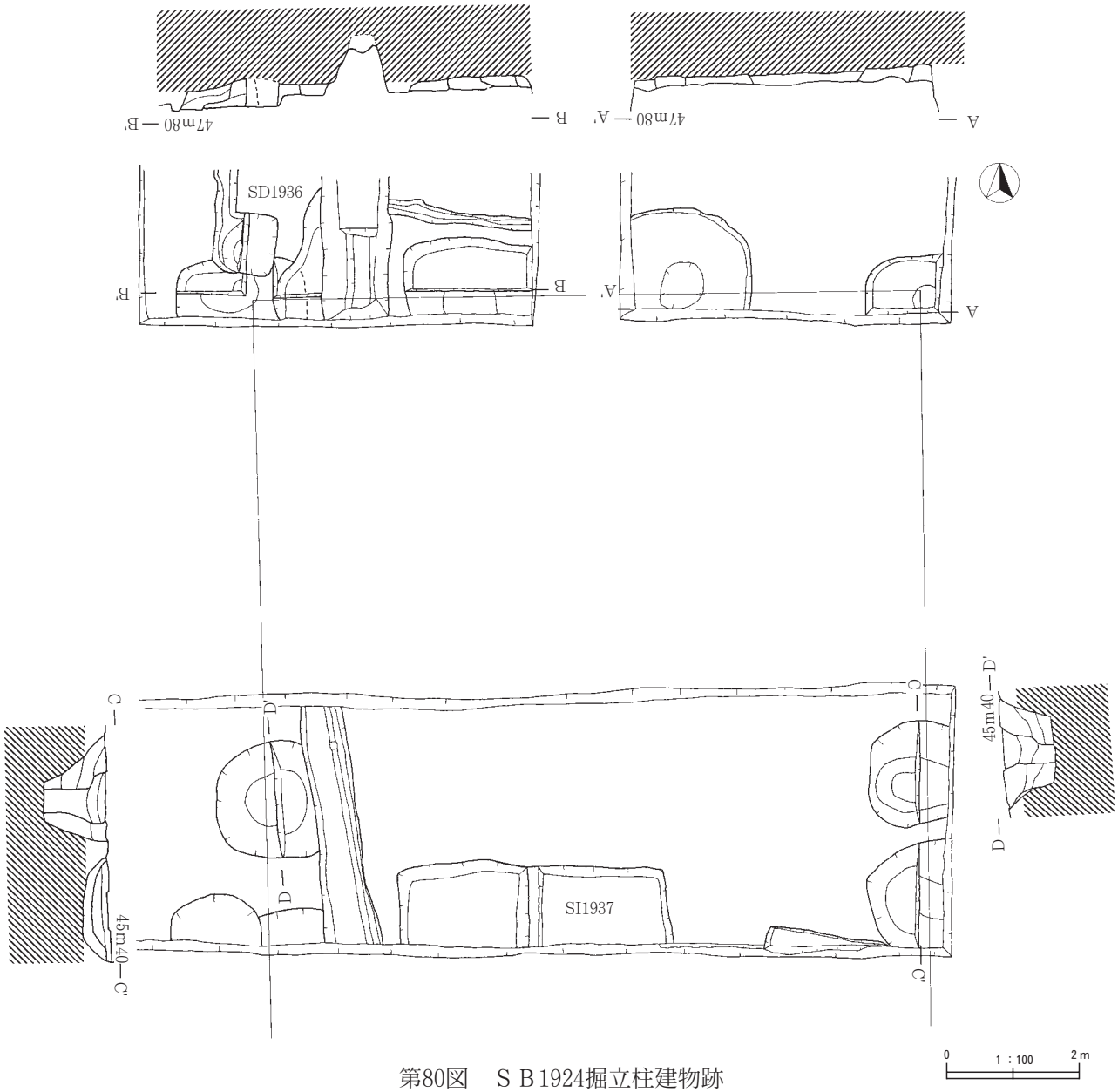
ＳＢ1924掘立柱建物跡（第80図、図版22）

Ｂ調査区南端からＣ調査区東側にかけての第8層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。梁間3間（3.3ｍ＋3.3ｍ＋3.5ｍ）、桁行3間以上（3.6ｍ＋3.6ｍ＋…）の南北棟の掘立柱建物跡である。建物の方位は桁行が北で約2度西に振れる。全体に削平を受けており、掘り方平面及び深さ等の規模は明確でないが、柱掘り方は一辺1.6ｍ～2.0ｍの隅丸方形で、深さ0.2ｍ～1.0ｍである。北側梁間の柱掘り方は特に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径30㎝～36㎝で、柱抜き取りを受けている。廃絶後周辺に第7層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層による整地が行われる。SD1936と重複し、これよりも古い。

ＳＢ1924出土遺物（第81図、図版45）

1、2は柱掘り方埋土出土である。

石製品（1）：砥石で、礫の1面に磨面が認められる。

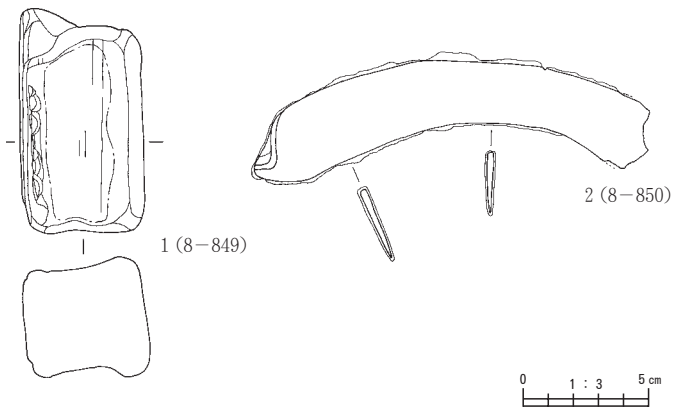


第80図　ＳＢ1924掘立柱建物跡

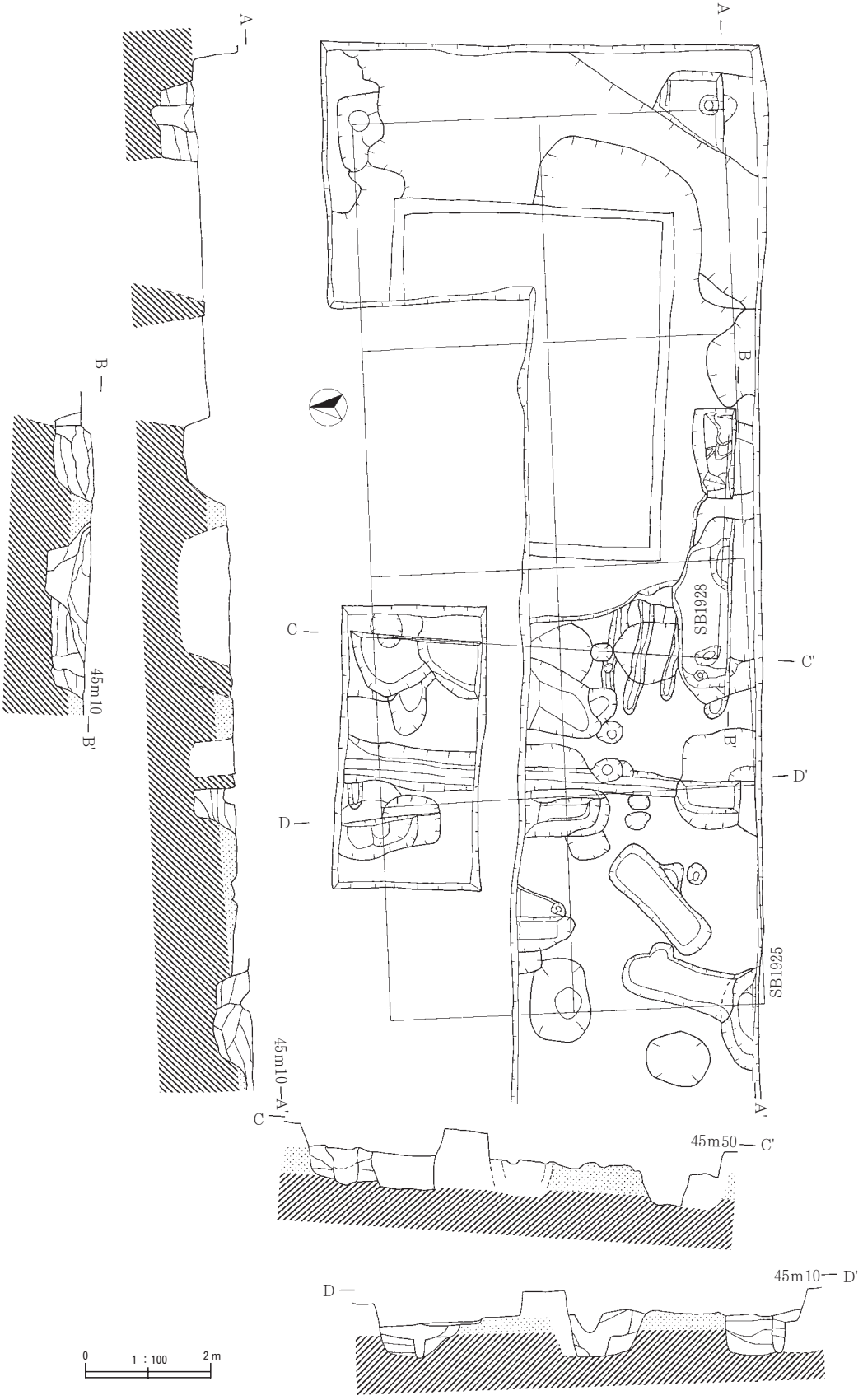
鉄製品（２）：鉄鎌で、刃先を欠いている。刃部は内反りし、木柄装着部の折り返しは刃部に対して直角である。全体的に錆化が進んでいる。

ＳＢ1925掘立柱建物跡（第82図、図版23）

Ａ調査区東側の第８層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。梁間２間以上（3.0m＋3.0m…）、桁行４間（3.5m＋3.6m＋3.6m＋3.6m）の東西棟の総柱式掘立柱建物跡である。北側は調査区外となっており、また南側は撹乱により規模確認が困難となっている。建物の方位は梁間が北で約３

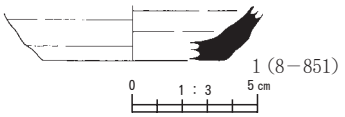


第81図　ＳＢ1924掘立柱建物跡出土遺物



第82図　ＳＢ1925・ＳＢ1928掘立柱建物跡

度西に振れる。柱掘り方は一辺1.0m～1.5mの隅丸方形で、深さ0.2m～1.0mである。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径27㎝～30㎝で、柱抜き取りを受けている。SB1928と重複し、これよりも新しい。埋土より須恵器の他に摩滅した瓦片が出土している。



第83図　ＳＢ1925掘立柱建物跡出土遺物

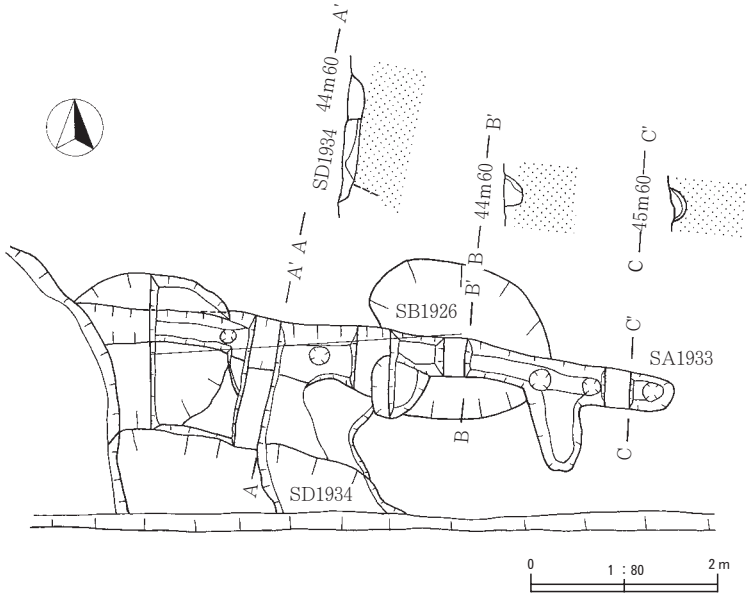
ＳＢ1925出土遺物（第83図、図版45）

１は柱掘り方埋土出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。

ＳＢ1926掘立柱建物跡（第84図、図版25）

Ｃ調査区西側の第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる掘立柱建物跡と考えられる。東西１間以上（3.3m＋…）と推定される。建物の方位は東西柱筋が西で約３度南に振れる。柱掘り方は直径1.6～2.0mのややゆがんだ円形である。柱抜き取りを受けている。SA1933、SD1934と重複し、これらよりも古い。



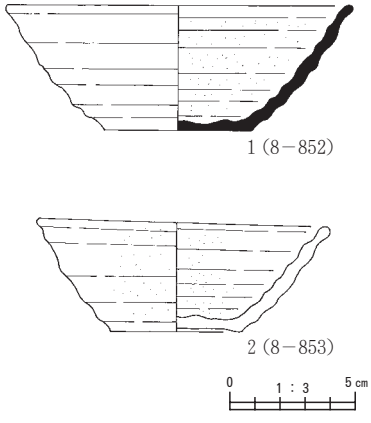
第84図　ＳＢ1926掘立柱建物跡、ＳＡ1933材木塀跡、ＳＤ1934溝跡

ＳＢ1926出土遺物（第85図、図版46）

１、２は柱掘り方抜き取り出土である。

須恵器（１）：糸切り無調整の坏で、体部内面に煤状炭化物が付着している。

赤褐色土器（２）：糸切り無調整の坏で、体部内外面に煤状炭化物が付着している。



第85図　ＳＢ1926掘立柱建物跡出土遺物

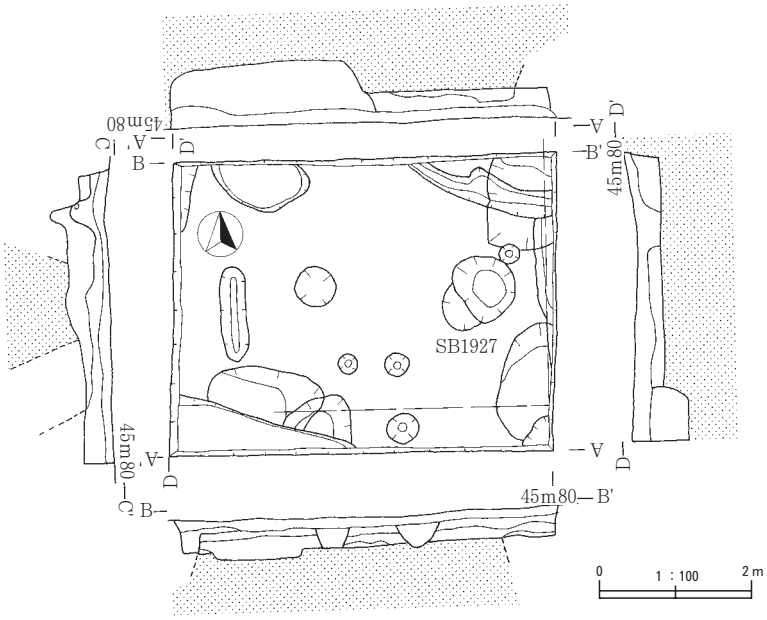
ＳＢ1927掘立柱建物跡（第86図、図版24）

Ｄ調査区の地山飛び砂層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる掘立柱建物跡と考えられる。南北２間以上（3.0m＋…）と推定される。建物の方位は南北柱筋が北で約２度西に振れると推定される。柱掘り方は一辺1.6m以上の隅丸方形と推定される。柱痕跡は不明で、抜き取りを受けている。

ＳＢ1928掘立柱建物跡（第82図、図版23）

Ａ調査区東側の第８層明黄褐色砂・浅黄色砂層面で検出された。南北２間以上（2.7m＋2.7m…）、東西１間以上（3.6m＋…）の掘立柱建物跡である。北側は調査区外となっており、東側は撹乱により規模の確

認が困難となっている。建物の方位は南北柱筋が北で約3度東に振れる。SB1925との重複や撹乱により柱掘り方の形態は不明確だが、深さは50㎝～60㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径21㎝で、柱抜き取りを受けている。SB1925と重複し、これよりも古い。



第86図　ＳＢ1927掘立柱建物跡

ＳＡ1929柱列（第87図、図版24・25）

Ｂ調査区南側の第6層暗褐色土層面で検出された。3基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約4度東に振れる。柱掘り方は直径50㎝～60㎝の円形で、深さは20㎝～30㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径12㎝で、抜き取りを受けている。柱間は南から2.5ｍ＋2.3ｍである。

ＳＡ1930柱列（第87図、図版24・25）

Ｂ調査区南側の第6層暗褐色土層面で検出された。3基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約6度東に振れる。柱掘り方は直径90㎝～100㎝の円形で、深さは20㎝～30㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は柱抜き取りにより、柱の直径は不明である。柱間は南から3.0ｍ＋2.9ｍと推定される。埋土より赤褐色土器片と瓦片が出土している。

ＳＡ1931柱列（第87図、図版24・25）

Ｂ調査区南側の第6層暗褐色土層面で検出された。3基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約2度東に振れる。柱掘り方は直径100㎝～110㎝の円形で、深さは30㎝～35㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径27㎝で、抜き取りを受けている。柱間は南から2.7ｍ＋3.0ｍである。

ＳＡ1932ピット群（第75図、図版24）

Ｂ調査区南側の第6層暗褐色土層面で検出された。直径30㎝～50㎝の小柱掘り方からなるピット群である。小規模な掘立柱建物や柱列を構成する可能性がある。埋土より赤褐色土器片が出土している。

ＳＡ1933材木塀跡（第84図、図版25）

Ｃ調査区西側の第7層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された区画施設である。布掘り溝を伴う東西方向の材木塀跡で、西側は撹乱により不明となっている。塀の方向は、布掘り溝跡が西で約7度北へ振れる方向である。

布掘り溝跡は上幅44㎝以上、深さ15㎝～20㎝で、削平により浅くなっている。断面形はU字状を呈する。布掘り溝底部には直径20㎝前後の丸太材の柱痕跡が認められる。材の間隔は、抜き取りを受けていることから明確でないが、0.6ｍ～１ｍと推定され、間隔をあけて丸太材を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。ＳＢ1926、ＳＤ1934と重複し、それらよりも新しい。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。

ＳＡ1933出土遺物（第88・89図、図版46）

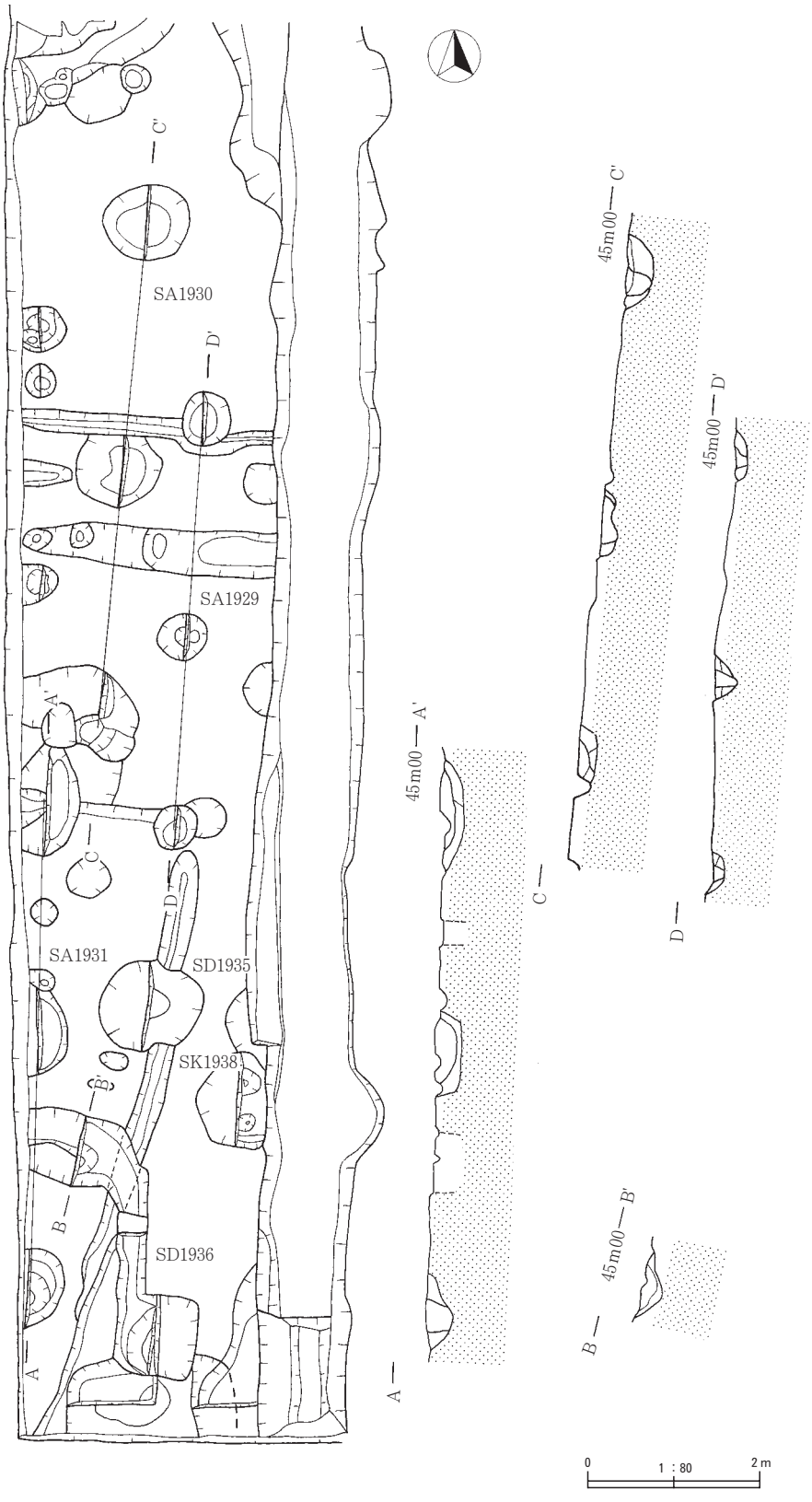
１、２は布堀り溝埋土出土である。

鉄製品（１）：鉄鏃の基部である。先端と基部の一部を欠き、錆化が進んでいる。

塼（２）：軟質で、淡黄色を呈する。

ＳＤ1934溝跡（第84図、図版25）

Ｂ調査区西側の第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された。幅100㎝、深さ15㎝、東西方向から南北方向に屈曲する溝跡で、溝の方向は北側では東で約10度南に振れ、南側では南で約10度東に振れる。SA1933と重複し、これより古い。埋土より赤褐色土器の他、須恵器片が出土している。

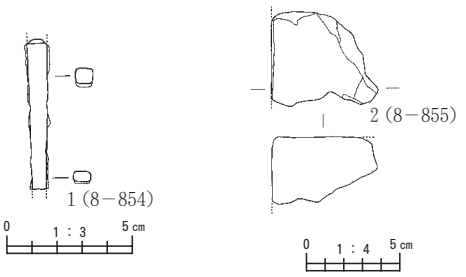


第87図　ＳＡ1929・ＳＡ1930・ＳＡ1931柱列、ＳＤ1935・ＳＤ1936溝跡

ＳＤ1934出土遺物（第90図、図版46）

１は埋土出土である。

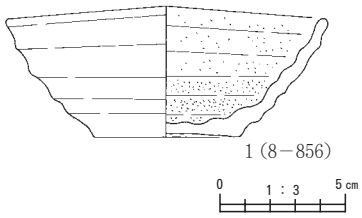
赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏で、体部内面に煤状炭化物が付着している。



第88図　ＳＡ1933材木塀跡出土遺物①　第89図　ＳＡ1933材木塀跡出土遺物②

ＳＤ1935溝跡（第87図、図版24）

Ｂ調査区南側の第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された。幅30㎝前後、深さ15㎝の南北方向の溝跡で、溝の方向は北で約12度東に振れる。SD1936、SK1938と重複し、SD1936よりも新しく、SK1938よりも古い。



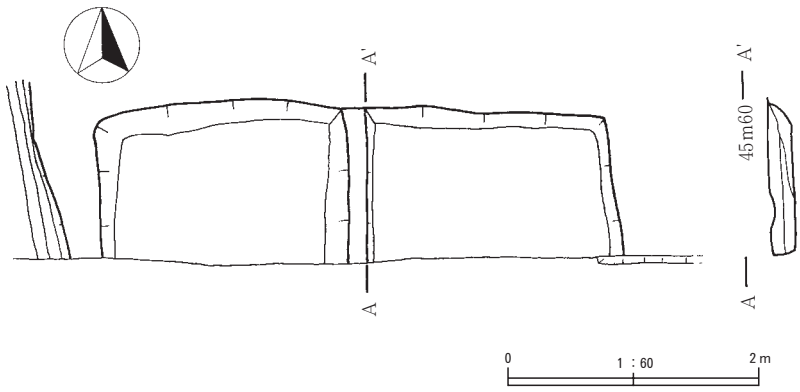
第90図　ＳＤ1934溝跡出土遺物

ＳＤ1936溝跡（第87図、図版24）

Ｂ調査区南側の第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された。幅32㎝～80㎝、深さ20㎝、東西方向から南北方向に屈曲する溝跡で、溝の方向は北側では東で約10度南に振れ、南側ではほぼ真南に向く方向となる。南東端部に一辺90㎝の方形の掘り方を伴う。SB1924、SD1935と重複し、SB1924より新しく、SD1935より古い。

ＳＩ1937竪穴住居跡（第91図、図版26）

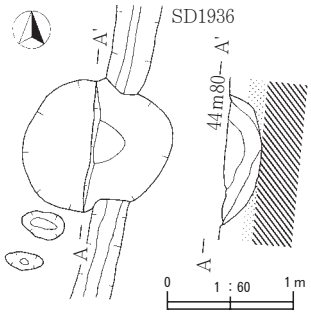
Ｃ調査区東側の第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層面で検出された。平面形は東西4.1ｍ×南北1.3ｍ以上の方形を呈し、南側調査区外へプランは広がる。西壁は北で約３度西へ振れる。カマドの有無は不明である。住居壁高は約20㎝を計るが、削平により全体に浅くなっている。埋土より須恵器片・赤褐色土器片が出土している。



第91図　ＳＩ1937竪穴住居跡

ＳＫ1938土坑（第92図、図版24）

Ｂ調査区南東側の第６層褐色土層面で検出された。東西2.3ｍ、南北2.1ｍのややゆがんだ円形を呈し、深さ60㎝である。SD1936と重複し、それより新しい。



第92図　ＳＫ1938土坑

３）基本層序及び各層出土遺物

基本層序（第76図、図版26）

第89次調査地は広い範囲を対象としており、調査地内で同時期の堆積と考

えられる土層についても色調等にいくらかの違いが認められるが、土地利用状況や遺構変遷を踏まえて調査地全体の基本層序をまとめると以下のようになる。

第１層　表土：秋田市水道局焼山浄水場の施設操業停止及び取り壊し時の造成土と現表土。

第２層　造成土：昭和18年、旧焼山浄水場の造成時の造成土。調査地北側では第２層直下が地山飛砂となる削平を受けている。

第３層　旧耕作土：旧焼山浄水場造成以前、近現代から近世に遡る旧畑地の耕作土。調査地東側中央から南側（Ｂ区中央からＣ区）にかけて堆積している。畑耕作時の畝跡が検出された。黒褐色土・褐灰色土・灰褐色土・灰黄褐色土からなり、上層は浄水場の造成時の影響で硬化し、変色している。

第４層　旧耕作土：近世に遡る旧畑地の耕作土。調査地東側から南側（Ｂ区からＣ区）にかけて堆積している。畑耕作時の畝跡が検出された。灰褐色土を主体とする上層（４－１層）とにぶい黄褐色土を主体とする下層（４－２層）に細分される。後者は出土遺物等から江戸前期まで遡る耕作土と考えられる。畑耕作時の畝跡が検出されている。

第５層　黒褐色土層：最上層の古代の遺物包含層。調査地南側（Ｃ区西側）に堆積する。赤褐色土器小片が混入する。

第６層　暗褐色土層：焼土・炭化物が多く混入する。調査地東側南半から南側（Ｂ区南半からＣ区）にかけて堆積する。SA1929～SA1931、SA1932の検出面。SA1933、SD1934の埋土や覆土となっている。

第７層　褐色土・明褐色土・明褐色粘土層：調査地東側から南側（Ｂ区からＣ区）にかけて堆積する。北側では褐色土、南東寄りでは明褐色粘土が主体となり、細分される可能性がある。SB1926、SA1933、SD1934～SD1936、SI1937、SK1938の検出面。また、SB1922、SB1924廃絶直後の整地層となっている。

第８層　明黄褐色砂・浅黄色砂層：調査地全体にかけて堆積が認められるが、後世の削平等により薄く部分的な堆積となっている。SB1922、SB1923、SB1924、SB1925、SB1928の検出面。

地山飛砂層：浅黄色砂層。調査地全域で地山となっている。削平等によりSB1927の検出面となっている。また、飛砂層下は黒褐色粘土の地山腐植粘土層、さらにその下層は明褐色粘土の地山粘土層となっている。

各層出土遺物

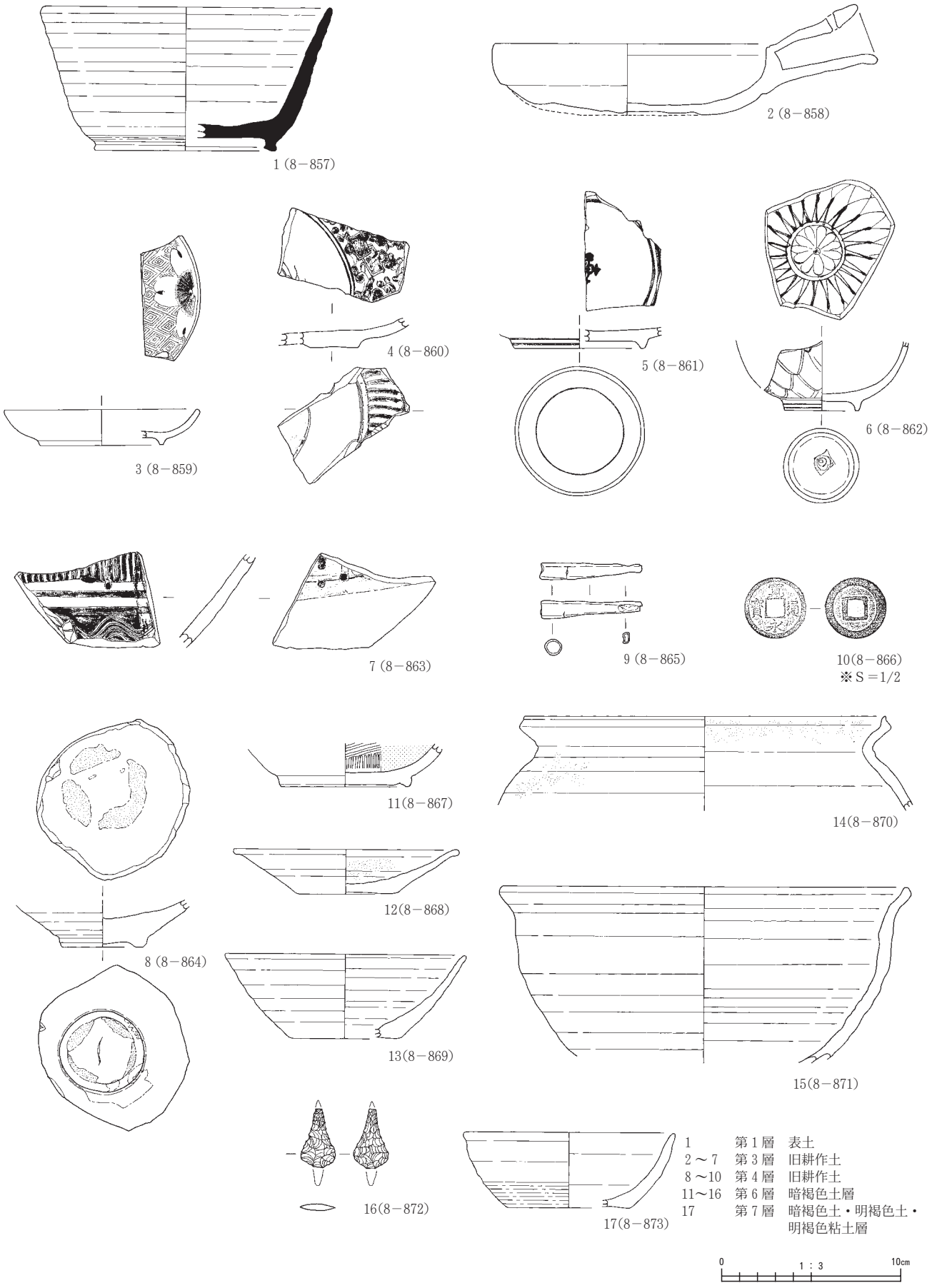
第１層　表土出土遺物（第93図、図版46）

須恵器（１）：糸切り後に台周縁に撫で調整を、体部下端にケズリ調整を施す台付坏である。

第３層　旧耕作土出土遺物（第93図、図版46）

土器（２）：焙烙である。把手の上部に孔が穿たれ、外面の底部と体部の間に段が認められる。底部は強く火熱を受けて部分的に剥離し、把手部付近に煤状炭化物が強く付着している。

磁器（３～６）：３は染付の丸皿である。文様をコバルトで型紙摺りし、口唇部に口紅を施す。４は染付皿で、底部は蛇ノ目高台である。５は染付皿で、見込みにコンニャク印判の五弁花文を施している。６は染付碗である。体部外面に二重網目文、内面に網目文と菊花文を、底部外面に一重方形枠にくずれた「渦福」の銘を染付ている。



第93図　第1層・第3層・第4層・第6層・第7層出土遺物

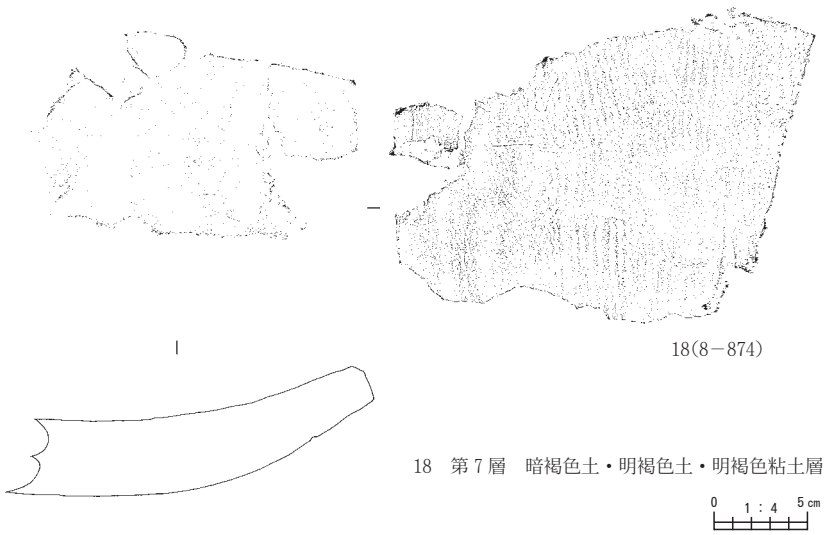
陶器（７）：肥前系（唐津系）の刷毛目文鉢の体部破片である。

第４層　旧耕作土出土遺物（第93図、図版47）

陶器（８）：肥前系（唐津系）の灰釉碗である。高台付近は露胎で、底部内面に砂目積み痕が認められる。

銅製品（９）：銅製の煙管吸口部分である。

銭貨（10）：銅銭の寛永通宝である。



第94図　第７層出土遺物

第６層　暗褐色土層出土遺物（第93図、図版47）

土師器（11）：糸切り後、台周縁に撫で調整を施す台付碗である。内面の体部に横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

赤褐色土器（12～15）：12は糸切り無調整の皿で、内面に煤状炭化物が付着している。13は糸切り無調整の坏で、外面全体に二次加熱を受けている。14は甕の口縁部である。頸部が「く」の字状に外傾して立ち上がる器形で、内外面に煤状炭化物が付着している。15は鍋で、頸部が「く」の字状に外傾して立ち上がる器形である。

石器（16）：石鏃で、基部を欠く。

第７層　暗褐色土・明褐色土・明褐色粘土層出土遺物（第93・94図、図版47）

赤褐色土器（17）：糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。

瓦（18）：平瓦で、凸面に縄目叩き痕が認められ、撫で調整を施している。凹面は撫で調整によって布目圧痕が認められない。軟質で、淡黄色を呈する。

Ⅳ　第 90 次調査報告

１）調査経過

第90次調査は秋田城跡城外南側の大小路地区南西部を対象に、平成18年10月4日から10月30日まで実施した。調査面積は203㎡である。

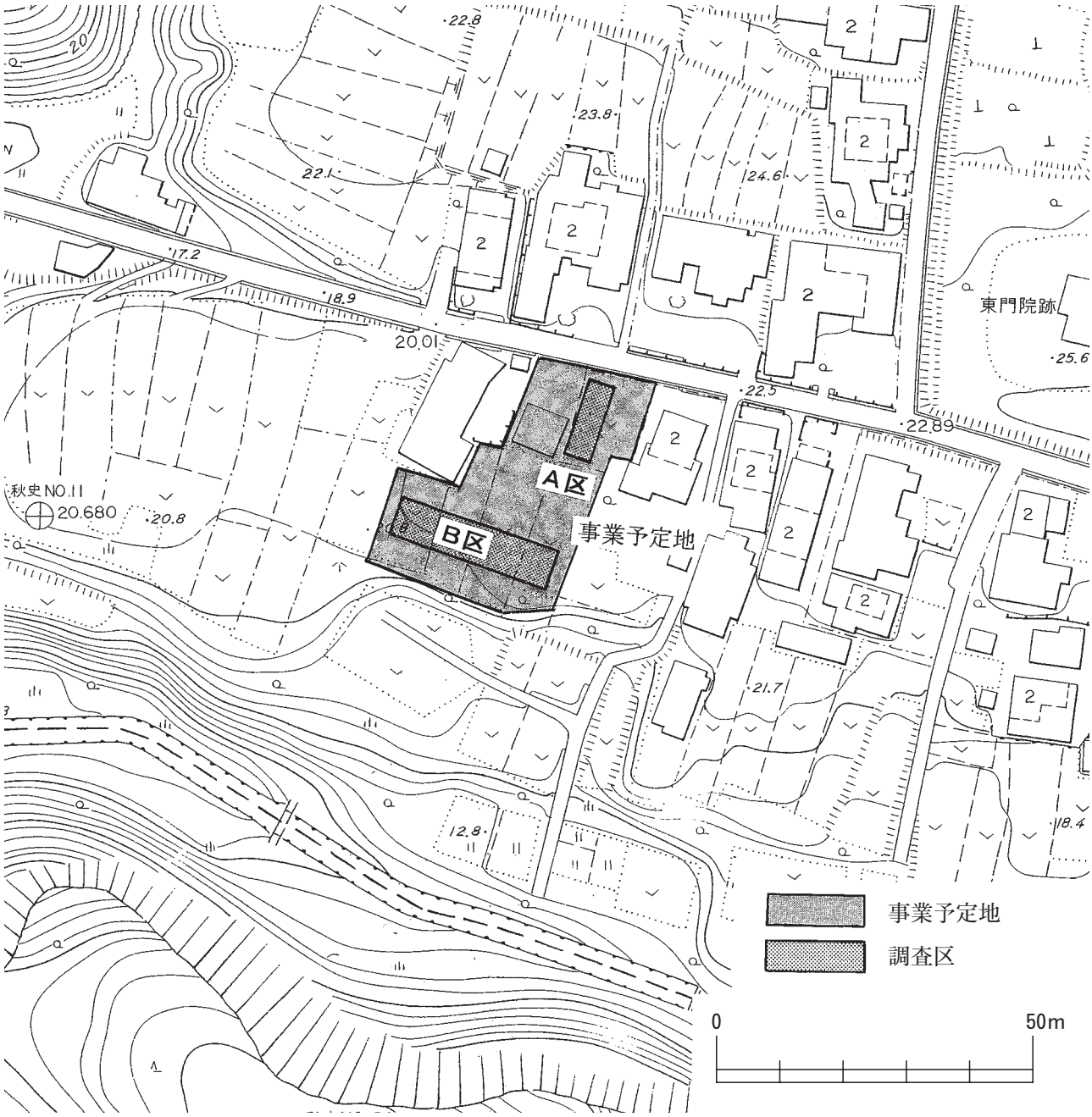
調査は寺内大小路の個人が行った住宅新築の現状変更許可申請について、許可条件である発掘調査を実施したものであり、工事予定地における遺構の有無及び遺存状況や内容の把握を行うことを目的として実施した。

調査地は畑地として利用されていた場所である。現状はほぼ平坦であるが、調査地南側の畑地とは約２ｍの高低差があり、畑の造成時に段階的に北側から南側盛土造成が行われたと考えられる。

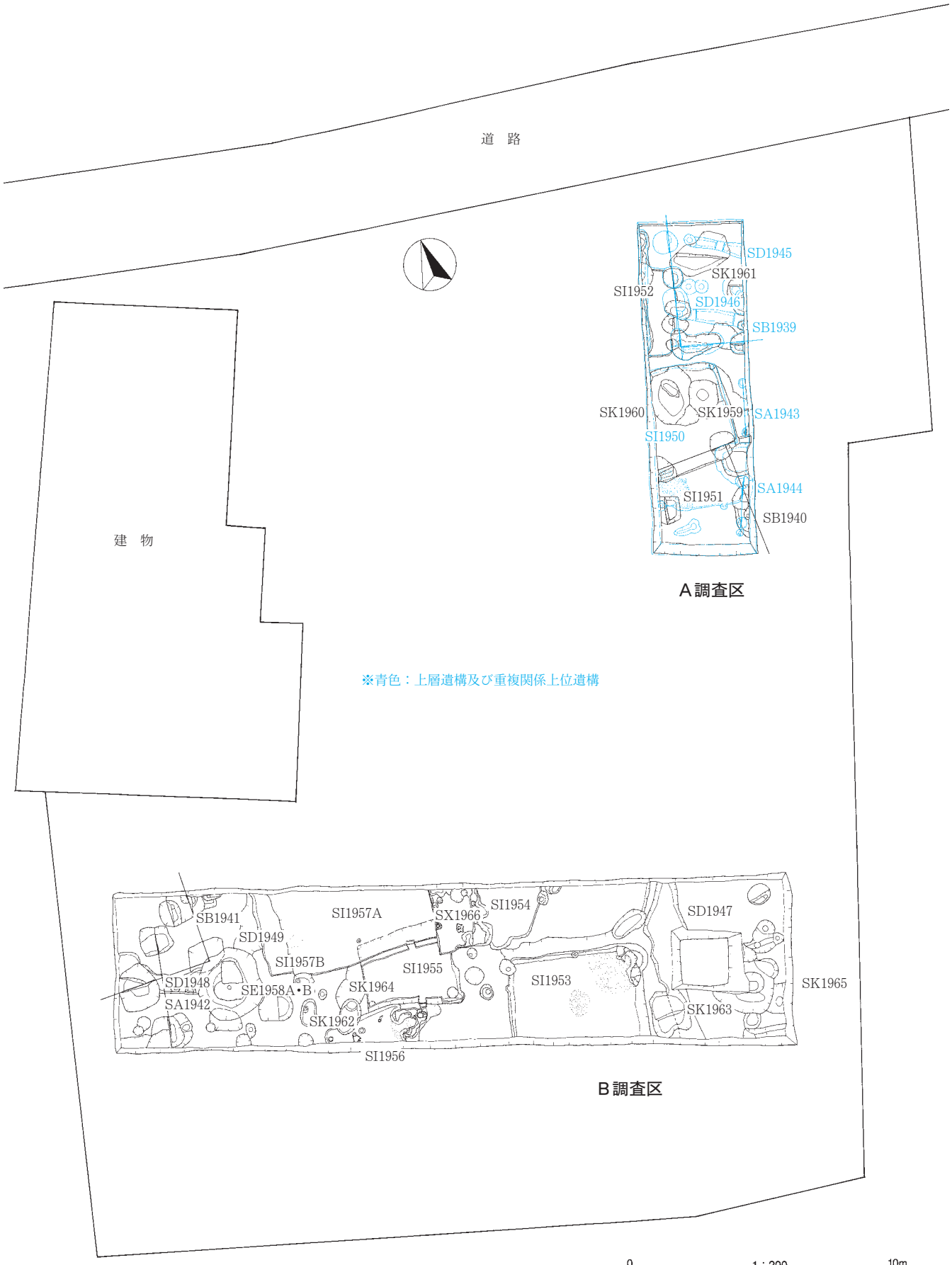
調査地は秋田城の城内南側、推定外郭南門から南に延びる推定南大路の西側にあたる場所で、外郭南辺からは約160ｍ南に位置している。周辺調査では、推定南大路を挟んで東側の第68次調査で平安時代の竪穴住居跡が検出されており、居住域としての利用が確認されている。

調査は、４棟の住宅新築予定範囲を中心に、北側に南北方向に東西４ｍ、南北に５ｍの範囲で幅広いトレンチ状にＡ調査区、南側に東西方向に南北６ｍ、東西25.5ｍの範囲で幅の広いトレンチ状にＢ調査区を設定する方法で行った。調査区は旧地形も含めた状況把握と調査により生じる排土置き場も考慮して設定した。

調査は、まず基準杭測量及び調査区の設定を行い、設定後重機による表土除去作業を行った。それに併行して発掘機材の搬入等を行った（10月６日～10月10日）。

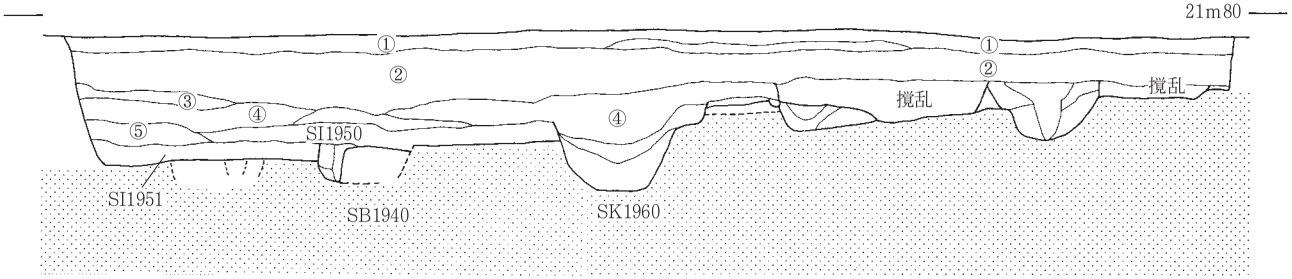


第95図　第90次調査周辺地形図

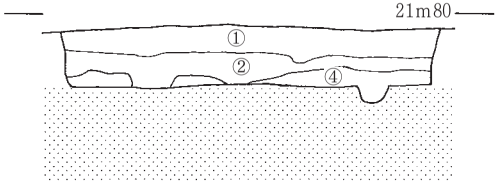


第96図　第90次調査検出遺構図

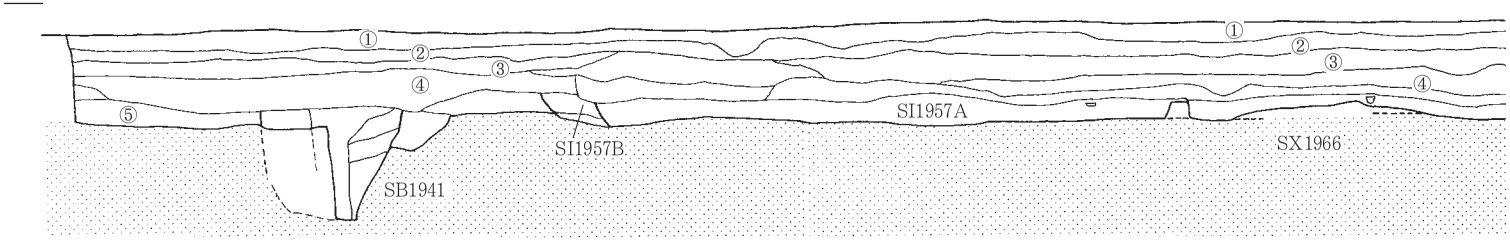
A調査区西壁土層断面図



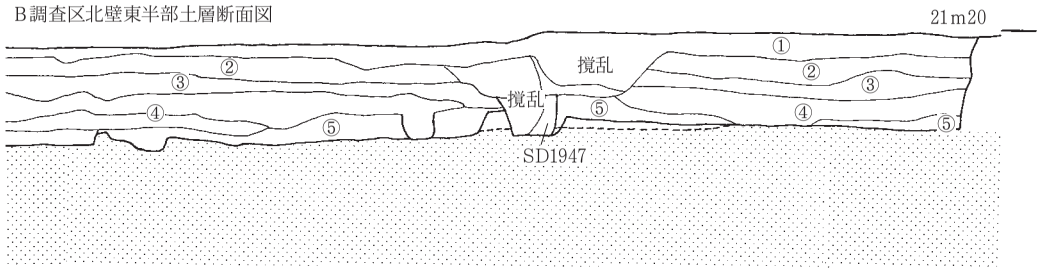
A調査区北壁土層断面図



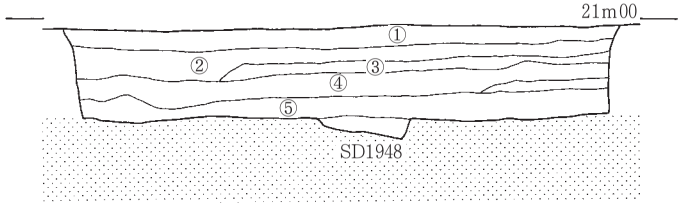
B調査区北壁西半部土層断面図



B調査区北壁東半部土層断面図



B調査区西壁土層断面図



第90次調査地基本層序

① 表　　土：暗褐色土
② 旧耕作土：灰褐色土・黒褐色土
③ 造　成　土：黒褐色土
④ 第　4　層：暗褐色土・褐色土
⑤ 第　5　層：褐色土
⑥ 地山飛砂層：浅黄色砂

0　1：80　2m

第97図　第90次調査地土層断面図

調査地北側のＡ調査区から人手による表土下の旧耕作土である黒褐色土の除去を行い、第４層暗褐色土・褐色土層面から第５層褐色土層面の遺構存在面を検出した。その面を精査して、撹乱の他にSB1939掘立柱建物跡、SA1943・1944柱列、SD1945・1939溝跡、SI1950竪穴住居跡などの上層遺構を検出し、検出状況の写真撮影を行った（10月12日）。調査地南側のＢ調査区についても東側で旧耕作土の除去と、西側で第３層となる旧畑地造成土を除去しながら精査していった。その結果、第５層面から地山飛砂層面にかけてSB1941掘立柱建物跡、SA1942柱列、SI1950～SI1957竪穴住居跡、SE1958井戸跡、SD1947～SD1949溝跡、SK1962～SK1964土坑、SX1966焼土遺構等の遺構群が検出された（10月13日）。

Ｂ調査区遺構検出状況を写真撮影後、Ａ調査区及びＢ調査区検出遺構の掘り下げを開始した。Ａ調査区については上層遺構掘り下げ後に全体の写真撮影及び平面実測等の記録化を行った。SB1939は中世の建物であると判明した。また、Ｂ調査区においてはSI1957とSE1958に新旧の重複があり、SE1958は古代と中世の井戸がほぼ同位置に重複していることが判明した（10月16日～10月19日）。

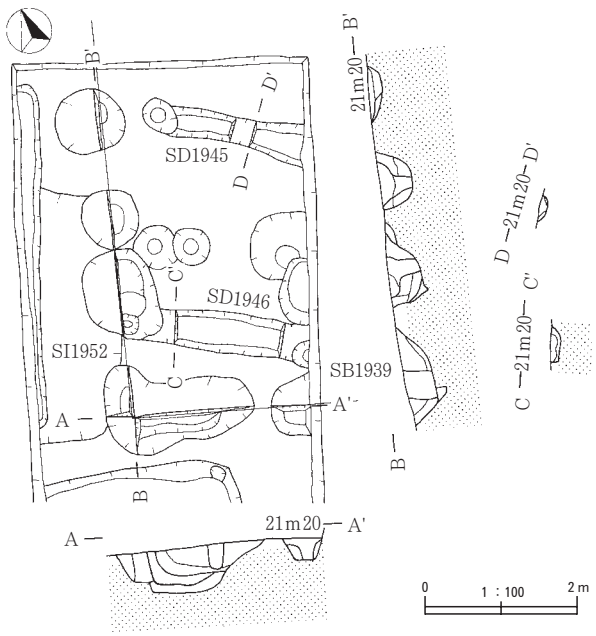
Ｂ調査区では各遺構掘り下げ後に断面実測や写真撮影を行った。また調査区全体の写真撮影、調査区壁の土層断面実測や写真撮影等の記録化を行った。それと併行してＡ調査区では下層遺構の追求を行い、SB1940掘立柱建物跡、SI1951・SI1952竪穴住居跡や、SK1959～SK1961土坑を検出した（10月20日～10月25日）。

Ａ調査区下層検出遺構の掘り下げと断面の記録化を行った後、調査区壁の土層断面実測及び写真撮影を行った。Ａ・Ｂ調査区の平面実測を行った。調査地全景写真撮影を行った後人手による埋め戻しを行った（10月26日～10月27日）。機材を撤収するとともに重機による埋め戻しを行い、調査を終了した（10月30日）。

２）検出遺構と出土遺物

ＳＢ1939掘立柱建物跡（第98図、図版29）

Ａ調査区北側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。東西２間以上（1.0m＋1.2m＋…）、南北３間以上（1.5m＋1.0m＋1.5m＋…）の南北棟の掘立柱建物跡と推定される。建物の方位は南北方向柱筋が北で約14度東に振れる。柱掘り方は直径0.9m～1.2mの円形で、深さ20㎝～40㎝である。北側の柱掘り方は削平により特に浅くなっている。柱痕跡は直径18㎝～21㎝で、柱抜き取りを受けている。SI1952、SD1946と重複し、それらより新しい。



第98図　ＳＢ1939掘立柱建物跡、ＳＤ1945・ＳＤ1946溝跡

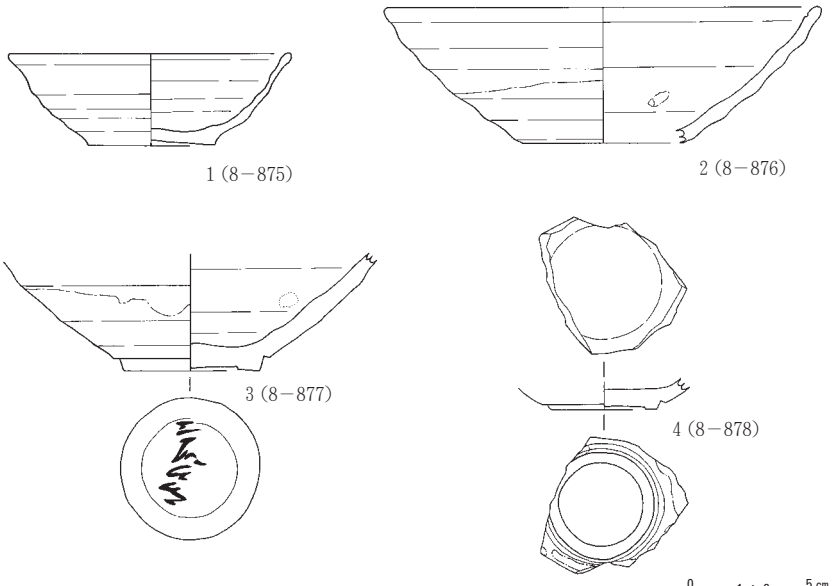
ＳＢ1939出土遺物（第99図、図版47）

１～４は柱掘り方埋土出土である。

赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏である。

陶器（２～４）：２、３は古瀬戸の灰釉平椀である。内面全面と外面上半につけ掛けで施釉し、体部内面にトチン痕が認められる。２は体部破片である。３は糸切りで、削り出しによって台を付け、底部は露胎となっている。底部外

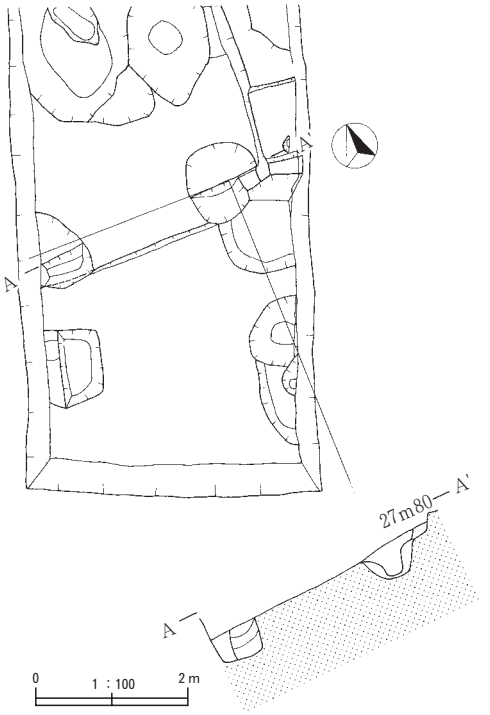
面に判読不能の墨書がある。４は古瀬戸の灰釉碗で、削り出しによって台を付けていることから切り離しは不明である。内面全面と外面上半につけ掛けで施釉し、底部は露胎となっている。



第99図　ＳＢ1939掘立柱建物跡出土遺物

ＳＢ1940掘立柱建物跡（第100図、図版29）

Ａ調査区南側の地山飛び砂層面で検出された。東西１間以上（3.0ｍ＋…）、南北２間以上（2.4m＋…）の掘立柱建物跡である。建物の方位は南北方向柱筋が北で約１度東に振れる。柱掘り方は直径1.0m前後のややゆがんだ円形で、深さ40㎝～50㎝である。全体に削平を受けている。柱痕跡は直径24㎝で、柱抜き取りを受けている。SI1950、SI1951と重複し、それらより古い。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。



第100図　ＳＢ1940掘立柱建物跡

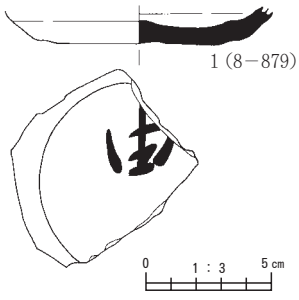
ＳＢ1940出土遺物（第101図、図版48）

１は柱掘り方埋土出土である。

須恵器（１）：ヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。底部は丸底風で、外面に「由」の墨書がある。外面に二次加熱を受けている。

ＳＢ1941掘立柱建物跡（第102図、図版29・30）

Ｂ調査区西側の第５層褐色土層面で検出された。東西１間以上（3.0ｍ＋…）、南北１間以上（2.4ｍ＋…）の掘立柱建物跡である。建物の方位は南北方向柱筋が北で約２度東に振れる。柱掘り方は一辺1.4ｍ～1.5ｍの隅丸方形で、深さ1.0ｍである。柱痕跡は直径21㎝で、柱抜き取りを受けている。SD1948、SE1958と重複し、それらより古い。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。



第101図　ＳＢ1940掘立柱建物跡出土遺物

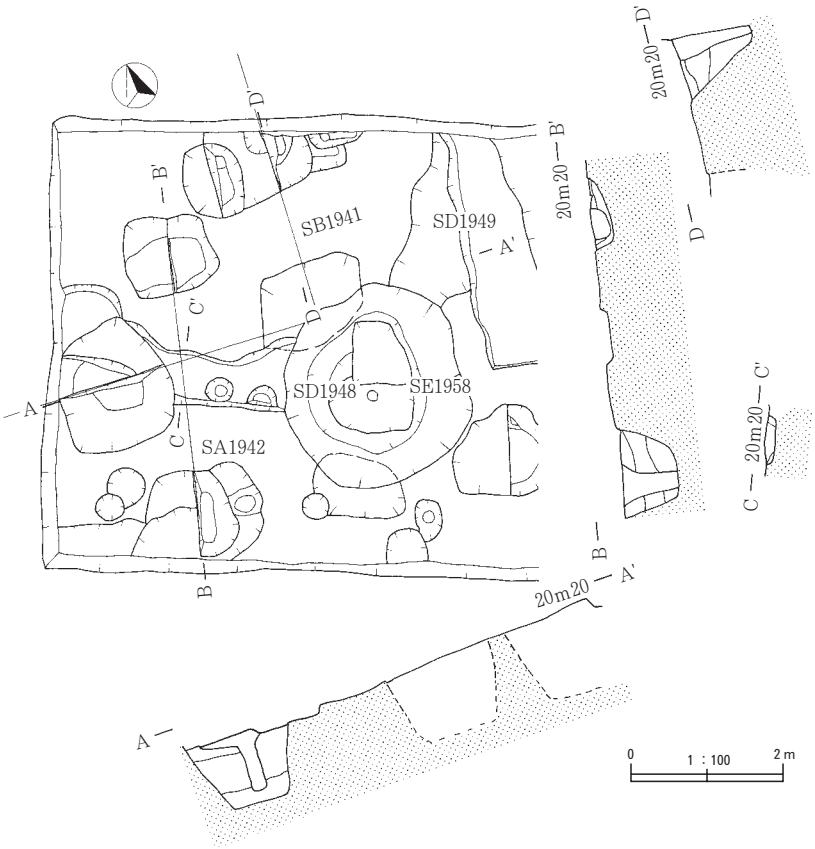
ＳＡ1942柱列（第102図、図版29・30）

Ｂ調査区西側の第５層褐色土層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約13度東に振れる。柱掘り方は一辺1.0ｍ～1.2ｍの隅丸方形で、深さ30㎝～70㎝である。建物を構成し、

北側柱掘り方が廂部分の掘り方となる可能性がある。柱痕跡は直径24㎝で、抜き取りを受けている。柱間は南から3.4m＋…である。

ＳＡ1943柱列（第105図、図版30）

Ａ調査区南側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約18度東に振れる。柱掘り方は直径36㎝の円形で、深さは15㎝～25㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径14㎝で、抜き取りを受けている。柱間は1.8mと推定される。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。



第102図　ＳＢ1941掘立柱建物跡、ＳＡ1942柱列、ＳＤ1948・ＳＤ1949溝跡

ＳＡ1944柱列（第105図、図版30）

Ａ調査区南側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。２基以上の柱掘り方よりなる南北方向の柱列である。柱列の方向は北で約22度東に振れる。柱掘り方は直径40㎝～50㎝の円形で、深さは26㎝～28㎝である。全体に削平により浅くなっている。柱痕跡は直径14㎝で、抜き取りを受けている。柱間は1.5mと推定される。

ＳＤ1945溝跡（第98図、図版29）

Ａ調査区北側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。幅36㎝～50㎝、深さ12㎝、東西方向の溝跡で、全体に削平を受けている。溝の方向は西で約30度北に振れる。SK1961と重複し、これより新しい。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1946溝跡（第98図、図版29）

Ａ調査区北側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。幅46㎝～50㎝、深さ14㎝、東西方向の溝跡で、全体に削平を受けている。溝の方向は西で約26度北に振れる。SB1939と重複し、これより古い。

ＳＤ1947溝跡（第103図、図版30）

Ｂ調査区東側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。幅60㎝～150㎝、深さ32㎝～36㎝の南北方向の溝跡で、溝の方向は北で約20度東に向く方向で、南側では南で約10度東に振れるように曲る。SK1963と重複し、それよりも新しい。埋土より赤褐色土器の他に、須恵器・土師器片が出土している。

ＳＤ1947出土遺物（第104図、図版48）

１は埋土出土である。

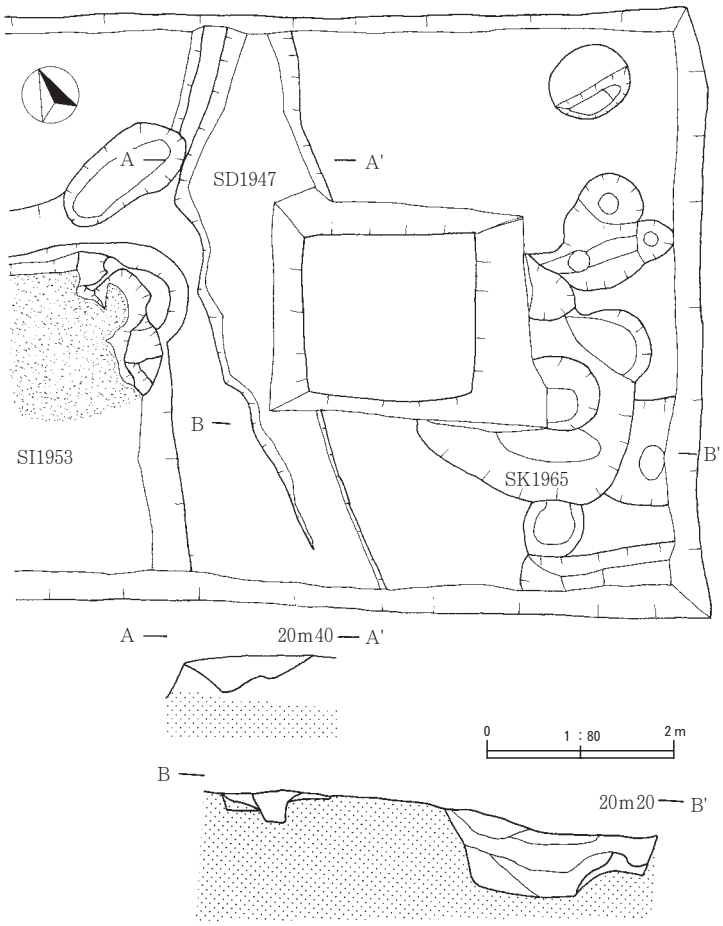
赤褐色土器（１）：台付皿で、台部分が欠損している。底部に菊花状調整痕が認められることから切り離しは不明である。

ＳＤ1948溝跡（第102図、図版30）

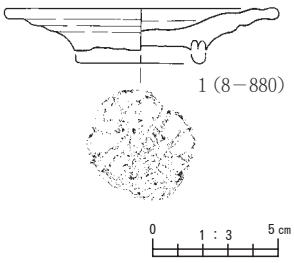
Ｂ調査区西側の第５層褐色土層面で検出された。幅60㎝～90㎝、深さ15㎝前後、東西方向の溝跡で、全体に削平を受けている。溝の方向は東側では西で約24度、西側では西で約44度北に振れる方向に曲がる。SB1941、SE1958と重複し、SB1941より新しく、SE1958より古い。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。

ＳＤ1949溝跡（第102図、図版29）

Ｂ調査区西側の第５層褐色土層面で検出された。幅80㎝～100㎝、北東から南西方向の不規則な溝跡である。溝の方向はSI1957Bとの重複により明確でない。SI1957B、SE1958と重複し、それらよりより古い。



第103図　ＳＤ1947溝跡、ＳＫ1965土取り穴



第104図　ＳＤ1947溝跡出土遺物

ＳＩ1950竪穴住居跡（第105図、図版30）

Ａ調査区中央南寄りの第５層褐色土層面で検出された。平面形は東西3.0ｍ×南北5.5ｍ以上の方形を呈し、西側が調査区外となっている。東壁は北で約16度西へ振れる。南辺西寄りに粘土混じりの炭化物面を伴うが、カマドの有無は不明である。住居壁高は約25㎝を計るが、削平により全体に浅くなっている。SB1940、SI1951、SK1959、SK1960と重複し、SB1940・SI1951より新しく、SK1959、SK1960より古い。

ＳＩ1950出土遺物（第106図、図版48）

１～４、６は埋土、５は床面出土である。

須恵器（１）：天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施す蓋の破片である。ツマミに「城」の墨書がある。

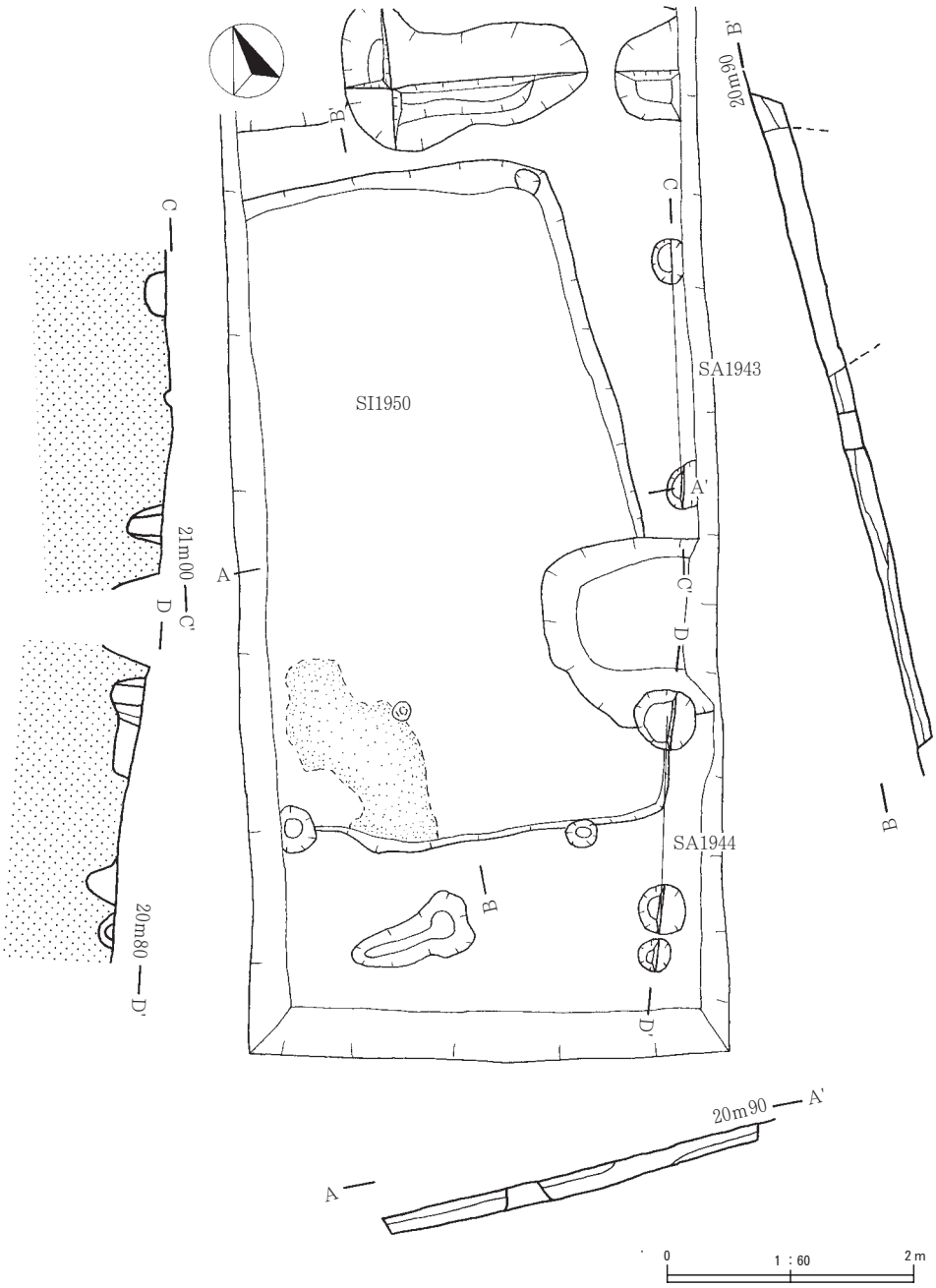
赤褐色土器（２～５）：２は糸切り無調整の皿で、体部内面に煤状炭化物が付着している。３は糸切り無調整の坏である。底部が厚く、柱状高台状となっている。体部内外面に煤状炭化物が付着している。４は糸切り後に台周縁に棒状工具によって撫で調整を施す台付坏で、底部外面には菊花状調整痕が認められる。体部内面に煤状炭化物が付着している。５は糸切り後に台周縁に撫で調整を施す台付坏で、底部外面に菊花状

調整痕が認められる。

陶器（6）：緑釉陶器台付椀である。底部及び台周縁に撫で調整を行っていることから、切り離しは不明である。内外面に刷毛塗りによって施釉している。

ＳＩ1951竪穴住居跡（第107図、図版29）

Ａ調査区南側の地山飛び砂層面で検出された。平面形は東西3.5m以上×南北3.0m以上の方形を呈すると推定され、東側及び南側が調査区外となっている。北壁はほぼ真西の方向となる。カマドの有無は不明である。住居壁高は約12㎝を計るが、削平により全体に著しく浅くなっている。SB1940、SI1950と重複し、SB1940より新しく、SI1950より古い。埋土より須恵器・赤褐色土器片が出土している。



第105図　ＳＩ1950竪穴住居跡、ＳＡ1943・ＳＡ1944柱列

ＳＩ1952竪穴住居跡（第108図、図版30）

Ａ調査区北側の第５層褐色土層面で検出された。平面形は東西1.3m以上×南北3.3mの方形を呈し、西側が調査区外となっている。壁の方向はSB1939の重複等により明確でなく、カマドの有無も不明である。住居壁高は約12㎝を計るが、削平により全体に浅くなっている。SB1939と重複し、それより古い。

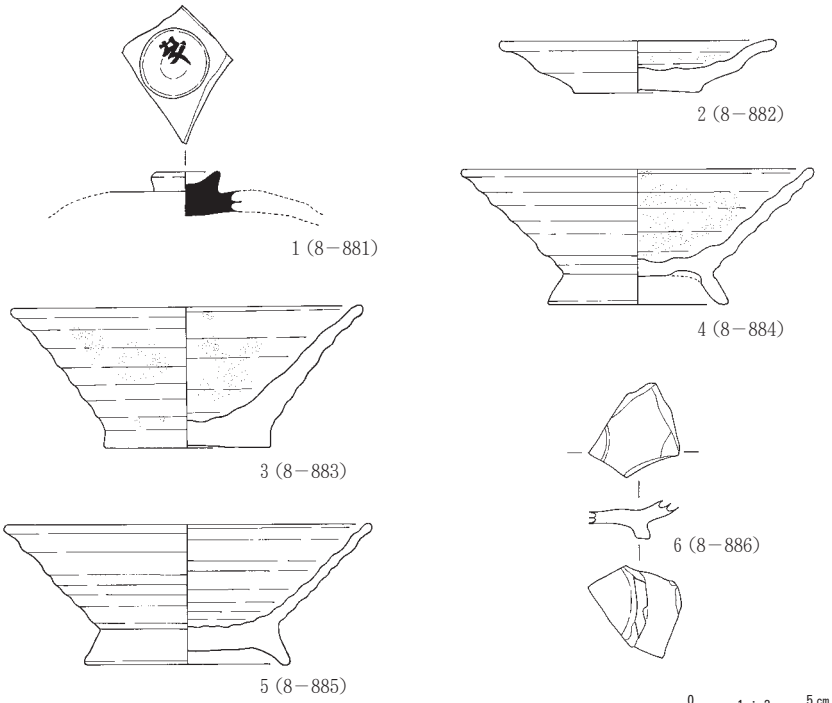
ＳＩ1953竪穴住居跡（第109・110図、図版31）

Ｂ調査区東側の第５層褐色土層面で検出された。平面形は東西5.2m×南北3.3m以上の方形を呈し、南側が調査区外となっている。西壁は北で約17度東へ振れる。北東隅にカマドを伴う。住居壁高は東壁で約45㎝を計るが、西側及び北側は削平により浅くなっている。

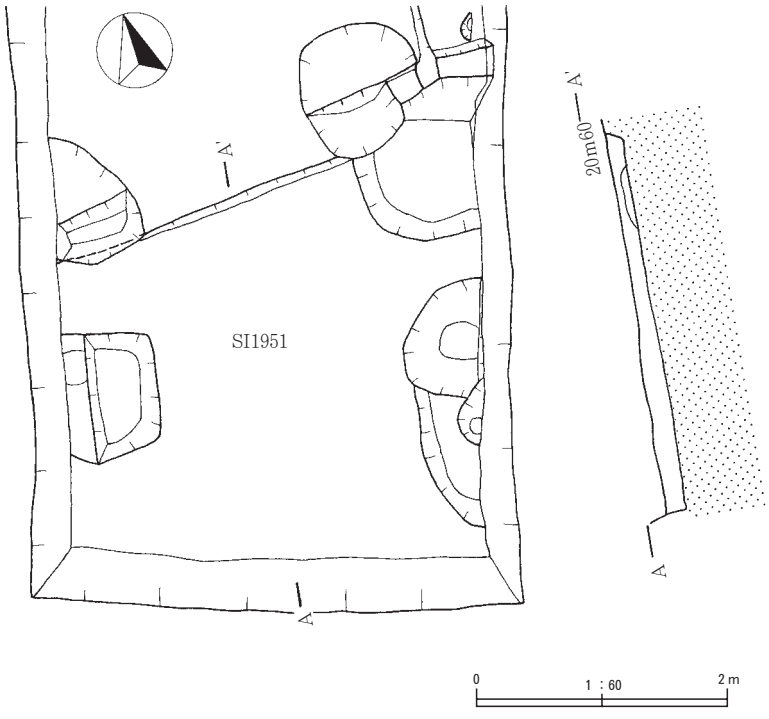
ＳＩ1953出土遺物（第111図、図版48）

１、３、５、６は埋土、２、４はカマド脇の床面出土である。

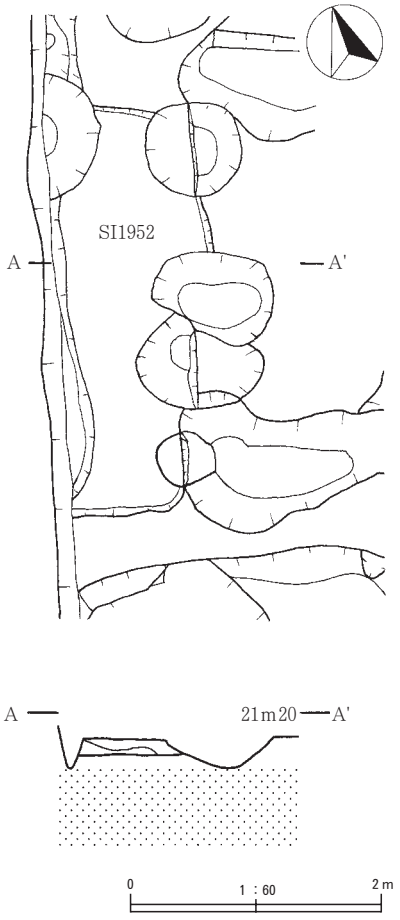
赤褐色土器（１～６）：１は糸切り無調整の小型皿である。２、３は糸切り無調整の小型坏、４は糸切り無調整の坏である。３の体部から底部にかけての内外面に煤状炭化物が付着していることから、燈明皿として使用したと考えられる。５は糸切り無調整の坏で、底部は柱状高台である。６は体部破片で、外面に「木」の墨書がある。



第106図　ＳＩ1950竪穴住居跡出土遺物



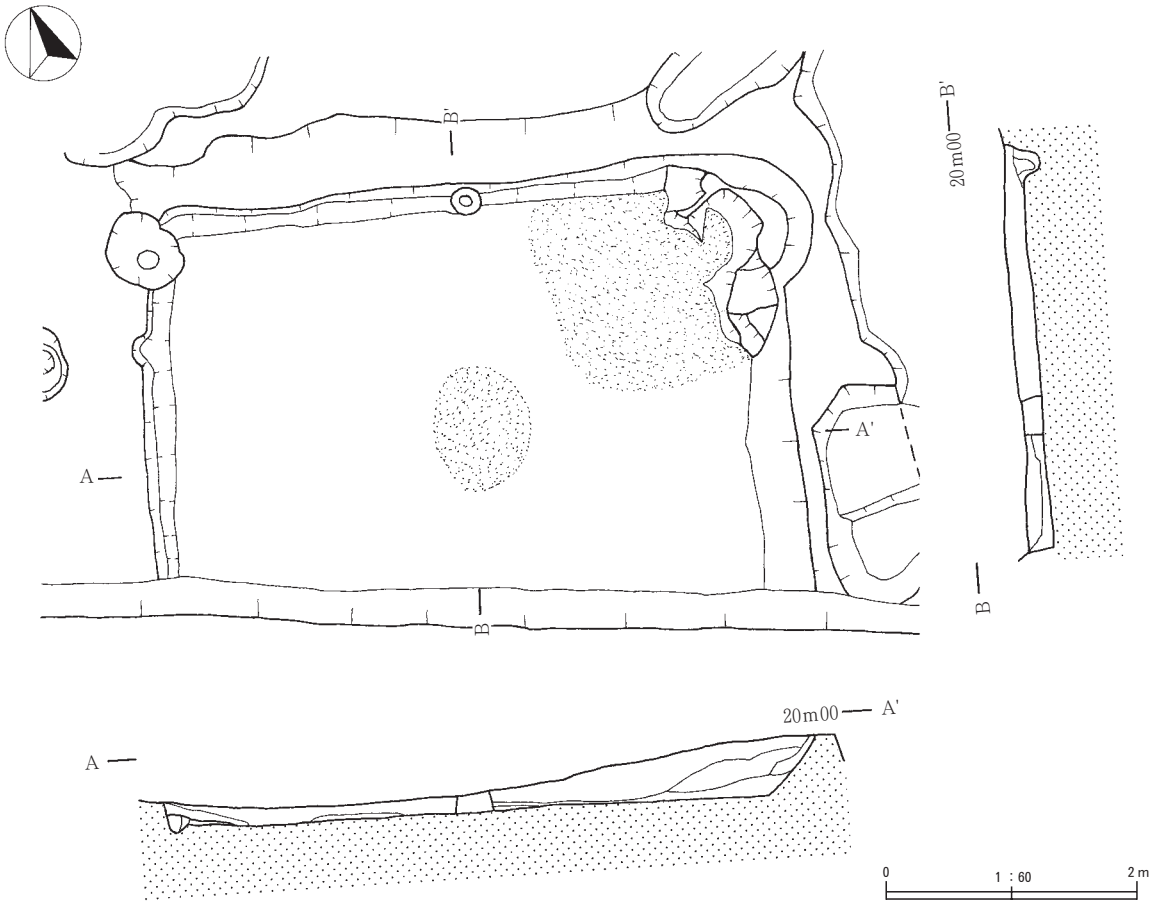
第107図　ＳＩ1951竪穴住居跡



第108図　ＳＩ1952竪穴住居跡

ＳＩ1954竪穴住居跡（第112図、図版31）

Ｂ調査区中央の第５層褐色土層面で検出された。平面形は東西2.0m以上×南北2.0m以上の不整形を呈し、北側が調査区外となり、西側がSX1966と重複することから平面や規模が不明である。東壁は北で約20度東へ振れる。カマドの



第109図　ＳＩ1953竪穴住居跡

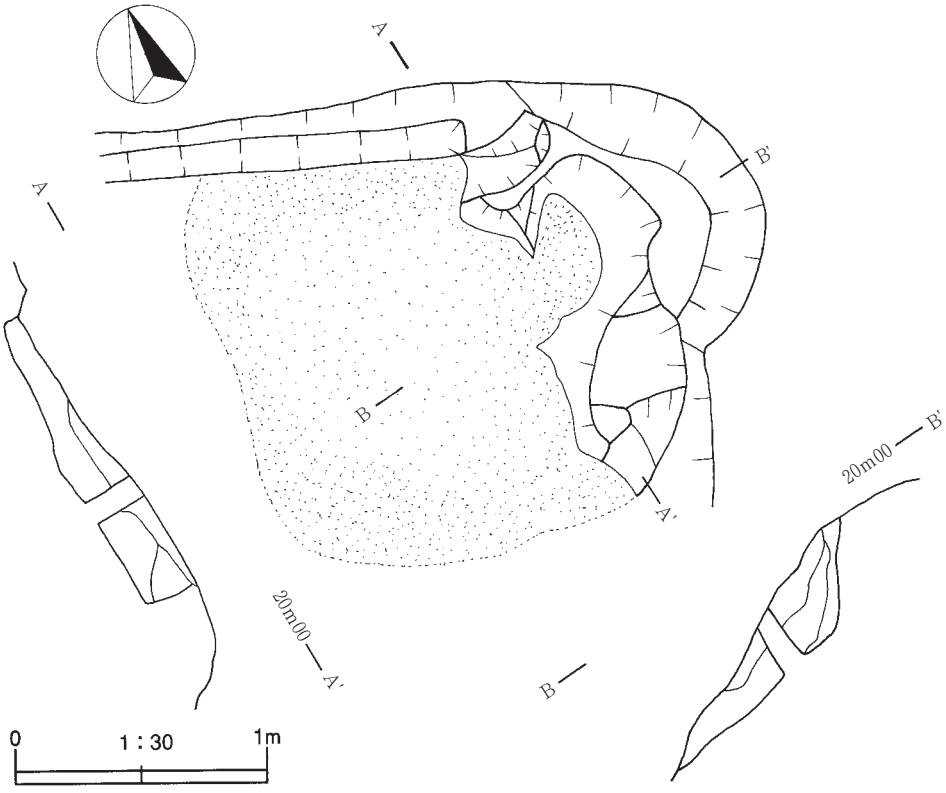
有無は不明である。住居壁高は約10㎝を計るが、削平により全体的に浅くなっている。SX1966と重複し、それより古い。

ＳＩ1954出土遺物（第113図、図版48）

1、2は埋土出土である。

須恵器（1）：糸切り無調整の坏である。

赤褐色土器（2）：糸切り無調整の坏である。口縁部内外面に煤状炭化物が付着し、内外面に二次加熱を受けている。



第110図　ＳＩ1953竪穴住居跡カマド

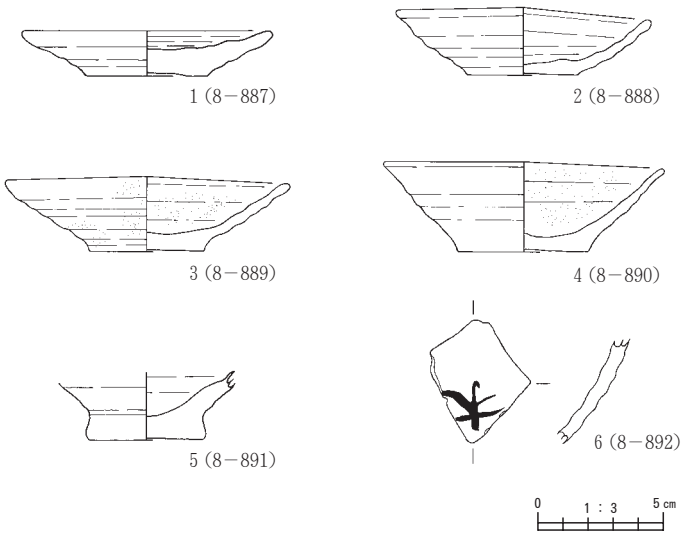
ＳＩ1955竪穴住居跡（第114図、図版31）

Ｂ調査区中央の西寄りの地山飛び砂層面で検出された。平面形は東西3.6ｍ×南北2.4ｍ以上の方形を呈し、北側がSI1957Ａと重複するため不明となっている。西壁は北で約９度東へ振れる。カマドは伴わないと判断される。住居壁高は約15㎝を計るが、削平により全体的に浅くなっている。SI1956、SI1957Ａと重複し、それらより古い。

ＳＩ1955出土遺物（第116図、図版48）

１は埋土出土である。

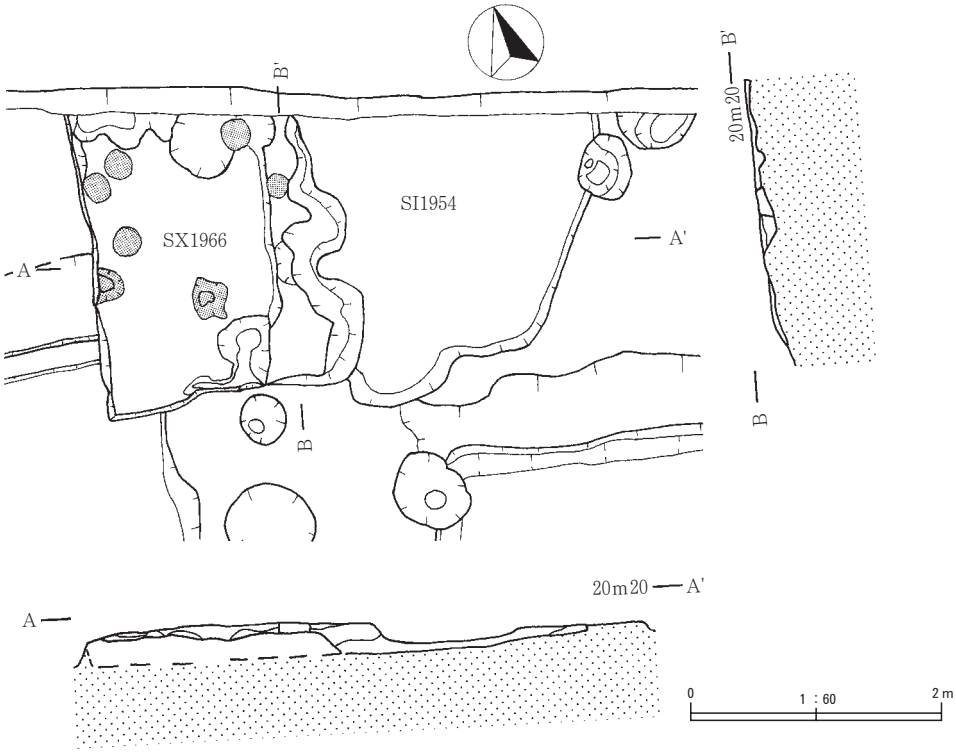
硯（１）：円面硯の脚部で、方形の透かし窓が認められる。



第111図　ＳＩ1953竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ1956竪穴住居跡（第114図、図版31）

Ｂ調査区中央の西寄りの地山飛び砂層面で検出された。平面形は東西3.3ｍ×南北1.6ｍ以上の方形を呈し、南側が調査区外となっている。北壁は西で約９度北へ振れる。北東隅にカマドを伴う。カマド煙道部には土師器長胴甕を埋設している。住居壁高は約20㎝を計る。SI1955、SK1962と重複し、SI1955より新しく、SK1962より古い。

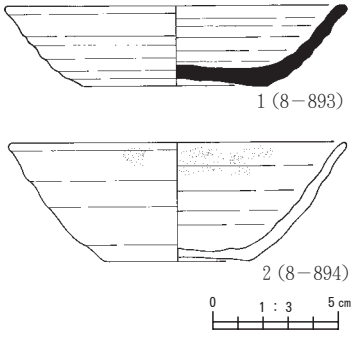


第112図　ＳＩ1954竪穴住居跡、ＳＸ1966焼土遺構

ＳＩ1956出土遺物（第117図、図版49・50）

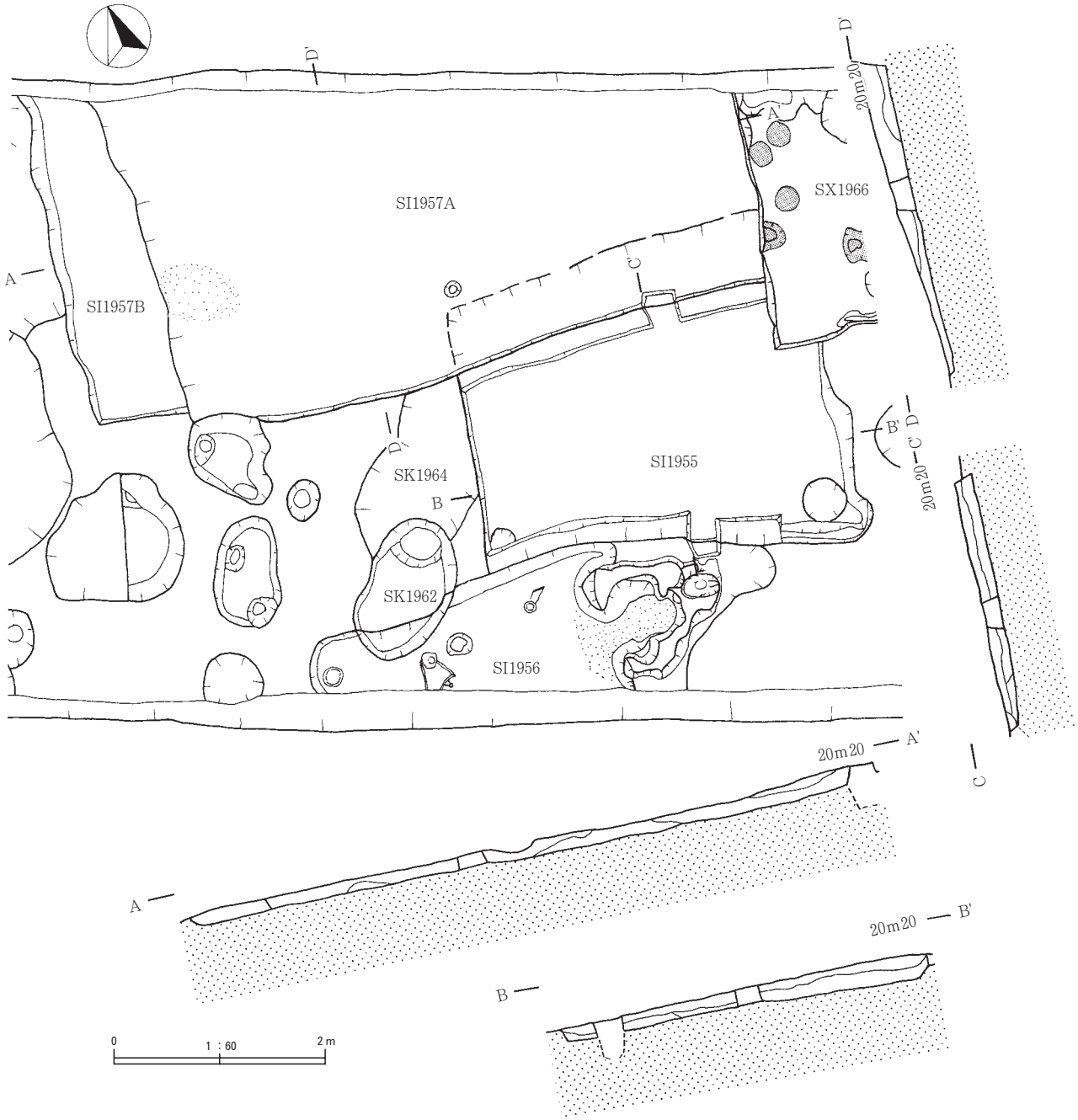
１～３、６は床面、４はカマド煙道内、５はカマド燃焼部崩壊土、７、８は埋土下層出土である。

須恵器（１、２）：１はヘラ切り後に軽い撫で調整を施す坏で、底部外面に「来」の墨書がある。２はヘラ切り後、撫で調整を施す坏である。底部外面に「宗宜」の墨書があり、体部内外面に煤状炭化物が付着している。



第113図　ＳＩ1954竪穴住居跡出土遺物

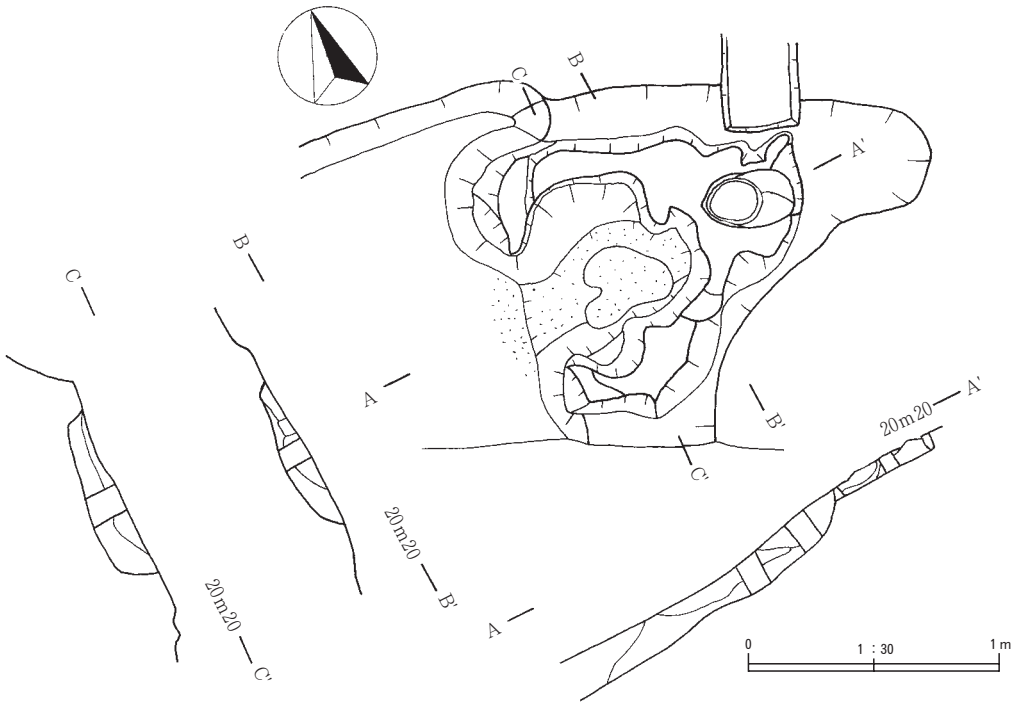
土師器（3～7）：3は頸部が「く」の字状に外傾する甕で、底部は砂底である。外面は口縁部に撫で、体部に縦方向の刷毛目調整を施す。内面は口縁部から体部に横方向の刷毛目調整を施し、その後で口縁部と体部上半に撫で調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着している。4は頸部が「く」の字状に外傾する甕で、底部を欠く。外面は口縁部に撫で、体部に縦方向の刷毛目調整を施す。内面は口縁部から体部に横方向の刷毛目調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着している。5は頸部が「く」の字状に外傾する甕で、体部下半を欠く。外面は口縁部から体部に縦方向の刷毛目調整を施し、その後で口縁部に撫で調整を施す。内面は口縁部から体部に横方向の刷毛目調整を施し、その後で口縁部と体部上半に軽い撫で調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着している。6は頸部が緩く外傾する小型の甕で、底部は砂底である。外面は体



第114図　ＳＩ1955・ＳＩ1956・ＳＩ1957Ａ・Ｂ竪穴住居跡、ＳＫ1964土坑

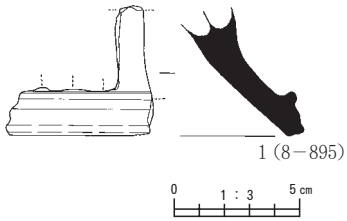
部に縦方向の刷毛目調整を、内面は口縁部から体部に横方向の刷毛目調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着している。

7は頸部が緩く外傾する小型の甕で、底部に木葉痕が認められる。外面は口縁部に撫で、体部上半に縦・斜方向の刷毛目、体部下方に斜方向のケズリ調整を施す。内面は口縁部に撫で、体部に横方向の刷毛目調整を施す。体部内外面に煤状炭化物が付着している。



第115図　ＳＩ1956竪穴住居跡カマド

磁器（8）：越州窯青磁壺の胴部から頸部にかけての破片である。頸部に沈線が巡る。胴部には縦位に細い彫り込みが認められ、爪割形の胴部になると考えられる。



第116図　ＳＩ1955竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ1957Ａ竪穴住居跡（第114図、図版31）

Ｂ調査区中央の西寄りの第5層褐色土層面で検出された。平面形は東西5.5m以上×南北3.3m以上の方形を呈する。北側が調査区外となっており、西側がSX1966と重複することから規模は不明である。西壁は北で約3度東へ振れる。カマドの有無は不明である。住居壁高は約10㎝を計るが、削平により全体的に浅くなっている。SI1955、SI1957Ｂ、SX1966と重複し、SI1955、SI1957Ｂより新しく、SX1966より古い。

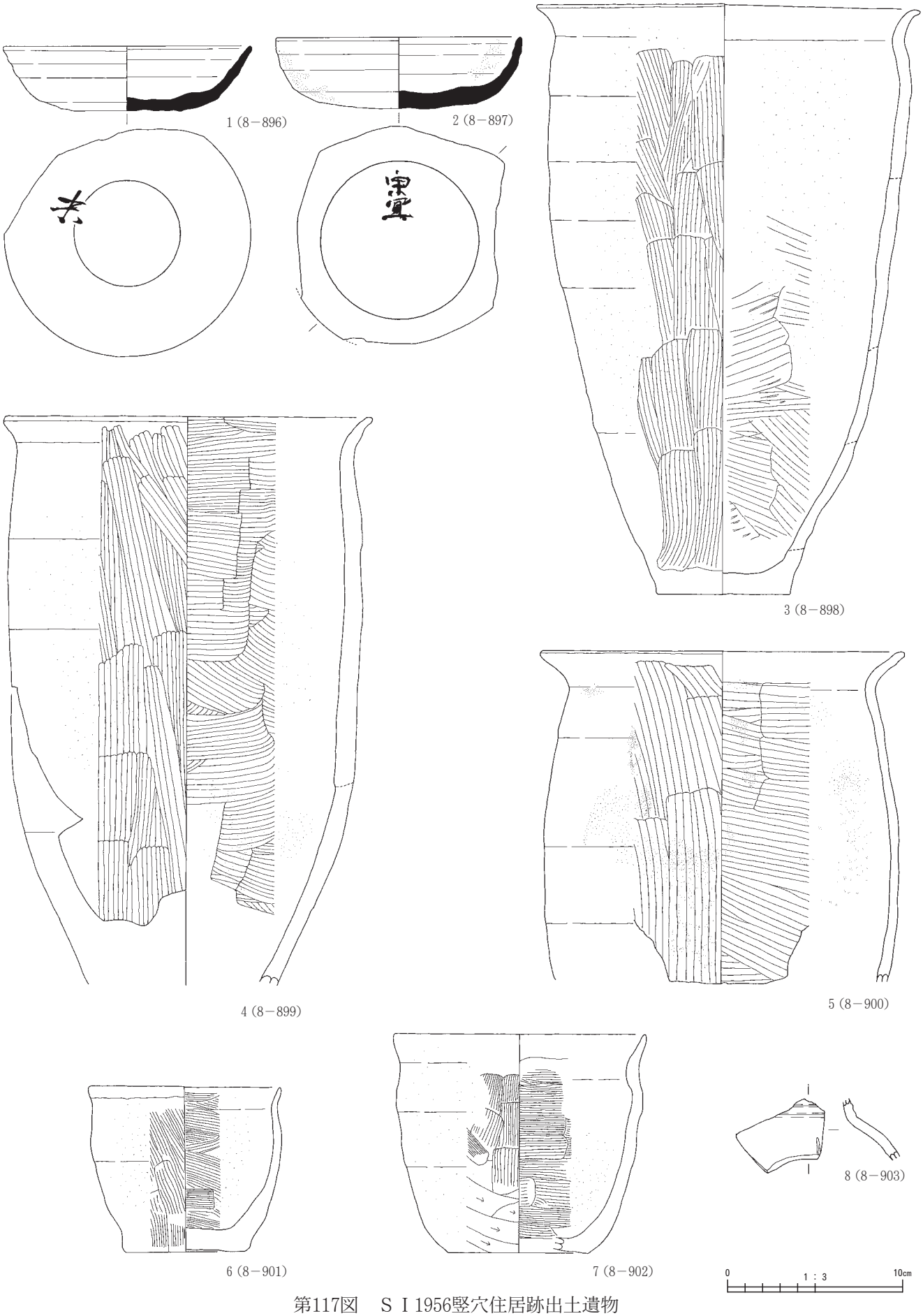
ＳＩ1957Ｂ竪穴住居跡（第114図、図版31）

Ｂ調査区中央の西寄りの第5層褐色土層面で検出された。平面形は東西1.0m以上×南北3.2m以上の方形を呈する。北側が調査区外となっており、西側がSI1957Aと重複することから規模が不明である。西壁は北で約8度東へ振れる。カマドの有無は不明である。住居壁高は約15㎝を計るが、削平により全体的に浅くなっている。SI1957A、SD1949と重複し、SD1949より新しく、SI1957Aより古い。

ＳＩ1957Ａ・Ｂ出土遺物（第118図、図版50）

1～5はSI1957Ａ、6はSI1957Ｂからの出土で、1、3～6は埋土、2は床面出土である。

須恵器（1～3）：1はヘラ切り後に撫で調整を施す坏で、口縁部内面に煤状炭化物が付着している。2

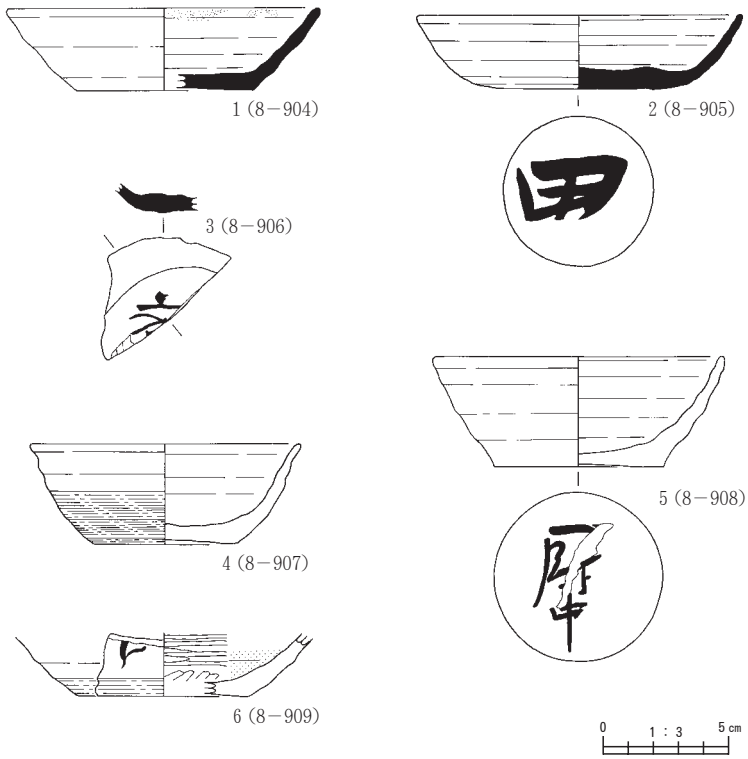


第117図　ＳＩ1956竪穴住居跡出土遺物

は糸切り後に軽い撫で調整を施す坏で、底部外面に「田」の墨書がある。3はヘラ切り後に軽い撫で調整を施す坏で、底部外面に判読不能の墨書がある。

赤褐色土器（4、5）：4は糸切り後、体部下半にケズリ調整を施す坏である。5は糸切り無調整の坏で、底部外面に「厨中」の墨書がある。

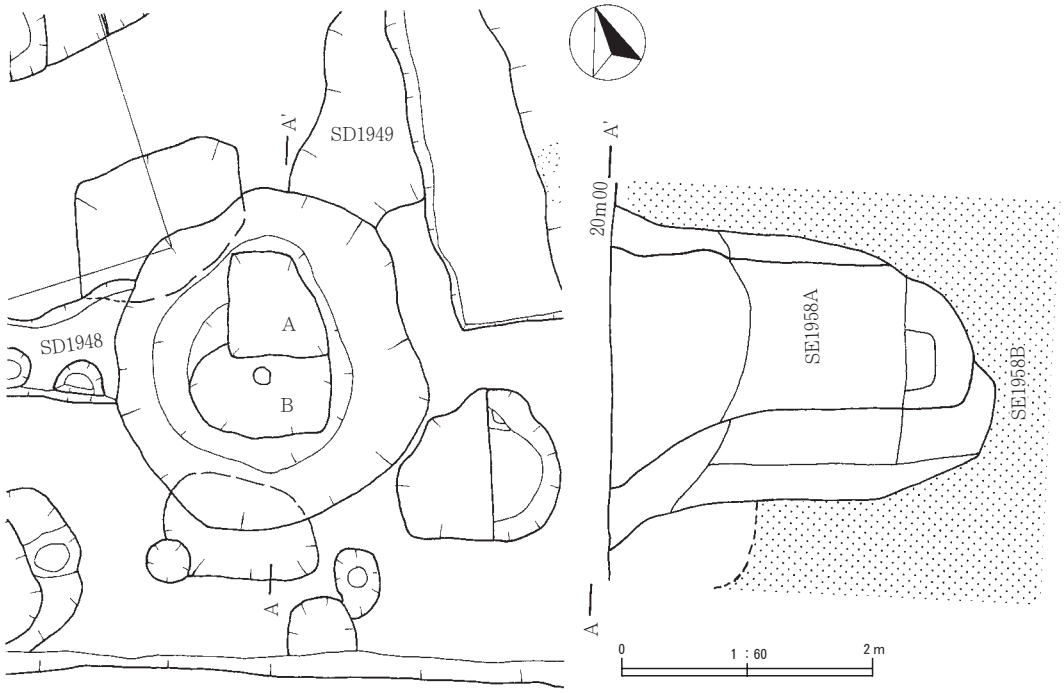
土師器（6）：糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。内面の体部に横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。体部外面に判読不能の墨書がある。



第118図　ＳＩ1957Ａ・Ｂ竪穴住居跡出土遺物

ＳＥ1958Ａ井戸跡（第119図、図版29）

Ｂ調査区西側の第4層暗褐色土・褐色土層面で検出された。古代の井戸掘り方に重複する形で中世に井側を埋設している。掘り方の平面形は直径2.5ｍのややゆがんだ円形を呈する。確認面より約１ｍまでやや傾斜をつけて掘り下げられ、そこからほぼ垂直に掘り下げられている。深さは2.8ｍである。腐植により不明確だが、底部付近の状況から一辺80㎝四方の方形を呈する井側が埋設されていたと考えられる。SB1941、SD1948、SD1949、SE1958Ｂと重複し、それらより新しい。



第119図　ＳＥ1958Ａ・Ｂ井戸跡

ＳＥ1958Ｂ井戸跡（第119図、図版29）

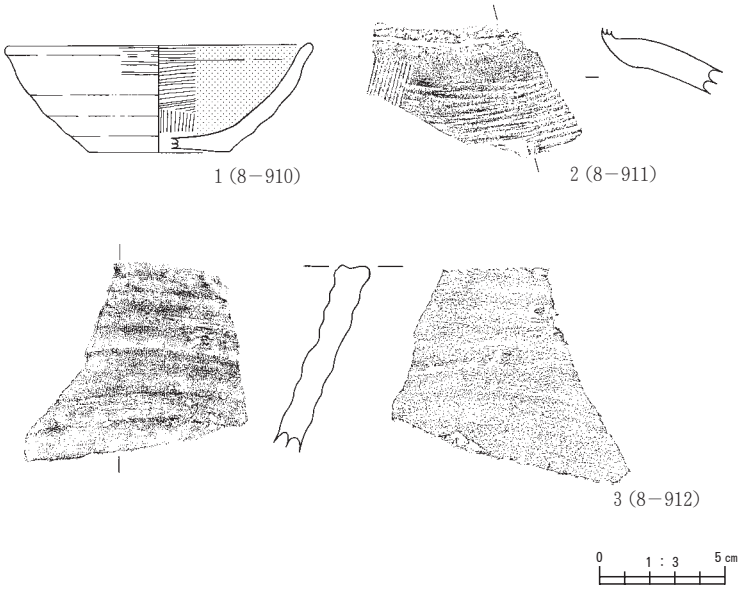
Ｂ調査区西側の第４層暗褐色土・褐色土層面で検出された。掘り方の平面形は直径2.5ｍのややゆがんだ円形を呈する。確認面より約80㎝まで傾斜をつけて掘り下げられ、そこからほぼ垂直に掘り下げている。井側が抜き取りを受けた可能性もある。深さは3.0ｍである。腐植により不明確だが、底部付近の状況から直径1.5ｍの円形の井側が埋設され、底部に60㎝×100㎝の方形を呈する井筒が埋設された可能性がある。SB1941、SD1948、SD1949、SE1958Ａと重複し、SB1941、SD1948、SD1949より新しく、SE1958Ａより古い。

ＳＥ1958Ａ・Ｂ出土遺物（第120図、図版50）

１はSE1958Ｂ井筒内埋土、２、３はSE1958Ａ井側内埋土出土である。

土師器（１）：糸切り無調整の椀である。外面は体部上半に横方向、内面は体部に横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

陶器（２、３）：２は珠洲系中世陶器壺の頸部から体上部にかけての破片である。外面に平行叩き板痕、内面に無文のアテ板痕が認められる。外面体上部に波状文と考えられる文様が認められる。３は珠洲系中世陶器摺鉢の口縁部破片で、内面は無文と考えられる。



第120図　ＳＥ1958Ａ・Ｂ井戸跡出土遺物

ＳＫ1959土坑（第121図、図版31）

Ａ調査区中央のSI1950の床面で検出された。東西2.1ｍ、南北3.0ｍの不整形を呈し、深さ0.8ｍである。SI1950、SK1960と重複し、SI1950より新しく、SK1960より古い。

ＳＫ1959出土遺物（第122図、図版51）

１、２は埋土出土である。

赤褐色土器（１、２）：１は糸切り無調整の皿である。底部を擬高台状に厚く作り、柱状高台となっている。２は坏の体部破片で、外面に「尓」の墨書がある。

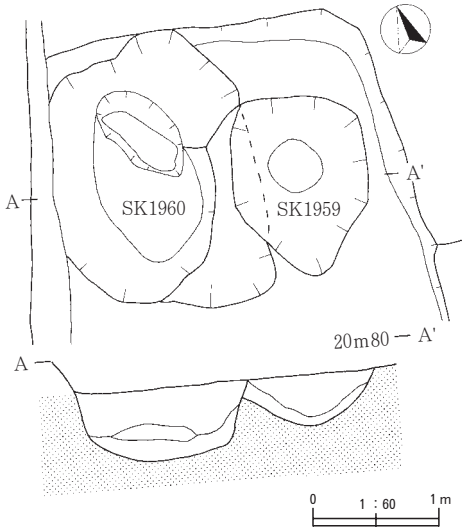
ＳＫ1960土坑（第121図、図版31）

Ａ調査区中央のSI1950の床面で検出された。東西3.2ｍ、南北4.5ｍのゆがんだ楕円形を呈し、深さ1.2ｍである。SI1950、SK1959と重複し、それらより新しい。埋土より砥石の他に、赤褐色土器片が出土している。

ＳＫ1960出土遺物（第123図、図版51）

１は埋土出土である。

石器（１）：砥石で、４面を使用している。石質は凝灰岩であ

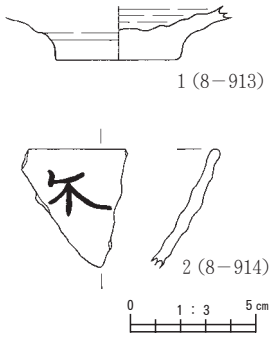


第121図　ＳＫ1959・ＳＫ1960土坑

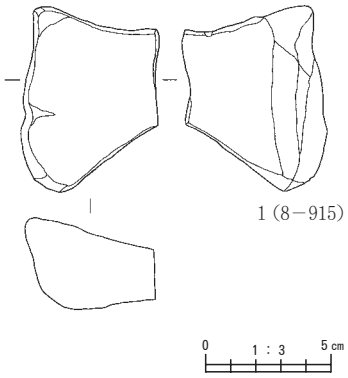
る。

ＳＫ1961土坑（第124図、図版31）

Ａ調査区北側の第５層褐色土層面で検出された。東西4.5ｍ、南北2.6ｍの不整形を呈し、深さ1.0ｍである。SB1939、SD1945と重複し、それより古い。埋土より土師器片が出土している。



第122図　ＳＫ1959土坑出土遺物



第123図　ＳＫ1960土坑出土遺物

ＳＫ1962土坑（第125図、図版31）

Ｂ調査区中央西寄りの地山飛び砂層面で検出された。東西2.8ｍ、南北1.7ｍの楕円形を呈し、深さ25㎝である。SI1956、SK1964と重複し、それより新しい。

ＳＫ1962出土遺物（第126図、図版51）

１は埋土出土である。

赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏である。内外面に煤状炭化物が強く付着していることから、燈明皿として使用したと考えられる。

ＳＫ1963土坑（第96図、図版28）

Ｂ調査区東側の地山飛び砂層面で検出された。東西1.5ｍ、南北1.8ｍの不整方形を呈し、深さ50㎝である。SD1947と重複し、それより古い。

ＳＫ1963出土遺物（第127図、図版51）

１は埋土出土である。

土師器（１）：糸切り無調整の椀である。外面は口縁部に横方向、内面は体部に横方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

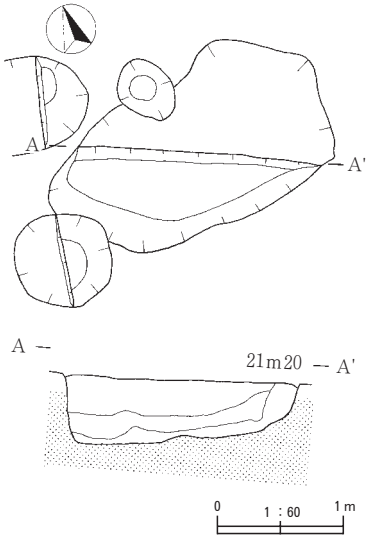
ＳＫ1964土坑（第114図、図版31）

Ｂ調査区中央西寄りの地山飛び砂層面で検出された。東西1.8ｍ、南北1.0ｍの不整円形を呈する。SI1955、SK1962と重複し、それらより古い。

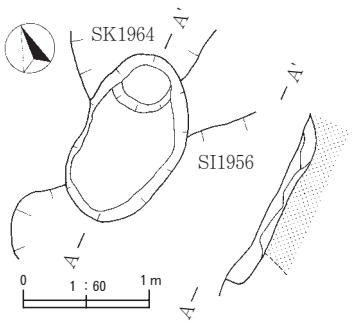
ＳＫ1964出土遺物（第128図、図版51）

１は埋土出土である。

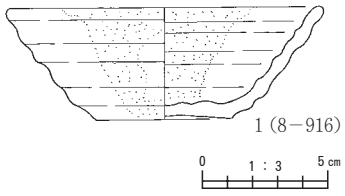
須恵器（１）：１はヘラ切り後に撫で調整を施す坏で、口縁部内面の一部



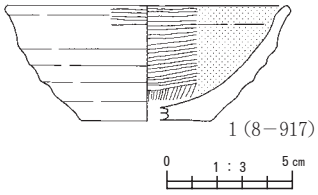
第124図　ＳＫ1961土坑



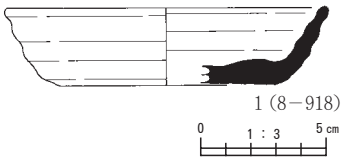
第125図　ＳＫ1962土坑



第126図　ＳＫ1962土坑出土遺物



第127図　ＳＫ1963土坑出土遺物



第128図　ＳＫ1964土坑出土遺物

に自然釉が掛かっている。

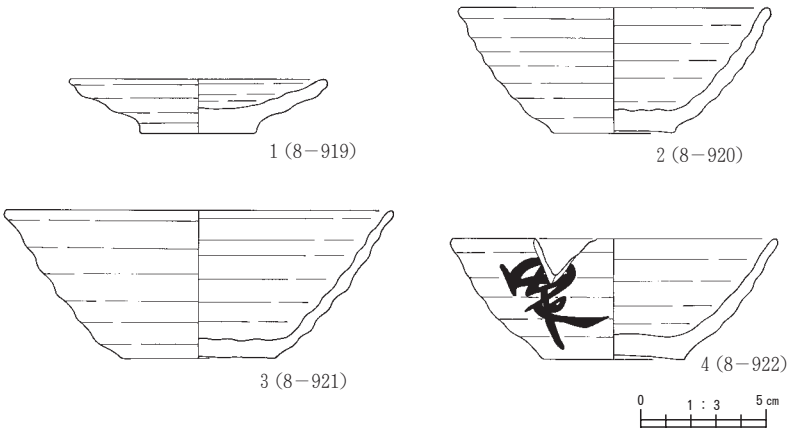
ＳＫ1965土取り穴（第103図、図版28）

Ｂ調査区東側の第５層褐色土層面で検出された。直径0.6ｍ～2.0ｍ、深さ0.6ｍ～1.0ｍのゆがんだ円形の掘り込みが重複する土取り穴である。

ＳＫ1965出土遺物（第129図、図版51）

１～４は埋土出土である。

赤褐色土器（１～４）：１は糸切り無調整の皿である。２～４は糸切り無調整の坏で、４の体部外面に「田中」の墨書がある。



第129図　ＳＫ1965土取り穴出土遺物

ＳＸ1966焼土遺構（第112図、図版32）

Ｂ調査区中央の第５層褐色土層面で検出された。平面形は東西2.0ｍ以上×南北2.4ｍ以上の方形を呈する範囲に粘土面が存在し、その上面に炉跡と考えられる一部還元化した直径20㎝～30㎝の焼土面が７箇所認められる。SI1954、SI1955、SI1957Ａと重複し、それらより新しい。

３）基本層序及び各層出土遺物

基本層序（第97図、図版32）

第90次調査地は畑地で、南側に傾斜している旧地形を、近世以降の切り土及び盛土により大きく造成が行なわれたため、遺物包含層や遺構が撹乱や削平を受けている。調査地全体で遺物包含層の堆積を確認しているものの層堆積は限られており、中世の遺物包含層は失われている。調査地全体の基本層序をまとめると以下のようになる。

第１層　表土：現表土。現代の畑地耕作土。暗褐色土からなる。

第２層　旧耕作土：旧畑地の耕作土。灰褐色土・黒褐色土からなる近世から近代にかけての耕作土。

第３層　旧畑地造成土：古い時期の畑地の造成土及び耕作土で、黒褐色土からなり南側で厚く堆積する。中世から近世にかけての陶磁器類が出土しており、近世段階での造成土及び耕作土と考えられる。

第４層　暗褐色土・褐色土層：古代の遺物包含層。調査地全体に堆積する。焼土・炭化物が多く混入し、赤褐色土器片が混入する。細分される可能性がある。SB1939、SA1943、SA1944、SD1945～SD1947、SE1958Ａ・Ｂの検出面。

第５層　褐色土：古代の遺物包含層。調査地南側を中心に堆積する。SB1941、SA1942、SD1948、SD1949、SI1950、SI1952、SI1953、SI1954、SI1957Ａ・Ｂ、SK1961、SK1965、SX1966の検出面。

地山飛砂層：浅黄色砂層。調査地全域で地山となっている。削平等によりSB1940、SI1951、SI1955、SI1956、SK1962、SK1963、SK1964の検出面となっている。また、飛砂層下は黒褐色粘土の地山腐植粘土層、さらにその下層は明褐色粘土の地山粘土層となっている。

各層出土遺物

第１層　表土出土遺物（第130図、図版51）

赤褐色土器（１）：糸切り無調整の坏で、内外面に二次加熱を受けている。

第３層　旧畑地造成土出土遺物（第130図、図版51、52）

赤褐色土器（２～４）：２、３は糸切り無調整の皿である。４は糸切り無調整の小型坏である。

縄文土器（５）：晩期の注口土器注口部である。

磁器（６、７）：６は青磁碗の口縁部破片である。７は染付碗で、体部外面に草花文を染付け、口縁部内面に帯が１条巡る。

第４層　暗褐色土・褐色土層出土遺物（第130図、図版52）

土師器（８）：糸切り台取り付け後、台周縁に撫で調整を施す椀である。内面の体部に横・斜方向、底部に放射状のミガキ調整を施し、内面を黒色処理している。

赤褐色土器（９～15）：９、10は糸切り無調整の小型坏で、切り離しは粗雑である。11～13、15は糸切り無調整の坏である。12の体部内外面に煤状炭化物が強く付着していることから、燈明皿として使用したと考えられる。15は底部外面に「个」（「箇」の異体字）の墨書がある。14は体部破片で、外面に判読不能の墨書がある。

硯（16）：須恵器の円面硯である。脚部の破片で、透かし窓が認められる。

陶器（17）：灰釉陶器段皿の体部破片で、刷毛塗りで施釉している。

第５層　褐色土層出土遺物（第130図、図版52）

赤褐色土器（18）：糸切り後、体部下端にケズリ調整を施す坏である。底部外面に「平」の墨書がある。

縄文土器（19）：晩期、大洞C_1式の皿形土器体部破片である。体部外面に磨消縄文による雲形文を施し、漆を塗付している。

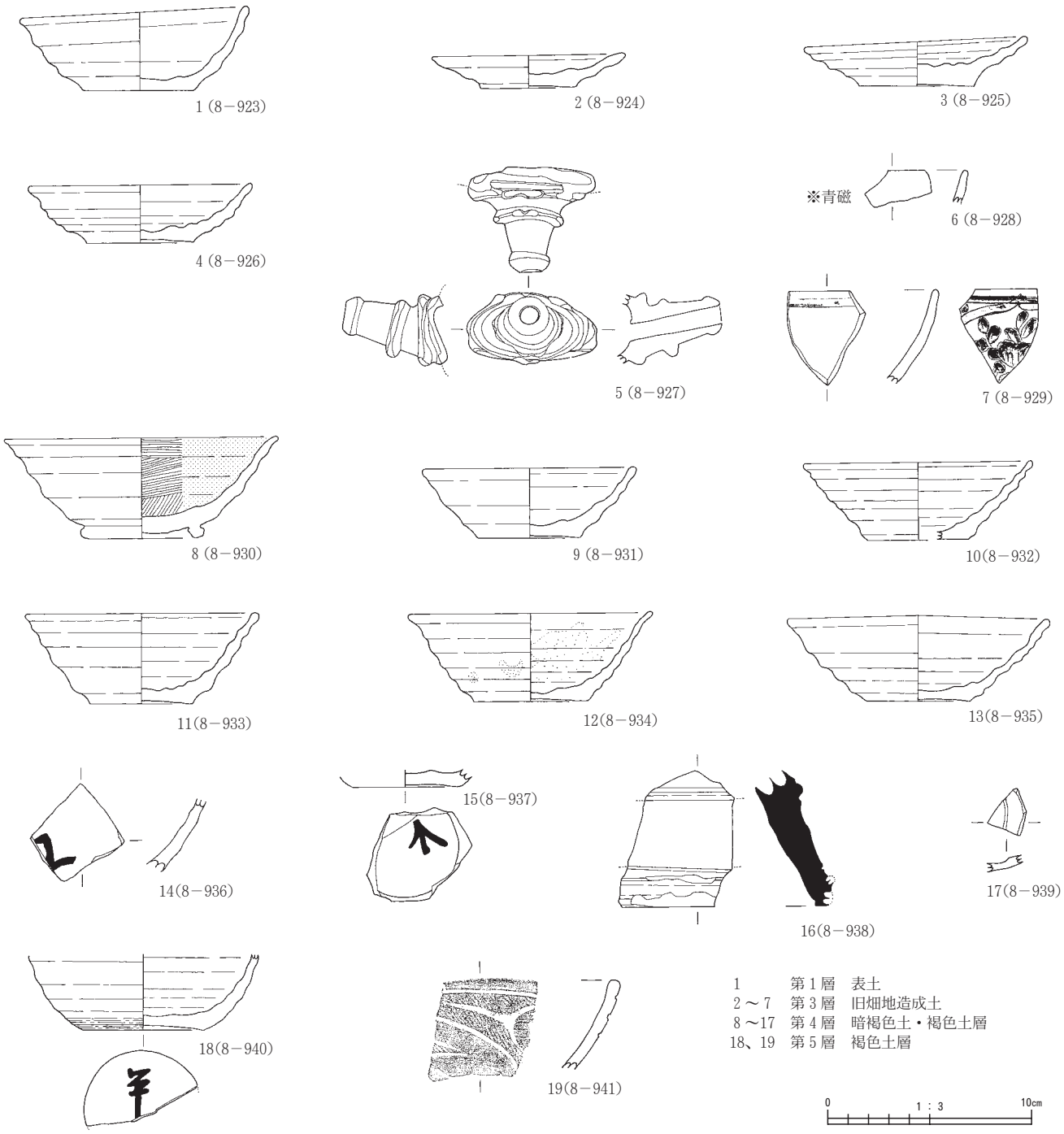
Ⅴ　現状変更（鵜ノ木地区共同住宅新築工事）に伴う発掘調査報告

１）調査経過について

鵜ノ木地区共同住宅新築に伴う現状変更許可申請・教文第９号（平成18年４月７日付）に対する18委庁財第４の82号（平成18年５月11日付）の指示により、共同住宅新築工事予定地である秋田市寺内鵜ノ木147番、147番１、149番１、150、153番１、154、154番２、300番地内における発掘調査を実施した。

調査は平成18年６月13日から６月16日まで行い、調査面積は41.2㎡である。

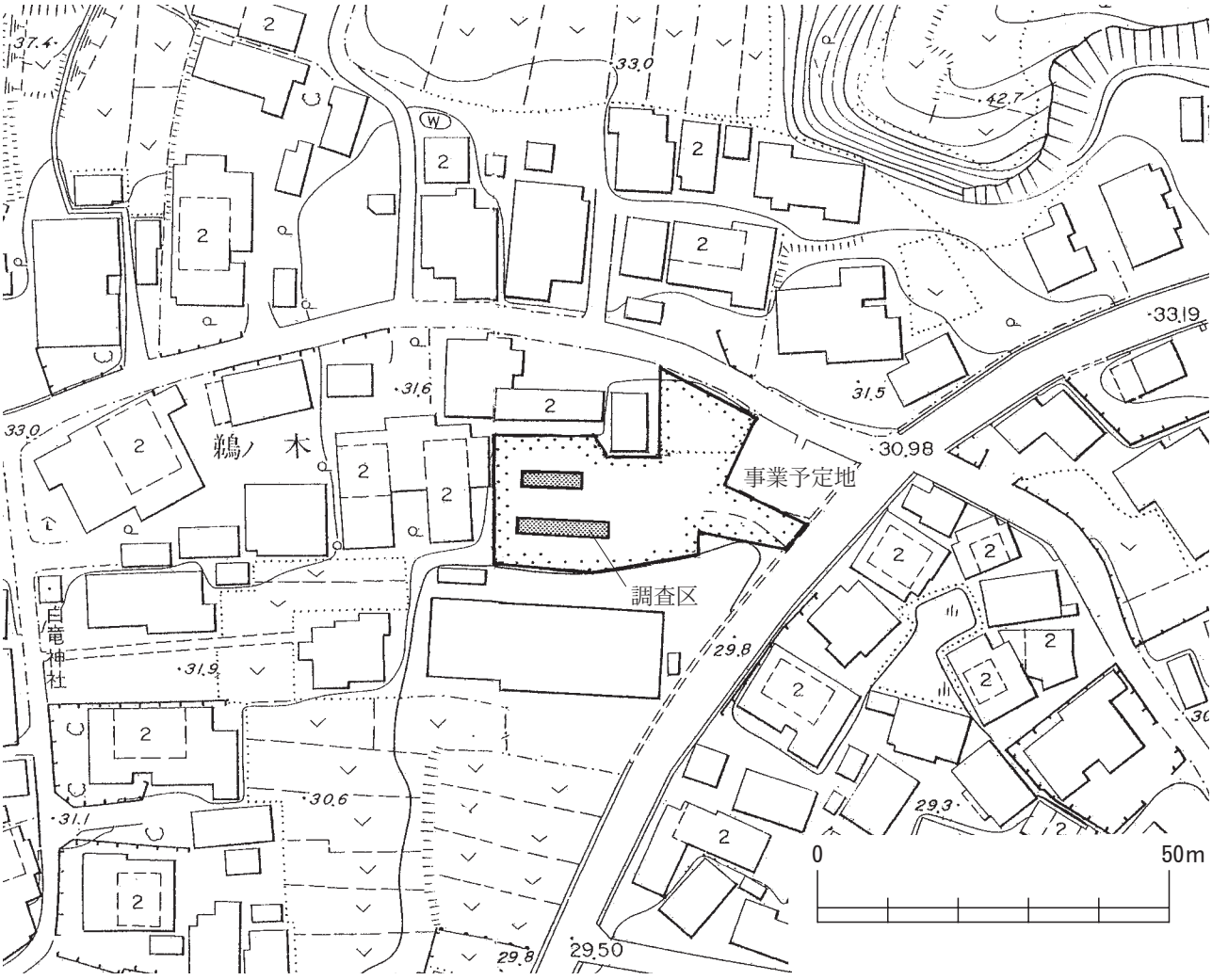
調査地は、秋田城跡外郭南辺より南に約140ｍの地点に位置しており、調査地南側の第20次Ｂ調査では平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。調査は、調査地における遺構及び遺物包含層の有無について把握することを目的に実施した。



第130図　第１層・第３層～第５層出土遺物

調査対象地（事業予定地）は宅地及び旧水田で、宅地の造成と駐車場などの利用に伴って埋め立て造成され、平坦地（建物等が撤去された更地）となっている。今回の調査地東側に近い第20次Ｂ調査地東側の水田であった部分では、耕作土下に水気を帯びた腐植土層の堆積を確認したのみで遺構や遺物包含層は確認されていない。旧地形は西側が高く、東側が低いと考えられる。

調査方法は、調査対象地のうち隣接地調査結果から遺構存在の可能性があり、今回建物が建築される予定



第131図　鵜ノ木地区共同住宅新築工事現状変更に伴う調査位置図

の西側を中心に、幅2.0ｍのトレンチを東西に併行する形で２箇所設定した。南側はＡトレンチで長さ13.0ｍ、北側はＢトレンチで長さ7.4ｍを設定し調査を実施した。表土除去は重機（バックホー）によって実施した。

２）調査結果について

⑴基本層序（第132・133図）

調査地全体で旧宅地造成土による造成と旧耕作土の堆積を確認し、調査地中央南側にあたるＡトレンチ東側で部分的に遺物包含層の堆積を確認した。北側のＢトレンチでは、削平により旧畑地造成土直下が地山飛砂層面となっていた。南側のＡトレンチ西側では同じく削平により旧畑地造成土直下が地山飛砂層面となっており、東側では旧耕作土下に厚さ20㎝～30㎝の古代の遺物包含層が遺存していた。

調査地の基本層序は、上層より①褐色土・明黄褐色粘土層（表土・造成土10～60㎝）、②暗褐色土層（造成土・25～95㎝）、③黒褐色土層（旧耕作土・25～70㎝）、④黒褐色土・浅褐色土層（旧畑地造成土・20～30㎝）、⑤褐色土層（遺物包含層・10～30㎝）、⑥浅黄色砂層（地山飛砂層）である。

①は家屋撤去時の造成土で、②は宅地造成時の造成土である。③は宅地造成以前の旧畑地の耕作土で、④は旧畑地造成時の造成土である。⑤は古代の遺物包含層で、赤褐色土器が出土することから平安時代の堆積

層と考えられるが、遺物の包含は少ない。

土層観察の結果、調査地の旧地形は西側が高く、東側が低い傾斜面となっており、旧宅地造成時や旧畑地造成時に西側の高い部分を削平し、東側に盛り土造成を行うことにより平坦地とする削平・造成が行われたと判断した。そのため、調査地西側では造成土直下が地山飛砂層面となっており、造成土は東に行くに従って厚くなり、調査地中央南寄りでは厚さ110㎝～130㎝の造成土下に古代の遺物包含層が遺存していることが確認された。また、調査地東側は、旧水田があり、土層観察からもさらに低い旧地形となると判断され、南側隣接地の調査結果に基づけば、遺構や遺物包含層が遺存している可能性は低いと考えられ、遺物包含層の堆積は調査地中央南寄りに限られると考えられる。

⑵検出遺構（第132・133図）

遺構については、Ｂトレンチ及びＡトレンチ西側では撹乱・削平により検出されず、Ａトレンチ東側の⑤褐色土層面で検出された。検出遺構は平安時代を中心としており、竪穴状遺構１基、ピット３基である。

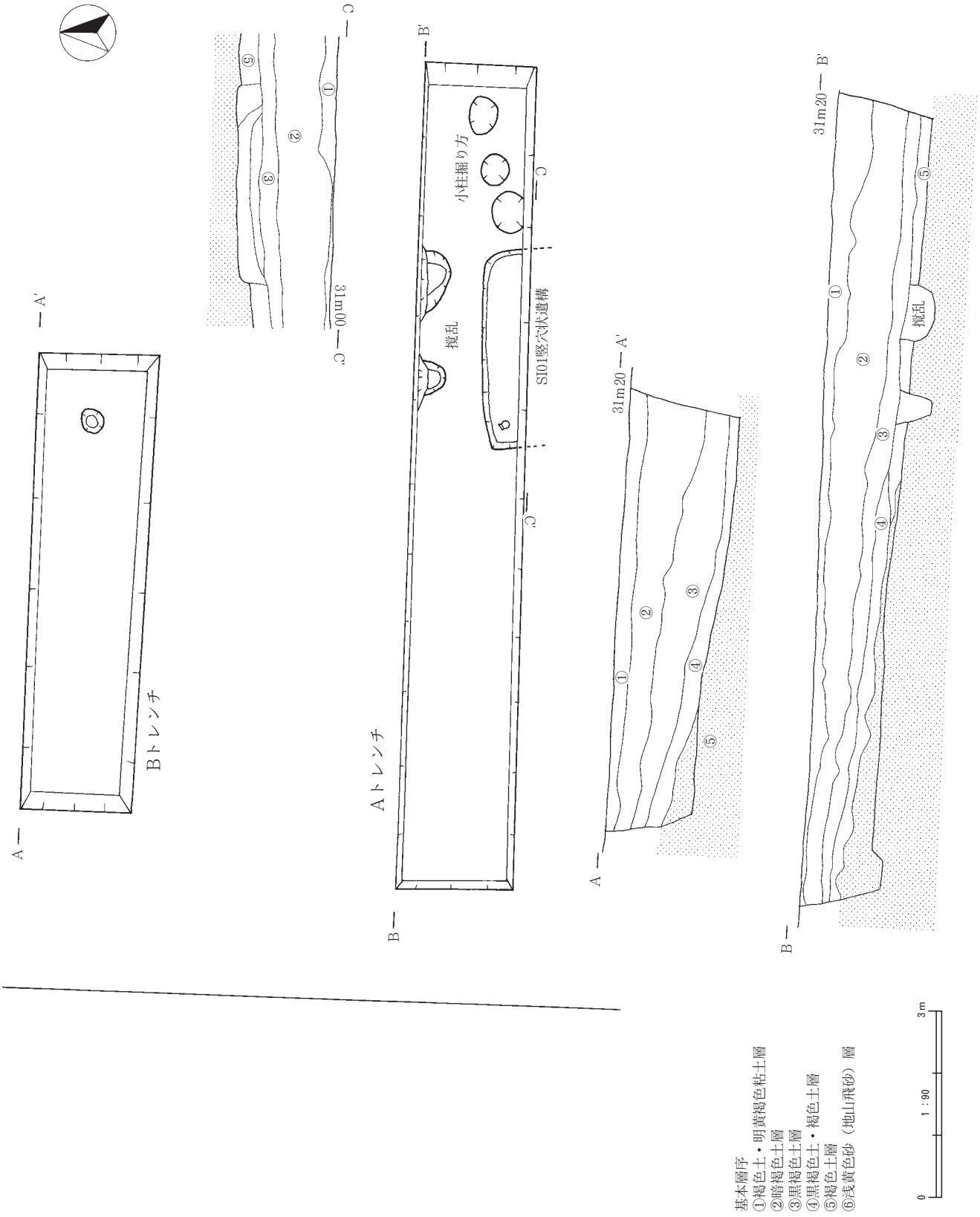
検出遺構のうち、SI01竪穴状遺構は東西3.0ｍ、南北0.4ｍ以上の方形を呈し、プランはさらに南側のトレンチ外に広がる。遺構の深さは約30㎝であり、カマドの有無は不明であるが、竪穴住居跡となる可能性が高いと考えられる。埋土出土の赤褐色土器の年代から、９世紀前半の遺構と考えられる。ピットについては、直径40㎝～60㎝、深さ15㎝～30㎝のややゆがんだ円形であり、埋土より赤褐色土器片が出土していることから、９世紀以降の平安時代の遺構と考えられる。

遺構の遺存状況は、遺物包含層と同様に調査地中央南寄りに限られると考えられる。

３）調査結果とその後の措置

調査の結果、調査地中央南寄りにおいて古代の遺物包含層及び遺構が確認された。古代の遺物包含層及び遺構は、平安時代の９世紀代前半を中心としており、調査地中央南寄りから南側隣接の第20次Ｂ調査地にかけて居住区等の生活域として利用されている状況が把握された。調査地西側及び北側については、畑地及び宅地造成時の削平・撹乱により古代の遺物包含層及び遺構は遺存していない状況が確認された。水田であった調査地東側については古代でも低地となっていたと判断され、南側隣接地の調査結果も踏まえれば、遺構や遺物包含層が遺存している可能性は低いと考えられる。

調査地中央南寄りで確認された遺物包含層及び遺構については、現地表面から最も浅い部分で約110㎝である。その遺存推定範囲は、共同住宅建築工事で建物が建てられる範囲と、南北３ｍ、東西６ｍ程重複している。建物基礎布掘りは深さ50㎝であり、遺構及び遺物包含層に影響を与えることはないと判断したが、布掘り基礎下に10箇所程度、径0.6ｍ、深さ1.75ｍのコンクリート杭が打設されることから、その部分については影響を与える可能性が高いと判断された。調査段階での調査範囲の面的拡張は、掘削が深く南側の土留め用擁壁に影響を与えることから、発掘調査後の住宅建築工事基礎布掘り掘削時に立ち会い調査を実施することとした。平成18年７月11日～14日に工事立ち会いを実施した結果、新たな遺構の確認はなく、遺物の出土もなかった。



第132図　鵜ノ木地区共同住宅新築工事現状変更に伴う発掘調査平面図及び土層断面図

調査地全景（東から）

Aトレンチ調査状況（東から）

Bトレンチ調査状況（東から）

第133図　鵜ノ木地区共同住宅新築工事現状変更に伴う発掘調査状況

Ⅵ 考　察

1　第88次調査について

第88次調査は、秋田城跡城内東側にあたる大畑地区中央部を対象とした。調査地は外郭東門と政庁域間の東西軸線上で、やや政庁寄りの位置にあたり、外郭東門から政庁に至る城内東西道路（東大路）の存在が推定されている。周辺調査では、東側の第84次調査で奈良時代から平安時代にかけて変遷する城内東西道路が検出されている。また、西側隣接地の第33次調査で材木塀に囲まれた掘立柱建物や竪穴状工房からなる平安時代の生産施設が、南東側隣接地の第72次調査においても平安時代の鍛冶工房群が検出されており、調査地の周辺は平安時代に生産施設としての利用が確認されている。

調査は、この地区の整備計画を踏まえて、城の基本構造に関わる重要遺構である城内東西道路（東大路）の存在及び位置を確認するとともに、大路周辺の利用状況を把握することを目的として実施した。

調査の結果、道路側溝跡などからなる城内東西道路（東大路）の一部や、道路北側で材木塀に区画された生産施設の一画が確認された。調査地全体では、掘立柱建物跡１棟、柱列９列、ピット群、材木塀跡５条、溝跡12条、竪穴住居跡１軒、竪穴状工房跡４軒、土坑14基、焼土遺構３基、道路遺構２面等が検出された。

それらの検出遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係や方位等の検討から年代や変遷の把握が可能である。以下、まず遺構変遷の前提となる遺物包含層の年代を含めたそれらの検討を行い、次に調査地における利用状況の変遷や特徴等についてまとめることにする。

（１）各遺物包含層の年代と性格について

第３層造成土からは近世陶磁器が出土し、その下層の第４層旧耕作土からは肥前Ⅴ期以降の山水文磁器染付輪花皿が出土していることから、第４層は19世紀の江戸後期以降の旧耕作土、その上層の第３層は近世末から近代初頭以降の造成土と考えられる。第５層旧耕作土からは洪武通宝等の渡来銭や近世陶磁器片が出土していることから、近世以降の旧耕作土と考えられる。当初、調査地南側に存在している小山状地形が旧地形として存在し、大路の位置関係に影響を与えている可能性も想定されたが、調査により第２層の盛土造成によることが判明した。第３層の年代が近世末以降となり、また、第２層時代からコバルト使用の磁器染付皿が出土していることから、結果として小山状地形は近代以降の公園整備に伴う盛土と判断した。

古代最上層の遺物包含層となる第６層褐色土層からは、10世紀第２四半期の年代に位置付けられる赤褐色土器小型皿が出土している（註１、註２）。第７層暗褐色土層からは、９世紀第４四半期に位置付けられる底径比の縮小した赤褐色土器坏Ａや赤褐色土器皿が出土している。第７層には焼土・炭化物が多く混入していることから、出土土器の年代と合わせ、元慶２年（878）の元慶の乱に伴う焼土・炭化物層となる可能性が高い。第８層褐色土・明褐色土層からは、赤褐色土器片が出土しており、上下層の年代を踏まえると、９世紀第２四半期～第３四半期頃の年代に位置付けられると考えられる。第９層明褐色土層からは、底部全体から体部下端にかけてケズリ調整を施した小型の須恵器坏が出土している。これは形態及び調整技法が赤褐色土器坏Ｂの出現期に極めて類似しており、８世紀末～９世紀初頭の年代に位置付けられる。明褐色土や明褐色粘土による整地は、近接する政庁域において８世紀末から９世紀初めの外郭・政庁Ⅲ期改修に伴う整地層となっていることも踏まえた場合、第９層もその段階の整地層と考えられる。第10層明黄褐色砂・褐色砂層からは、８世紀第２四半期に位置付けられる底部から体部下端にかけてケズリ調整を施した盤状の須恵器

坏が出土している。最下層の第11層明黄褐色砂・褐色砂層からは、瓦片が若干出土するのみで、ほとんど遺物が出土しないことから、第11層は秋田出羽柵創建期の整地層に該当し、第10層はそれ以降の８世紀中葉、外郭・政庁Ⅱ期の改修に伴う整地層となる可能性が高いと考えられる。

（２）各遺構の年代と変遷について

①城内東西道路（東大路）に関係する遺構の年代と変遷について（第134図参照）

城内東西道路（東大路）に直接関係する遺構として、調査地南側のＢ調査区南東側で道路面となるSX1918Ａ・Ｂ道路遺構、南側側溝と考えられる東西溝のSD1899Ａ・Ｂ溝跡が検出されている。SD1899Ａ溝跡はＳ９ライン、 SD1899Ｂ溝跡はＳ８ライン上に検出されている（註３）。さらに、調査地南西側のＡ調査区南側でも南側側溝と考えられる東西溝のSD1893溝跡が延長線上ともいえるＳ10ライン上に検出されている。また、調査地北西側のＡ調査区北側では北側側溝と考えられる東西溝のSD1895溝跡がＮ３ライン上に検出され、Ａ調査区中央でも北側側溝と考えられる東西溝のSD1894溝跡がＳ４ライン上に検出されている。SD1893溝跡とSD1895溝跡の南北間の距離は溝内端間（SD1893北端～SD1895南端）で12.1m～12.2m、溝芯々間で13m前後となっている。本来は、SD1893溝跡とSD1895溝跡間やSX1918Ａ・Ｂ道路遺構のさらに北側などにも道路面が確認されるはずであるが、後世の削平により失われたと判断される。

各遺構の年代については、SD1899Ｂ及びSX1918Ｂは第11層面検出で、SD1899Ａ及びSX1918ＡとSD1895は第10層面検出であり、前述の各層の年代及び従来の調査成果に基づけば、前者は８世紀第２四半期の秋田出羽柵創建期の道路遺構、後者は８世紀後半の外郭・政庁Ⅱ期の道路遺構になると考えられる。SD1893は第10層面検出であり、位置関係からも奈良時代の南側側溝と考えられるが、埋土より赤褐色土器片が出土しており、８世紀末以降の平安時代の側溝が同位置に重複して掘り込まれた可能性が高い。

城内東西道路の位置に関係する従来の調査成果によれば、東側の第84次調査では、奈良時代の道路南側側溝としてSD1722・SD1770溝跡が東側でＳ６～Ｓ５、西側ではＳ４ライン上に検出されている。また、西側の第38次・第82次調査で検出されている奈良時代の政庁東門跡SA718を中心にして幅12m道路を想定した場合、南側側溝の位置はＳ９ライン上、北側側溝の位置はＮ３ライン上に位置することになる（註４）。

それらの溝跡の位置関係に基づいても、今次調査検出の溝跡は、従来の側溝位置や想定される側溝位置に近似しており、SD1899Ａ・ＢとSD1893は奈良時代～平安時代の道路南側側溝、SD1895は奈良時代の道路北側側と判断される。広く城内東側で見れば、今次調査地から政庁東門跡まではほぼ東西軸線に沿った直線的な東西道路が把握され、また、外郭東門及び第84次調査東側から見れば、若干南寄りに延びる直線的道路が想定される。しかし、第84次調査西側に限ってみれば２ｍ程度北に寄る傾向があり、それについては旧地形の影響により北寄りにやや曲がった可能性が考えられるが、今後、奈良時代の側溝として把握した溝跡位置の再検討も必要と思われる。

なお、平安時代の北側側溝に該当する溝跡はSD1894以外に把握されておらず、これについては道路北辺部に検出された東西方向の区画施設を含めて検討する必要がある。南側側溝のSD1893から溝芯々間で9.0mの位置にはSA1889の布掘り溝跡が検出されていることから、平安時代初めには道路北側は側溝ではなく、立体的区画施設（材木塀）により区画されていたと考えられる。その後の北側側溝の位置については、９世紀のある段階で一時的にSD1894の位置、道路幅約６ｍまで道幅が縮小した可能性が高い（註５）。また、削平により不明確ではあるが、その他の時期に当初の道幅９ｍの位置に側溝が存在した可能性もある。いず

れにしても平安時代の道路北側の区画については、生産施設南辺区画施設が関係していたと考えられる。

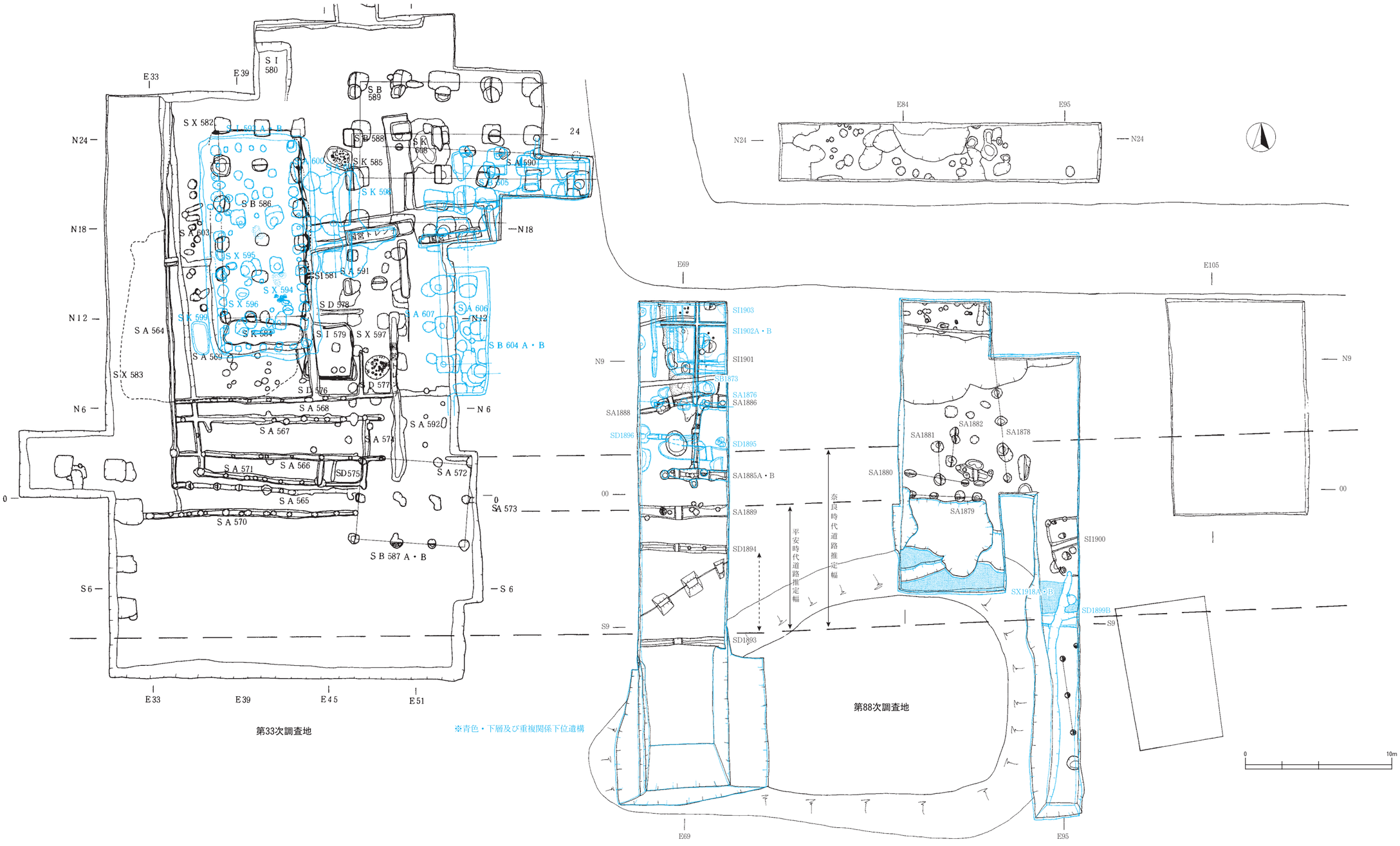
②調査地北西部の生産施設関連遺構群の年代と変遷について（第134図参照）

城内東西道路の北側にあたる今次調査地の北西側、つまり、Ａ調査区の北側では、東西方向のSA1876柱列、SA1885～SA1889材木列塀跡が南北に位置をずらしながら変遷し、その北側に焼土面を伴い、埋土より鉄滓が出土するSI1901～SI1903竪穴状工房跡がほぼ同位置で重複する状況が検出された。これらの遺構群はその位置関係や年代等から、北西側隣接地の第33次調査で検出された周囲を材木塀で区画された掘立柱建物や竪穴状鍛冶工房からなる平安時代の生産施設に連続し、一体になるのものと判断される。さらに調査地中央でもSA1878～SA1882柱列が検出され、そのうち南北方向のSA1878柱列と東西方向のSA1879柱列については、その方向と位置関係から生産施設を囲う区画施設の南東コーナー部に該当すると判断される。

それら関連遺構群の把握により、第33次調査と今次調査北西部から中央部にかけて検出された生産施設は、区画施設に囲まれた範囲が当初段階で東西69m、南北29m以上の規模まで広がることが判明した。その南辺西寄りには門を伴い、東西両側に南北棟の竪穴状工房（鍛冶工房）が配置され、中央北側には管理棟的な機能が推察される東西棟掘立柱建物が配置されるという、本格的な鍛冶関連生産施設が平安時代に政庁北東側、城内東西道路（東大路）北側に存在したと考えられる。

材木塀区画施設の年代や第33次調査検出区画施設との関係を見てみると、最も南側に位置するSA1889は布掘り溝埋土から赤褐色土器片が出土しており、８世紀末から９世紀初め以降の年代に位置付けられる。SA1889は位置関係から第33次調査のSA570に組み合うと考えられ、そのSA570は第33次調査地で生産施設が操業を開始する最も古い段階の遺構期であるⅢ期とされている（註６）。その北側にほぼ同位置で重複するSA1885Ａ・Ｂのうち、SA1885Ｂからは布掘り溝埋土より９世紀第２四半期に位置付けられる赤褐色土器坏Ｂや、底径比のやや大きい糸切り無調整の須恵器坏が出土している。SA1885Ａに伴う小柱掘り方の抜き取りからは、９世紀第４四半期に位置付けられる赤褐色土器坏Ａが、小柱掘り方の埋土からは９世紀後半以降の年代に位置付けられる糸切り無調整無台の赤褐色土器皿が出土している。新旧及び位置関係を踏まえると、SA1885Ｂは第33次調査のⅣ期とされるSA571に組み合い、SA1885Ａは第33次調査のⅤ期とされるSA565に組み合うと考えられる。南北方向のSA1886からは、布掘り溝埋土より９世紀第２四半期に位置付けられる口径12.9㎝のヘラ切り撫で調整の須恵器坏が出土している。SA1885Ｂとの重複はあるものの遺物の年代から時期差はあまりなく、SA571などと同一遺構期と考えられる。そのSA1886と重複しそれより新しいSA1888は新旧及び位置関係を踏まえると、第33次調査のⅤ期とされるSA567に組み合うと考えられる。SA1876は、SA1886と重複しそれより古いが、柱抜き取りより９世紀第３四半期に位置付けられる赤褐色土器坏Ａが出土していることから、第33次調査のⅢ期またはⅣ期に該当すると考えられる。なお、南東コーナー部区画施設のSA1878とSA1879は、位置関係からⅢ期のSA1889に連続すると考えられる。また、柱列の方位から、SA1881は第33次調査のⅣ期、SA1881はⅤ期に該当する可能性が高い。

区画施設北側検出の鍛冶工房と考えられるSI1901～SI1903竪穴状工房跡の年代や第33次調査検出鍛冶工房跡との関係を見てみると、まず重複関係ではSI1903→SI1902Ｂ→SI1902Ａ→SI1901の順にほぼ同位置で変遷している。SI1903床面からは８世紀末～９世紀第１四半期の年代に位置付けられる口径13.8㎝～14.0㎝でやや大振りなヘラ切り撫で調整の須恵器坏や赤褐色土器坏Ｂが出土しており、SI1902Ａ床面からは９世紀第１四半期～９世紀第２四半期の年代に位置付けられる赤褐色土器坏Ｂや、口径13㎝台のヘラ切り撫で調整



第134図　城内東西道路及び鍛冶関連生産施設関係遺構図

の須恵器坏や口径12㎝台のヘラ切り軽い撫で調整の須恵器坏が出土している。SI1901からは床面より 9 世紀第 2 四半期～ 9 世紀第 3 四半期の年代に位置付けられる下端部をわずかにケズリ調整する赤褐色土器坏Ｂや赤褐色土器蓋から、底径比がやや縮小した赤褐色土器坏Ａまでが出土している。埋土からは、それらよりやや新しい 9 世紀第 4 四半期まで下る可能性が高い口縁部が外反し底径比がやや縮小した赤褐色土器坏Ａや土師器皿が出土している。新旧関係を踏まえると、SI1903は第33次調査のⅢ期の鍛冶工房跡とされる SI593Ａ・Ｂに、SI1902Ａ・ＢはⅣ期とされる SB586に、SI1901はⅤ期とされる SX582に対応すると考えられる。

以上の第33次調査検出遺構に今次調査検出遺構を対比した生産施設関連遺構の各遺構期の年代と変遷について、最新の土器編年をもとに再検討した結果（註 7 ）、第33次調査のⅢ期は 8 世紀末・ 9 世紀初め～ 9 世紀第 1 四半期となり、城内の遺構期では政庁Ⅲ期に該当すると考えられる。さらにⅣ期は 9 世紀第 2 四半期を中心とする政庁ⅣＡ期、Ⅴ期は 9 世紀第 3 四半期を中心とする政庁ⅣＢ期に該当すると考えられる。その年代と前述した遺物包含層の年代を踏まえると、区画施設を伴う鍛冶関連生産施設は第 7 層堆積段階、つまり元慶の乱を期に廃絶した可能性が指摘される。また、第33次調査では生産施設に先行する下層遺構として、Ⅰ期の SB605・SA601、Ⅱ期の SB604Ａ・Ｂ・SA600が検出されているが、今次調査地でも生産施設より下層の遺構として SB1873掘立柱建物跡を検出しており、同様に掘立柱建物を主体とする遺構群が存在し、広がりを持つ可能性がある。SB1873を含むそれらⅠ期・Ⅱ期の遺構期は 8 世紀代の奈良時代に遡ると考えられるが、SB1873自体は柱抜き取りから赤褐色土器坏Ｂが出土していることから、Ⅱ期に該当する可能性が高い。

③その他の遺構の年代について

主要遺構群以外の遺構の年代について、検出位置や検出層位ごとにまとめると以下のようになる。

調査地北西のＡ調査区北側では、第 8 層面から SD1891Ａ・Ｂ溝跡、SK1910土坑が検出されている。SD1891Ｂと SK1910の埋土からは赤褐色土器坏Ｂが出土しており、前述の第 8 層の堆積年代とも矛盾せず、これらの遺構は 9 世紀第 2 四半期頃の年代に位置付けられる。第 7 層面からは SA1874柱列、SK1907土坑、SK1911～ SK1913土坑、SX1921焼土遺構が検出されている。そのうち SK1911埋土からは 9 世紀第 4 四半期頃の糸切り無調整で口縁部が外反した須恵器が出土している。また SK1907からも同時期の高台が簡略化された赤褐色土器台付坏が出土している。その他の遺構からも第 7 層の堆積年代と矛盾する遺物は出土しておらず、これらの遺構は 9 世紀第 4 四半期頃の年代に位置付けられる。第 6 層面からは SA1875柱列、SD1890溝跡、SK1908・SK1909土坑、SX1919・SX1920焼土遺構が検出されている。そのうち SD1890溝跡からは底部が擬高台状に厚く柱状高台を呈する10世紀第 1 四半期以降の赤褐色土器坏が出土している。下層の第 7 層の堆積年代や第 6 層からの出土遺物の年代を考慮した場合、これらの遺構は10世紀前半以降の年代に位置付けられる。

調査地西のＡ調査区中央では、第10層面から SK1904土坑が検出されているが、埋土からは 9 世紀後半以降の赤褐色土器皿が出土しており、それ以降の年代に位置付けられる。

調査地南西のＡ調査区南側では、第 6 層面から SD1892溝跡、SK1905・SK1906土坑が検出されている。前述の第 6 層や第 6 層面検出遺構からの出土遺物の年代を考慮した場合、これらの遺構も10世紀前半以降の年代に位置付けられる。

調査地南のＢ調査区南東側では、第10層面からSI1900竪穴住居跡が検出されているが、埋土からは 9 世紀

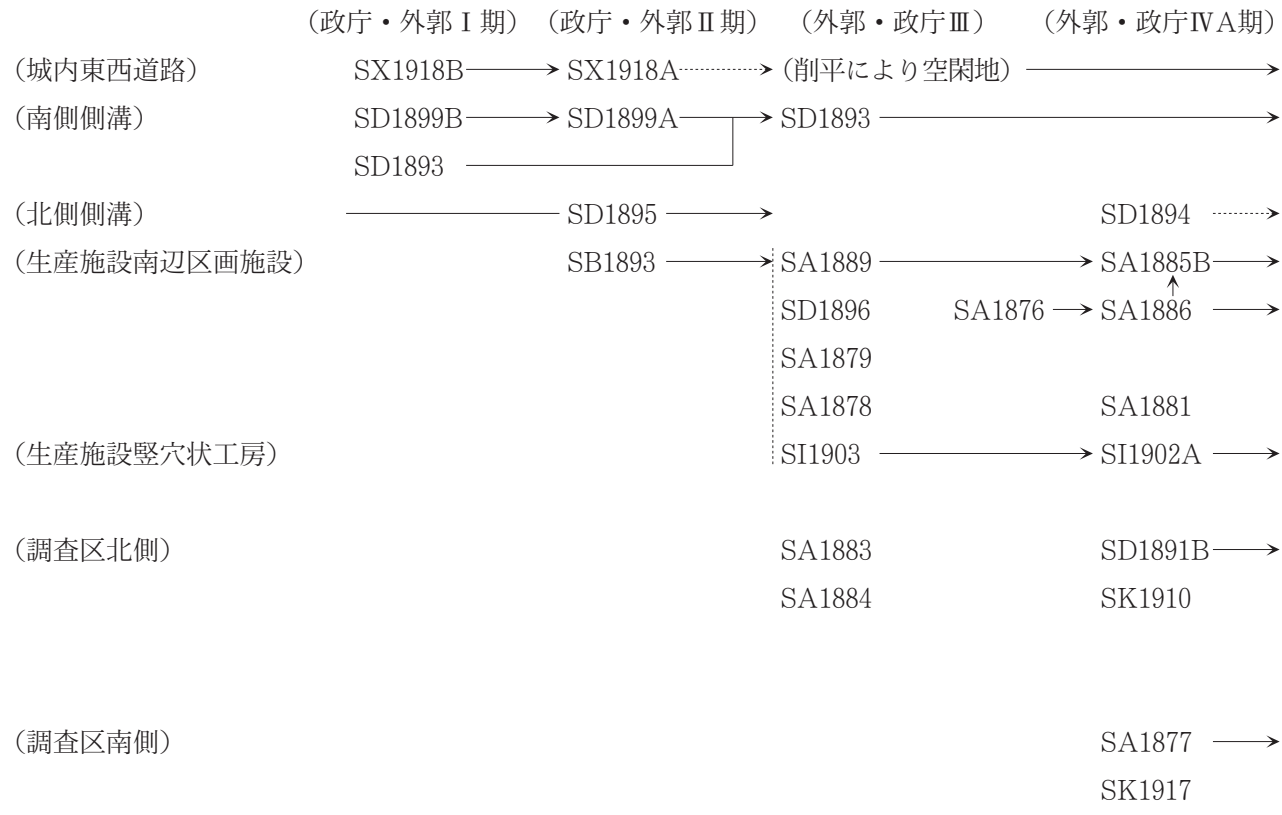
後半以降の赤褐色土器小型甕が出土しており、それ以降の年代に位置付けられる。この住居は城内東西道路の範囲内に入ってくるが、改修期等に仮設的に造られ、一時的に使用された可能性が考えられる。第 8 層面からは、SA1877柱列、SK1917土坑が検出されており、これらの遺構は第 8 層の堆積年代から 9 世紀第 2 四半期以降の年代に位置付けられる。第 6 層面からは、SD1897・SD1898溝跡、SK1916土坑が検出されている。SK1916からは10世紀中葉の年代に位置付けられる大量の赤褐色土器小型坏・小型皿・台付坏が出土しており、祭祀に関連する一括廃棄土坑と考えられる。SD1897・SD1898については、第 6 層や第 6 層面検出遺構からの出土遺物の年代を考慮した場合、10世紀前半以降の年代に位置付けられる。SK1914・SK1915土坑は第 5 層面の検出であり、近世以降の遺構と判断される。なお、調査地南側の遺構検出状況を見た場合、10世紀前半以降に不規則な溝跡や小土坑が存在する傾向が指摘される。

調査地中央から北側の地山飛び砂層面から第11層面にかけて検出された SA1883・SA1884ピット群については、埋土より赤褐色土器片が出土していることから、 8 世紀末以降の遺構と考えられる。

（３）調査地利用状況の変遷及び城内東西道路（東大路）について（第134図参照）

以上のような各検出遺構の年代等に基づき、調査地利用状況の変遷をまとめると以下のようになる。

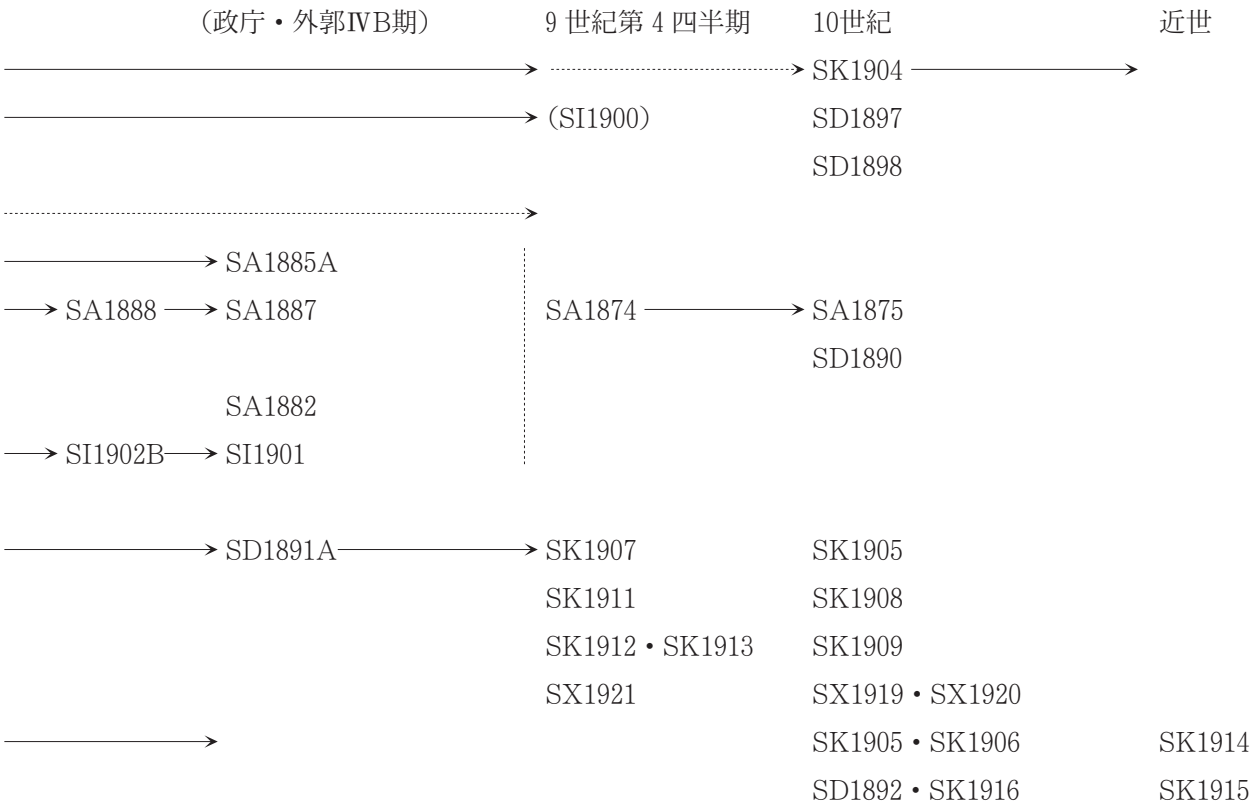
調査地全体を見れば、中央部は奈良時代と平安時代を通じ城内東西道路（東大路）として利用されている。奈良時代には北西部の一部に建物が存在する以外は遺構はほとんど認められず、大路周辺の利用に規制が存在したと考えられる。 8 世紀末以降の平安時代に入ると、大路北側が周囲を材木塀により区画された竪穴状工房等からなる生産施設の一画として利用されるようになり、 9 世紀第 3 四半期まで操業・機能する。北西部は 9 世紀第 4 四半期四半期以降から10世紀前半まで区画施設などは伴わないが、柱列や焼土遺構・土坑な



どが認められることから、生産活動に関連する区域として利用が続いたと考えられる。なお、その時期のSK1911からは長方形箱形炉のものとされる製錬滓が出土しており（註8）、付近での製錬に伴うものか、城外からの搬入によるものか、城内における鉄生産活動の実態を考える上で検討を要する遺物である。大路南側については、平安時代以降も目立った利用はなく、10世紀以降になると溝跡や小土坑等が認められることから、生活域の周辺部として利用されたと考えられる。

以上のように今次調査地周辺は、特に北側が奈良時代と平安時代で利用状況が異なり、平安時代以降は政庁に程近い大路北側が恒常的な鍛冶等の生産施設として利用される状況が再確認されたといえる。なお、平安時代における大路周辺の生産施設としての利用状況は、大畑地区に共通する特徴として指摘できる。

今次調査の主要検出遺構である城内東西道路（東大路）について見た場合、奈良時代は道路南側と北側に側溝を伴い、道路幅は側溝内端間で約12mとなっている。平安時代になると南側側溝から溝芯々間で9.0mの位置に材木塀の布掘り溝跡が検出されることから、平安時代初めには道路北側は側溝ではなく、立体的区画施設によって区画され、道路幅は南寄りに9mに縮小したと考えられる。また、9世紀のある段階で一時的に幅約6mまで道幅が縮小した可能性が高い。つまり、道路幅の縮小はあるものの、道路位置自体に大きな変化はない。今次調査により、外郭東門と政庁間における道路位置についてほぼ全体が把握されたことになり、これまでの調査成果と合わせると、奈良時代から平安時代を通じ、外郭東門から政庁東門間の城内東大路はほぼ直線的に延びていることが判明した。それにより、城内東側における方位や規則性を重視した基本構造の一端が明らかになったといえる。なお、調査地における遺構や遺物包含層の遺存度から、調査地周辺の旧地形も把握された。調査地東側は小高い地形となっており、特に東側に対して比高差があることから、東大路を外郭東門方向から来た場合、一段高い地形を超えて緩やかに下りながら政庁へ向かう状況が把握された。



2　第89次調査について

第89次調査は、秋田城跡城内西側にあたる焼山地区東部を対象とした。調査地は政庁西側隣接地で、調査地東辺部で推定政庁西辺からの距離は約30ｍである。調査地北側には政庁から外郭東門に至る東西軸線を政庁西側に折り返したラインが通り、政庁から城内西側を通る東西道路（西大路）の存在が推定されている。周辺調査では、北西側の焼山地区北部で奈良時代から平安時代にかけて変遷する、規則的配置に基づく城内最大規模の掘立柱建物群が確認されており、倉庫群などの実務官衙域としての利用が確認された。また、南西側では平安時代の竪穴住居や材木塀区画施設が確認されている。

調査地は、かつて浄水場として大規模に造成された地域であるが、調査地南側での歴史資料館建設計画も踏まえ、焼山地区東部における遺構の遺存状況や東西道路遺構の有無をはじめとする周辺利用状況の把握を目的として実施した。

調査の結果、城内東西道路遺構（西大路）は確認されなかったが、奈良時代の大規模な掘立柱建物跡や、平安時代の掘立柱建物跡などが発見された。また、南側でも奈良時代の大規模な掘立柱建物跡が発見され、焼山地区東部にも規則的配置に基づく建物群が存在する可能性が高くなった。他に調査地南側では平安時代の竪穴住居跡や材木塀跡、柱列も発見された。調査地全体では、掘立柱建物跡７棟、柱列跡３列、ピット群、材木塀跡１条、溝跡３条、竪穴住居跡１軒、土坑１基等が検出された。

それらの検出遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係や方位等の検討から、年代や変遷の把握が可能である。以下、まず遺構変遷の前提となる遺物包含層の年代を含めたそれらの検討を行い、次に調査地における利用状況の変遷や特徴等についてまとめることにする。

（１）各遺物包含層の年代と性格について

第３層旧耕作土からは肥前Ⅳ期以降の磁器染付碗が出土し、下限としてコバルト使用の磁器染付皿が出土していることから、18世紀の江戸中期から近代にかけての旧耕作土と考えられる。その下層の第４層旧耕作土からは砂目積み痕がある肥前Ⅱ期の肥前系（唐津系）灰釉埦や寛永通宝等が出土していることから、17世紀の江戸前期以降の旧耕作土と考えられる。第５層黒褐色土からは赤褐色土器片が出土しており、下層の第６層の年代を考慮すると10世紀以降の堆積層と考えられる。第６層暗褐色土からは９世紀第４四半期に位置付けられる底径比の縮小した赤褐色土器坏Ａや赤褐色土器皿が出土している。第６層には焼土・炭化物が多く混入していることから、出土土器の年代と合わせ、元慶２年（878）の元慶の乱に伴う焼土・炭化物層となる可能性が高い。第７層褐色土・明褐色土・明褐色粘土層からは、８世紀末～９世紀第１四半期の年代に位置づけられ、体部下端にケズリ調整を施した小型の赤褐色土器坏Ｂが出土している。明褐色土や明褐色粘土による整地は、前述したように近接する政庁域において８世紀末から９世紀初めの外郭・政庁Ⅲ期改修に伴う整地層となっていることから、第７層もその段階の整地層と考えられる。第８層明黄褐色砂・浅黄色砂層からはほとんど遺物が出土しておらず、８世紀代の秋田出羽柵創建期に遡る整地層と考えられる。

（２）各遺構の年代と変遷について

今次調査の主要遺構である掘立柱建物跡について見てみると、調査地北東側のSB1922掘立柱建物跡については、火災による焼失後に第７層、つまり８世紀末から９世紀初めの政庁・外郭Ⅲ期の整地層により整地されていることから、８世紀後半代の建物と考えられる。また、それにほぼ同位置で重複し、それより古い

SB1923掘立柱建物跡はそれ以前の年代に位置付けられるが、創建期にまで遡るかは明確でない。柱掘り方埋土から瓦片や塼が出土した状況や、近接する焼山地区建物群では8世紀後半のB類建物の中に同位置で建て替えられる事例があることから、8世紀後半に収まる可能性がある（註9）。調査地南東側のSB1924掘立柱建物跡についても、廃絶後に第7層により埋め戻され整地されていることから、8世紀後半の建物と考えられる。調査地北側のSB1925掘立柱建物跡は、柱掘り方埋土から9世紀第1四半期以降の年代に位置付けられるヘラ切り撫で調整の須恵器坏が出土しており、9世紀前半以降の建物になると考えられる。SB1928掘立柱建物跡はSB1925と重複し、それより古いため、それ以前の年代に位置付けられる。 調査地南西側のSB1926掘立柱建物跡は、柱抜き取りから9世紀第4四半期の年代に位置付けられる底径比の縮小した糸切り無調整の須恵器や赤褐色土器坏Aが出土しており、検出層位を考慮した場合、それ以前の8世紀末から9世紀中頃の建物になると考えられる。その建物方位は、前述のSB1925と同じことから、SB1925も同時期となる可能性がある。調査地北西側のSB1927掘立柱建物跡は地山飛び砂層面検出で、出土遺物もないが、建物方位が北で約2度西に振れることから、焼山地区建物群の分類に当てはめた場合、8世紀後半のB類建物に該当すると考えられる。

調査地南東側のB調査区南側の遺構群については、明確な年代比定資料を欠くが、SA1929～SA1931柱列、SA1932ピット群、SK1811土坑が第6層面検出であり、9世紀第4四半期以降の年代に位置付けられる。柱列の方向については同じく北で東に2度から6度振れる範囲に収まっていることから、大きな時期差はないと考えられる。また、SD1935・SD1936溝跡については、第7層面検出であり、8世紀末以降の年代に位置付けられるが、溝跡の方向が前述の柱列の方向に近いことを考慮した場合、SD1935についてはより新しく9世紀第4四半期以降の年代になると考えられる。

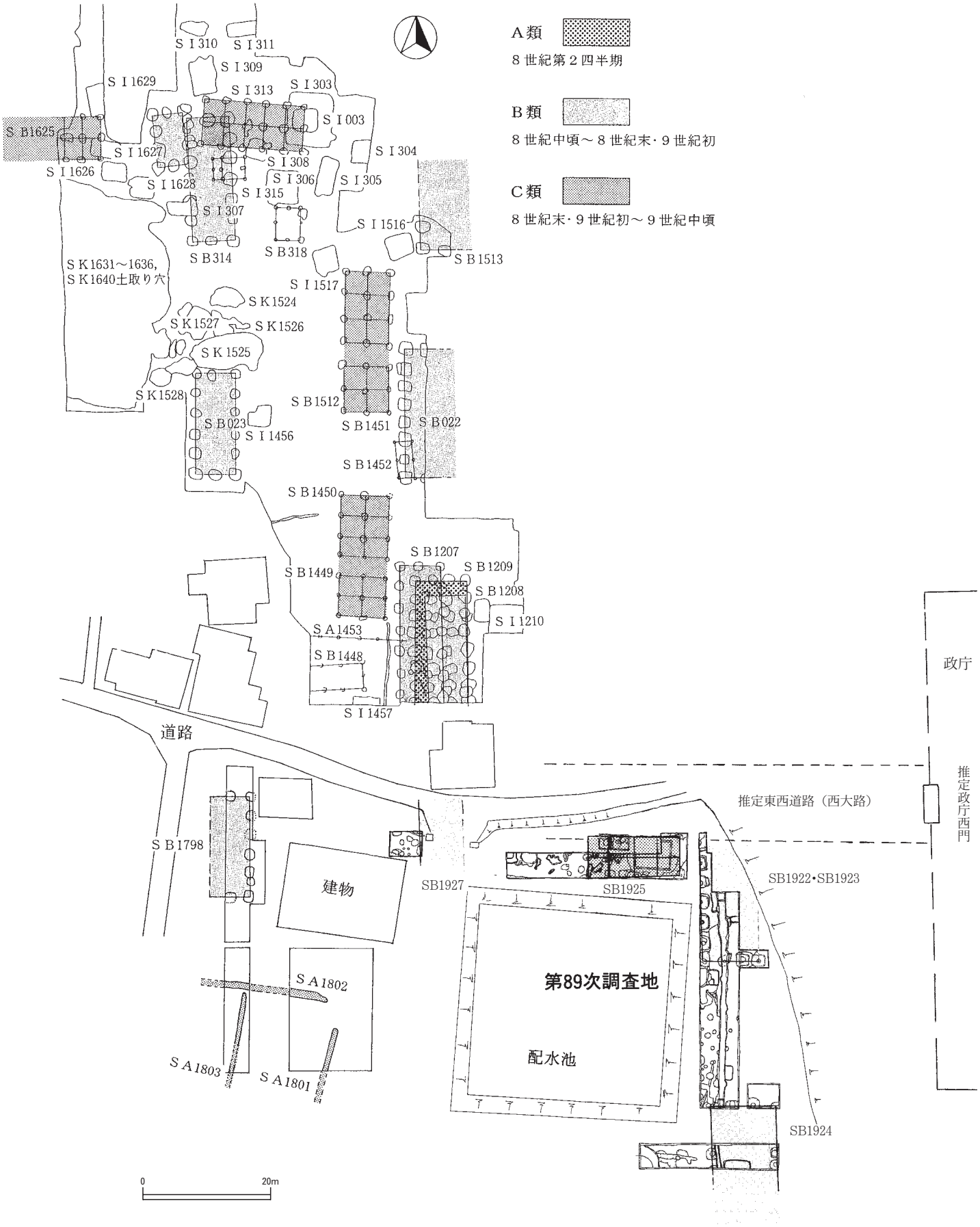
調査地南側のC調査区の遺構群については、SI1937竪穴住居跡は第7層面検出であり、SB1924廃絶後の8世紀末以降の年代に位置付けられる。SD1934溝跡については、埋土より9世紀第4四半期の年代に位置付けられる底径比の縮小した赤褐色土器坏Aが出土しており、重複関係でSD1934より新しいSA1933材木塀跡とともに、それ以降の年代に位置付けられる。

検出遺構の方位や方向について見た場合、時期が不明確なSB1928を除き、8世紀代のものは南北方向で見ると北で西に2度振れ、8世紀末から9世紀中頃のものは南北方向で見ると北で西に3度振れ、9世紀第4四半期以降には、南北方向で見ると北で東に2度～12度振れる方向となっていることから、方位において奈良時代から平安時代を通じ時期毎に一定の規制が存在したと考えられる。

（3）調査地利用状況の変遷と城内西側の東西道路について（第135図参照）

以上の各検出遺構の年代や重複関係、方位等に基づき利用状況の変遷をまとめ、さらに調査地北側に推定された政庁から城内西側を通る東西道路（西大路）に関してまとめると以下のようになる。

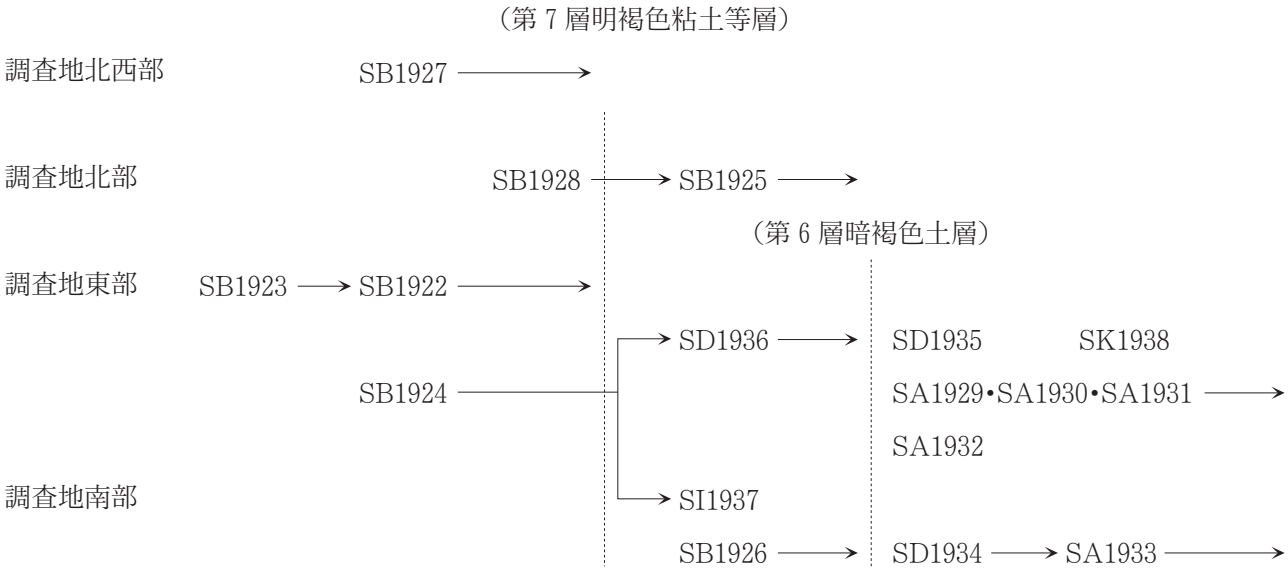
焼山地区東部のうち、東側については奈良時代の8世紀後半に政庁西側に隣接する建物群の一画として利用される。また北西側についても、焼山地区北部で確認されている建物群の一画(南東端部)として利用されると考えられる（註10)。平安時代に入り、北側は9世紀前半から中頃にかけて引き続き建物群の一画として利用された可能性がある。南側については、8世紀末以降の平安時代に入ってから建物や竪穴住居が存在する居住域として利用され、9世紀第4四半期以降には柱列や材木塀等の区画施設が設けられる等、利用状況が変化する。



第135図　焼山地区建物群遺構配置図

主要遺構である掘立柱建物跡については、時期及び建物方位等のまとまりで見ると、SB1923・SB1924・(SB1927) → SB1928→ SB1925・SB1926の変遷が把握される。建物配置としては、調査地の北東側から南東側にかけて、方位を同じくして南北に列をなす形で奈良時代の大規模な南北棟建物跡が新たに検出された。それにより、政庁西側隣接地域の焼山地区東部にも奈良時代に規則的配置に基づく掘立柱建物群が存在する可能性が高くなった。それら奈良時代の建物に関しては、従来確認されている焼山地区建物群Ｂ類と建物方位が一致しており、焼山地区全体で共通した方位規制が存在したと考えられる。しかし、梁間（東西）間数は今次検出の焼山地区東部建物が 3 間に対し、焼山地区建物群Ｂ類が 2 間を主体にする等、建物構造や規模には相違が認められ、焼山地区全体で広域に一つの建物群を構成するかについては、なお検討を要する。平安時代に関しても、SB1925は総柱式建物構造等に焼山地区建物群Ｃ類との類似性を示すが、建物方位は異なっており、その段階での城内東西道路との位置関係も含め、焼山地区全体でさらに検討を要するといえる。

調査の結果、政庁から城内西側を通る東西道路遺構（西大路）は確認されなかった。奈良時代については、道路推定範囲に接するか、または重複する位置に SB1922・SB1923が存在し、さらにその延長線上には SB1927が存在している。また、平安時代についても同様に道路推定範囲に接するか、または重複する位置に SB1925が存在していたことから、城内東側と東西対象となるような直線的な道路が城内西側には存在せず、城内の東側と西側で基本プランが異なる可能性がさらに高まったといえる。外郭西門を外郭北西隅部に擬定し、政庁から門に至る道路を想定した場合、推定される政庁西門からやや北西寄りに延び、そこから焼山地区建物群に沿ってクランク状に門に至るルートが考えられる。しかし、政庁西側や道路想定ルート部分については、旧国道の開削や宅地造成に伴う切り土により旧地形が大きく失われており、検証は困難なのが現状である。上記の城内西側の基本プラン解明のために、今後、外郭西門位置の特定がさらに重要になったと考えられる。



3　第90次調査について

第90次調査は秋田城跡城外南側の大小路地区南西部を対象とした。調査地は推定外郭南門から南に延びる推定南大路の西側にあたる場所で、外郭南辺からは約160ｍ南に位置している。周辺調査では、推定南大路を挟んで東側の第68次調査で平安時代の竪穴住居跡が検出されており、居住域としての利用が確認されてい

る。調査は寺内大小路の個人が行った住宅新築の現状変更許可申請について、許可条件である発掘調査を実施したものであり、工事予定地における遺構の遺存状況や内容の把握を行うことを目的として実施した。

調査の結果、調査地全体から遺構及び遺物包含層が確認された。奈良時代後半から室町時代にかけての遺構が検出され、平安時代を中心に居住域として利用される状況が把握された。調査地全体では、掘立柱建物跡3棟、柱列3列、溝跡5条、井戸跡1基、竪穴住居跡9軒、土坑6基、土取り穴1基、焼土遺構1基等が検出された。

それらの検出遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係や方位等の検討から、年代や変遷の把握が可能である。以下、まず遺構変遷の前提となる遺物包含層の年代を含めたそれらの検討を行い、次に調査地における利用状況の変遷等についてまとめることにする。

（1）各遺物包含層の年代について

第3層からは肥前Ⅳ期以降の草花文磁器染付碗が出土していることから、18世紀の江戸中期以降の畑地耕作に伴う造成土と考えられる。青磁片等の中世遺物も含んでおり、それらの包含層も削平し、遺物を巻き込みながら堆積したと考えられる。古代最上層の遺物包含層となる第4層暗褐色土・褐色土層からは、下限の資料として10世紀第中葉の年代に位置付けられる赤褐色土器小型坏が出土しているが、9世紀後半に位置付けられる底径比の縮小した赤褐色土器坏Ａも多く出土しており、それら9世紀代の包含層も削平し、遺物を巻き込みながら10世紀中葉以降に堆積したと考えられる。 第5層褐色土層からは8世紀末～9世紀第1四半期の年代に位置付けられる体部下端にケズリ調整を施した赤褐色土器坏Ｂが出土していることから、その頃の整地層と考えられる。

（2）各遺構の年代について

調査地北側のＡ調査区では古代と中世の遺構重複が認められる。第4層面検出のSB1939掘立柱建物跡は、柱掘り方埋土から15世紀前半の年代に位置付けられる古瀬戸後期Ⅳ期段階の灰釉平椀が出土しており、室町時代の遺構と考えられる。同じく第4層面検出のSD1945・SD1947溝跡、SA1943・SA1944柱列からは中世の遺物は出土しておらず、赤褐色土器片等が出土していることから10世紀第中葉の古代の遺構と考えられる。下層の第5層面で検出されている遺構のうち、第4層が覆土となっていたSI1950竪穴住居跡からは、10世紀1四半期～第2四半期にかけての年代に位置付けられ、小型化が進んだ赤褐色土器皿や高台が高くなる台付坏が出土している。また、第4層が埋土となっていたSK1959・SK1960土坑からも、同時期の底部が厚く擬高台状になった赤褐色土器皿が出土している。その他第5層面検出のSI1952竪穴住居跡、SK1961土坑については、検出層位から大きく8世紀末以降の平安時代の遺構と考えられる。地山飛砂層面検出のSB1940掘立柱建物跡からは、柱掘り方埋土より9世紀前半の年代に位置付けられるヘラ切り撫で調整の須恵器坏が出土していることから、その時期の建物と考えられる。SB1940と重複してそれより新しいSI1951竪穴住居跡は、その年代以降の9世紀代に位置付けられる。

調査地南側のＢ調査区では、SE1958Ａ井戸跡が中世の遺構となるが、それ以外全て古代の遺構と考えられる。古代の井戸跡SE1958Ｂに重複する形で検出されたSE1958Ａの埋土からは、珠洲Ⅰ期に該当する珠洲系中世陶器擂鉢が出土しており、12世紀後半以降の遺構になると考えられる。SE1958Ｂは第4層面検出であり、10世紀第中葉以降の遺構と考えられる。Ｂ調査区の第4層面検出遺構としては、他にSD1947溝跡

があり、やはり10世紀第中葉の年代に位置付けられる小型の赤褐色土器台付皿が出土している。

第５層面検出遺構は年代に幅があり、中央部検出のSI1953竪穴住居跡埋土から、10世紀第中葉の年代に位置付けられる赤褐色土器小型皿や小型坏が出土している。SI1954竪穴住居跡埋土からは、９世紀第３四半期の年代に位置付けられる底径比のやや大きい赤褐色土器坏Ａや糸切り無調整で椀形の須恵器坏が出土している。SI1957Ａ竪穴住居跡埋土からは、９世紀第２四半期の年代に位置付けられる赤褐色土器坏Ｂや、口径12㎝～13㎝台のヘラ切り軽い撫で調整の須恵器坏出土している。東端部のSK1965土取穴からは埋土より10世紀第中葉の年代に位置付けられる赤褐色土器小型皿が出土している。その他第５層面検出のSB1941掘立柱建物跡、SA1942柱列、SD1948・SD1949溝跡、SX1966焼土遺構については、検出層位から８世紀末以降の平安時代の遺構になると考えられる。地山飛砂層面検出のSI1955竪穴住居跡埋土からは須恵器円面硯が出土し、SI1956竪穴住居跡埋土からは８世紀末～９世紀第１四半期の年代に位置付けられる口径14.0㎝台のやや大振りで丸底風のヘラ切り撫で調整の須恵器坏や、カマド付近より非ロクロ成形で刷毛目調整主体の土師器甕類が出土している。また他に、越州窯青磁の壺破片が秋田城周辺では初めて出土しており、注目される。SK1962土坑やSK1963土坑からは、９世紀第４四半期以降の年代に位置付けられる底径比と法量の縮小した赤褐色土器坏Ａや土師器椀が出土している。SK1964土坑は、重複関係から８世紀代の奈良時代に遡る可能性がある。

Ｂ調査区中央部に集中する竪穴住居跡について見てみると、出土遺物の年代や重複関係等から、SI1955→SI1956・SI1957Ｂ→SI1957Ａ→SI1954→SI1953の変遷が把握され、８世紀第４四半期頃から10世紀中葉まで継続して住居が営まれたと考えられる。

竪穴住居や建物等の方位や方向について見た場合、全体的に南北方向で見るとほとんどが北でやや東に振れる方向となっている。特に８世紀第４四半期から９世紀第１四半期の遺構については、北で東に８度～10度振れる方向にまとまり、９世紀第２四半期以降のものは真北に近く（約０度～東に約２度）なり、10世紀代のものは北で東に約11度～17度振れる方向にまとまることが指摘できる。それらのことから、奈良時代末から平安時代を通じ時期毎に一定の方位規制が存在したと考えられる。

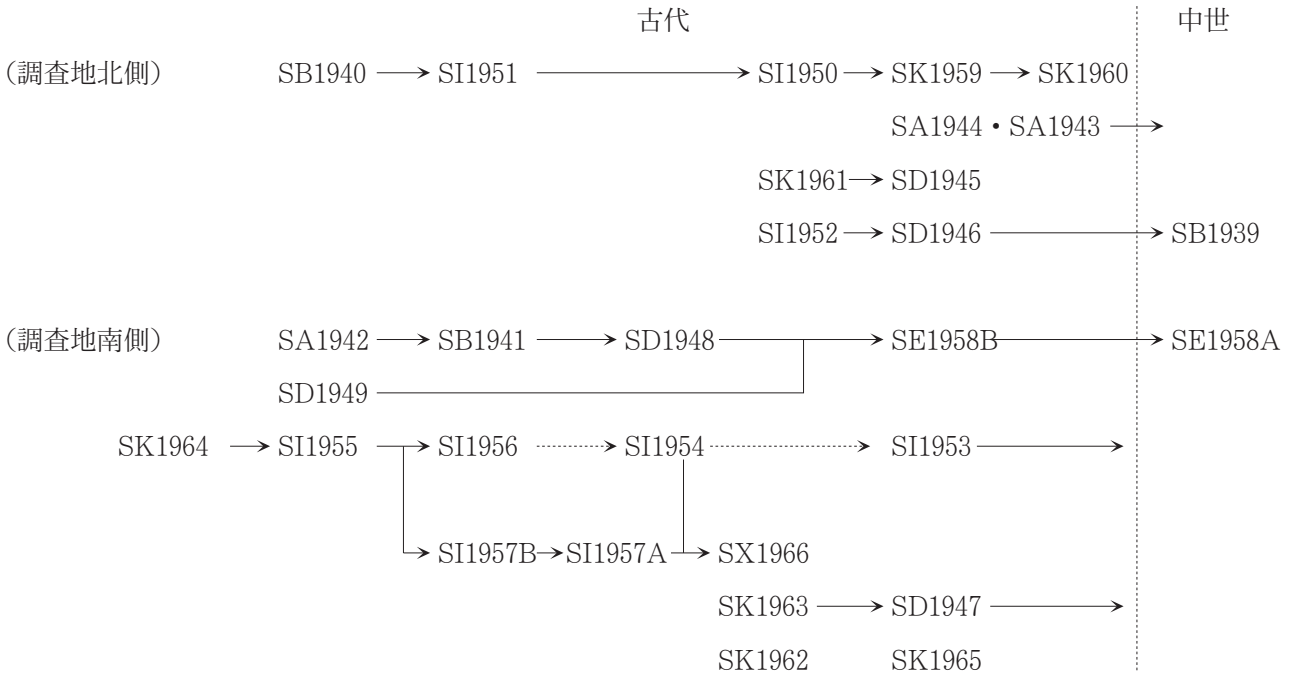
（３）調査地利用状況の変遷と特徴

以上の各検出遺構の年代や重複関係、方位等に基づき調査地の利用状況の変遷や特徴をまとめると以下のようになる。

大小路地区南西部については、古代から中世にかけての遺構が確認された。古代については、竪穴住居跡や建物跡、井戸跡などが検出されており、奈良時代末の８世紀第４四半期以降に居住域として利用が開始された。８世紀末以降の平安時代に入り、９世紀前半から中頃にかけて居住域として活発に利用されるようになり、10世紀中葉まで継続して利用されている。中世については、12世紀後半以降の鎌倉時代から15世紀の室町時代にかけて建物や井戸跡が検出されており、居住域として利用されていると考えられるが、遺構の遺存が良好ではなく、実態は不明確である。

奈良時代末から平安時代にかけての居住域の性格については、住居から円面硯や墨書土器が出土することから識字層が存在し、相対的に須恵器の出土も多く、さらに居住域に一定の方位規制が存在することからも、外郭外ではあるが、秋田城つまり官衙との関係が明確であり、秋田城に直接関係する人々の居住域であったと考えられる。また、調査地南西部に検出された掘立柱建物跡は比較的規模が大きいと推定され、南西側の

台地状の一画に何らかの施設が存在した可能性も考えられる。



註１　これ以降の考察における出土土器の年代比定は、以下一連の秋田城跡出土土器編年成果に基づくものである。
小松正夫「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）―第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして―」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』1992年
伊藤武士「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究　第７号』1997年
「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会　1997年度秋田大会蝦夷・律令国家・日本海―シンポジウムⅡ・資料集―』1997年
秋田市「第７章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史　第７巻　古代　史料編』2001年
また、以下の文章中の「底径比」は底径に対する口径の比率、底径指数を示すものである。

註２　赤褐色土器の呼称と坏Ａ・Ｂの分類については、酸化炎焼成、非内黒、ロクロからの切り離しが回転、静止糸切りのものを赤褐色土器とし、坏類の底部から体部下端及び下半にかけてケズリ調整を施すものを坏Ｂ、無調整のものを坏Ａとしている。

註３　ＳとＮの数値は凡例に示したとおり、外郭範囲内のほぼ中央にある測量原点からの座標上の位置を示す。

註４　秋田市教育委員会『秋田城跡昭和58年度調査概報』 1984年
秋田市教育委員会『秋田城跡調査事務所年報2003』 2004年
秋田市教育委員会『秋田城跡調査事務所年報2004』 2005年

註５　第38次調査検出の SB587Ａ・Ｂとされる門跡南側桁行の東西ラインまで縮小する可能性がある。

註６　秋田市教育委員会『秋田城跡昭和56年度調査概報』 1982年

註７　註１に同じ

註８　穴澤義功氏のご教示による。

註９　焼山地区建物群の最新の分類による。秋田市教育委員会『秋田城跡調査事務所年報2005』 2006年

註10　焼山地区建物群Ｂ類の東側建物列の南から１番目の建物となる可能性が高い。

Ⅶ　秋田城跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田城跡は、奈良時代から平安時代にかけて築かれた地方官庁であり、本地域における古代の政治・軍事・文化の中心地であった。第89次調査区は、秋田城跡の城内西側にあたり、政庁域の西側から南西側に隣接する。今回の発掘調査により、奈良時代の大規模な南北棟建物跡、平安時代の東西棟建物跡、平安時代以前の建物跡、平安時代の竪穴住居跡、柱列等の遺構が検出されている。

出土遺物や検出層位等から 8 世紀後半の南北棟建物跡とされる SB1922では柱掘り方内から炭化柱材と柱抜き取り痕から炭化材が出土し、同じく 9 世紀の東西棟建物跡とされる SB1925では、柱穴の掘り方の柱抜き取り痕から炭化材が出土している。今回の分析調査では、時期の異なる可能性のある 2 棟の建物跡で使用された建築部材の木材利用に関する資料を得るため、出土した炭化材を対象として樹種同定を実施する。

1　試料

試料は、SB1922から出土した炭化材 2 点（№2， 3 ）と SB1925から出土した炭化材 1 点（№7 ）の合計 3 点である。

2　分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982)、Wheeler 他（1998)、Richter 他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991)、伊東（1995，1996，1997，1998，1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3　結果

樹種同定結果を表 1 に示す。炭化材は、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 1 種類（サクラ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、 1 分野に 2 － 4 個。放射組織は単列、 1 －15細胞高。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2 － 4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、 1 － 3 細胞幅、 1 －30細胞高。

4　考察

B区の掘立柱建物跡SB1922は、8世紀後半に建築され、9世紀初頭に火災により焼失したと考えられている。大規模な南北棟建物と考えられ、隣接する焼山地区でも同時期の大規模な南北棟建物群が確認されており、共通した方位制のもとに建築された可能性が指摘されている。SB1922の柱穴№.2柱掘り方の柱抜き取り痕の炭化材と、柱穴№.3の柱掘り方内の炭化柱材は、いずれも針葉樹のスギであった。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。同定を実施した2点が同じ樹種であることから、スギを選択的に利用していた可能性がある。

一方、A区SB1925は9世紀の東西棟建物跡であり、柱穴№.7柱掘り方の柱抜き取り痕の炭化材は、落葉広葉樹のサクラ属であった。サクラ属は、比較的重硬で強度が高い材質を有する。先行する時期のSB1922とは樹種が異なってことから、SB1922とSB1925とで木材利用が異なっていた可能性がある。この背景には柱材以外の部材となる可能性や、建物の時期差や用途・規模・機能の違い等が考えられる。これらの点については、今後さらに各時期の資料を増やし、時期別や建物の規模・機能別の種類構成を明らかにすることが望まれる。

なお、秋田県内で奈良時代～平安時代の柱材について樹種を明らかにした例としては、払田柵跡の調査例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988，1991，1993；光谷，1997，1998）。それらの結果をみると、奈良時代の柱材ではスギ材の利用が多く、広葉樹材の利用は少ない傾向がある。一方、平安時代の柱材では、スギも継続して利用されているが、広葉樹のクリの占める割合が高く、奈良時代と平安時代とで柱材の樹種構成が異なる傾向がある。建物の用途・規模なども含めて考える必要があるが、奈良時代の柱材にスギが多いこれまでの事例は、今回の調査結果とも調和的といえる。

引 用 文 献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81－181．

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66－176．

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83－201．

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30－166．

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47－216．

光谷拓実，1997，樹種同定．「秋田県文化財調査報告書第269集・払田柵跡調査事務所年報1996　払田柵跡－第107次～109次調査概要－」，秋田県教育庁払田柵跡調査事務所．

光谷拓実，1998，樹種同定．「秋田県文化財調査報告書第280集，払田柵跡調査事務所年報1997　払田柵跡－第110次～112次調査概要－」，秋田県教育庁払田柵跡調査事務所．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1988，自然科学的分析．「秋田県文化財調査報告書第168集・払田柵跡調査事務所年報1987払田柵跡－第68～73次調査概要－」，秋田県教育庁払田柵跡調査事務所，59．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1991，樹種鑑定．「秋田県文化財調査報告書第216集・払田柵跡調査事務所年報1990　払田柵跡　第84～87次調査概要」，秋田県教育庁払田柵調査事務所，64－65．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1993，花粉分析および樹種鑑定．「秋田県文化財調査報告書第238集・払田柵跡調査事務所年報1992　払田柵跡－第92・93次調査概要－」，秋田県埋蔵文化財振興会，85－89．

Richter　H.G.,Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p．［Richter　H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］．

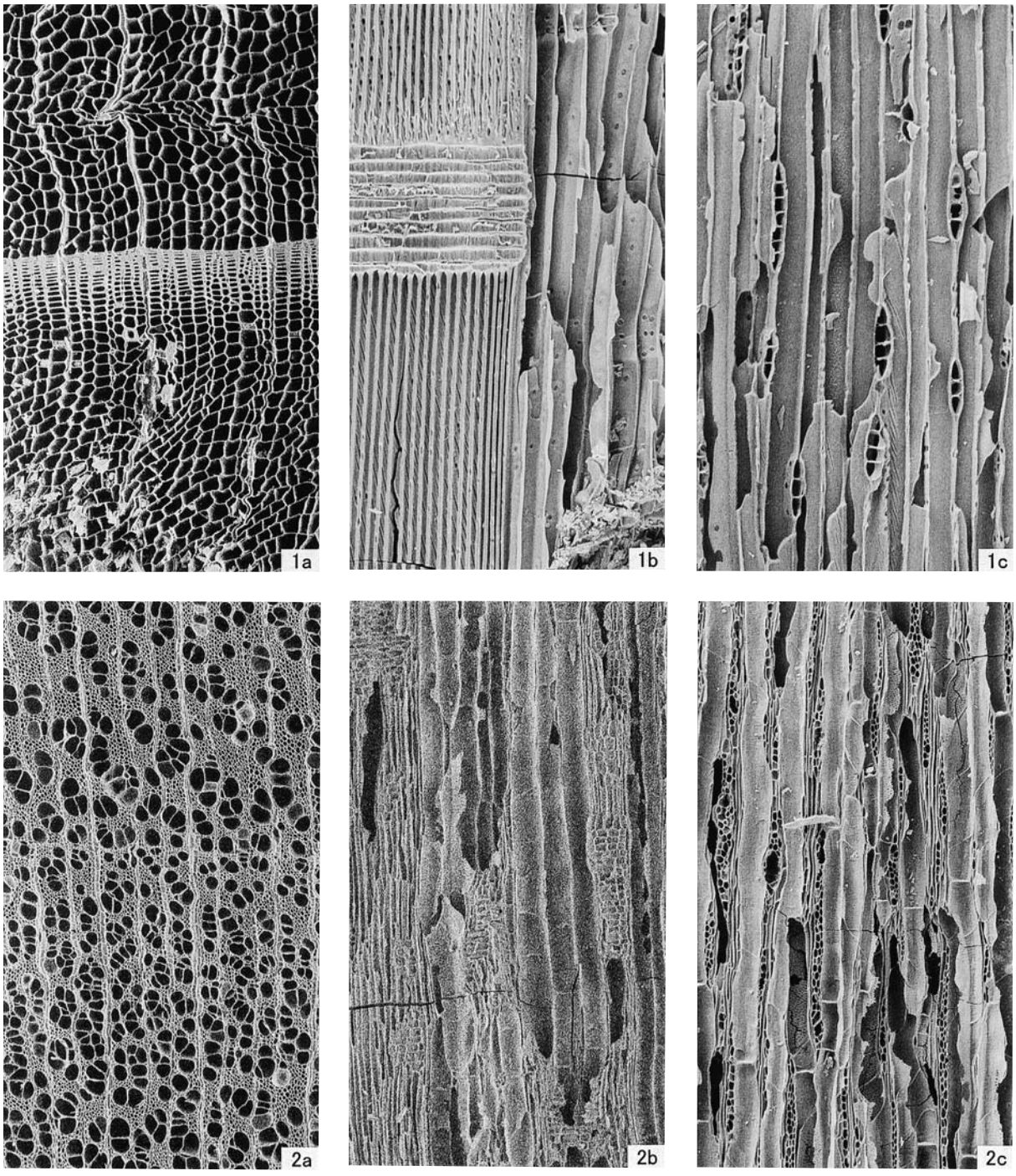
島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p．

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　ISWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p．［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］．

表１　樹種同定結果

調査次数	地 区	遺 構	番 号	位　　置	試 料 名	樹　　種
89次調査	A区	SB03	No.7	柱掘り方抜き取り	柱抜き取り出土炭化材	サクラ属
	B区	SB02	No.2	柱掘り方抜き取り	柱抜き取り出土炭化	スギ
	B区	SB02	No.3	柱掘り方内	炭化柱材	スギ

図版１　炭化材



１．スギ（A区ＳＢ02；№３）
２．サクラ属（B区ＳＢ03；№７）
　ａ：木口、ｂ：柾目、ｃ：板目

200μｍ：２ａ
200μｍ：１ａ・２ｂ、ｃ
100μｍ：１ｂ、ｃ

Ⅷ　秋田城跡環境整備事業

平成18年度の整備概要

今年度は、昨年度に引き続き政庁域築地塀・東門の復元整備を行うとともに、政庁域創建期の20分の１の模型製作と水洗厠舎の便槽・木樋などのレプリカ製作委託を行った。

１　政庁域の整備

政庁域の復元は、北東コーナーを含む北辺部分11ｍと東辺49ｍの合計60ｍの築地塀と、すでに復元が終了している外郭東門からの大路が取付く政庁東門を復元の対象としており、今年度は4.8ｍの築地塀復元と東門の塗装、扉の取り付け等を行った。

塗装については、外郭東門復元の際に膠着剤として使用したカゼインの付着力が弱く丹土塗りが手に付くなどの苦情があったことから、１年の暴露試験を行った結果、水性ウレタンアクリルエマルションを膠着剤として使用した。

工事の概要は次のとおりである。

実施地区　　政 庁 域

名　　称	区　　分	規格寸法	数　量	金額（千円）	備　　考
東門工事費				1,543	
	仮設工事		一式	13	シート払い
	木 工 事		一式	1,197	扉金具・取付、扉建付等
	塗装工事		一式	333	弁柄・黄土・胡粉塗
築地塀工事費				5,001	
	仮設工事		一式	370	素屋根、養生シート等
	基礎工事		一式	194	
	木 工 事		一式	364	木材組立、柱据付等
	屋根工事		一式	729	瓦葺、面戸・軒瓦漆喰塗等
	版築工事		一式	3,197	築地版築
	雑 工 事		一式	147	鳥除金網等
直接工事費計				6,544	

2　政庁域の模型製作

政庁変遷の理解や、道路等によって削平されている政庁域全体の広がりなどを理解できるように、政庁域全体模型（Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期）を築地塀・東門側に設置することとしており、今年度はⅠ期（20分の１）の製作を行った。

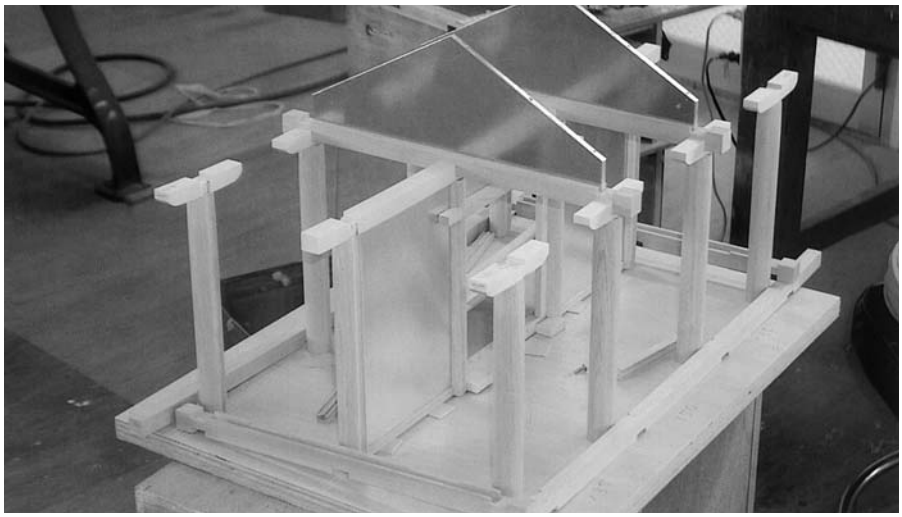
今回製作した模型は復元と同じ時期の模型で、これらを比較することによって容易に個々の建物の形や大きさなどがイメージできるようにし、使用材は極力木やセラミック製の瓦などを用いた。その際の塗料・樹脂含浸材については、二冬暴露試験を行った結果を参考とした。

3　水洗厠舎便槽・木樋等レプリカ製作

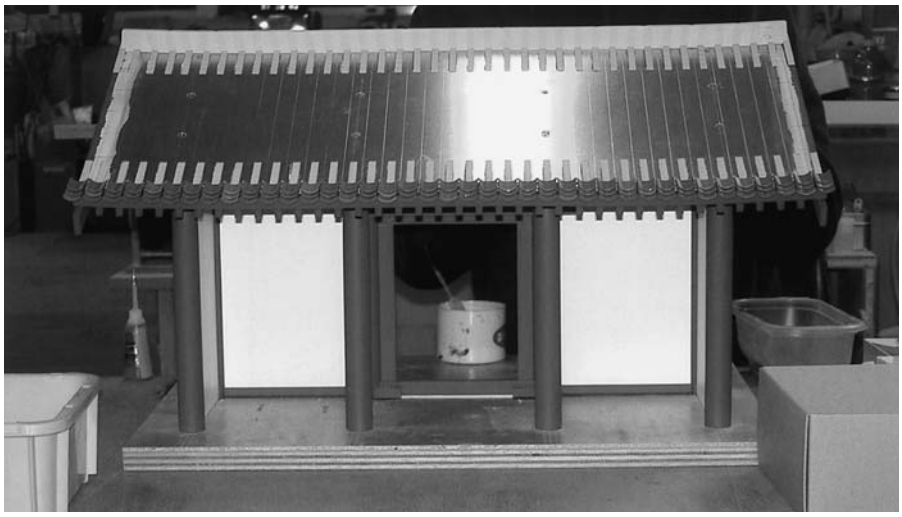
厠舎跡からは、３基の便槽等が確認されている。復元整備にあたっては、１基は遺構の複製品としてどのような状態で発掘されたかが分かるように、もう１基は発見された遺構からどのように復元できたのかを知ってもらうために復元した便槽・木樋から土を取り除いた状態でその構造が分かるように、最後の１基は復元したもので水を流すような体験ができるようにし、見学者の遺構に対する理解を深めてもらうような工夫を施すことにしている。今年度はこれらのレプリカ製作を委託した。その材質については、ＧＲＣ（強化ガラス繊維入りモルタル）とＦＲＰについて検討を行ったが、模型同様二冬暴露試験を行った結果と遺構に対する重量による影響を考え、ＦＲＰとした。

政庁東門と築地塀復元工事完成

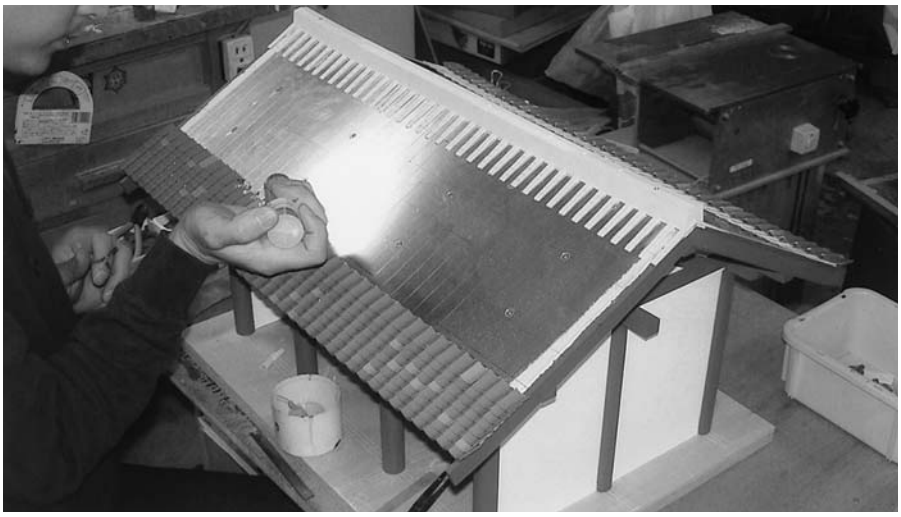
政庁域模型部材加工状況



仮組状況



組立状況



瓦葺き状況

完成（南門）

水洗厠舎便槽・木樋等レプリカ完成

Ⅸ　秋田城跡の現状変更

秋田城跡調査事務所では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすと同時に、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、史跡内の現状を変更する必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者及び関係機関と史跡保護のための協議をを慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

平成18年度の現状変更申請は20件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

①民間工事14件…共同住宅新築工事（４）、住宅新築工事（11)、住宅等解体工事（６、10、13、15、16)、住宅外構工事（５、７、17)、境内外構工事（３)、上下水道工事（８)、ガス工事（２)、電柱移設工事（14)

②公共工事５件…道路側溝改良工事（９、18)、水道工事、(12)、急傾斜地保全工事（19)、樹木伐採事業（20)、

③史跡の保護や保存に係わるもの１件…発掘調査（１）

現 状 変 更 一 覧

番号	申　請　者	申　請　地	変 更 事 項	申　請　日	許 可 番 号	対　応
1	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内大畑・焼山地内	発掘調査	平成18年２月13日	17委庁財第４の1745号 平成18年３月17日	発掘調査
2	東部ガス株式会社 秋田支社長	秋田市寺内鵜ノ木３番１～７号、３番20号	ガス管埋設・プラグ止工事	平成18年４月３日	秋市教指令第178号 平成18年４月４日	立会調査
3	秋田県護国神社	秋田市寺内大畑69番の内	竹垣改修工事	平成18年４月３日	18委庁財第４の117号 平成18年５月19日	立会調査
4	個人	秋田市寺内鵜ノ木147番､外	共同住宅新築工事	平成18年４月４日	18委庁財第４の82号 平成18年５月11日	発掘調査
5	個人	秋田市寺内児桜三丁目34番２号	住宅新築に伴う外構工事	平成18年４月10日	秋市教指令第182号 平成18年４月12日	立会調査
6	個人	秋田市寺内大畑314番３	住宅解体工事	平成18年４月13日	秋市教指令第183号 平成18年４月17日	立会調査
7	個人	秋田市寺内高野136番１	ブロック塀の改築工事	平成18年４月18日	秋市教指令第185号 平成18年４月26日	立会調査
8	個人	秋田市寺内鵜ノ木５番27号	水洗切替工事	平成18年６月29日	秋市教指令第201号 平成18年７月３日	立会調査
9	秋田市長	秋田市寺内大畑地内	道路側溝改良工事	平成18年７月21日	秋市教指令第204号 平成18年７月25日	立会調査
10	個人	秋田市寺内神屋敷14番の内、19番	小屋除却工事	平成18年８月21日	秋市教指令第207号 平成18年８月24日	立会調査
11	個人	秋田市寺内神屋敷14番の内、19番	住宅新築工事	平成18年８月21日	18委庁財第４の1055号 平成18年９月15日	発掘調査
12	秋田市上下水道事業管理者	秋田市将軍野南一丁目地内	水道配水管の取り替え工事	平成18年８月23日	秋市教指令第208号 平成18年８月25日	立会調査
13	個人	秋田市寺内神屋敷14番17号	倉庫及び貸家除却工事	平成18年９月７日	秋市教指令第209号 平成18年９月11日	立会調査
14	東日本電信電話株式会社 秋田支店長	秋田市寺内大畑地内	側溝改良工事に伴う電柱移転工事	平成18年９月15日	秋市教指令第212号 平成18年９月21日	立会調査
15	個人	秋田市寺内神屋敷17番19号	住宅解体工事	平成18年９月25日	秋市教指令第213号 平成18年９月26日	立会調査
16	個人	秋田市寺内焼山８番21号	住宅解体工事	平成18年11月９日	秋市教指令第220号 平成18年11月９日	立会調査
17	個人	秋田市寺内大小路５番29号	土留めの撤去及び新設、舗装工事	平成18年11月20日	秋市教指令第223号 平成18年11月27日	立会調査
18	秋田市長	秋田市寺内児桜一、二丁目地内	道路側溝改良工事	平成18年12月６日	秋市教指令第228号 平成18年12月７日	立会調査
19	秋田県知事	秋田市寺内鵜ノ木地内	法面保護工事	平成18年12月25日	18委庁財第４の1886号 平成19年２月１日	立会調査
20	秋田市長	秋田市将軍野南一丁目・寺内焼山地内	松くい虫被害木の伐採処理事業	平成19年１月18日	秋市教指令第１号 平成19年１月19日	立会調査

秋田城跡及び第88次調査地航空写真（東から）

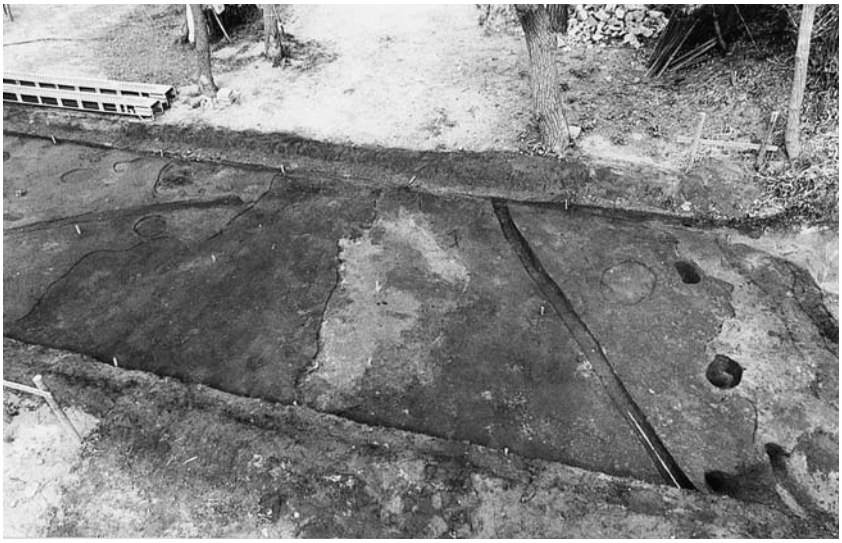
図版 1

第88次調査地全景航空写真（上が北）

第89次調査地全景（南東から）

図版 2

第88次調査地
調査前状況（西から）

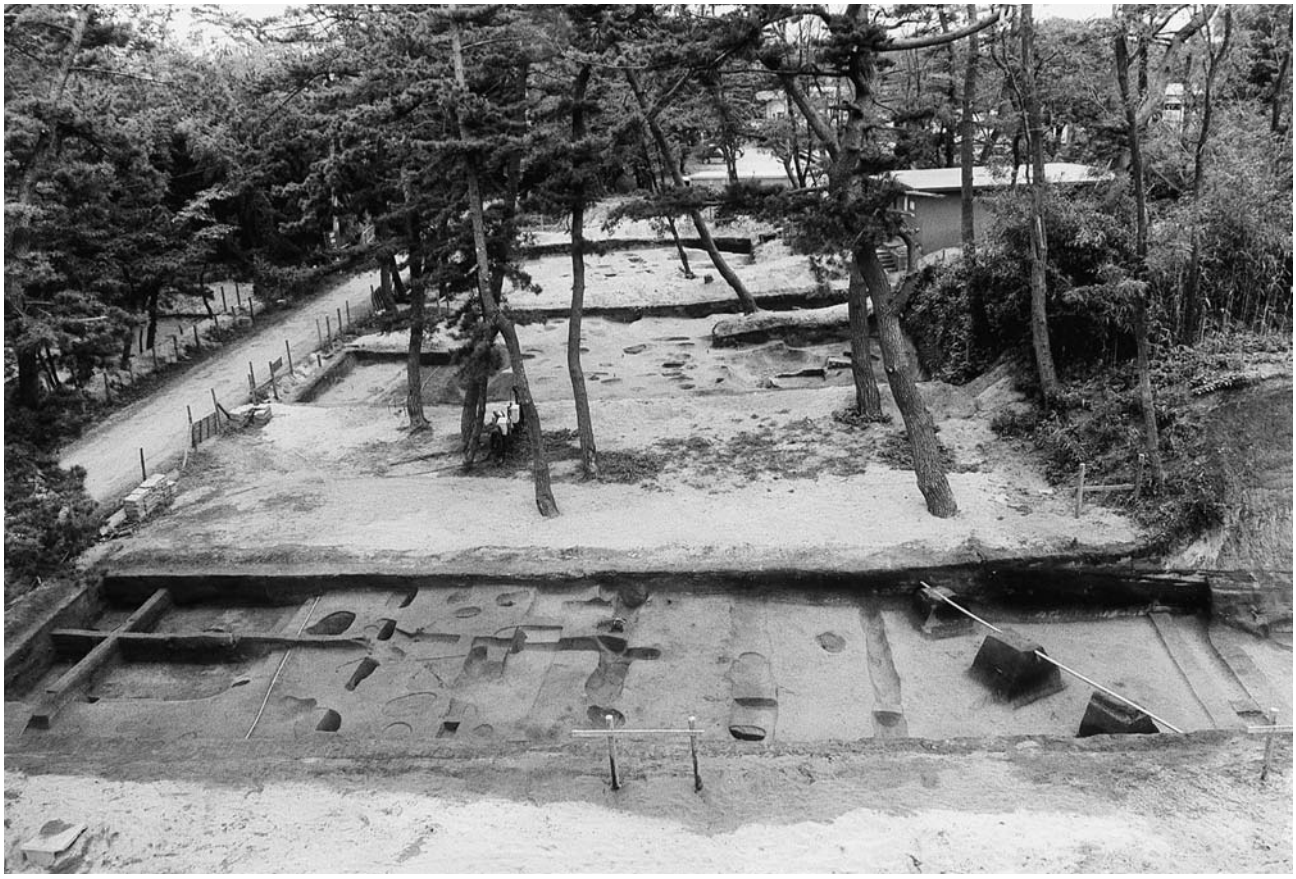


A調査区中央
第 3 層道路状硬化面
検出状況（西から）

B調査南東撹乱・畑畝跡（北から）

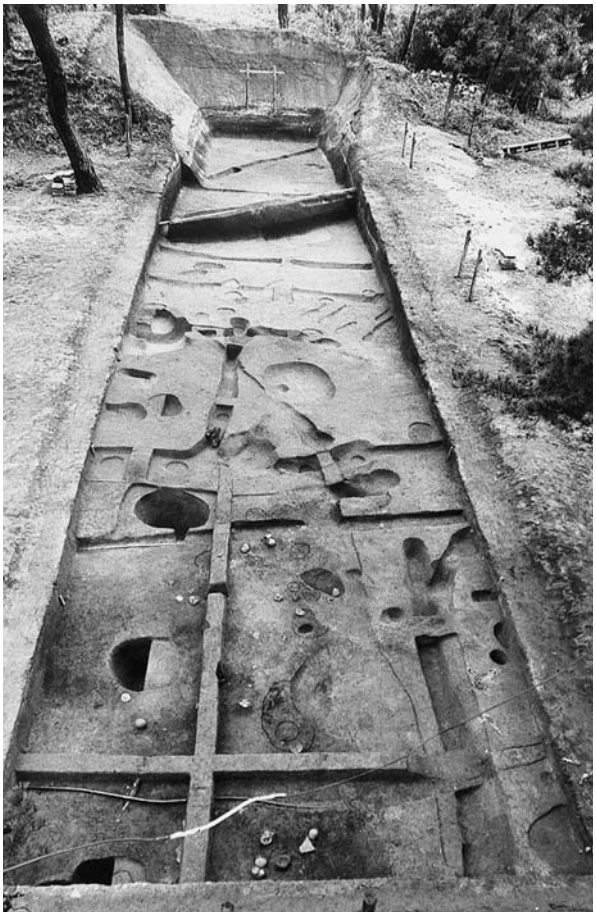
A調査区畑畝跡検出状況（北西から）

図版 3



第88次調査地全景（西から）

A 調査区第 6 〜第 7 層面遺構全景（北から）



A 調査区第 8 〜第10層面遺構全景（北から）

図版 4

A調査区第 9 〜第10層面遺構全景（北から）

B調査区南東第10層面遺構全景（北から）

B調査区南東第11層面遺構全景（北から）

C調査区全景（東から）

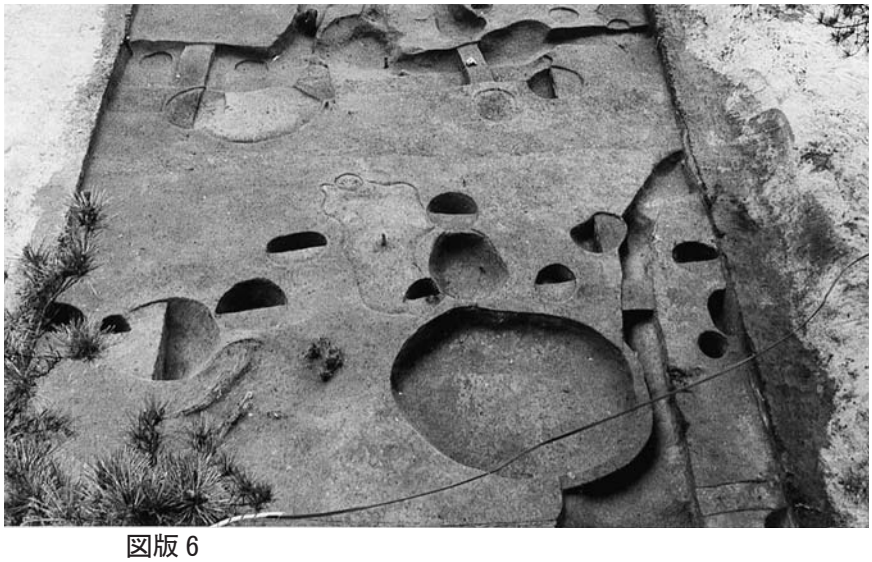
図版 5

D調査区全景（西から）

D調査区全景（東から）

ＳＡ1874柱列（北から）

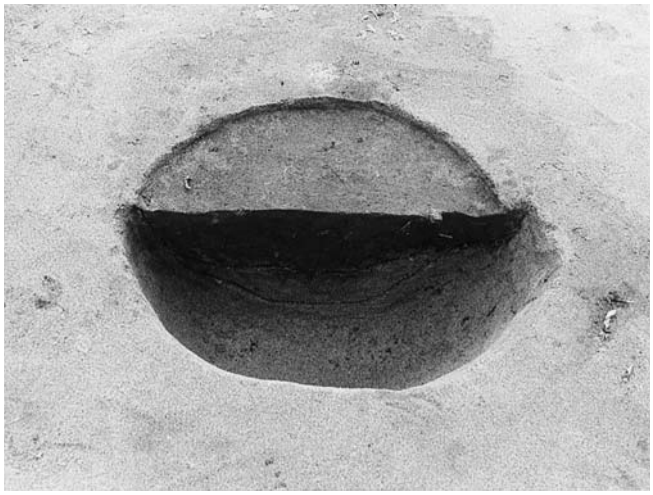
ＳＡ1877柱列（南から）



ＳＡ1875柱列（北から）

図版 6

ＳＡ1878～ＳＡ1882柱列（西から）



ＳＡ1878柱掘り方断面（南から１番目）（東から）

ＳＡ1878柱掘り方断面（南から４番目）（東から）

ＳＡ1879柱掘り方断面（西から４番目）（南から）

図版７

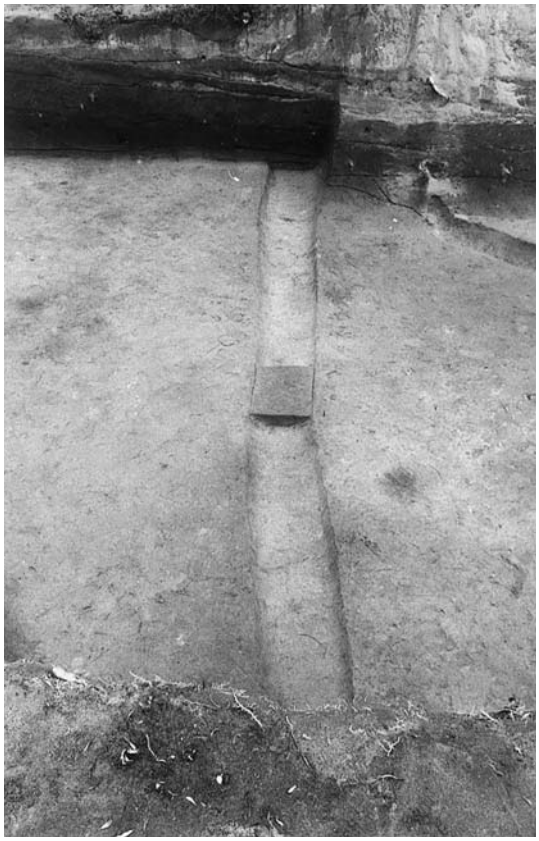
A調査区中央東西道路付近（ＳＡ1885・ＳＡ1889材木塀跡、ＳＤ1893・ＳＤ1894溝跡）（西から）

ＳＡ1885～ＳＡ1888材木塀跡、ＳＤ1890溝跡、ＳＫ1908土坑（西から）

ＳＡ1889材木塀跡（西から）

図版 8

ＳＤ1894溝跡（西から）



ＳＤ1893溝跡（西から）

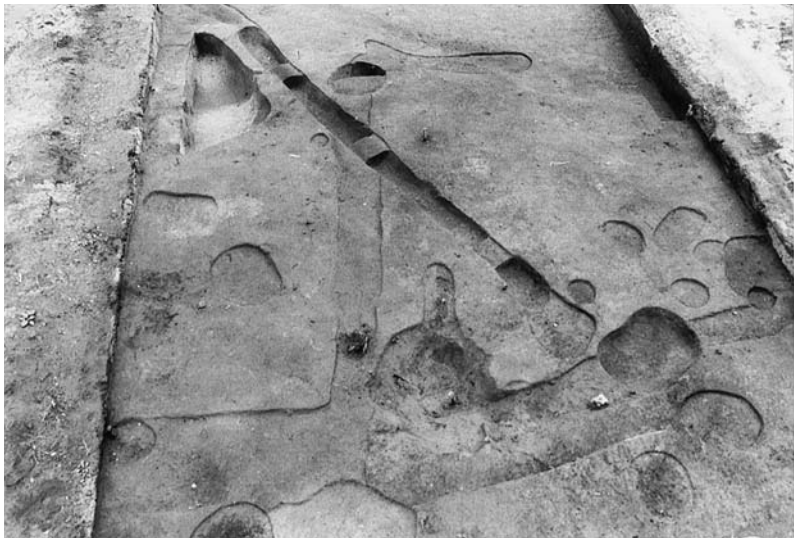
ＳＡ1876柱列、ＳＤ1895・ＳＤ1896溝跡（西から）

図版９

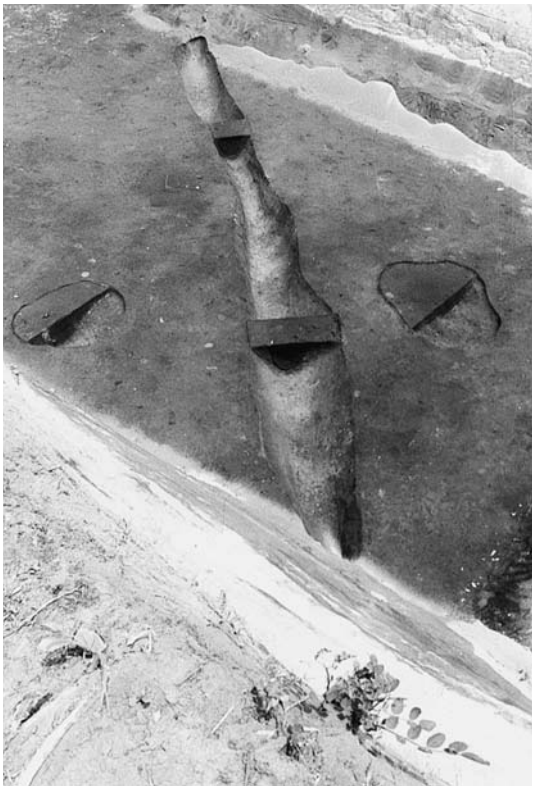
ＳＤ1895溝跡断面（西から）

ＳＤ1896溝跡断面（西から）

ＳＡ1876柱掘り方断面（東から１番目）（南から）



ＳＤ1890溝跡（北から）



ＳＤ1892溝跡（南西から）

図版10

ＳＤ1897・ＳＤ1898溝跡
（北から）

Ｂ調査区中央ＳＸ1919道路遺構（東から）

ＳＤ1899Ａ溝跡断面（東から）

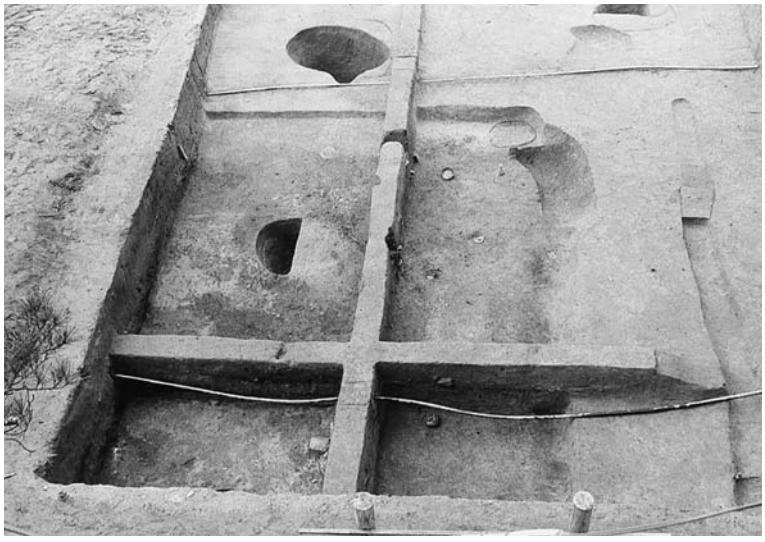
ＳＸ1918Ａ道路遺構、ＳＤ1899Ａ溝跡（東から）

ＳＤ1899Ｂ溝跡断面（東から）

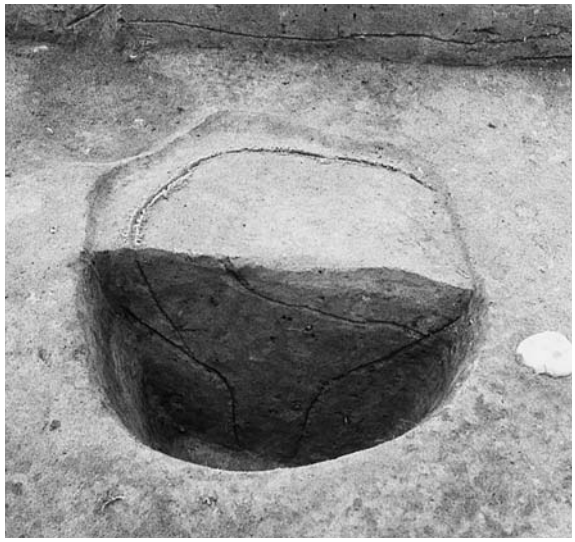
ＳＸ1918Ｂ道路遺構、ＳＤ1899Ｂ溝跡（東から）

図版11

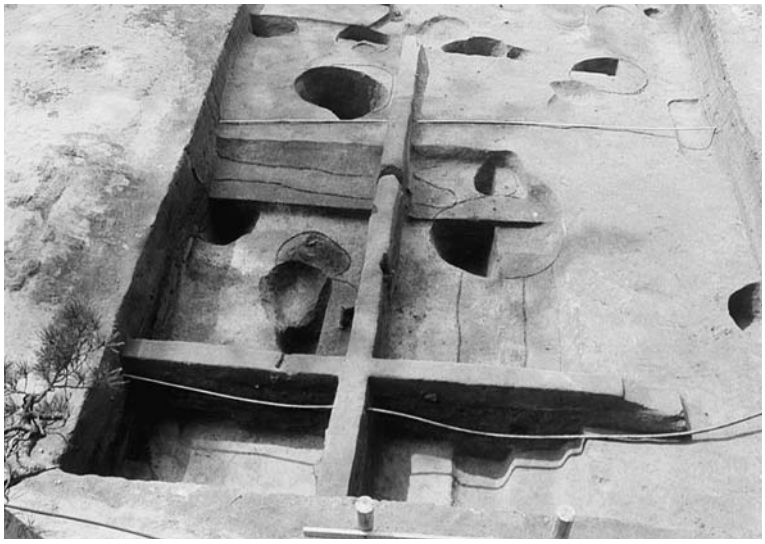
ＳＩ1901竪穴状工房跡、ＳＤ1891Ａ・Ｂ溝跡（北から）



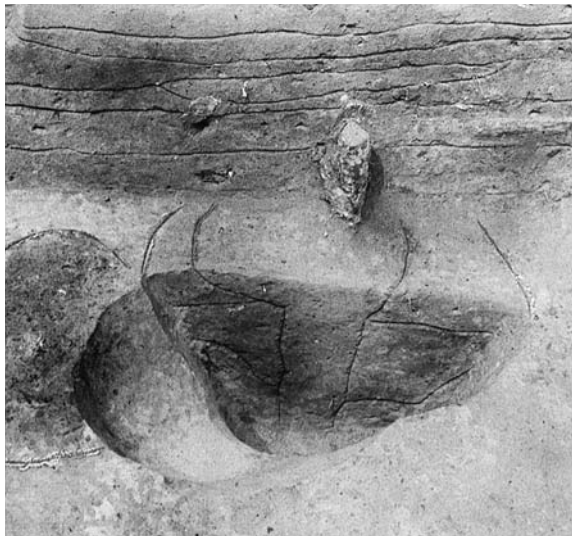
ＳＩ1902Ａ・Ｂ竪穴状工房跡（北から）



ＳＩ1902に伴う柱掘り方断面（東から）

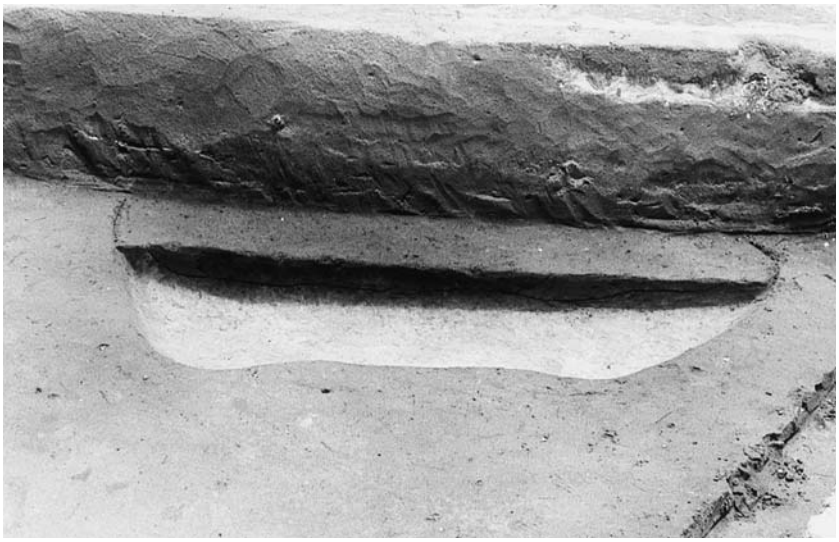


ＳＩ1903竪穴状工房跡、ＳＢ1873掘立柱建物跡（北から）



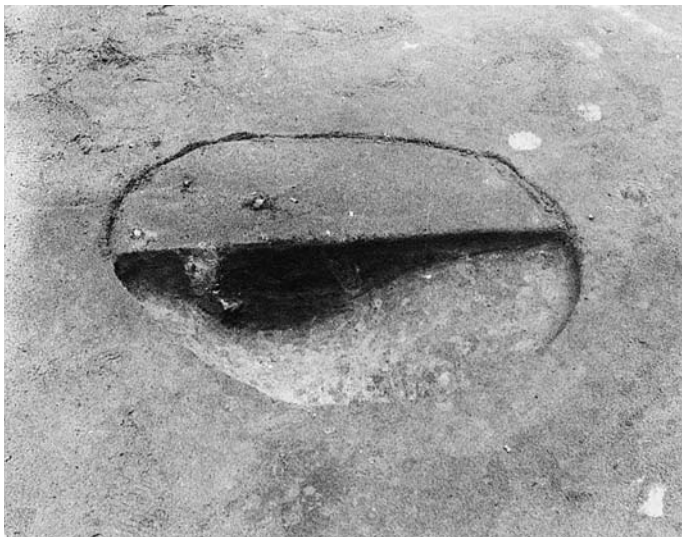
ＳＢ1873柱掘り方断面（東から）

図版12



ＳＫ1904土坑（北から）

ＳＫ1905土坑（南から）



ＳＫ1906土坑（南から）

ＳＫ1907土坑（南から）

ＳＫ1909土坑（東から）

図版13

ＳＫ1910土坑（南東から）

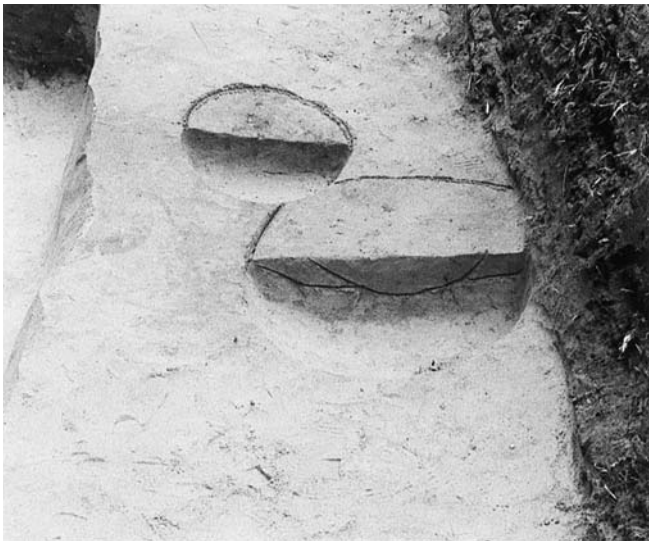
ＳＫ1911土坑（南から）

ＳＫ1912土坑（南から）

ＳＫ1913土坑（西から）

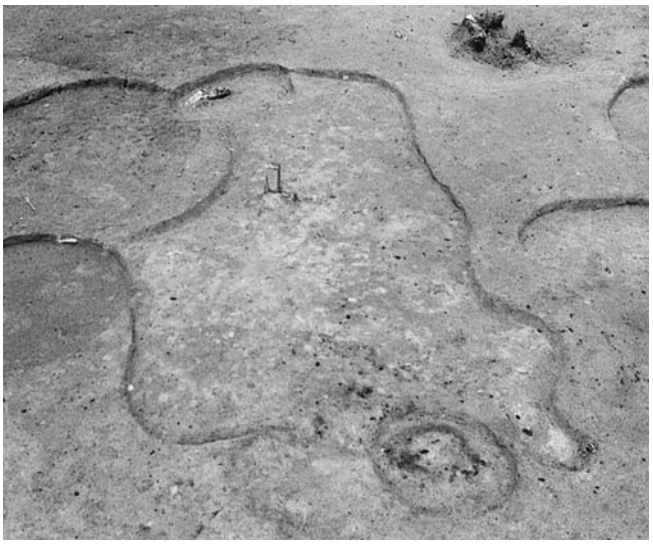
図版14

ＳＫ1914・ＳＫ1915土坑（東から）

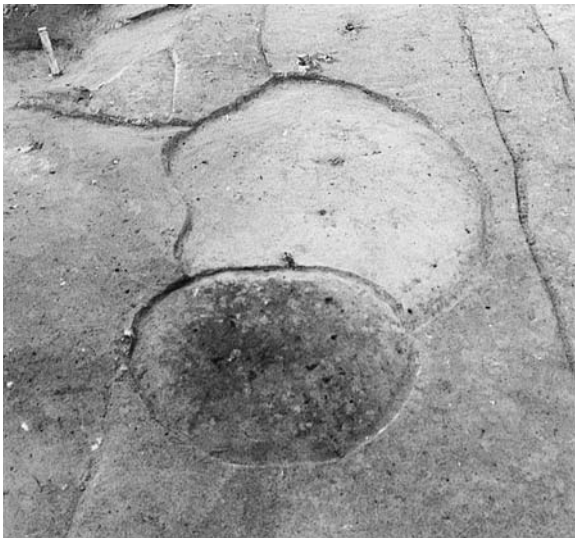


ＳＫ1917土坑（南から）

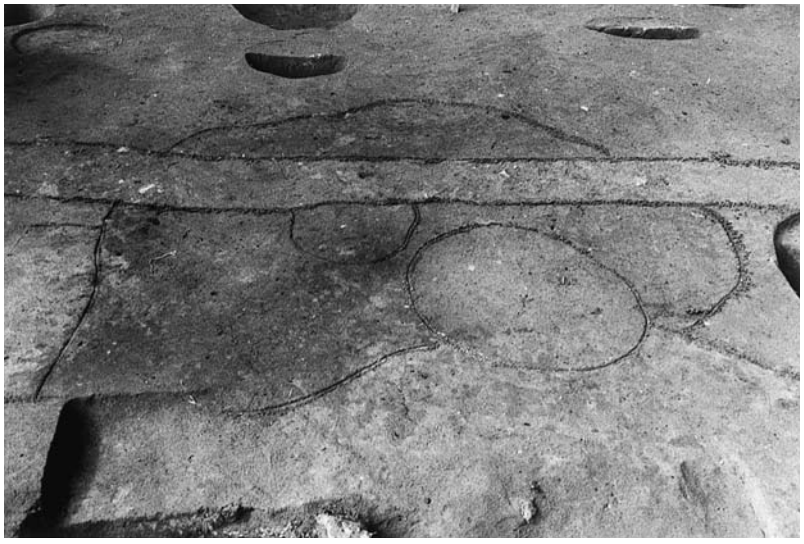
ＳＫ1916土坑（東から）



ＳＸ1919焼土遺構（南から）



ＳＸ1920焼土遺構（東から）



ＳＸ1921焼土遺構（南から）

図版15

A調査区東壁土層断面（南西から）

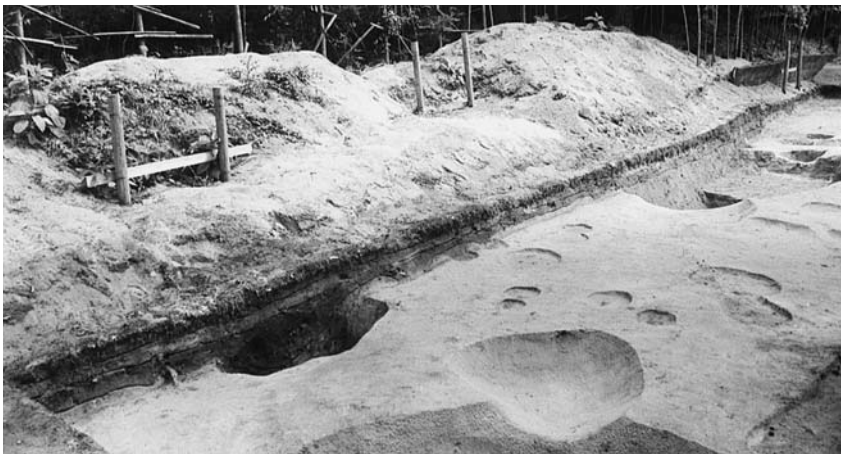
B調査区南東側西壁土層断面図（北東から）

図版16

A調査区
東壁北半部土層断面
（北西から）

C調査区東壁土層断面
（西から）

B調査区東壁土層断面
（西から）



D調査区北壁土層断面
（南西から）

図版17

第89次調査地調査前状況（南東から）

A調査区撹乱掘り下げ後（西から）

A調査区撹乱・畑畝跡検出状況（西から）

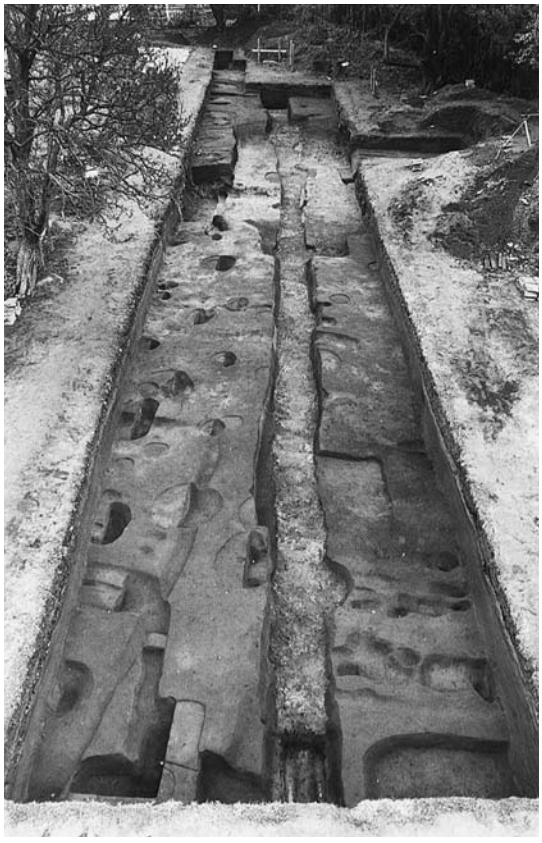
B調査区撹乱・畑畝跡掘り下げ後（南から）

C調査区撹乱・畑畝跡掘り下げ後（東から）

図版18

第89次調査地全景（南東から）

A調査区全景（東から）



B調査区全景（南から）

図版19

C調査区全景（東から）

C調査区全景（西から）

ＳＢ1922・ＳＢ1923掘立柱建物跡（南から）

図版20

ＳＢ1922・ＳＢ1923柱掘り方検出状況（西桁行南から３番目）（東から）

同左ＳＢ1922炭化柱材検出状況（東から）

ＳＢ1922柱掘り方断面（南梁間西から１番目）（南から）

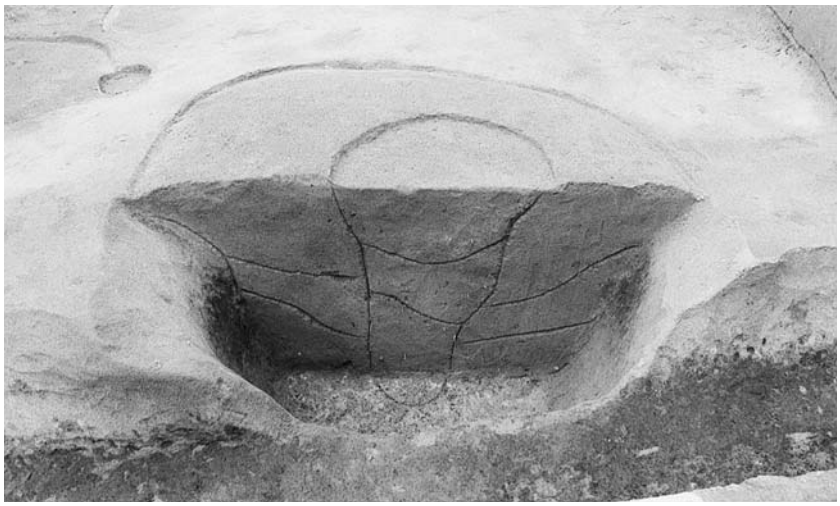
ＳＢ1922・ＳＢ1923柱掘り方断面（南梁間西から３番目と４番目）（南から）

ＳＢ1922・ＳＢ1923柱掘り方断面（西桁行北から１番目）（東から）

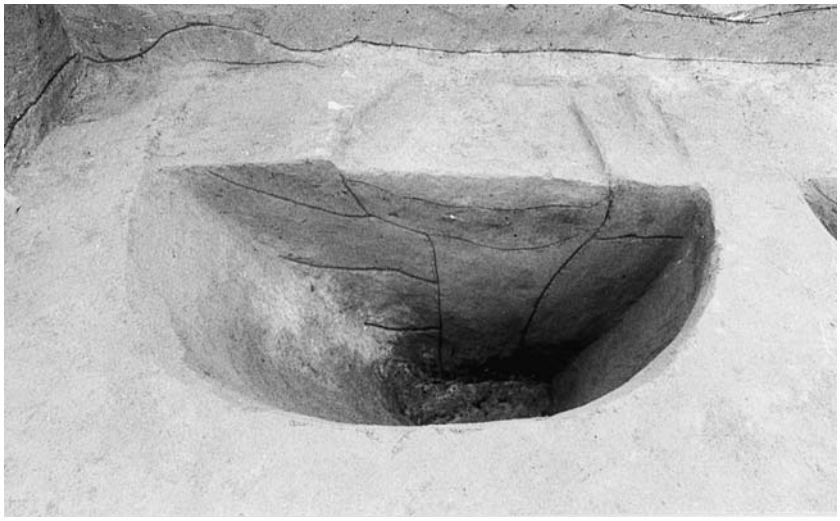
ＳＢ1922・ＳＢ1923柱掘り方断ち割り後（南から）

図版21

ＳＢ1924掘立柱建物跡（西から）



ＳＢ1924柱掘り方断面
（西桁行北から３番目）
（東から）



ＳＢ1924柱掘り方断面
（東桁行北から３番目）
（西から）

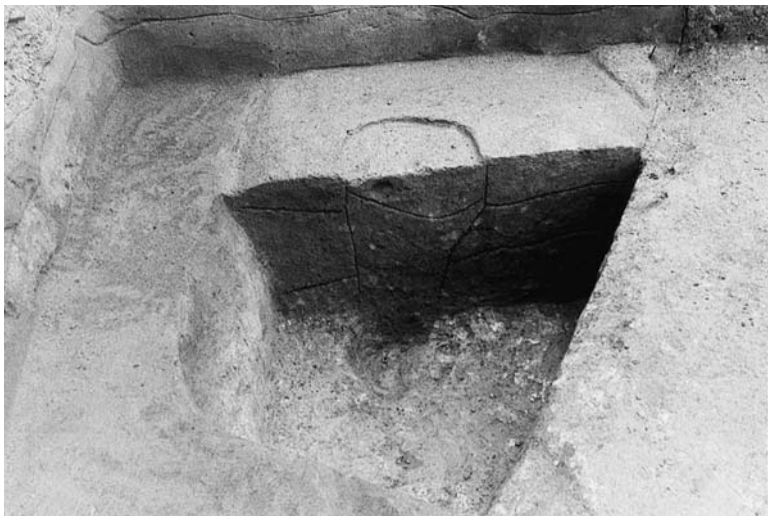
図版22

ＳＢ1925・ＳＢ1928掘立柱建物跡
（西から）

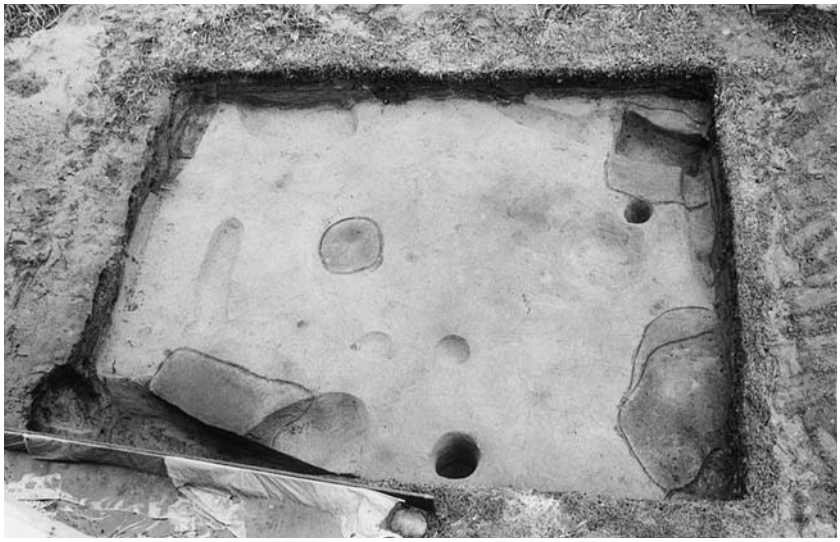
右上：ＳＢ1925柱掘り方断面
（南桁行西から２番目）（北から）

右下：ＳＢ1925柱掘り方断面
（南桁行東から１番目）（北から）

左下：ＳＢ1925・ＳＢ1928柱掘り方断ち割り後
（西から）



図版23



D調査区
ＳＢ1927掘立柱建物跡
（南から）

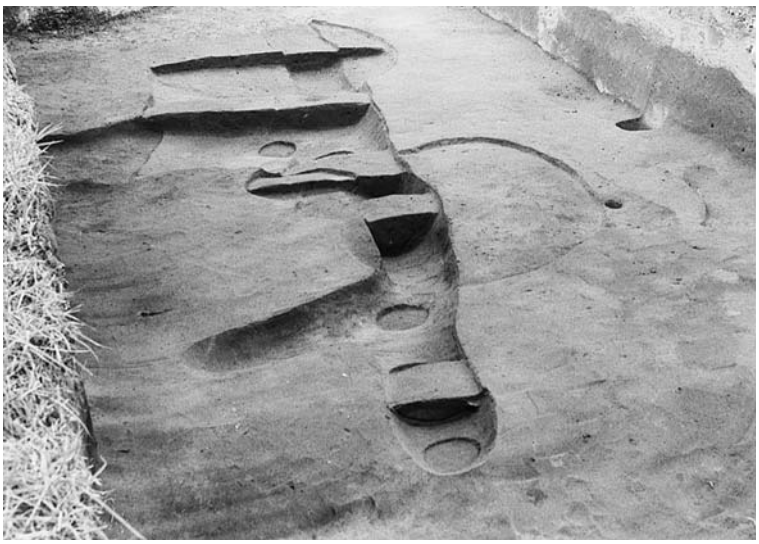
B調査区南半
ＳＡ1929～ＳＡ1931柱列
ＳＡ1932ピット群
ＳＤ1935・ＳＤ1936溝跡
ＳＫ1938土坑
（南から）

図版24

ＳＡ1929柱掘り方断面（北から１番目）（東から）

ＳＡ1930柱掘り方断面（北から１番目）（東から）

ＳＡ1931柱掘り方断面（北から２番目）（東から）



ＳＡ1933・ＳＤ1934断面（東から）

ＳＡ1933材木塀跡、ＳＤ1934溝跡、
ＳＢ1926掘立柱建物跡（西から）

図版25

ＳＩ1937竪穴住居跡
（東から）

ＳＫ1938土坑（東から）

Ａ調査区北壁土層断面
（南東から）

Ｃ調査区北壁土層断面
（南西から）

図版26

第90次調査地調査前状況（北東から）

第90次調査地全景（西から）

A調査区上層検出遺構（南から）

A調査区下層検出遺構（南から）

B調査区全景（東から）

B調査区全景（西から）

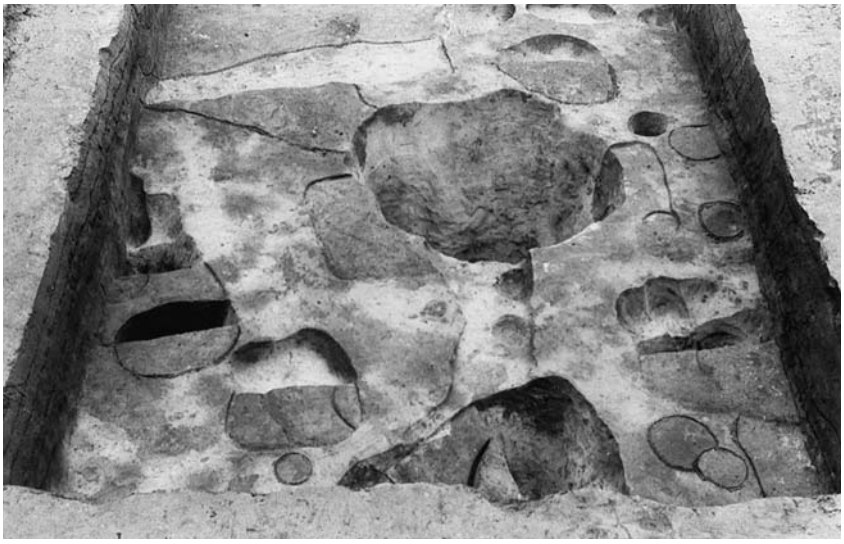
図版28

ＳＢ1939柱掘り方断面（西桁行中央）（東から）

ＳＢ1939掘立柱建物跡、ＳＤ1945・ＳＤ1946溝跡（南から）

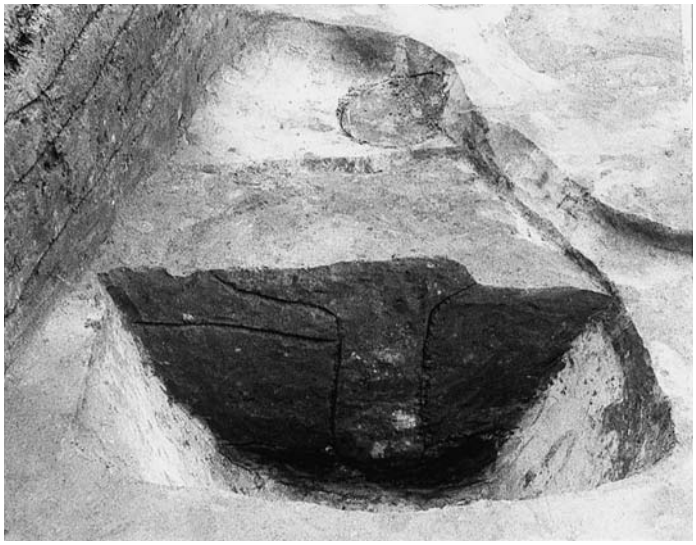
ＳＢ1940柱掘り方断面（北東隅）（南から）

ＳＢ1940掘立柱建物跡、ＳＩ1951竪穴住居跡（南から）

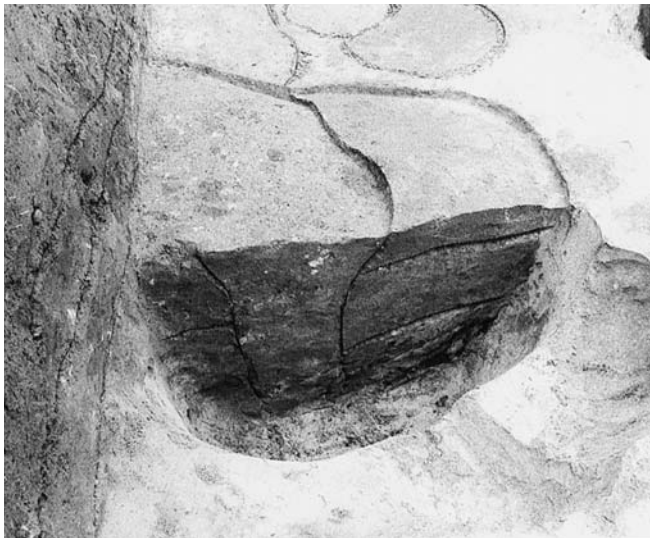


ＳＢ1941掘立柱建物跡、ＳＡ1942柱列、ＳＥ1958Ａ・Ｂ井戸跡、ＳＤ1949溝跡（西から）

図版29



ＳＢ1941柱掘り方断面（南梁間西から１番目）（南から）



ＳＡ1942柱掘り方（南から１番目）（東から）

ＳＤ1947溝跡（南から）

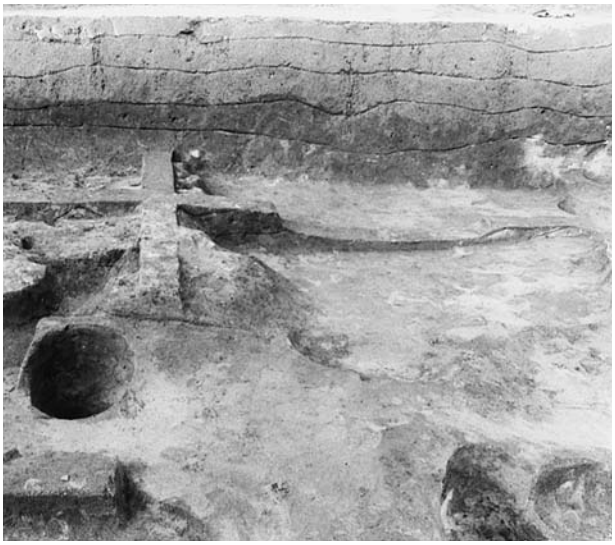
ＳＤ1948溝跡（東から）

ＳＡ1943・ＳＡ1944柱列、ＳＩ1950竪穴住居跡（南から）

ＳＩ1952竪穴住居跡（東から）

図版30

ＳＩ1953竪穴住居跡（南西から）



ＳＩ1954竪穴住居跡（南から）

ＳＩ1956竪穴住居跡、ＳＫ1962土坑（南西から）

ＳＩ1955・ＳＩ1957Ａ・Ｂ竪穴住居跡、ＳＫ1964土坑（西から）

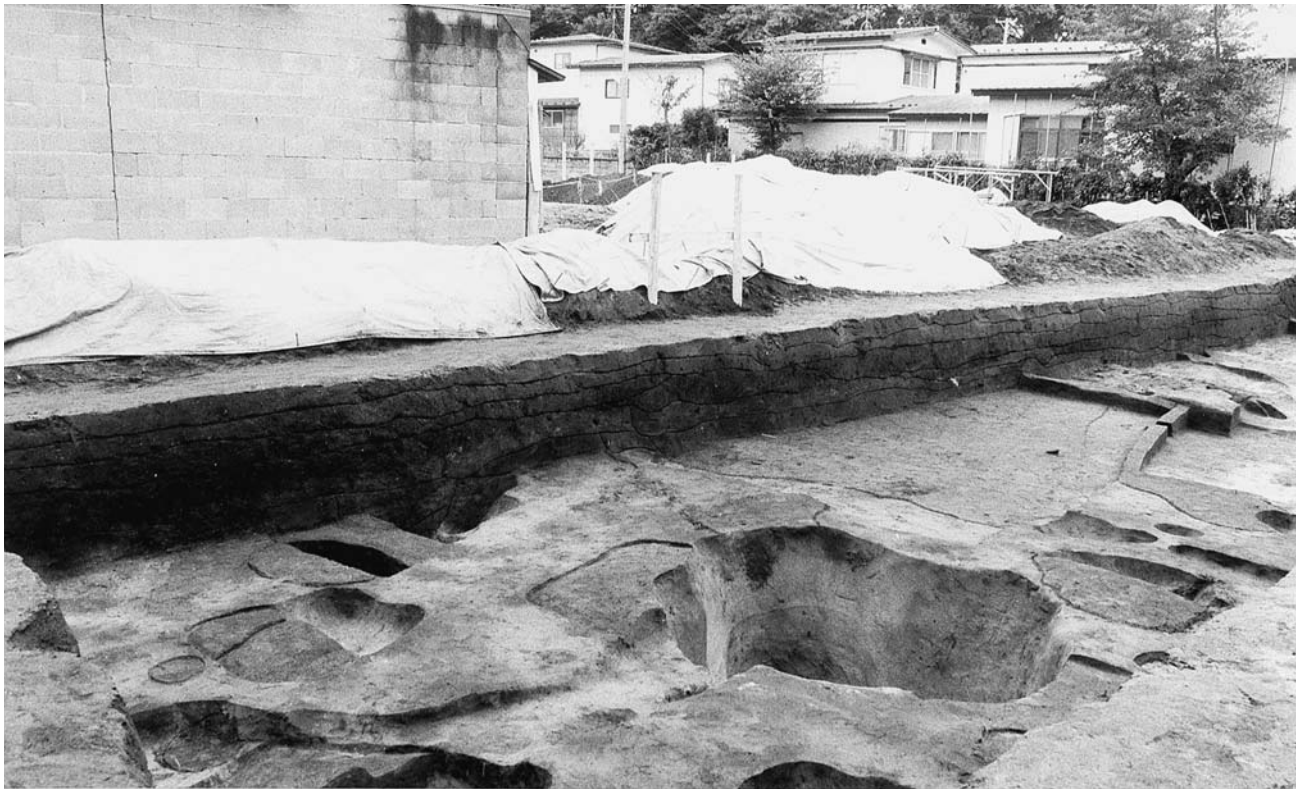
ＳＫ1959・ＳＫ1960土坑（南から）

ＳＫ1961土坑（南から）

図版31

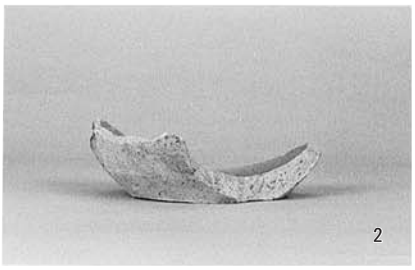
ＳＸ1966焼土遺構
（北から）

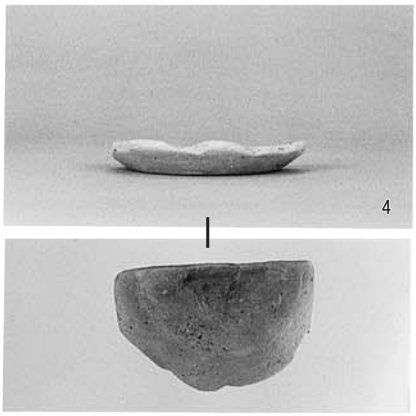
Ａ調査区東壁土層断面
（南西から）

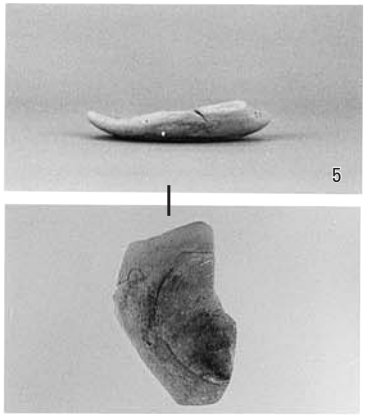


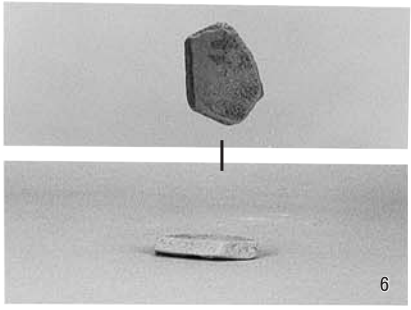
Ｂ調査区北壁土層断面（南西から）

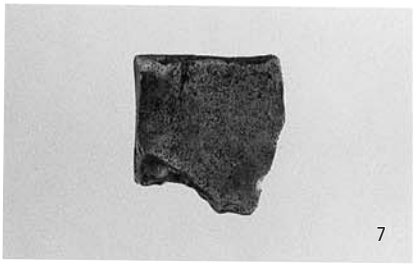
図版32

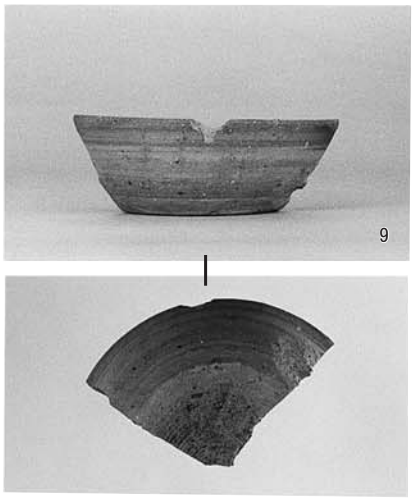


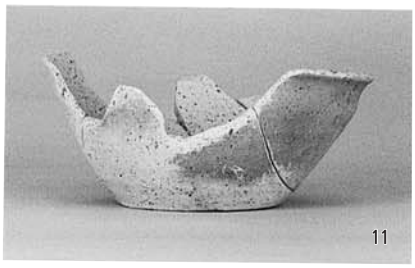








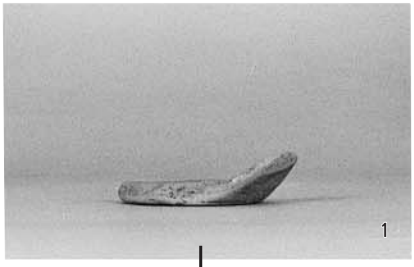
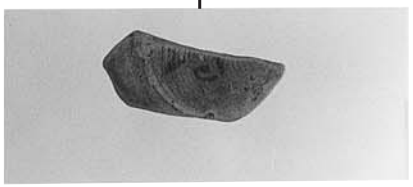
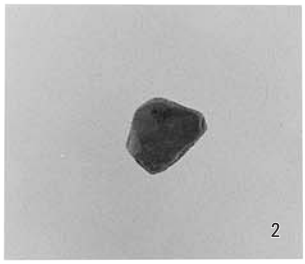
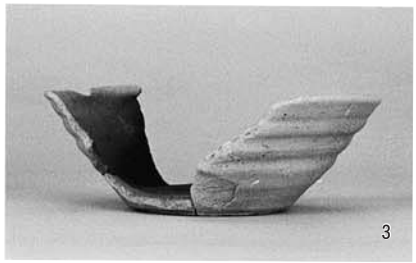
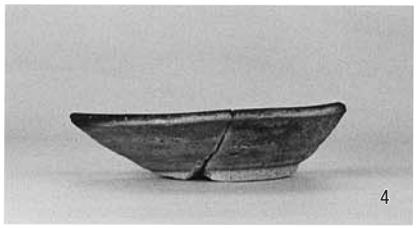
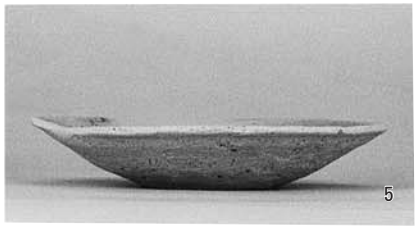
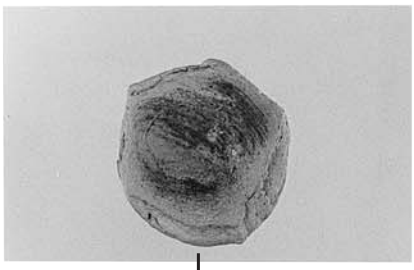
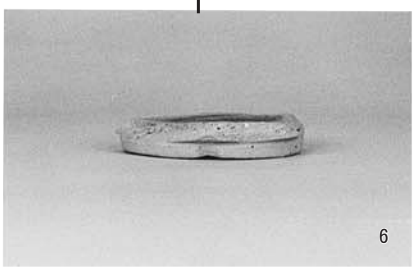
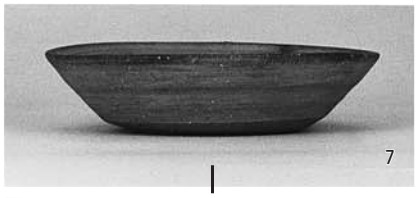


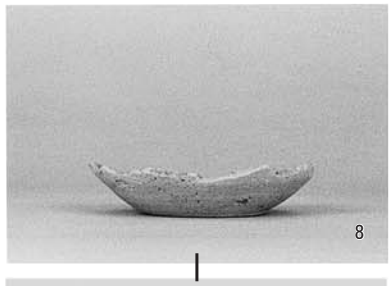
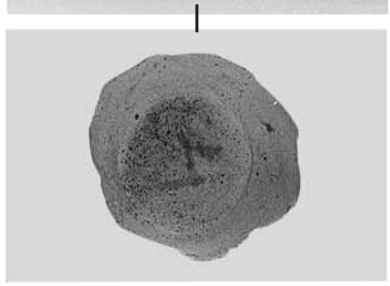
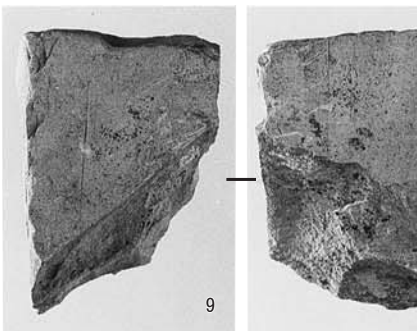
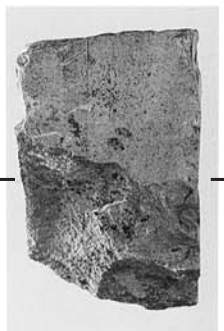


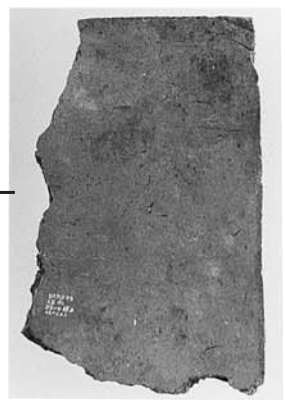
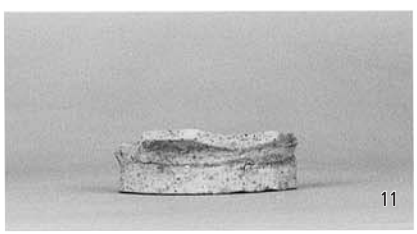
第88次調査

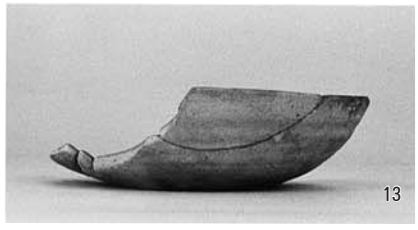
1、2　SB1873
3～6　SA1874
7　SA1875
8　SA1876
9～14　SA1885

図版33

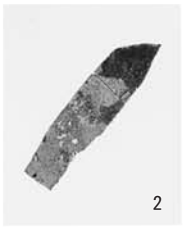





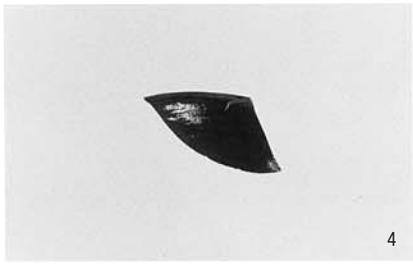



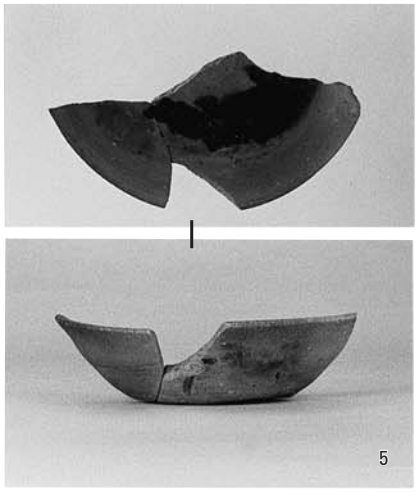


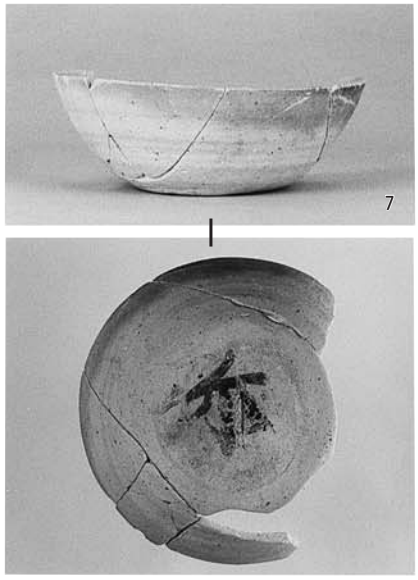
1～6	S A1885
7、8	S A1886
9	S A1887
10	S A1888
11	S D1890
12、13	S D1891

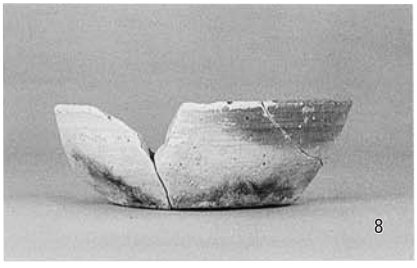
図版34

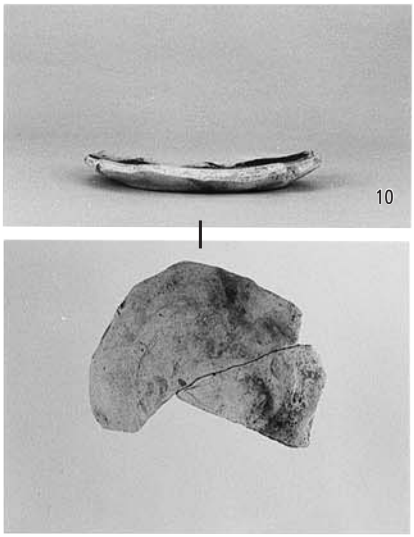


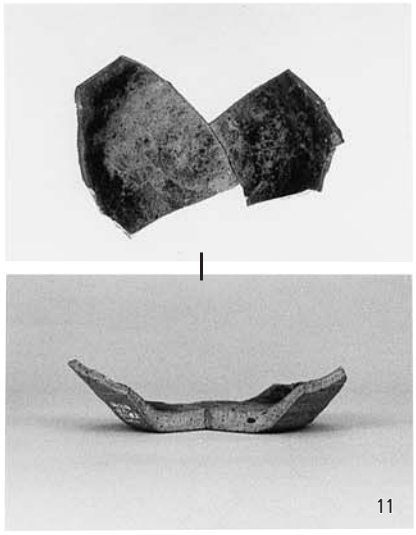


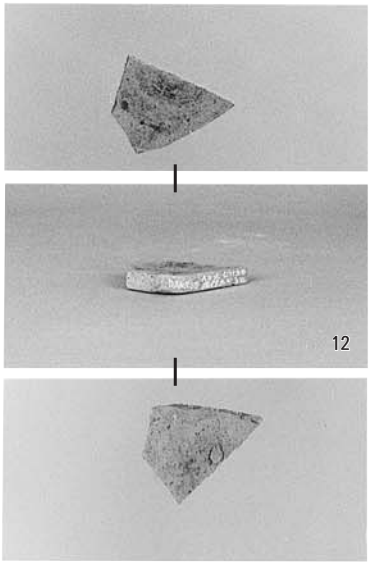


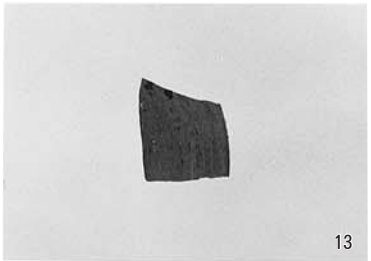






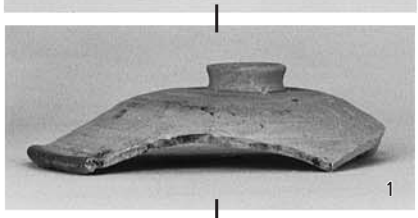


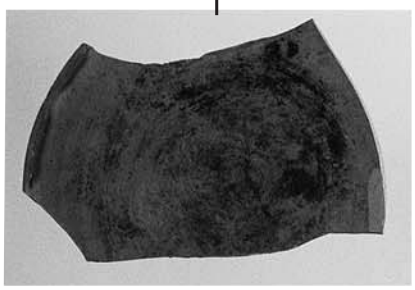


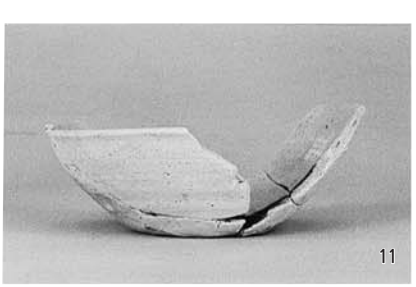


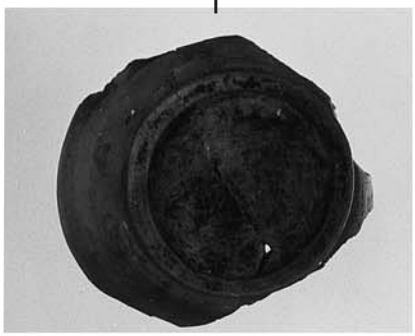
1　　S D1894
2　　S D1897
3、4　S I 1900
5～13　S I 1901

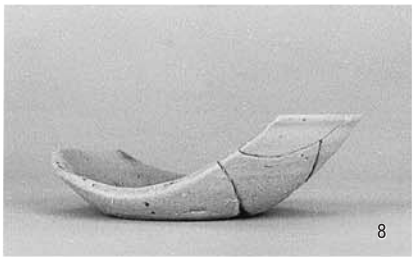
図版35

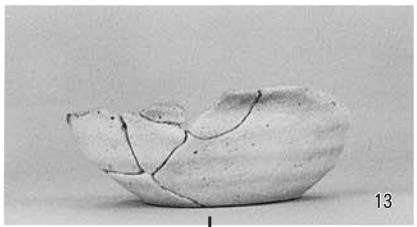


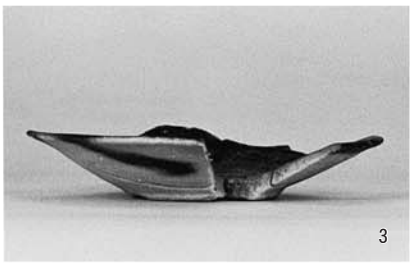


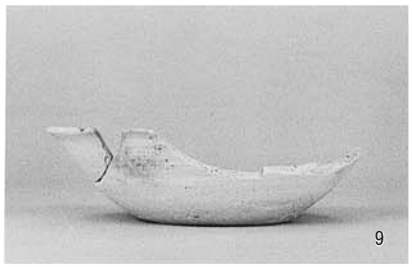


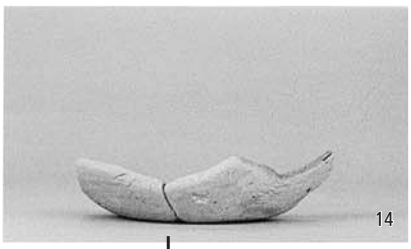


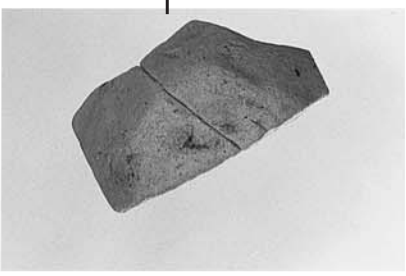






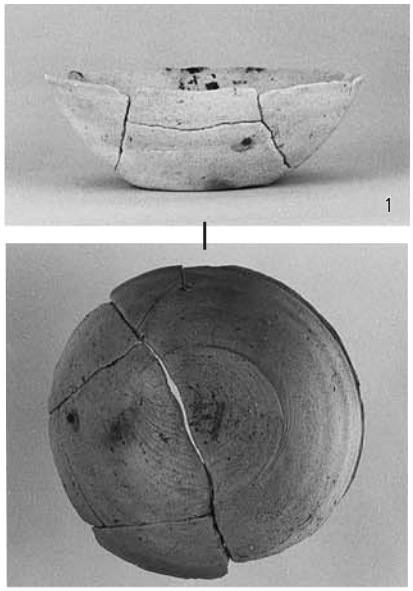






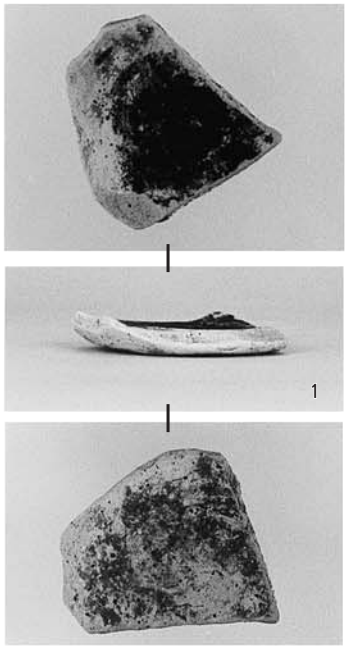
1～14　S I 1901

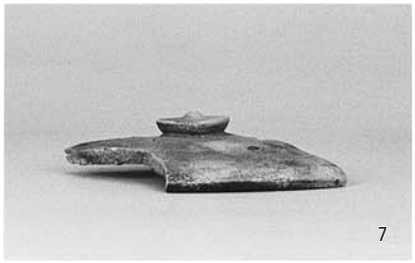
図版36

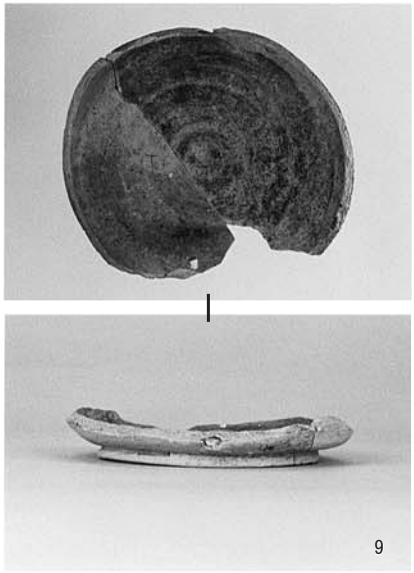


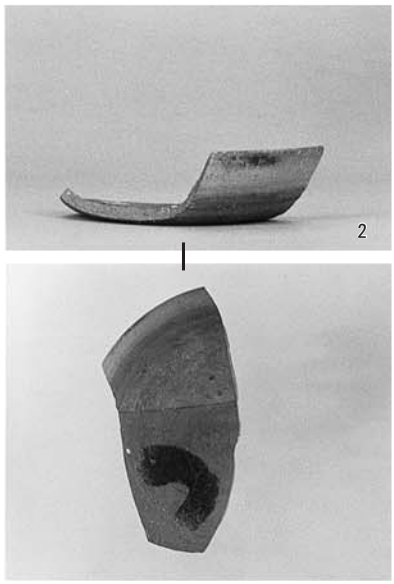
1～8　SI1901
9～13　SI1902

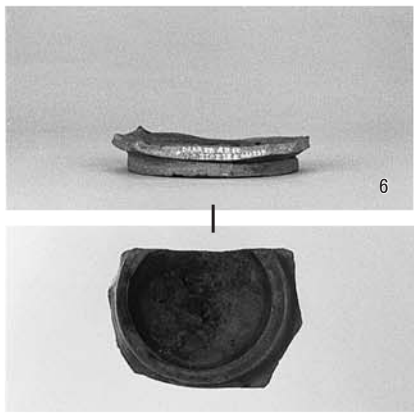
図版37

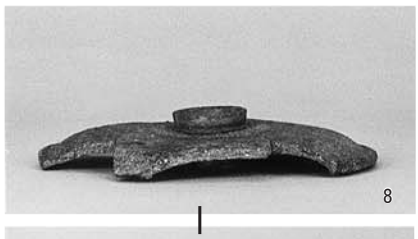


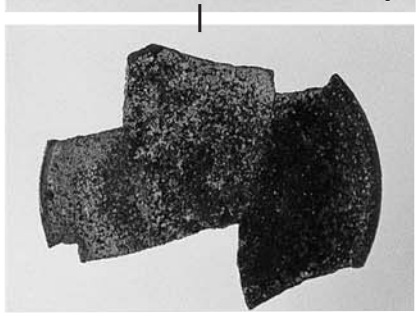


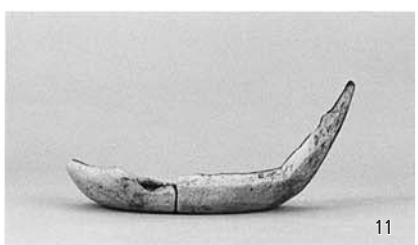


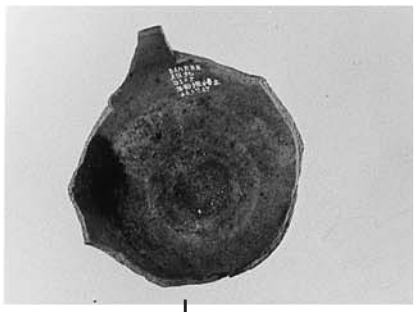


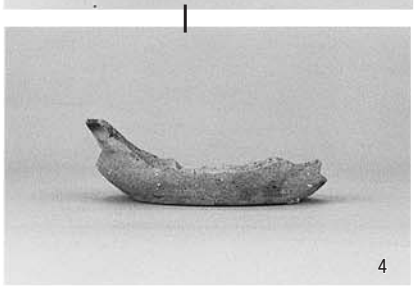


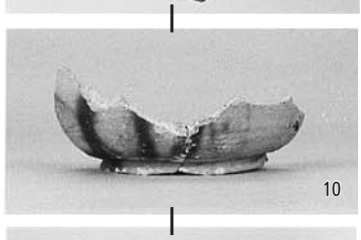






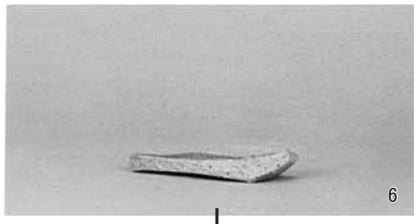


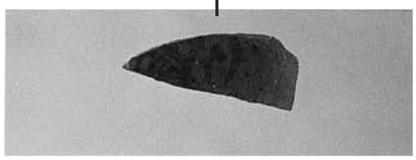


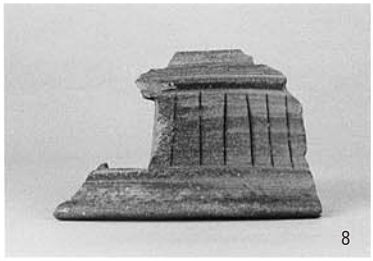


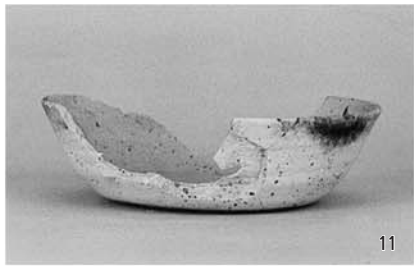
1～11　ＳＩ1902

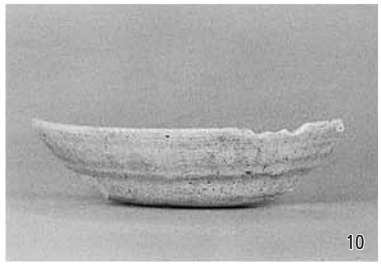
図版38

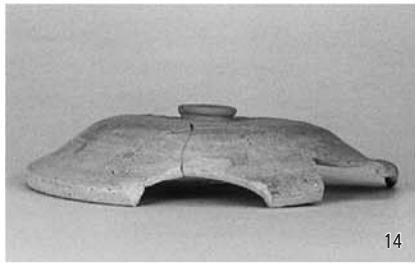


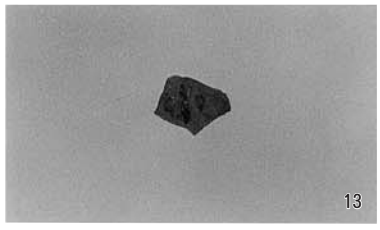


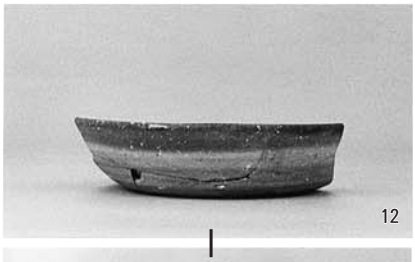


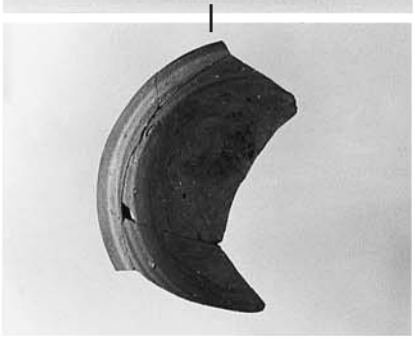


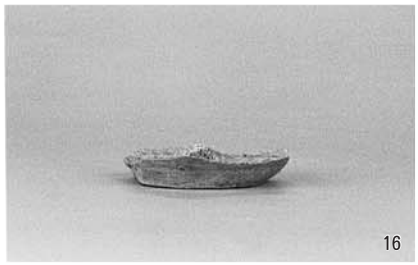






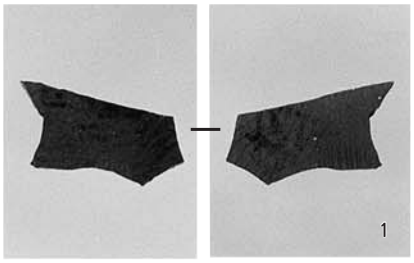


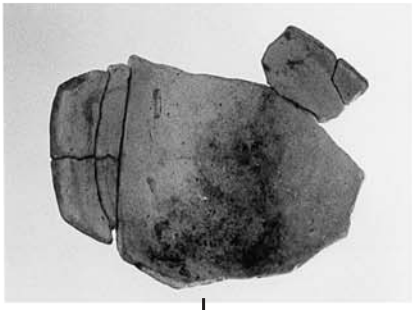


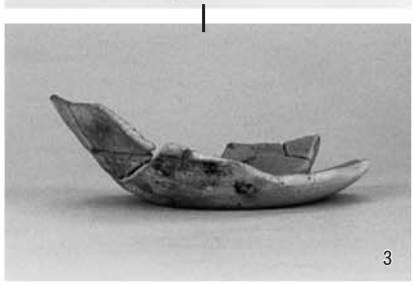


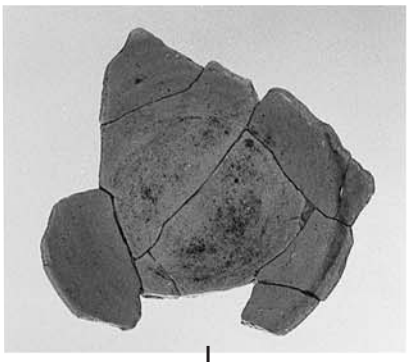
1～9　S I 1902
10～15　S I 1903
16　S K 1904

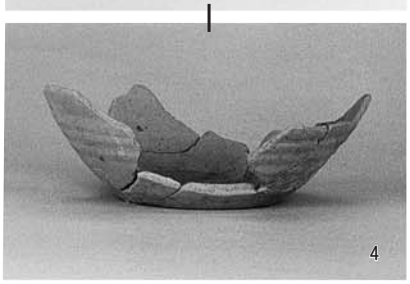
図版39

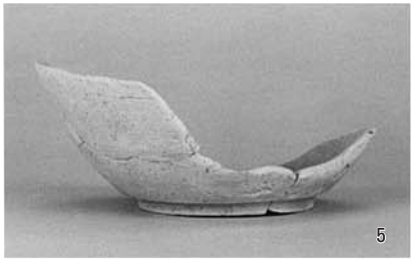


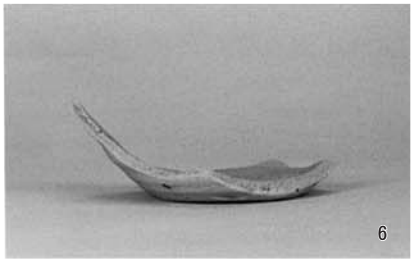


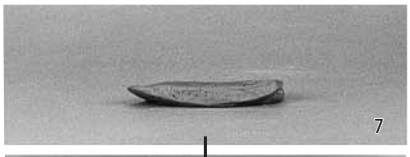


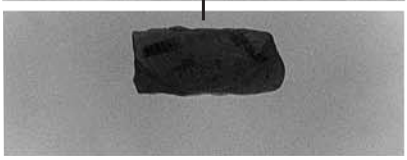


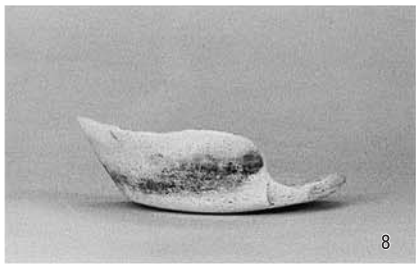


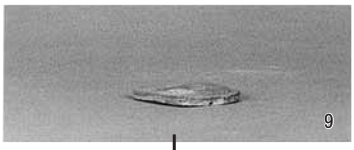


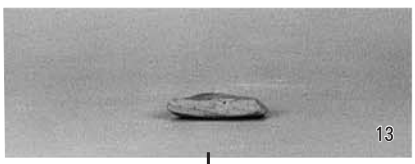


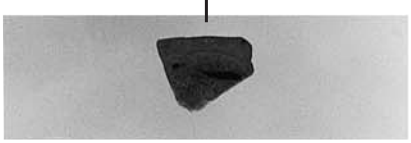






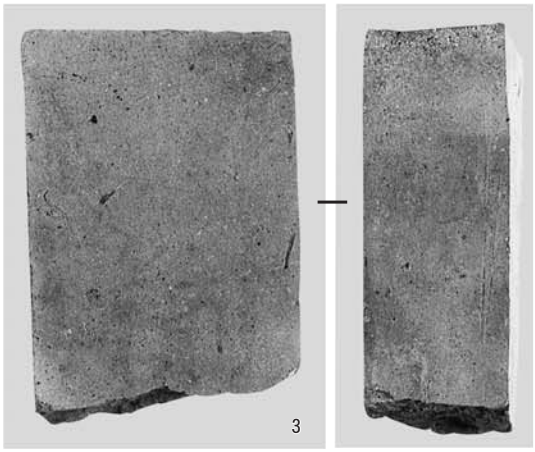


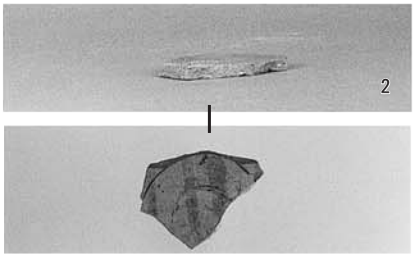


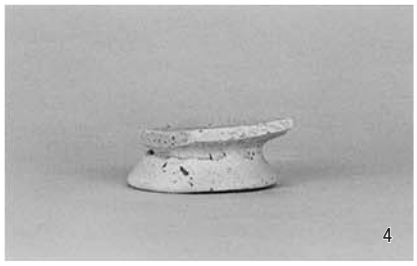


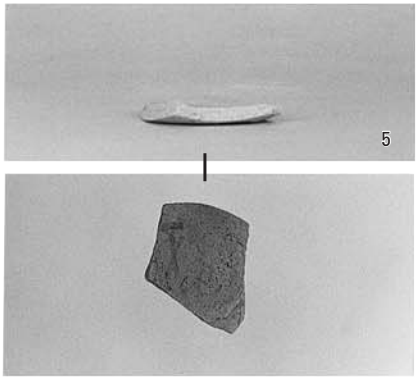
1～5　SK1907
6、7　SK1908
8　SK1909
9、10　SK1910
11～13　SK1911

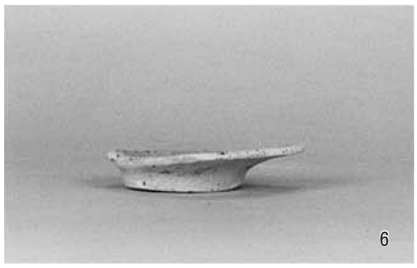
図版40

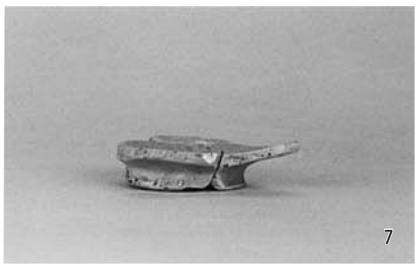


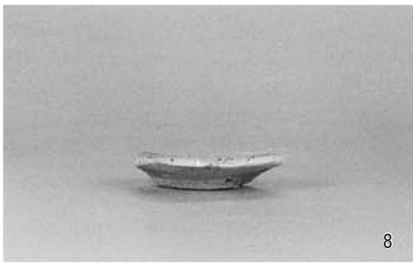


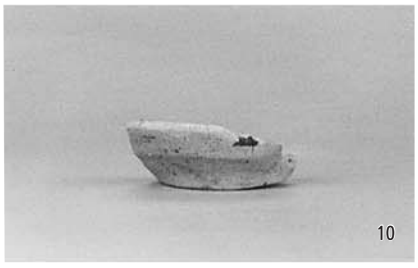






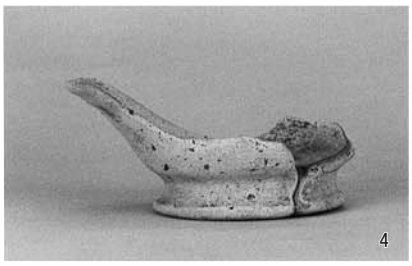


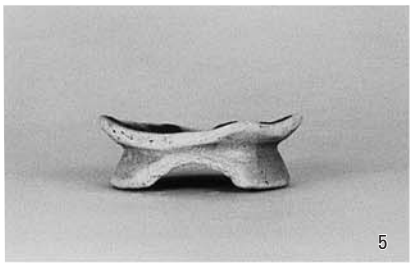


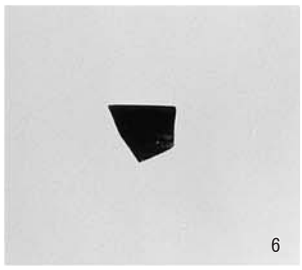


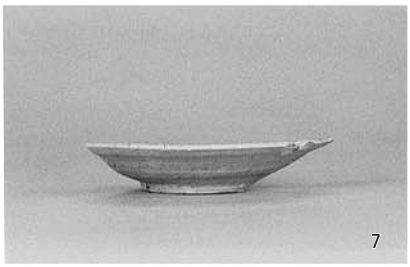
1　　S K1911
2　　S K1912
3　　S K1913
4　　S K1914
5 ～13　S A1916

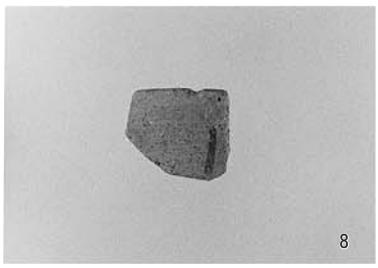
図版41

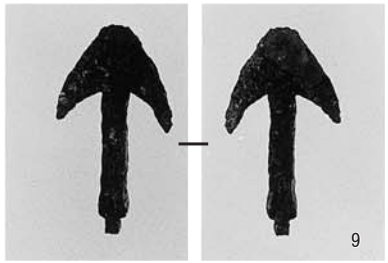


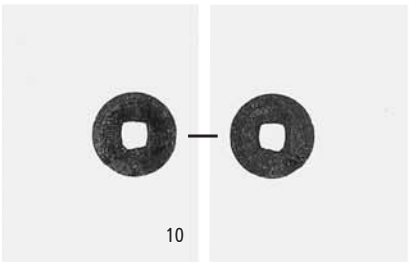


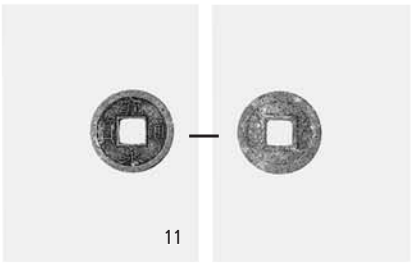


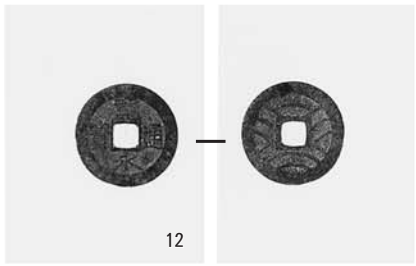


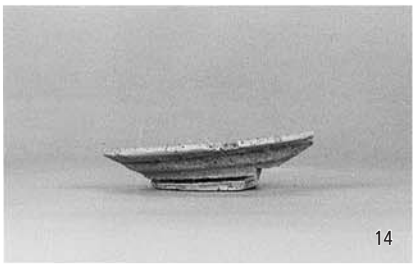


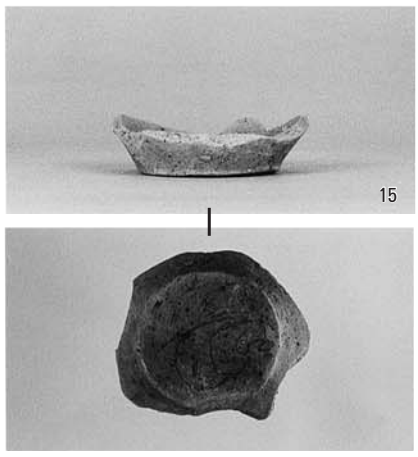


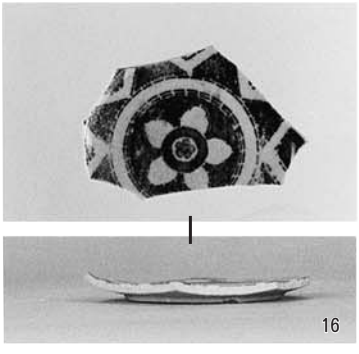


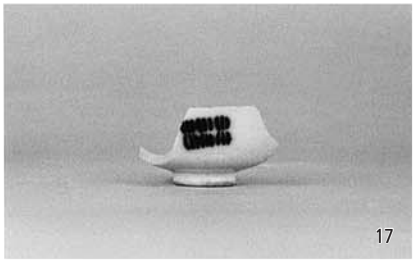






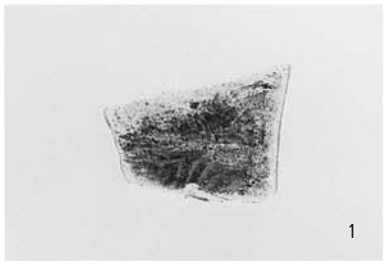


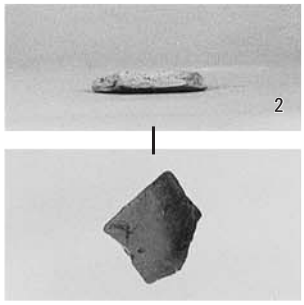


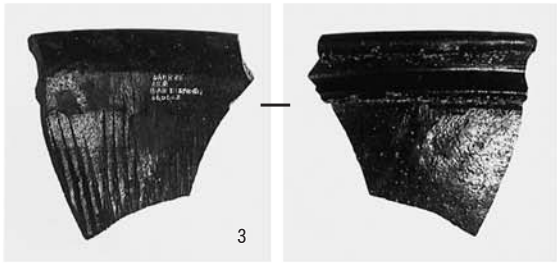


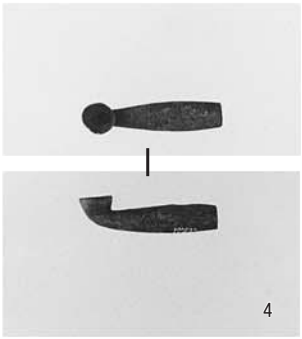
1～6　SK1916
7～12　第1層
13～17　第2層
※10～12：½

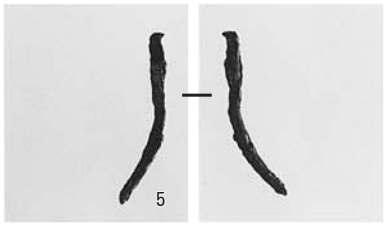
図版42

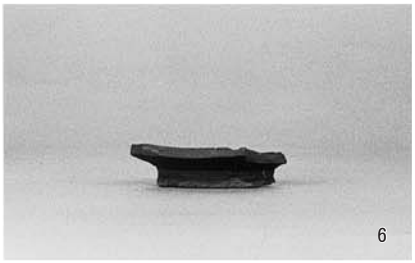


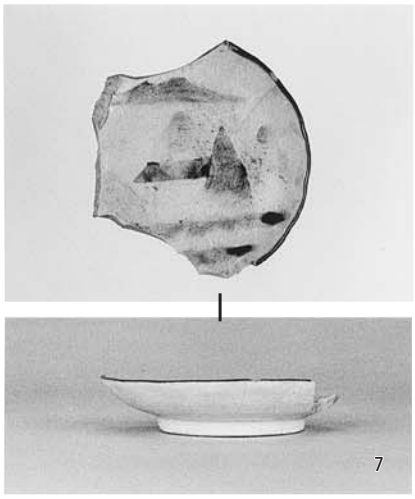


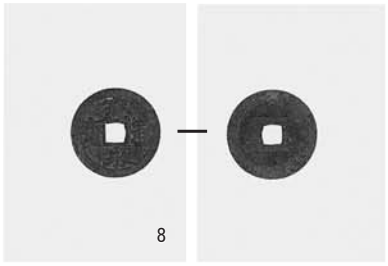


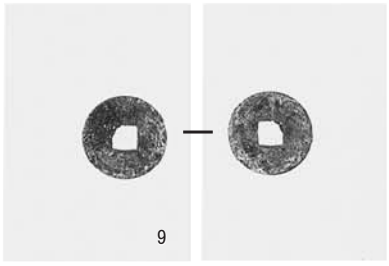


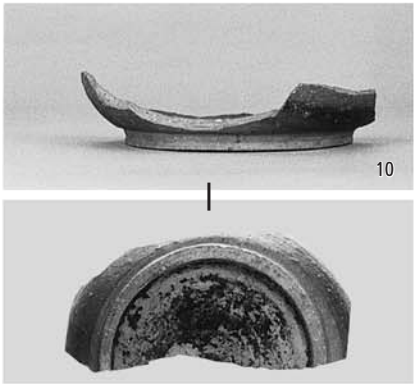


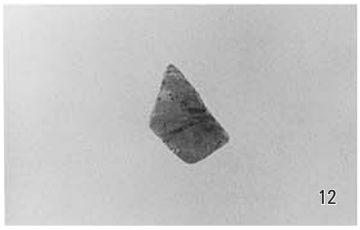


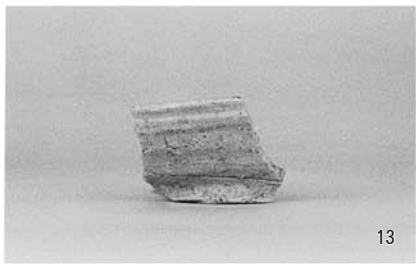


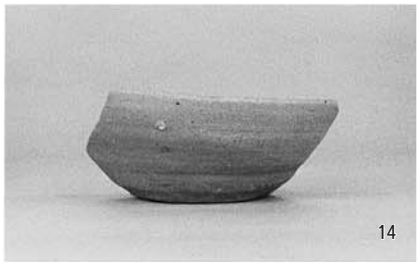


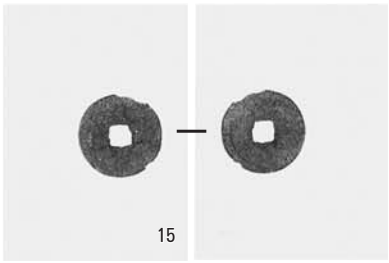


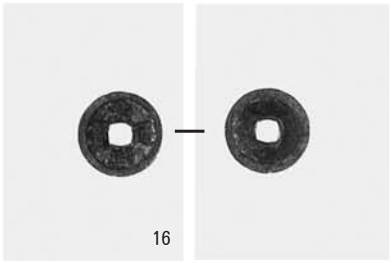






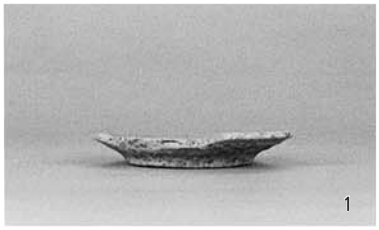


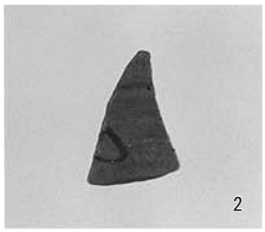


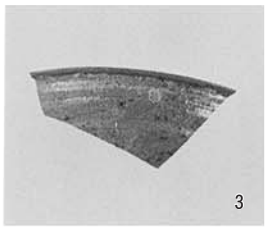


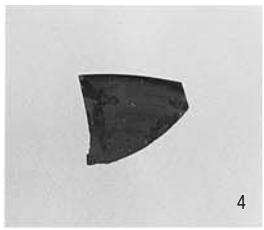
1～5　第3層
6～9　第4層
10～16　第5層
※8、9、15、16：½

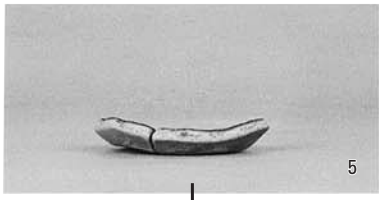
図版43


1

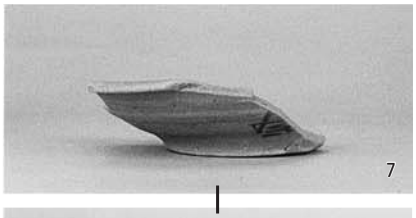

2

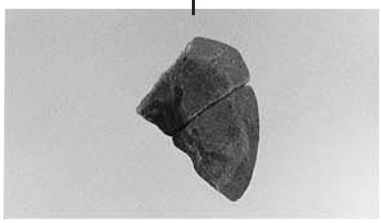

3

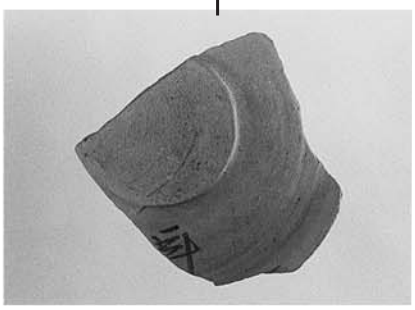

4

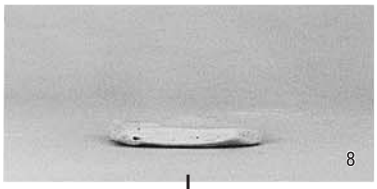

5

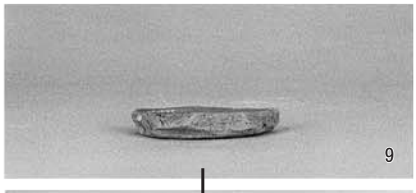
6

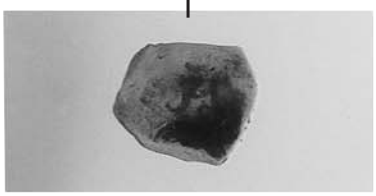

7



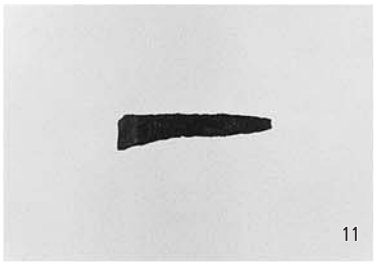


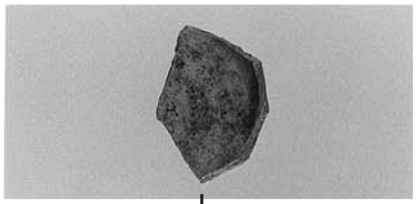

8

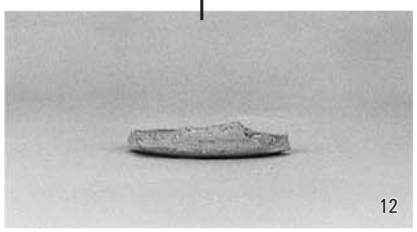

9

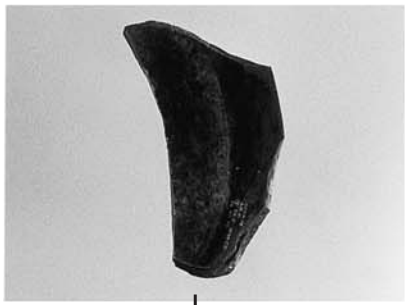


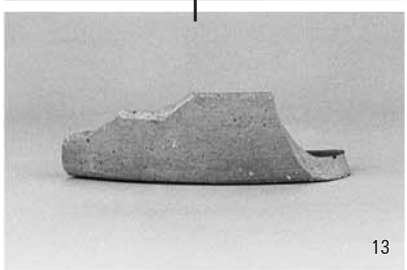
10

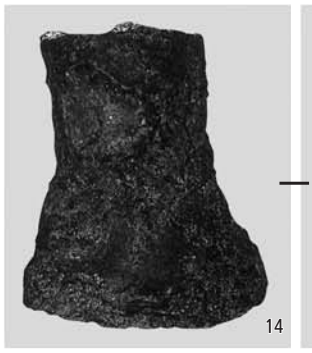

11




12

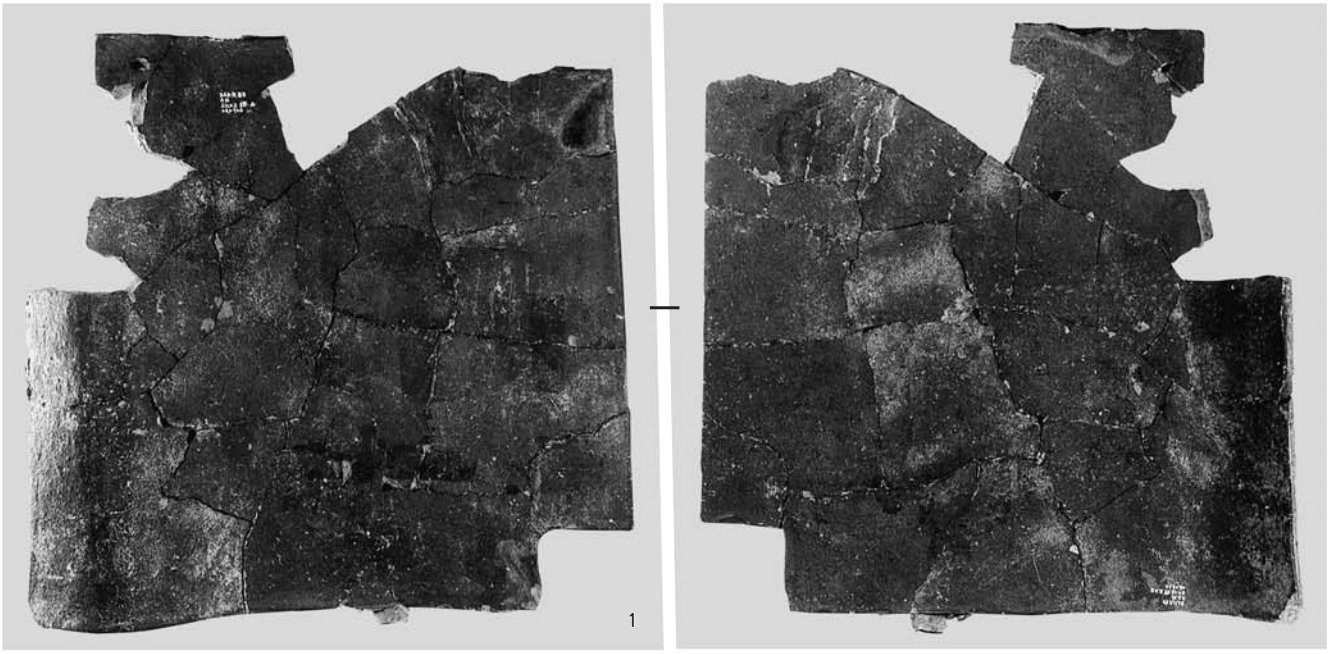


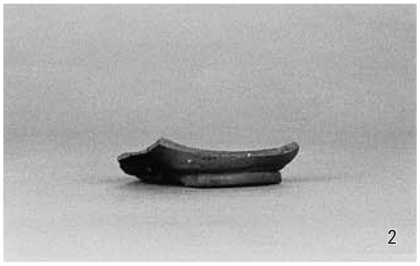

13

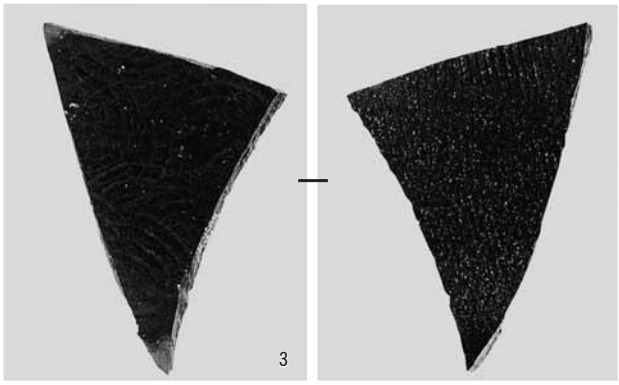

14

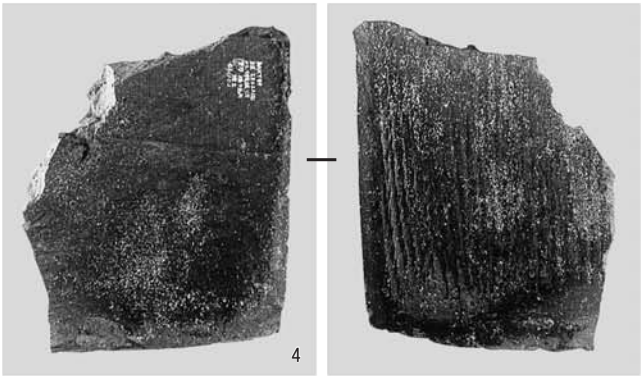
1～3　第6層
4～11　第7層
12　第9層
13、14　第10層

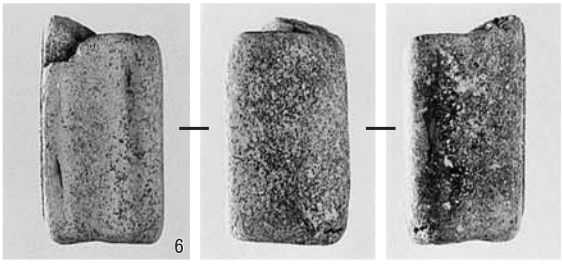
図版44

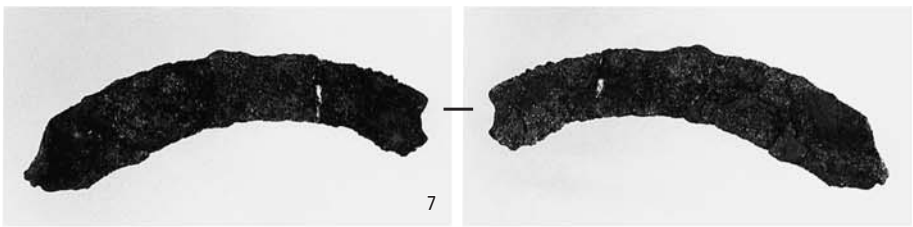








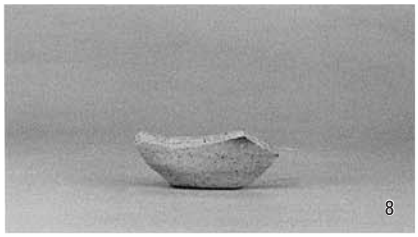




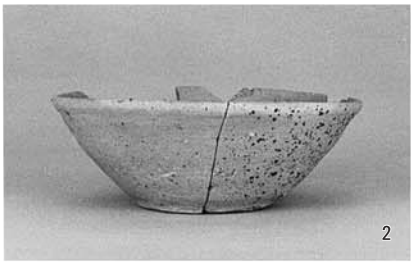
1　　第2層

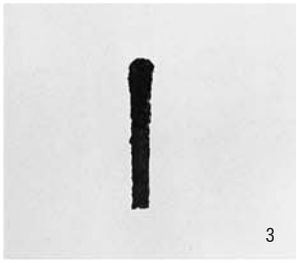
第89次調査

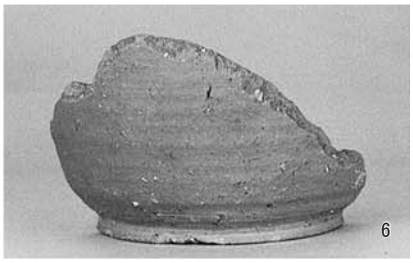
2、3　SB1922
4、5　SB1923
6、7　SB1924
8　　SB1925

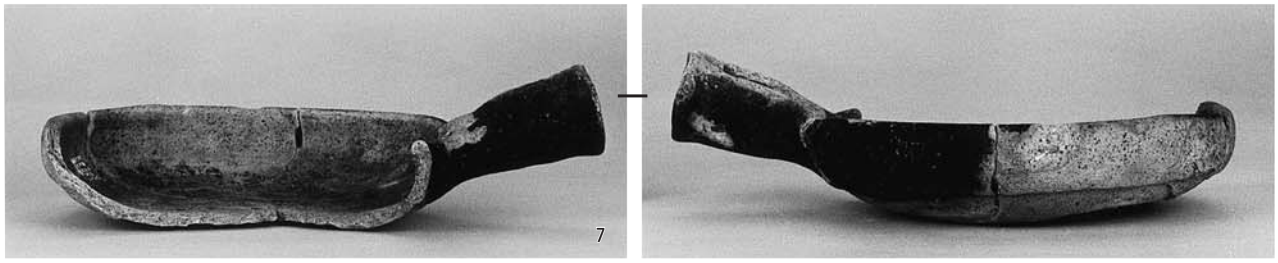


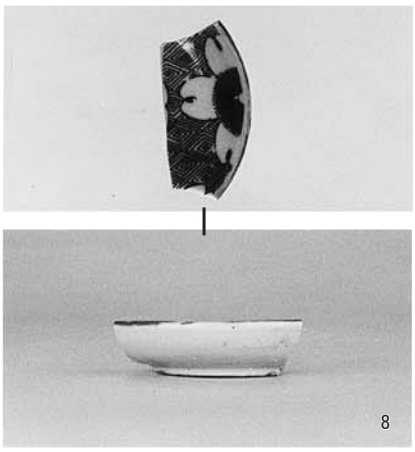
図版45

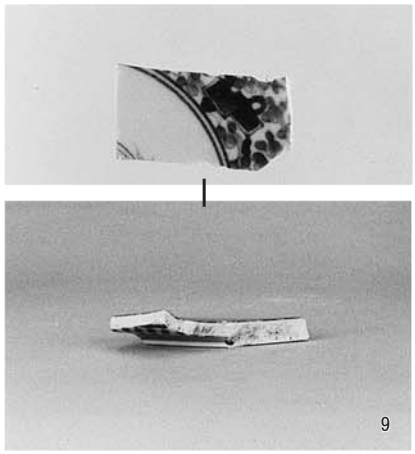


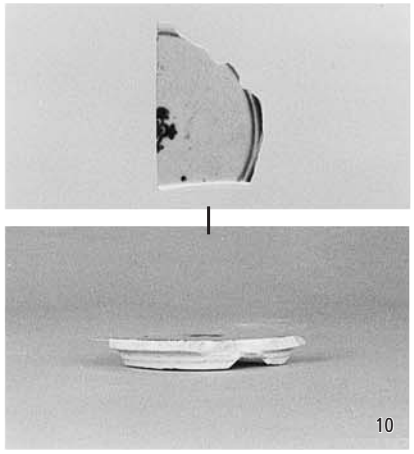


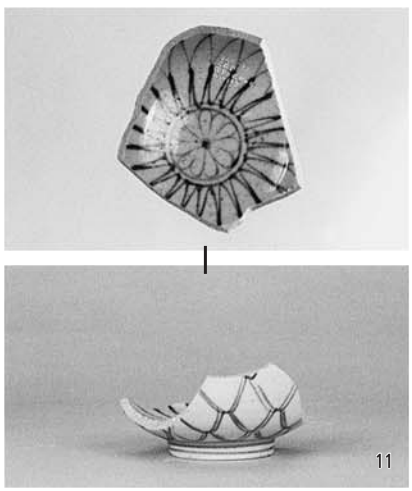


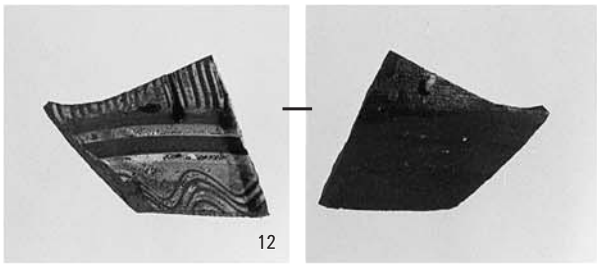






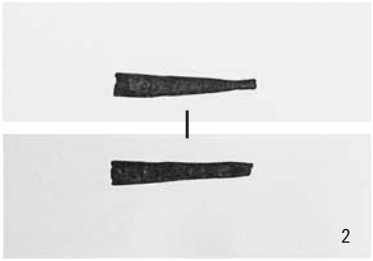


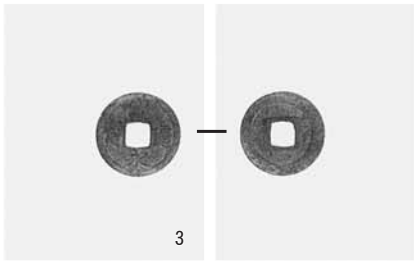


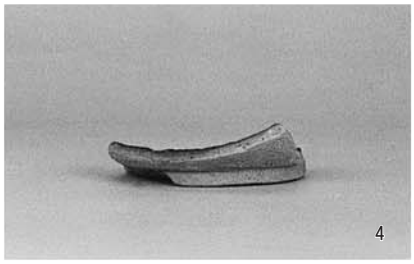


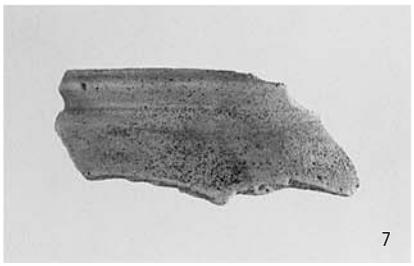
1、2　SB1926
3、4　SA1933
5　SD1934
6　第1層
7～12　第3層

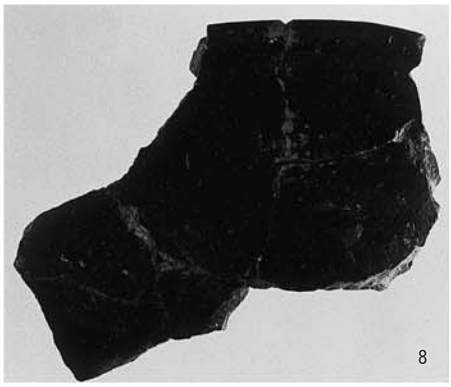
図版46

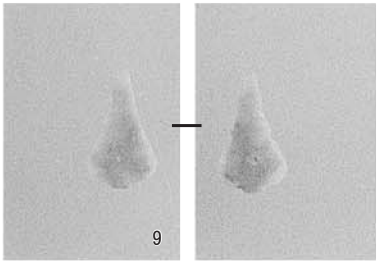


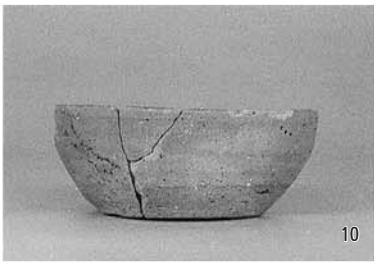


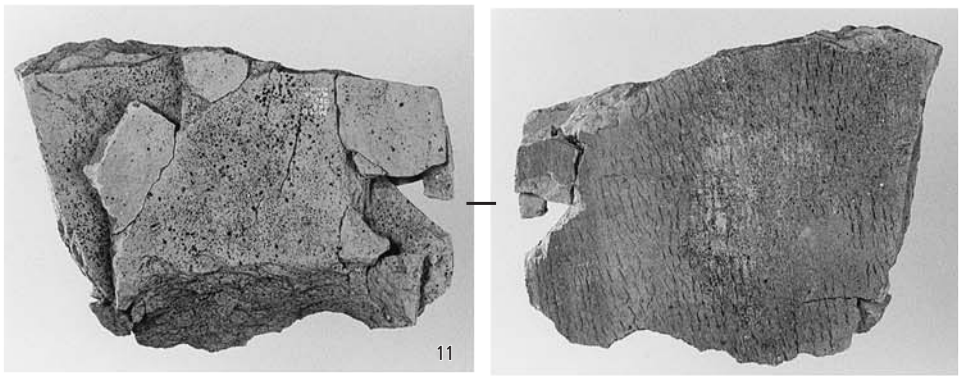


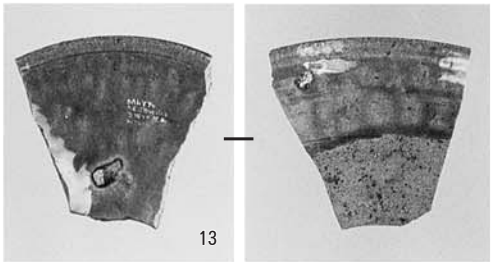


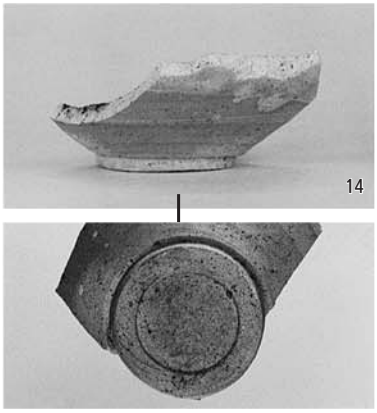


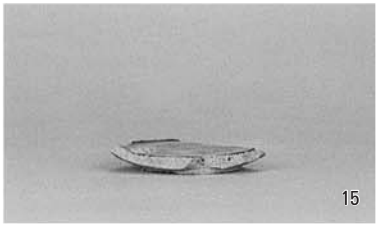










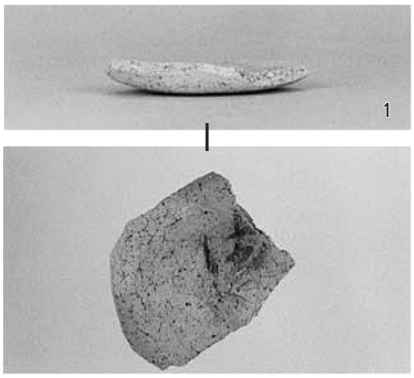


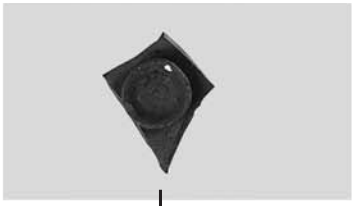
1～3　第4層　　※3：½
4～9　第6層
10、11　第7層

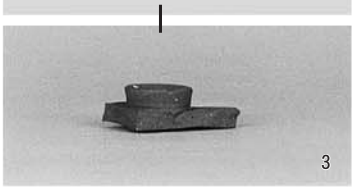
第90次調査

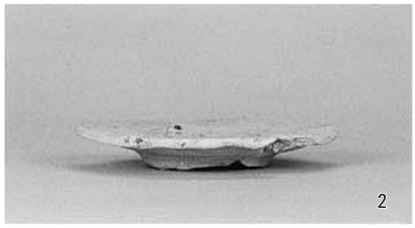
12～15　SB1939

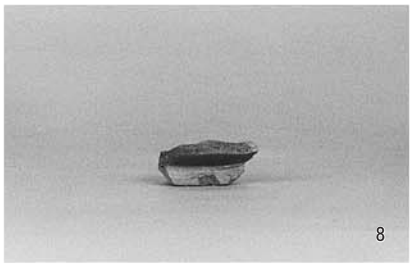
図版47

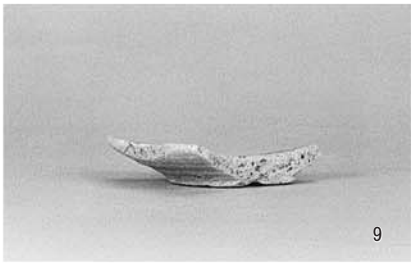


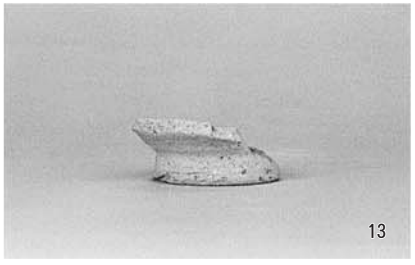


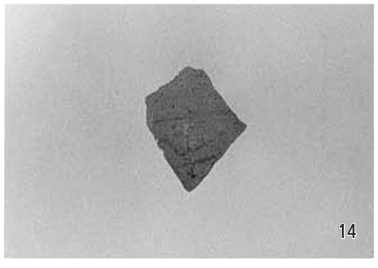


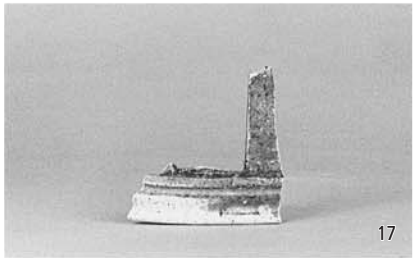






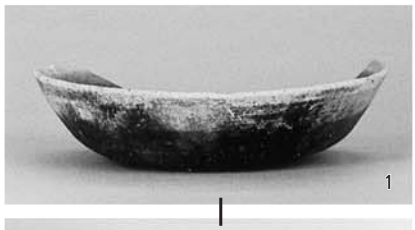


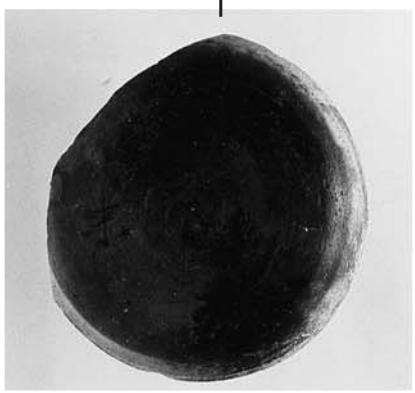


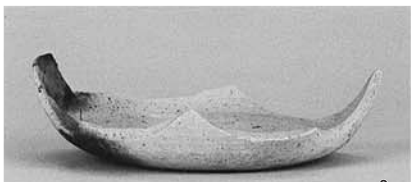


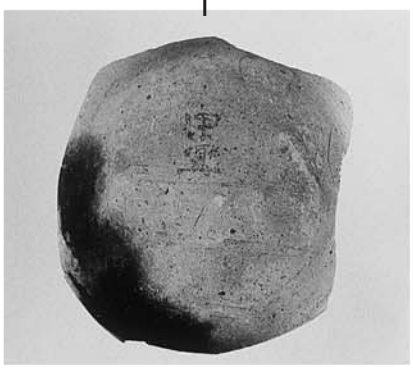
1	S B 1940
2	S D 1947
3 ～ 8	S I 1950
9 ～14	S I 1953
15、16	S I 1954
17	S I 1955

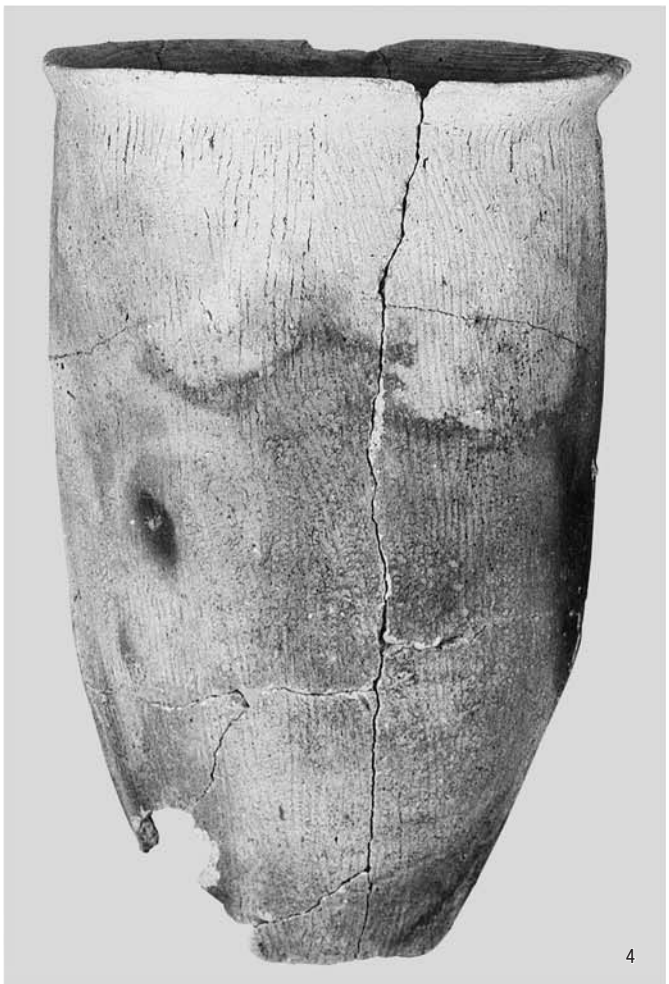
図版48



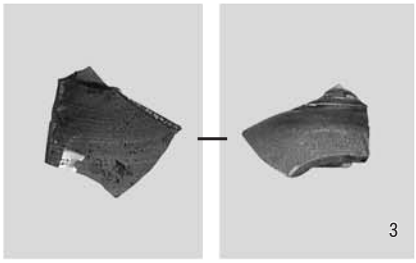


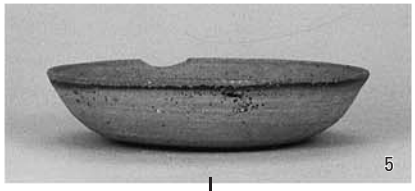


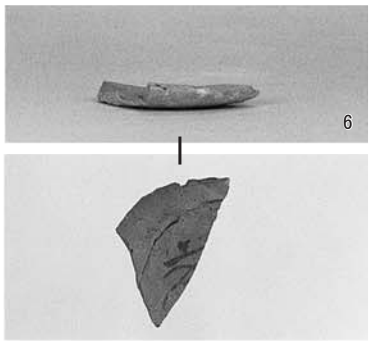


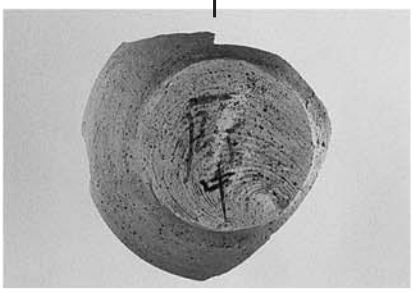


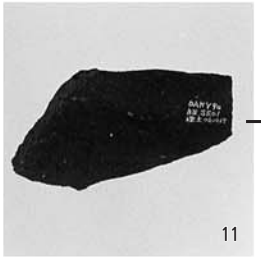
1～5　SI1956　　**図版49**

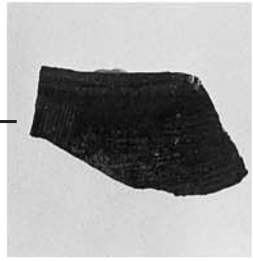


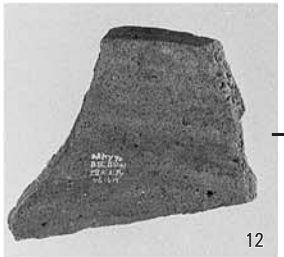






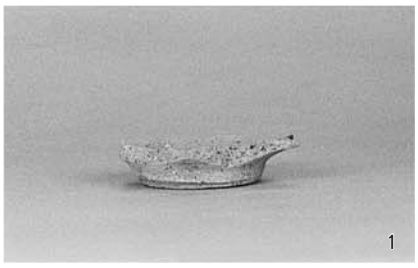


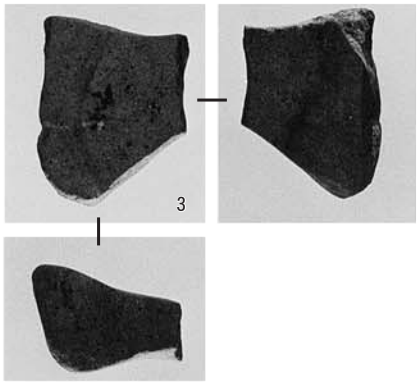


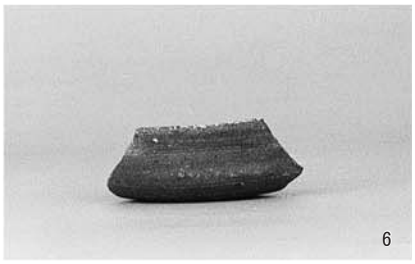


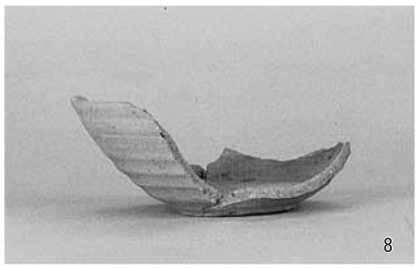
1～3　SI1956
4～9　SI1957
10～12　SE1958

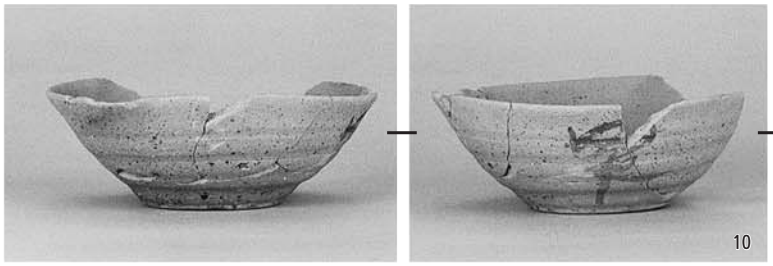
図版50



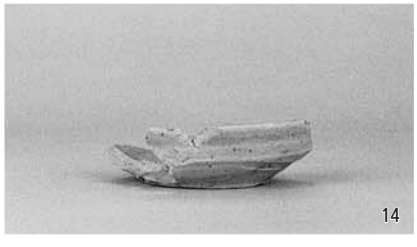


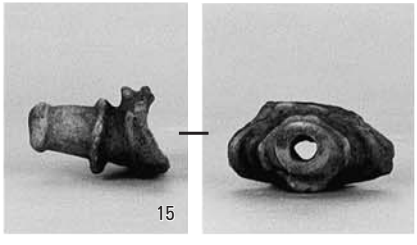




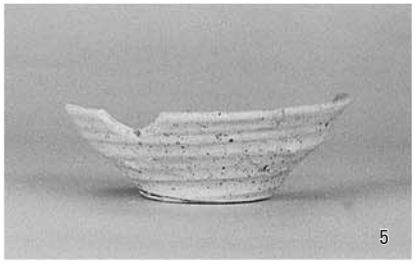


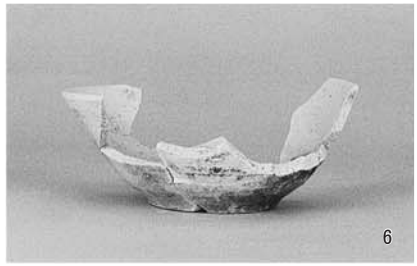
1、2　SK1959
3　SK1960
4　SK1962
5　SK1963
6　SK1964
7～10　SK1965
11　第1層
12～15　第3層

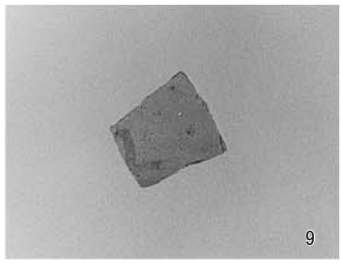


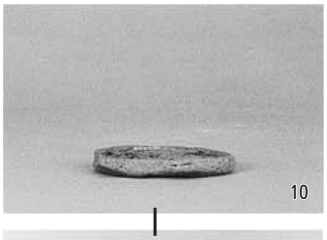


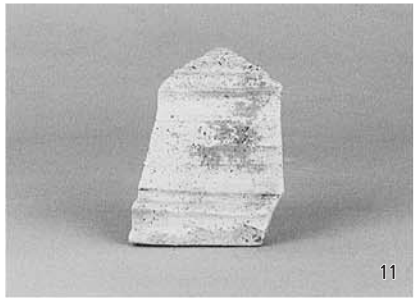
図版51

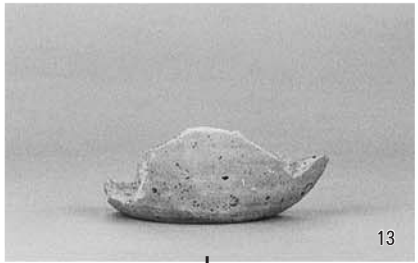












1、2　第3層
3～12　第4層
13、14　第5層

図版52

報 告 書 抄 録

ふりがな	あきたじょうあと
書名	秋田城跡
副書名	秋田城跡調査事務所年報2006
巻次	2006
シリーズ名	秋田城跡調査事務所年報
シリーズ番号	
編著者名	小松正夫、松下秀博、安田忠市、伊藤武士、筒井孝志
編集機関	秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所
所在地	〒011-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号　℡ 018-845-1837　Fax 018-845-1318
発行年月日	２００７年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あきたじょうあと 秋田城跡	あきたしてらうち 秋田市寺内	05201	186	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第88次調査 20060417～ 20060810	621	保護管理
						第89次調査 20060802～ 20061128	478	保護管理
						第90次調査 20061004～ 20061030	203	現状変更

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋田城跡 第88次調査	城柵官衙遺跡	奈良～平安	掘立柱建物跡　1棟 柱列　9列 材木塀跡　5条 溝跡　12条 竪穴住居跡　1軒 竪穴状工房　4軒 土坑　14基 焼土遺構　3基 道路遺構　2面	須恵器、土師器、赤褐色土器、墨書土器、瓦、塼、陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品、銭貨	城内東大路及び周辺の調査
秋田城跡 第89次調査	城柵官衙遺跡	奈良～平安	掘立柱建物跡　7棟 柱列　3列 材木塀跡　1条 溝跡　3条 竪穴住居跡　1軒 土坑　1基	須恵器、土師器、赤褐色土器、瓦、塼、陶磁器、鉄製品、石器、石製品、銭貨	城内西大路及び周辺の調査
秋田城跡 第90次調査	城柵官衙遺跡	奈良～平安	掘立柱建物跡　3棟 柱列　3列 溝跡　5条 井戸跡　1基 竪穴住居跡　9軒 土坑　6基 土取り穴　1基 焼土遺構　1基	須恵器、土師器、赤褐色土器、墨書土器、縄文土器、陶磁器、土製品、石器	現状変更に伴う調査

秋田城跡調査事務所要項

Ⅰ　組織規定

秋田市教育委員会行政組織規則　抜粋　（平成３年３月25日教委規則第１号）

第５条

４　文化振興室に所属する機関として秋田城跡調査事務所を設置する。

第８条

５　秋田城跡調査事務所を秋田市寺内焼山９番６号に設置し、その分掌する事務は、おおむね次のとおりとする。

（１）史跡秋田城跡の発掘に関すること。

（２）史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。

（３）史跡秋田城跡の整備に関すること。

Ⅱ　発掘調査体制

１　調査体制

秋田市教育委員会

教　育　長	髙　橋　健　一
文化振興室長	小　松　正　夫

調査機関

秋田城跡調査事務所

所　　長	小　松　正　夫
主席主査	松　下　秀　博
主席主査	安　田　忠　市
主　　査	伊　藤　武　士
主　　事	筒　井　孝　志
技能技師	田　口　　茂

２　調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡調査事務所年報 2006）

印刷・発行　平成 19 年 3 月
編　　集　秋田市教育委員会
　　秋田城跡調査事務所
　　〒011－0907　秋田市寺内焼山 9 番 6 号
　　TEL 018－845－1837　FAX 018－845－1318
印　　刷　株式会社 三戸印刷所